

語り継ぐ15

後世に「継ぐ」架け橋
～「語る」意志を持つ者たちの集大成～

兵庫県立舞子高等学校

環境防災科3年

題 名	名 前	頁
時を超えてつなぐ想い	青 雲 烈	1 ~
過去と未来を繋ぐ私たち ~To the future~	東 遥 平	5 ~
「語り継ぐ」	石 川 邑 真	9 ~
「語り継ぐ」	石 原 直 樹	13 ~
1.17からいのちをつなぐ	市 場 香 帆	17 ~
過去から未来へつなぐバトン	戎 居 繁 秀	21 ~
今伝えたい、あの日の記録	大 塚 愛 未	26 ~
「伝えることを決して忘れるな」	大 面 崇 平	30 ~
「語り継ぐ」	大 森 桃 花	34 ~
「語り継ぐ」	加 藤 昌 也	38 ~
「悪魔が来た日」	金 田 実 緒	42 ~
「語り継ぐ」	熊 地 翼	46 ~
「語り継ぐ」	近 藤 拓 真	50 ~
「語り継ぐ」	坂 口 樹	54 ~
震災当時の「想い」 現在の「想い」 つなぐ「想い」	佐 藤 峻 輔	58 ~
「語り継ぐ」	志 方 宥 紀	62 ~
「語り継ぐ」	下 川 真七佳	66 ~
「語り継ぐ」	白 壁 敬 太	70 ~
「語り継ぐ」	鈴 木 みなも	74 ~
「語り継ぐ」	住 田 萌 栗	78 ~
未災者に伝えるのか、被災者に伝えるのか	住 吉 悠	82 ~
「語り合う」	高 田 凜太郎	87 ~
「語り継ぐ」	高 橋 史 大	91 ~
「語り継ぐ」	豊 田 瑞 季	95 ~
「語り継ぐ」	夏 山 禎 炯	99 ~
「語り継ぐ」	西 尾 ことり	103 ~
「震災と聞いて何を思うか」	西 川 尚 哉	107 ~
「決して忘れてはいけない」	信 川 亮 太	111 ~
「語り継ぐ」	橋 岡 達 也	115 ~
「語り継ぐ」	平 井 花 歩	119 ~
「語り継ぐ」	福 岡 朝 陽	123 ~
「語り継ぐ」	藤 田 優 芽	127 ~
「語り継ぐ」	松 浦 陽 樹	131 ~
「語り継ぐ」	本 池 夏 音	135 ~
「語り継ぐ」	本 西 杏	139 ~
「語り継ぐ」	山 口 紗耶香	143 ~
伝わる話 伝える話	山 田 永 将	147 ~
「語り継ぐ」	山 村 太 一	151 ~

時を超えてつなぐ想い

青雲 烈

1 阪神・淡路大震災の概要

地震名	: 兵庫県南部地震
発生日時	: 1995年1月17日午前5時46分52秒
震源地	: 淡路島北部
地震の規模	: M7.3
死者数	: 6,434人
行方不明者	: 3人
死因	: 圧死が8割
年齢層	: 6割が60歳以上
長田区	
西宮市	

2 地震発生前

(1) それぞれの生活

- ・母は、当時もう働いているの一人暮らしで神戸市六甲道の8階建てマンションに住んでいた。そして、会社は六甲アイランドにある。
- ・父は、当時小学生6年生で西宮の阪神高速道路が通っているすぐそばに住んでいた。

(2) 前日～直前

- ・母は、その日の前いつものように自宅で寝ていた。
- ・父は、いつもより早く起きて学校がある日なのでボーっとしていたようだ。

3 直後とその後の生活

・母の話は、地震が起きた瞬間なにがおこったかわからなかったけど、もう駄目だと思って布団に丸まって収まるまでじっとしていました。収まったら不安になり、とりあえず外に出ました。そうしたら、みんなも同じことを考えていてマンション前にある大きな駐車場にたくさんの人がいました。そこにはラジオを持っている人がいて情報交換をしました。そこで初めて地震が起きたとわかりました。鞆に通帳と財布とラジオと印鑑を入れてもう一回下に降りたら改めて周りを見る余裕ができたので見たら、家がどこもめっちゃめちゃにつぶされていて、その中から「助けてー」という叫び声が聞こえてきました。男の人は助けにいらいたけれど、自分は自分のことで精いっぱいなんにも手伝うことができなかった。その声に動けるほど力がなかった。

このことは後からすごく後悔したといえます。けが人の置き場所がなかったのでいつの間にか避難している駐車場が死体置き場になっていました。それを見て気分が悪くなっていたら、おじさんが走ってきて火事が起こったといい、消しに行ったけど、何をしても水があるので何もできず、ただ燃え上がっていくのを見ていることしかできなかった。安否確認をしようにも公衆電話が長蛇の列になっていてできなかった。その後も余震が怖いので駐車場にいたら、知り合いの人が車で迎えに来てくれました。そして、知り合いの家がある六甲アイランドに夕方ぐらいにつきました。

六甲アイランドは比較的被害が少なかったもので、電気が通っていてテレビもついていました。食べ物は何もなかったけれど、工場の配給おでんのまるたまを3つもらえました。水に関しても目の前に中学校があったのでプールの水を運んできてトイレを流すために使っていました。テレビではずっと長田の被害がすごいとやっていたので、父母や姉が死んでしまっていると思っていました。実際に3つ所有していた家のうち2つはつぶれてしまいました。2日目は食料を探しにコンビニに行ったけど泥棒に入られていて何もなくなっていました。何もすることがなくなったので、とりあえず家族の安否確認のために長田に帰りました。そのあとすぐに余震で六甲アイランドの橋が落ちました。そのおかげで支援が届くのが遅れたので、震災後小中学校の屋上にヘリの発着場ができたといえます。支援が遅れた理由はもう1つあって、それはテレビで長田ばかり放送されていたからそっちに全部行ってしまったからです。近くにある火力発電所が地震の影響で危ないので避難指示が出ていたけど、それも橋が落ちていたので逃げられなかったといえます。

姉の家に全員が集まっていると避難所から聞いたので行ったら、しあわせの村の近くでは、自衛隊が

活動拠点にしていたのでたくさんの食糧がもらえ、風呂にも入ることができました。震災から5日後に、会社はどうなるのだろうと思って電話したら上司から自宅待機と言われ、1か月後の橋が立て直されるまで行けなかったそうです。この時、行き帰りのためにバイクを買ったらそれが大活躍した。まともな生活に戻れたのは5月ぐらいでした。

母は当時神戸に地震が来るなんて思ってもみなかったとっています。

・父の話は、最初は揺れているなーという感じだったけれど強いのが来た。そして、気が付いたらタンスの下敷きになっていたといます。祖父は、無事だったので助けに来たらしいですが、ドアが開かなかったのを蹴破って助けてくれました。その時、祖父以外の姉や母はパニックに陥って何をしていたかわからなくなったとっています。父の偉大さに気付いたといます。

とりあえず外に出てみたら、周りが火の海になっていて阪神高速道路が真二つに割れていたといます。その光景は戦争のようで今でも目に焼き付いているといます。そのあとは、2時間ぐらい落ち着くまで待って、周りの安否を確認したら、無事だったので家の中で食料の確保などをしていました。この時に一番困ったのは、水の確保でした。コンビニはすぐに開けてくれたそうですが人が多すぎて水以外は何も買えなかったそうです。水だけは一人何本と決められていたので買えたそうです。2週間ぐらいしたら自衛隊がきて、水も大量に持ってきたので十キロの水を取りに何度も往復して、きつかったのが印象に残っているとっていました。それまでは家の中にあるもので耐え忍んだといます。1か月ぐらいたって銭湯が再開しても何時間も待つのであまりいけなかったそうです。震災時とても役に立ったのが、ガスコンロだといいます。なぜなら、電気なしで火が使えるので軽い料理もできるし、何よりインスタントラーメンが作れたので良かったそうです。

学校に関しては、2か月ぐらいで登校は開始したが通常授業に戻るまでかなりかかったそうです。地震のことや亡くなった人に関することは暗黙の了解で禁句になっていたそうです。

トラウマのことについては、近い人は死んでないのでそこまでひどくなかったけど、建物につぶされたぐちゃぐちゃな死体は今でもはっきり覚えているそうです。

4 父母の話聞いた感想

今までは、地震の日のことについて軽くしか触れてこなかったけれど、それが今回は深くまで聞くことができ、震災体験がより身近になったので語り継いでいくにはとてもためになった。

父が私に震災のことを語ってくれているとき、何回も耳にしたのは水が大事だ、なにせ水さえあればなんとかなるといふものだ。これは父が小さいながらも教訓として覚えていたことだ。この考えは実際に正しくて、震災直後を生き残ったら3日耐えるのが目標になる、なぜなら3日もすれば国からの支援が来るのを期待できるからだ。だから、それまでの間、最悪水さえあればなんとかなるし選択肢の幅が増える。やっぱり、実際に体験した人の教訓はとてもためになることばかりだ。ガスコンロは、今の家庭では持っているところが少ないけれど、当時は一家に一台の感覚であったそうなので、防災のことを考えている人なら日常生活でも使えるので持っていてよいと思う。地震が起きてみんながパニックになったときみんなを落ち着かせてスムーズに行動できる人間になろうとこの話を聞いて強く思った。

母は、震災直後男の人みんなが救出活動をしていだけれど怖くて助けに行くことができなかったことをすごく後悔しているといっていた。しかし、私の考えではみんながみんな危険を冒してまで助けに行かないし、怖いと思いつながら行くことはとても危ないので、まずは自分の安全、そして、助けに行ける余裕があったら助けに行くというのでも私は間違っていないと思う。

六甲アイランドの橋が壊れて支援が遅れて孤立した問題については、橋というものに限った話ではなく集落などでもこの問題が発生している。これは、南海トラフ地震が来るまでに何とかしないとイケないことだ。

震災時には必ず泥棒などがあると言うが、命がかかっている状況だとしてもやっていいことと悪いことがあって、人に多大な迷惑をかけることは許されることではない。

熊本地震の時にもあったけれど、被害が一番大きかった地域だけを放送してしまうこともメディアの悪いところで、その地域だけに支援やボランティアが集中してしまいそのほかにも被害を受けた地域は、支援が遅いし、何より忘れられたような感情になってしまい被害が拡大する可能性があるそこでメディアの人たちは自覚をもって、利益追求だけにとらわれることなくやってほしいと願っている。

今回自分の両親の話聞いて、この人たちもこういう経験をしていろんなことを思って生きているのだなと思って、その想いをここで途切れさせないで自分ができる範囲でよいかから次の世代にも語り継い

でいきたいと考えさせられた。

5 私の夢

私はまだ夢が決まってない。周りのみんなは消防士や警察官など、立派な夢を高校生のうちから持っているけれど、私は明確な夢を持ってないことに対してダメだとか早く決めなくてはいけないという気持ちはなくて、楽しみながら生きていくうちにしたいことを決めていけたらよいと思う。私はいろんな経験をしているんな人と出会っていきたいので、一つの仕事だけじゃなく沢山のジャンルの仕事をしたい。

しかし、そんなに現実には甘くない。まず、生きていくにはお金が必要で、そのためにしっかりとした仕事につかなければいけない。お金が大事というのは夢がないような話だが、これがあることで色々なことに挑戦できるようになり、資金面でも、時間面でも、心に余裕が出てきて視野も広くなると思う。そうなったら、お金にとらわれない人生が送れると思う。お金にとらわれないために、お金を稼ぐというのは矛盾しているようだけれど、大切なことだと思う。誰にでもしてみたいことや、やってみたいことがあるけれど、時間やお金が枷になってできないこともあると思う。それも解決できると思う。

だから、私は高校を卒業した後、大学に進もうと思う。これからの人生の幅を広げるっていうものもあるけれど、それをやっていくうえでも楽しんでいきたい。だから、私は大学にも多くの学科という選択肢があるけれど、その中で経営学部に行こうと思う。

6 これからの防災とのかかわり方

生き方とかこれからの進路のことでの中の防災がどの位置にあるのかと言ったら全部だ。この世界で生きていく以上自分や家族、知り合いなどに危険があるなら、それを防ぐようにしたいし、仮に企業に就職するにしても利益だけじゃなくて、安全で災害対策の重要性を伝えていくことは大切だ。日本は特に災害大国で台風、洪水、噴火、大雪、地震も30年以内で80%の確率で南海トラフ地震が来て、その時の予想最高死者数は30万人以上だ。一年間の災害件数も1000を超えてどんどん増えている。こんな国で災害について知らなかったらとても危ない。他人事のようにどうせここには来ないだろうと思っていて、もし自分の身に災害が降りかかったら後悔しか残らないだろう。大学に行っても企業に就職してもそのことは変わらないので、周りの人に防災のことを伝えて行ったり、もし何かあったときに自分が動いて最悪の事態を避けたりできるようにしたい。

今世間では南海トラフ巨大地震の影響で防災への意識が高まってきている。だから、ネットとかテレビなどでそういう情報があふれてきていて身近な存在になってきている。

しかしながら、防災について興味がない人がまだまだたくさんいる。それはなぜだろうと考えて周りの人に聞いたら、そのほとんどが地震のことが他人事のことのように思っていた。そして、もし自分のところに地震がきたらなんてこと考えもしていなかった。ある程度予想はついていたけれど、やっぱり今まで被害にあわれてきた方々と同じことを言っていた。

我が事意識を持ってもらうために私たち個人ができることは、友達などのある程度信頼関係ができて人に防災の大切さやそれを伝えていくことの重要性を呼び掛けていくことだと思う。そしたら、その人の家族や周りの人につながっていくと思う。これはこれからずっとやっていかなければならない基礎的なことで、これから先成長していったらその都度自分に合った防災の広め方を見つけてやっていけたらよいと思う。例えば、会社の運営に関わるようになったら防災対策を提案してもよいし、ネットで広げていってもよいし、いろんな広げ方がある。でも、防災を広げていくなかで大切にしたいことは、この高校三年間で学んだことや、被害にあった方々から聞いて感じたことを忘れないようにしていきたい。

7 これからの防災に備えて

南海トラフ巨大地震が30年以内に80パーセントの確率で発生する。これは私たちが生きている間に大災害と向き合うということを示している。被害にあった方は口々に「自分のところには来ないと思っていた」と言っていたので、後悔しないためにもすべき備えをしていく。私が考えた今からできることは次の3つだ。

1つ目は地震が起きた直後の動きをシミュレーションしておくことだ。状況によって変わってくると思うけれど、最低限自分のすべきことを把握したり優先順位をつけたりしておくことは大切である。なぜ大切であるかというと、人は予想外の出来事に出会ったとき2パターンの行動しかとれない。動けなく

なるか、いつも通りのことしかできなくなる。実際に私も街中でいきなり他人に嘔吐されたことがあったとき頭が真っ白になり何も考えられなくなった経験がある。そして、その時の記憶もあいまいだ。これが地震の時に出してしまうと命を落としてしまうかもしれない。これを防ぐためにもまだ災害が来ていない時に災害時のシミュレーションしておくことで地震が起きてもすぐ行動することができる。避難ルートや避難場所、家族の集合場所などもこの時話し合っておけば、想定しやすくなるだろう。

2つ目は、近所の人たちとのコミュニケーションだ。この地域とのコミュニケーションの大切さは阪神・淡路大震災で顕著に表れた。地震直後に被害にあった人を助けたのは、そのほとんどが地域住民で消防や自衛隊に助けてもらった人はほとんどいなかった。このことの教訓として今も語り継がれてきているのだが、実際のところあまり世間にはこの考えは浸透してない。だから、私はなんにもできないけれど、せめて自分が住んでいる地域の人々と繋がっていきたいと思う。例えば、毎日会ったら挨拶をしてどこにどんな人が住んでいるのか、この時間帯は何をしているのだろうかをわかっているようにしたい。そしたら、もし何かあったときにすぐに助けに行けることができるだろう。

3つ目は、基本中の基本だが家具の固定や家の耐震化だ。例えば、壁に筋交を入れたり、金物で補強したりすることで、家がつぶれてその下敷きになるリスクが低くなる。また、家具を固定することで食器やタンスなどの重たいものが倒れてきてケガしないようにすることが必要である。

この3つのように今から確実にできることを、積み重ねていくことが未来に来る災害に対する防災だと思う。

過去と未来を繋ぐ私たち ～To the future～

東 遥平

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していない。だが今後同じ悲劇を生まないために、風化させないために一人の若い世代として語り継いでいく義務があると思う。語り継ぐと言っても経験していない私が語るには経験した方から話を聞き、伝えていくことしかできない。だからここからは父の同僚の、当時新長田で被災した方（小田中 浩二さん・恵美子さん）から聞いた話を書いていく。

2 阪神・淡路大震災

(1) 浩二さんのお話

当時三宮で靴の販売をしていた。成人式を迎えた、その2日後…。

新長田の自宅マンションで今までに感じたことのない大きな衝撃、ゴジラが来たのかと思った。

揺れが収まってから外に出て状況を確認するとマンションはひびだらけで、町の様子は一変していた。近くの商店街に行くと建物は倒れ火事が発生していた。長屋に住んでいた母のことが心配になり様子を見に行ってみると、幸い家屋の倒壊もなく無事だった。マンションの近くの水道管から水が吹き出していたので、その水を汲んで使った。自宅マンションは危険だったので、被災した当日は避難所で過ごし、その後1週間は母の長屋で過ごした。コンビニに商品は全くなく、ご飯は近くの学校に行き救援物資を受け取り生活していた。電気はついてはいたが水は出ていなかったため、しばらくお風呂に入ることはできなかった。

母の家で過ごした後、大阪の箕面にある会社の社宅に住まわせてもらえることになった。その社宅はライフラインに関して何一つ不自由なことはなく、大阪なので食料に困ることもなかった。しかし、物はあるが仕事はまだ再開できないため、ずっと家で生活し、土地勘もなく友達もいないため寂しい日々を過ごした。久しぶりに入ったお風呂ではシャワーがピリピリして痛かった。

しばらくして箕面の社宅から西宮の社宅に移った。約半年が経ったころ自宅マンションは補修され、戻ることができた。三宮で商売をすることはできなかったため、姫路で再開した。

(2) 恵美子さんのお話

恵美子さんは当時、病院の事務員をしていた。その日は母の家で寝ており、飛行機が墜落したのかと疑う程の音と衝撃で目が覚めた。寝ていた部屋にタンスがあったが、部屋が狭かったので壁につかかり下敷きにされずに済んだ。近くに住んでいた叔父の安否を確認しに行くと、怪我はなかったが家は全壊し、隣の家が叔父の家に突き刺さっていた。無料で電話ができる場所から、知り合いや親戚などあらゆる所に電話し安否確認をした。

地震から1日が経ち、祖母の家に荷物を取りに行こうとしたが、長田の街を襲った火事は祖母の家の近くまで来ており、危険だと判断して取りに行くことはやめた。幸いにも風向きが変わり祖母の家は焼けずに済んだ。

恵美子さんとも浩二さんとともに箕面の社宅で過ごし、それから西宮の社宅へと移り、自宅のマンションへと帰ってきた。

3 今

24年前に阪神・淡路大震災を体験して、今、思うことは、私たちが普段普通に生活していると忘れがちなライフラインのありがたさだ。スイッチ一つで電気がつき、蛇口をひねれば水が出て、元栓を開ければガスが通り火をつけることができる。そういった当たり前となっていることを当たり前と思わず感謝しなければならない。そして、それがあの日急になくなり、使うことが出来なくなる不自由さや苦しさを忘れてはいけない。当たり前のように生活できることが奇跡である。

幸いにも浩二さんや恵美子さんの家族や親戚が亡くなることはなかったが、恵美子さんの母は二度とこのような恐ろしい出来事を経験したくないと、長田にはもう住んでいない。

これから起こる災害に対して考えていることは、家具の配置を気を付けること、赤ちゃんや子供を寝かせる場所、マンションが海から近いため津波の危険性を認知しておくことだ。

阪神・淡路大震災が起こってから様々な建物が、次起こると言われている南海トラフ巨大地震のこと

を考えて設計されていると感じている。最近の家だと基本的にクローゼットが設置されており、クローゼットはタンスと違い倒れてくることなく設計の時点から防災のことを考えている。

当時、防災グッズなどはほとんどなかったが、現在はたくさんあり、全体的な意識が変わったと感じられる。

4 お話を聞いて

私がお話を聞いて、改めて一番大切だと感じたことは、まずは自分の命を守ることである。1年生の時、「災害と人間」の授業で救助する側の方の話をよくお聞きすることがあった。その中で災害が発生したとき、誰もが誰かを助けるものだと思い込んでいた。しかし、それは本当はとても難しいことだと知った。実際に浩二さんも被災時は他の人のことを心配する余裕もなく、自分の生活を確保することで精一杯だとおっしゃっていた。私は自分の命を守ることがその時できる100%のことだと考えている。一人一人が自分の命を守ることができれば、被害をより小さく抑えることもできる。だが、例外もある。小さな子どもや、障がい者、高齢者などだ。そのような方々を守るためには、暮らす家、家具の固定や配置、非常持ち出し袋の準備、ハザードマップ、避難経路や避難場所の確認が更に重要になってくる。これらのことを日頃から気にしていれば、被害は大きく減少すると思う。今、私が生きている間に70~80%間で発生すると言われている南海トラフ巨大地震に対して一体どれくらいの人が備えることができているのが正確には分からない。

5 東北訪問

高校1年生の時と2年生の時、東北訪問に参加した。様々な活動を行った中で私は交流が好きだ。理由は単純で人と話すことが好きだからである。兵庫と宮城の2つの地域で防災の見方は違った。阪神・淡路大震災では家屋の倒壊による圧死が多く、東日本大震災では津波のために溺死が多数を占めた。この違う種の教訓をどのように生かすことが出来るのか。

私は東日本大震災の教訓を、現在30年以内に70~80%の確率で発生するといわれている南海トラフ巨大地震に対してどう生かすことが出来るのかを考えた。南海トラフ巨大地震は高知県をはじめとした四国、淡路、神戸にも津波の危険があるといわれている。阪神・淡路大震災では津波が来なかったから次の地震でも津波は来ないだろうという油断や誤解は許されない。技術が発達し、どのくらいの被害が出てしまうかという正確な数字が発表されているが、その予想を超える可能性は十分にある。すべての情報を鵜呑みにせず、想定外を考えておくことが大切だ。24年前の阪神・淡路大震災の教訓と東日本大震災の教訓を常に意識していれば、南海トラフ巨大地震が発生したとき、多くの人が自分自身で命を守る行動がとれるのではないかと考えている。

私が1年生の時から参加している東北訪問で大切にしていることは「繋がり」である。そのため、今年も参加しようと考えている。少し前、新聞の記事で忘れられることが一番悲しいという文を見たことがある。この文を読んだとき、過去の災害を語り継いでいく使命がある私が、必ず守っていかなければならないと思った。

1年生の時、泥かきなどのボランティアをしに行くわけではない私が東北に対して何が出来るのかを考えたとき、1つ目は、継続することだと考えた。そして初めて東北へ行ったとき、「繋がり」を維持することを決心した。常に話すことや、意見を交換することはできないが、常に興味を示すことはできる。実際に私は、大川小学校で被害を受けた小学生の遺族が真実を知りたいために起こした裁判について何度か調べることがあった。また、1回目の訪問と2回目の訪問では心の持ち方が違っていった。まだあまり知識がない1年生の時、被害を受けた大川小学校を見て、正直その時は他人事として、受け取ってしまっていた。ただ、残念だ、二度と起こらないようにしなければならぬと考えるだけだった。しかし、2年生になってもう一度同じ場所に立つと、もし私が今生活している場でこのような災害が起きれば、周りの大切な人や友人の命を守ることが出来るのか、自分が行ってきている防災は何の効力も発揮しないのではないかと少し恐怖を感じた。8月、また私は同じ場所に立ったとき、何を感じ、何を思うのかはわからないが何一つ無駄にはしたくないと考えている。

6 夢と防災

私には、今夢が2つある。

1つ目は、海外に対して何かの支援をすることや十分な防災教育を広めたいということだ。このような夢をもつきっかけとなったのは高校2年生の時、参加させていただいたネパール訪問である。

ネパール訪問を通して私が最も考えたことは異文化の理解である。普段暮らしている日本とは生活様式や考え方など大きく異なることが多くあった。ネパールは途上国であり、日本と同じくらい耐震化や防災教育が進んでいるとは言いがたい。そのような国で私が見た景色は少し衝撃的だった。耐震化された建物と聞いて頭に思い浮かべるのは鉄筋コンクリートで建てられ、筋交いがあり、一目で揺れに強いと分かるような建物だか、ネパールでは違った。ネパールの建築の文化は主にレンガ造りで国内の多くの場所でその光景が見られる。だからといって、この建築はダメだ、日本と同じ設計で建てろ、と考えても言っても意味がない。その国にはその国で手に入れやすい材料があり伝統的な建築方法がある。私たちの常識を押し付けようとしても、簡単に受け入れてはもらえない。相手側の文化を理解して、それに合った防災を考える必要があると私は思う。

そして、私は人とコミュニケーションをとることが好きだ。ネパールでは通りすぎる人にも挨拶をし、関われる機会があるときは積極的に声をかけた。人と話すことは新しい発見ができる。新しい発見をすれば自分自身が大きく変わる。自分が変われば、また周囲の人を変えることができる。と私は考えている。

コミュニケーションをとるといことは大人になっても必ず継続していきたい。

また、私は英語が好きということもあり私自身、英語を使ってどれだけコミュニケーションをとることができるのか、という期待を胸にもっていた。しかし、その期待は今となっては良い意味だが裏切られた。話したいことも話せず、伝えたいことも伝えられず、相手の考えを理解することさえも容易ではなかった。

ネパールを訪問させていただいた時から新しい野心が芽生え始めた。これが今の夢となっている。元から海外に興味はあったが、今回の訪問を通して海外に対しての支援、主に海外ボランティアに興味を持ち始めた。きっかけは単純だ。ネパールも日本同様地震が多い。これはアルプス・ヒマラヤ造山帯の影響だ。その影響により地震が多いにも関わらず、日本ほどの耐震化や防災教育ができていないことを放っておくことはいけないと考えた。

もう1つの夢は英語の教師である。この時、私自身でネパールのような途上国の防災教育をしていけば良いのではないのかと考えた。途上国には学校に行きたくても行けない子ども、防災教育を受けていてもその状況に応じた適切な行動をとることができない子どもなど、ソフト面やハード面など一部には備わっているが一部には備わっていないということがよくある。

また、いつか海外へ行き自分の伝えたいことを伝えられるために必要な英語力を備えた人材を育成したい。環境防災科で培ってきた知識と高い英語力を身につけることで日本の防災・減災を海外へと広めることのできる人材を育てたい。

そして私にはもう1つやり遂げたいことがある。それは絶対に風化させないということだ。将来私がどのような立場で防災に関わっているかはわからない。だが風化させないために伝え語り継ぐということは必ず継続していきたい。日本の災害であったとしても海外に伝えたいと考えている。このようにするメリットは2つあると考えている。

1つ目は防災に対する意識の向上である。

これは国内外を問わないと思っている。もし私が日本で起きた災害についてネパールのような国で伝えたとする。私は日本人がどのような防災をしてきたか、しかし、それでもどれだけの被害が出てしまったのかなどを伝えるだろう。ネパールの国民からすれば、それだけ意識していてもそれほどの被害が出てしまうのか、ではどうすれば私たちネパールの国民は自分自身の命を守れるかと、考えるだろう。そうするだけで防災への意欲が高まり国民1人1人が自分で自分の命を守ろうとする。そうすれば国全体としての意識が高まり防災力が向上する。

2つ目に日本での風化防止である。海外に伝えるとなれば、まず日本でもそのような活動を行うことになる。日本で行えば自然と語り継がれ、簡単に風化することはないだろう。だが、ここで私が考えた問題点が1つある。私が大人になった時や、もっと歳を重ねたとき、阪神・淡路大震災を実際に経験した方は少ないだろう。そして、いつかは阪神・淡路大震災を経験したという人はいなくなるだろう。そうってしまったとき、どのように伝えることができるのか。今、私たちは「語り継ぐ」を行なっているが、実際に私たちが何も知らない世代へと語り継ごうとするとき、どれだけの子が興味を持ち、風化させてはいけないものなのだと意識するかが重要となる。

しかし、現代では画像や動画を簡単に見つけることができる、従って、触れる機会が増えると思う。このようにして、より関心を持ち未来のためへと繋いでいけるようにしたいと考えている。

実際に少し前、防災にかかわっていない子と話す機会があった。その子は阪神・淡路大震災が発生し

た日にちさえ曖昧だった。興味がないことは忘れてしまうのかもしれないが、それで済ませてはいけないと思った。防災を広げていきたいと考えている限り、興味がないから知らなくても良いという考えを持っている人は減らしていきたい。少し知るだけでも命を守る行動をとることが出来るかどうかが変わる。日本に住んでいる限り自然災害から逃げることはできず、向き合わなければならないことを全員が認知することが大切だ。大切な人を失って悲しくない人はいない。大切な人を守るためにも、大切な人を悲しませないために自分の命を守るためにも防災の重要性を広めていきたいと考えた。

7 感想

今回の「語り継ぐ」を通して、改めて様々なことを考え直すきっかけとなった。父や母から阪神・淡路大震災が起こった当時の話を聞くことはあったが、大きな被害などはなく、被災した人を客観的にみている立場の話がほとんどだった。しかし、小田中さんは、身内で命を失った方などはいなかったが、避難を余儀なくされ様々な苦勞をしてきた。今回のお話を聞いて、特に感じたのは支えあうことの大切さと普段の当たり前前に感謝するということだ。小田中さんは被災後すぐに箕面の社宅に住まわせてもらったが、相手のことを思いやり、被災した人に暮らす場所を提供してくれるような優しさが当時はたくさんあったのだと思った。もう一つの普段の当たり前とはライフラインやお腹が空けば食べるものがあるということだ。阪神・淡路大震災では「災害と人間」の授業でも聞いてきたように、電気、ガス、水道と人が生活していくために必要なものが急になくなった。私たちは公共のライフラインに依存している。この機能が止まれば何もできなくなってしまう。普段、水を無駄にしてしまっていることや、電気を付けっぱなしにしていることなどは本当に贅沢で、災害時はほんの少しの水も貴重だということを実感しておかなければならない。

また、自身の辛い体験を進んで話したいと思う人は多くないかもしれない。しかし、話すことには意味があり価値がある。話すことによってこれから先救える命が増えるかもしれない。教訓を生かすことが出来るかもしれない。救える命を救うために「語り継ぐ」は非常に重要なことである。そしてそのお話を聞いた私たちが次の世代へつなげていかなければいけない。決して同じ過ちを引き起こしてはいけない。

様々な災害が起こる現在の日本で絶対に安全だと言い切れる場所はないだろう。これから先どのような種類の災害に遭うかわからない。どんな災害に対しても柔軟に対応できる力を備えておきたい。

これから私はどのような道に進むかわからない。教師になっているのか、海外で活動しているのか、何もわからない。だが、1つだけ言えることは、防災は必ず行っているということだ。災害について学べば学ぶほど恐ろしさを知り、命を守る難しさを実感する。だからこそ防災をやめてはならない。技術が発展すればするほど人はその技術に依存し、人本来の防災力が低下するかもしれない。災害に強い街を作ればその分油断が生まれるだろう。そんな時自然は牙をむく。誰がいつどのような場所で災害に遭遇しても被害を受けないで済む道、防災を考えたい。災害が起こってから助けることも大事だが、助けられなくても助かることが出来る社会、一人一人の防災力を築きたい。

「語り継ぐ」

石川 邑真

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験することなく、また大きな災害も経験することなく今日まで生活してきた。この「語り継ぐ」を通して、阪神・淡路大震災を経験した人の体験を聞き、震災当時の状況を知ることができた。阪神・淡路大震災を経験した人たちの記憶を風化させないために語り継いでいくことは大切なことだと思った。震災体験を聞き、改めて災害に備える大切さを感じた。身近な人の震災体験として私は当時垂水区に住んでいた祖父母に話を聞いた。

2 祖母の話

(1) 震災体験

地震が発生する少し前に目を覚ましていた祖母は、激しい上下の揺れとその後すぐの左右の揺れで飛び起き、当時寝ていた二階の窓を開け少し高いところにあった自宅から見ると、まちはあまり変わった様子はなかったが、同じように窓を開けていた隣人はタンスの上の人形ケースが落ちてきたり、1階の食器棚の食器が割れたりしたと聞いた。自宅は大した被害はなく、この時はまだ電気も水道もガスも来ていたためご飯を炊き風呂に水を張りゆで卵をたくさん作った。その後、テレビをつけると少しずつ悲惨な状況が分かり驚いた祖父はとりあえず会社に向かった。

その後、ガス・水道・電気が止まり、買い物に行っても品物がない状況が続いた。しばらくして電気はとりあえず来たので家族4人で1階のこたつで寝る日が続いた。ガスがなかなか復旧しなかったので長い間まともな食事ができなかった。テレビの犠牲者のニュースで名前が流れるたびに恐怖を感じた。

祖母の実家は兵庫区だったので実家はかろうじて残っていたが、まわりはほぼ全壊という状況で祖母の伯母がつぶれた家の瓦礫の中に埋まりみんなで引っ張り出したり、年末に亡くなった伯父の遺骨が見つからなかったりと大変なうえ近所の知り合いが亡くなっていたと聞いた。その近隣に住んでいた人たちはみな中道小学校に避難することになった。後日曾祖父の話によると長田の大火が家のすぐそばまで迫っていた。

電車が動くようになって祖母が兵庫駅を降りて避難所へ行こうとしたときに違和感を持ち、その違和感はまち全体が傾いていることに気づいた。

(2) 今思うこと

祖母は今震災を振り返ると自然の脅威の前では人間は何もできない存在だと気づかされた。これをきっかけに阪神・淡路大震災を思い出すことができた。災害を経験していなくても起きた後にどのように立ち向かっていくかが大切だと言っていた。

3 祖父の話

(1) 震災体験

1995年1月17日当時祖父は、勤めていた酒造会社の酒造用ボイラーを6時に運転すべく早出の為に起きた直後、阪神・淡路大震災に遭遇した。

下から突き上げるような揺れに布団の上で跳ね上がり、上から落ちてくる衣装箱から守るように隣にいた祖母に布団を掛け、地震が収まるのを待った。10分ほどして落ち着いたころ、2階で寝ていた為、1階に降り周りは停電、水道は止まると思い風呂の水を溜めておくよう祖母に言いトイレと洗濯の水を確保した。

それから、7時半頃に会社(灘区新在家南町・現在のコーナンプロの場所)に行くため車で出発した。自宅周辺の塩屋付近は、たいそうな被害はなかった。旧神明道路は須磨寺付近で土砂崩れがあり通行不能だったので、引き返して2号線で行くことにして走行していると、市街地にだんだん近づくにつれて重大な被害を目のあたりにした祖父は、神戸が無くなっていると思った。いつもならザワザワしている雰囲気から普段の日常が消え、聞こえるのは人の叫び声と何かが爆発する音、そして自分が運転する車の音だけだった。見る光景は、パジャマ姿で走っている人、高速道路から落ちてきた車、長田ではエンジンカッターで内から切断して消防車を出そうとしている消防署の方たちがいた。

祖父は大事だと、会社に急ぎ到着してみると、見るも無残に築200年という木造蔵が屋根から崩れ落ち、見えるのはなんとか立っている親柱3本のみという想像を絶する変わり果てた姿に身が震えた。傍らにいた蔵人(杜氏)さんが、第二次世界大戦の神戸空襲にも耐えた蔵が、いとも簡単にくずれ落ちてし

まったく、呆然としていた。帰りは名谷から自転車で来た同僚と車で長田を通ったが、行く先々で火災が発生しており、水道が出ない為、消防士が近くの川より給水消火作業をしていた。

翌日より祖父は、車ではなく原付バイクで通勤し、通常ある道は倒壊した家により通行不能になっているので、他人の庭や土手など、通れる場所を何とか通り会社に通勤していた。同社社員も、原付を持っている人はバイク通勤で会社に行き、会社の復旧をすべく片づけに励んだ。電車通勤をしていた社員は阪神大石駅が高架脱落で駅が無く、電車が3月1日に西灘駅まで復旧するまで自宅待機だった。祖父もその日までバイク通勤にて会社復旧をしていた。祖父は、工務係である為、何とか復旧して今迄通りの酒造りをしたい思いがあった。灘五郷という神戸の酒屋は全部で54社あり、そのほとんどが震災の被害を受け、止む無く廃業した酒屋もあった。祖父の会社や近隣の会社では公園で宿泊生活をしている住民の方に暖をとってもらおうべく清酒を振る舞い、皆の団結力を高めた。また、祖父の会社の本社の方たちが京都より、阪神沿線は交通渋滞で車が動かない為、日本海舞鶴周りで応援物資を運んできて従業員に配布し、風呂がないだろうとプレハブの風呂を運んできてくれた。

(2) 今思うこと

携帯電話が当時あれば、あのような被害者数ではなかっただろう。焦げた匂いやいつも聞こえる音が聞こえない、普段見えない六甲山の麓が見えるほどの高い建物の倒壊、電気、水道、ガスが無い暮らしは現在では想像のつかないものだったと言っていた。

4 話を聞いて

今回「語り継ぐ」を通して初めて阪神・淡路大震災の当時の体験を聞いた。話を聞いていく中で身近な人が震災を経験していたのだと改めて感じた。祖父母は、当時の記憶を思い出しながら自分の震災体験を話してくれた。また、話だけでなく当時の新聞記事や阪神・淡路大震災の写真なども見せてくれた。祖母は震災を経験していなくても困難に立ち向かっていく力があればいいと言っていた。経験していない世代は震災体験を知り、防災や災害についての知識を身に付けておくことが大切だと思った。「語り継ぐ」で話を聞いたことで祖父母の忘れかけていた震災の体験を思い出すきっかけになったと思う。

5 環境防災科に入って

(1) 環境防災科

環境防災科に入ってここでしかできない経験をしてきた。外部講師による阪神・淡路大震災の当時の状況や活動そして震災から得た教訓などの講義、多門東小学校での出前授業や防災マップ作り、ひょうご安全の日のつどい、兵庫県立広域防災センターの見学、六甲山フィールドワークなど学校での授業だけでなく外に出て活動しながら防災を学ぶことができた。中でも出前授業が印象に残っている。学んできたことを小学生にわかりやすく伝える授業を考えたり、人に防災を伝えたりする経験ができたのでよかった。この3年間で学んできたことをこれからの生活に生かしていかなければならない。

(2) ボランティア

私はこれまで熊本地震被災地支援ボランティアや募金活動、地域の祭り、防災訓練に参加してきた。熊本地震被災地支援ボランティアでは、初めて被災地に行き倒壊した建物や避難所で生活している人を見た。災害に対する知識や被災地での人とのかわり方などわからないことがたくさんあったが、自分なりの活動ができたと思う。ボランティアの中でも地域の防災訓練や祭りが印象に残っている。このボランティア活動に参加させてもらって地域の防災の取り組みを知ることができた。地域の防災訓練に参加するにあたって事前に消防署に赴き応急手当の講習を受け、防災クイズや簡単な手話など防災訓練に参加している地域の人や小学生に伝える方法を考えたり、事前の準備をしたりすることが大切だった。また、新聞スリッパなどの災害時に役立つ情報を地域の人に伝えられた。地域のこうした活動に参加して地域の人とつながることができた。ボランティア活動を通して自分が活動することで少しでも人の助けになったり、自分が得た知識をまだ知らない人に伝えたりすることができたと思う。地域の防災訓練や祭りなどの行事が地域の人同士をつなげ、防災が広まり、それらが地域防災の向上につながっている。

6 夢と防災

私の将来の夢は消防士になることだ。消防士になることができたならやりたいことがある。

1つは、火災現場や災害時に人を助けることができる消防士になることだ。日本では近年大雨や猛暑など異常気象や、それによる土砂災害や河川の氾濫、熱中症など様々な危険がある、その中から助けが必要な人を助けたいと思う。それを実現するためには日々の訓練や技術を身に付ける必要がある。そし

て、第一にまず公務員試験に合格しなければならない。

もう一つは、地域の防災に力をいれたいと思う。地域の防災訓練や防災の講義などに参加して消防と地域を密接につなげることをしたいと思う。消防が積極的に地域防災にかかわっていくことは地域の防災力の向上につながると思う。私の住んでいる地域では学校の中での防災訓練や炊き出し訓練は行われているが地域を巻き込んだ地域の防災訓練は行われていないと感じる。私が住んでいない地域でも同様のことが起きていると思う。だから私は、消防士になったらこういった地域の防災に力を入れたいと思う。また、地域の防災コミュニティでは地域の人同士のつながりがあるが高齢化が進んでいる。阪神・淡路大震災では自助、共助により多くの命が助かっている。よって地域の人同士の助け合いや救助活動が必要となる。だから、大人に向けた防災教室を実施し幅広い世代が防災に触れる機会をつくっていかなければならない。また、高齢化した地域では高齢者同士が互いに助け合わなければならない。こうした問題を解決するためにも地域での住民の把握や災害時にどのような行動をとればいいのかなどの防災マニュアルを考えたい。防災の活動をするには消防と地域が密接な関係をつくること大切だと思う。他にも防災への取り組みがなされていない地域がまだまだあると思うので地域防災の向上のために活動したい。

7 南海トラフ地震

南海トラフ地震は、今後 30 年以内で 70~80%の確率で発生すると言われている。地震だけでなく津波による甚大な被害がでると予想されている。兵庫県では最大 3 万人の死者が出ると想定されており、そのほとんどが津波により命を落とすと言われている。しかし、防災の知識を身に着けることや津波避難行動を一人ひとりがとることで 400 人に減らすことができる。400 人の中に入らないようにするために一人ひとりが日ごろから災害についての知識を深め、災害に備えておくなどの行動をとることで自分の命を守ることができ、南海トラフ地震による死者を減らすことにつながると思う。例えば、自分のいる場所が海拔何mなのか、高台や津波避難ビルの場所を調べるなど津波からの避難行動を知っておけば自分の命を守ることができる。いつ起こるかわからない災害であり、いつか起こる災害でもあるので備えておく必要がある。

8 まとめ

この「語り継ぐ」を通して身近な人の震災体験を聞き、環境防災科での 3 年間で振り返ることができた。私が生まれる前に起こった阪神・淡路大震災の当時の状況や生活、復旧していく様子を聞き、今では想像できないものだった。自分の身近にいる人も震災により被災していて、それぞれの震災体験があり、聞かなければわからないものだと思う。私は祖父母に震災の語り継ぎをしてもらったが、身近な人の震災体験は今まで聞いてきた震災体験の話とは少し違った。普段ではなかなか聞かないことを聞いてそのような過去があったのだと思った。災害を知らないからこそ語り継ぎを行い、過去にあった災害の出来事を知り、震災を経験した人たちの思いを知ることが大切だと思った。そして、語り継ぎを過去の教訓にし、これから起こる災害に役立てていかなければならない。局地的な豪雨や台風、猛暑、豪雪などの異常気象、そして、それによる土砂災害や河川の氾濫、高潮などますます威力が強くなっている。また南海トラフ地震が 30 年以内に 70~80%の確率で起こると言われている。私たちはこれから様々な災害に対して備えていかなければならない。災害に備えることは、災害の知識をつけ、身近な活動によって備えることができる。災害の知識をつけるために防災のセミナーに参加し、インターネットで調べるなどをして自発的に活動していく必要がある。災害が起きた時にその災害に対して何も知らないことは一番恐い状況だと思う。災害について知ること避難の方法や場所を知ることができると思う。地域の活動や防災訓練、祭りなどの行事に参加することで地域の人とつながることができ助けられ、助ける関係作っておくことが災害への備えになる。

9 感想

今回「語り継ぎ」をすることで祖父母の震災体験を聞くことができた。この「語り継ぎ」をしていなければ祖父母の震災体験を知ることはなかったと思う。身近に震災を経験した人がいることに気づくことができたので話を聞いてみたいと思う。忘れかけていた震災の記憶を蘇らせ、これをきっかけに、いつ起こるかわからない災害への備えをしてほしいと思った。近年、様々な地域で様々な災害が起こっており、災害の備えや防災の知識を身につける必要性が高くなっている。私自身将来どんな場所に住んで、どんな仕事をしているのかはわからないが、どんな形でも防災に関わっていきたいと思う。災害の経験

を風化させないために「語り継ぐ」を続けなければならない。「防災は答えがない」だから難しい。けれど、答えがないからこそ誰でも自分なりの防災ができるのだと思う。

「語り継ぐ」

石原 直樹

1 はじめ

私は阪神・淡路大震災が発生して6年後に生まれた。だから、震災当時神戸のまちで何が起こり、どのような状況だったのかはわからない。しかし、私の周りの人は阪神・淡路大震災を経験している。だが、震災を経験した人たちが少しずつ少なくなっている。そこで、震災を経験した人から話を聞き、改めて阪神・淡路大震災について考え、まとめたいと思う。まとめたことを次世代に語り継ぐ。

2 母の話

(1)前日

母は当時、大丸でアパレル店員として働いていた。その日は変わったことは起きず、いつも通りだった。母は次の日掃除当番だったため、その日は早くに寝た。

(2)当日

母は神戸市北区のひよどり台に住んでいた。地震発生直後に、「ゴオオ」という地響きが鳴り、大きな揺れが起こった。その瞬間、寝ていた母はすぐに目が覚めた。同じ部屋で寝ていた姉は、布団にしがみつき、何が起きているかわかっていなかった。隣の部屋で寝ていた妹は、本がたくさん落ちてきているのにもかかわらず寝ていた。何度も「ゴオオ」という音とともに余震が続いていた。部屋の様子は、テレビが倒れる、食器が落ちる、ライフラインが止まる、などが起こっていた。しかし、ライフラインの復旧は早かった。小学校に給水に行ったのも一度ぐらいで、テレビも次の日ぐらいにはついていた、電話も次の日にはつながっていた。2、3日後にはライフラインは戻っていた。ひよどり台では家が倒壊したところは少なく、外はいつもと変わりがなかった。母は避難所にはいかず、家にいた。しかし、余震が続いていたため次の日だけ車で寝た。

(3)町の様子

2、3日後、母の妹が長田区で働いていたため、妹は仕事場が心配になり私の母と二人で長田区へ行った。電車は全く動いていなかったため、バスで長田区まで行くことにした。長田の街にはたくさん自衛隊が活動していた。建物はほとんどが倒壊していて、北区とは全く違うと感じていた。テレビでは長田の街の様子を見ていたが、実際に自分の目で見るととても衝撃を受けたと言っていた。 (4)

被災後の仕事

元町の大丸は地震の影響が酷く、人が入れる状態ではなかった。そのため、大丸での営業は不可能であった。しかし、本社が新神戸にあったため、被害が少なく本社での営業は大丈夫であった。本社から、「仕事に来られる人は来てください」という連絡を受けたため、母は仕事に行くことにした。周りのお店は地震の影響で倒壊し、開ける状態ではなかったため、地震で着替える服を失くした人や服を買いたい人が多くいた。そのため、本社では安い値段で服を売っていた。服のことで困っていた人が多くいたため、たくさん売れたようだ。

(5)今思うこと

母が阪神・淡路大震災を経験して今一番思うことは、備えが大事だということだ。母の実家では、震災が起こる前から食料をため込んでいた。そのため、震災発生後に食料に困ることはなかったと言っていた。しかし、神戸では地震など起きないと思っていたので家具の固定や防災リュック、災害や防災に関する知識がなかったために備えていなかった。だから困ることも多くあった。そのため、母は備えが一番大事だと言っている。

3 父の話

(1)前日

父は、いつも通り、何も変わったことはなかったと言っていた。この次の日にあんなに大きな地震が神戸のまちに襲うことなど全く予想していなかった。ただただ、いつもの生活を送っていた。

(2)当日

父は垂水区に住んでいた。地震発生直後、「ゴー」という音とともに激しい揺れに襲われた。みずやとサイドボードなどが次々に父の上に倒れ、起きられない状態になっていた。揺れが収まってから、父は隣の部屋に寝ていた祖母を見に行くと、祖母は無事だったが襖が歪み、開かなくなっていた。家の中には、ガラスの破片が散らばり、とても危ない状態になっていた。そのため、父と祖母は家の前に

止めていた車に乗り込み、ラジオをつけて神戸が今どのようなことになっているのか現状を確かめた。その日は雪が降っていた。寒さをしのぐためにエンジンをかけ明るくなるのを待っていた。明るくなり家に戻ると、水道やガス、電気が止まっていた。しかし、祖母が毎日お風呂に水をためていたため、水は少しあり、トイレ用に使った。食べ物を買いにコンビニに行くが何もなく、家に残っていた食料を食べていた。父の親せきは京都に住んでいた。そこで、父は車にガソリンを入れ、京都の親せきの家を目指した。道路の関係で篠山の方向から一日かけて京都に行き、半年間京都で暮らした。

4 両親の話を聞いて

私は両親に阪神・淡路大震災の話を聞いたことがなく、あの日に何をしていた、どのような被害にあったのか全く知らなかった。両親ともにそこまで大きな被害を受けてはいなかった。だが、被災者だ。被害が小さかった被災者の話を私は聞いたことがなかった。そのため、とても新鮮で学ぶことが多かった。私は、大きく被害を受けた被災者の話を聞き、語り継ぐことはとても大事だと思う。それと同じぐらい、被害は少なかったが被災者である人の話もとても大切である。そのような人の話はとても大事で、語り継ぐ必要がある。そのため、両親にこのような話を聞くことができよかった。私は両親に阪神・淡路大震災のことを一度聞いてみたかった。だが、聞く機会がなかった。だから、語り継ぐという機会に話を聞くことができよかった。今回両親に聞いた話をしっかりと語り継ぎたいと強く感じた。

5 環境防災科に入るまでの自分と防災

私は環境防災科に入学するまで全く防災の知識もなく、防災への興味関心がまったくなかった。私が知っていた防災知識といえば、「お・は・し・も」と頭を一番に守るということぐらいだった。なぜ環境防災科に入ろうと思ったのかというと、夢が警察官だったということだ。だから、環境防災科に入学しようと思った。防災の重要性は高校に入るまで全然わからず、小中学校のときの防災訓練もみんながやっているからやる、やれと言われたからやる、そのぐらいにしか、防災訓練を重要だと思っていなかった。環境防災科に入学するまで、まったくと言っていいほど防災とは無関係の生活を送っていた。友達と毎日外で遊び、地震なんて起きない。高校に入るまでずっと思っていた。だから、自分自身が高校に入り、こんなにも防災のことを学び、ボランティア活動を行っているとは小中学校の時の自分には想像もつかなかった。そのため、もっと小さい時から防災のことを知っておいたほうが良いと強く感じた。

6 環境防災科に入学して

私は環境防災科に入り、多くのことを学んできた。高校一年生の時には、熊本県で大きな地震が発生した(熊本地震)。とても印象に残っている出来事だ。人生で初めて、被災地に行き、被災した現場を初めて自分の目で見た。東日本大震災の時はまだ小学生で、テレビを通して観ていた。しかし、実際に自分の目で被災された現場を見ると心が不安定になりそうだった。何をしていたのかかわからず、ボランティアをしていた。熊本地震での被災地支援活動で学んだことは、知識が必要だということだ。やる気だけで被災地に行っても、迷惑をかけるだけだということも学んだ。次に、私は地域のボランティア活動に多く参加した。そこでも多くのことを学ぶことができた。募金活動では、被災地の情報をできるだけ多くの人に伝えなければいけない。なぜ募金活動をやっているのか、その集まったお金はどのように使われるのか、などを説明する必要がある。ただ募金活動をするのではなく、地域の人に訴えながら、被災地の人のためにすることが大切だということも学んだ。地域での防災訓練で学んだことは、地域の人との信頼関係の必要さを学ぶことができた。地域の方は高校生にだから頼めることがあると前に言われたことがある。なぜ、地域の方が頼ってくれるのかというと信頼関係があるからだ。日頃からのあいさつ、地域の人とのコミュニケーションをしているからこそ信頼関係が生まれるのだと思う。日ごろから地域の人とつながっている必要があるのだ。私は、環境防災科に入り、多くのことを経験し、学んできた。この三年間を無駄にしないために、将来に生かしていきたいと思う。私は将来警察官になりたいと思っている。そこで、環境防災科で学んだ、コミュニケーション能力や防災知識、などすべてを生かし、自分なりの防災を作っていきたい。これからも、世界規模で考え、地域で行動していく、それがこれからの自分に必要なことだと思う。

7 自分の夢と防災

先ほど言った通り、私の夢は警察官になることだ。警察官と防災は、とても密接な関係がある。災害が発生した場合、警察官が行うことは多くある。一つは、避難誘導である。災害が発生した地域の警察署が主体となり避難誘導を行う。東日本大震災では、津波が来ると分かった警察官は先頭と最後尾に立ち、避難誘導を行った。この行動により、多くの人の命が助かった。また、高齢者や子供などの災害弱者の方には早期避難を呼びかけていた。次に救出救助である。全国から派遣されてきた警察官や地元の警察官で建物が倒壊し、逃げ遅れた方や避難に遅れている人の救出救助を行っている。さらに、交通整備を警察官が行っている。地震が発生すると日常的な交通ルールが守られなくなる。なぜなら、災害の影響で信号や道路標識が壊れ使えなくなるからだ。地震で難を逃れた人が亡くなってしまうという最悪のケースが起こらないために、警察官が手信号などで、交通整備を行っている。次に、被災地における犯罪対策である。災害時になると犯罪が一気に増える。盗難、不法侵入、詐欺、暴力団がらみの犯罪などが一気に発生する。そこで、避難所で避難している人が被害にあわないために、呼びかけやパトロールなどを行っている。これらは災害時に警察官が行うことの一部である。次に、警察官が災害起こる前に行っていることは、救出訓練や津波災害対策、原子力災害対策、SNSやインターネットでの情報発信、南海トラフに備えた訓練などを行っている。救出訓練や津波災害対策、原子力災害対策などは起こった時のための訓練である。SNSやインターネットでの情報発信とは、壁紙や防災訓練を行っても、若者や仕事が忙しい人には知ってもらうことができない。そこで、このような人たちが情報を得るために、SNSやインターネットを利用し、防災情報を発信している。このような活動を日ごろから行っている。非日常時に多くの人の命を守るために、阪神・淡路大震災や東日本大震災、新潟中越地震、熊本地震、広島県豪雨、日本各地で起こる噴火などから学んできた防災知識を生かし、日々防災を強めている。私は警察官になっても防災を広げる活動を行いたいと思っている。警察官ならではの広め方を利用する。その方法は、四つあると考えた。

一つ目は学校での防災教育の強化である。私は、生活安全課少年係の警察官になりたいと思っている。そのため、学校での防災教育にかかわることができる。そこで、小中学校や高校に行き、私自身が経験したことや学んだこと、一般の人より知っている防災知識を子供たちに楽しく伝える活動をする。子供は、学校で楽しかったことや印象に残っていることを家で話すことが多い。子供が知った防災知識が家族に広がり、家族から近所の人へと広がり、地域に広がる。このような傾向を利用し、学校で楽しく防災を学ぶことによって、子供たちの防災知識、さらには地域の防災知識が高まると考えた。

二つ目に、自治体での防災訓練への参加である。私は、多聞東地区の防災リーダーをしている。多聞東地区の自治会では月に一度会議が行われている。その会議では、防災訓練をメインとした話し合いが行われている。そのため、防災訓練では、あらゆる災害に備えた訓練が行われる。しかし、住民だけでの訓練のため、消火器やAEDの使い方や、応急手当、などと内容が同じになってしまう。そのため、訓練に参加してもらえないのも、同じ人ばかりになってしまう。地域全体に広がらないのが現状である。そこに、警察官が参加することによって、知らなかった知識を知ることができ、防災訓練の内容も変えることができる。新しいことには人が寄ってくるため、地域全体へと防災を広げることができる。さらに、警察側としても、人に教えることにより自分の防災知識を高めることができる。このように、地域の人との交流を通して、警察と地域とのつながりができ、災害時に助け合える関係になる。

三つ目に、警察署での防災教室である。地域の人を警察署に招き、防災を教える。普段は入ることのない警察署で教室を開くことによって、興味関心がわくと考えた。子供と大人で教室を分けて行う。子供には、楽しく防災を学んでもらう。大人の方には、災害が起こった時の行動を再確認してもらおう。このように、子供と大人で分けて防災を教える。防災だけを教えていると飽きてしまうので、警察の仕組みや警察署を回るなどを取り入れながらすることにより、また来たくなり、継続して参加してもらえるようになると思う。

四つ目に、インターネットやSNSを利用することである。壁紙や防災訓練を行っていても、参加してもらえないのは小さい子供や高齢者の方だけである。学校や仕事が忙しい人は参加することが難しい。そこで、このような人たちに防災を伝えるために、インターネットやSNSを利用する。ほとんどの人が携帯やパソコンを利用しているからだ。警察版防災アプリやTwitter、ブログなどを作ることによって、若者たちに防災を身近なものにできると考えた。防災を若者たちに広げるためには、服やモノと同様に流行りに合わせなければならない。防災を風化させないためには、ずっと一緒ではなく、いろ

いろな世代に合わせた防災を作らなければいけない。災害時に一番力になるのは若者の力である。しかし、その若者に知識がなければ何もできない。災害時若者が先頭に立ち、地域の人を引っ張るためにも、防災を若者に広げる必要がある。このような四つのことを私は警察官になったら実現したいと思う。警察官にしかできないこと、警察官だからできることを探し、行動していきたい。その場所、人、環境、時代に合った防災を考えて伝え、そして、広げていきたいと思う。警察官ができる減災を行っていく。

8 感想

私は、初めて両親に阪神・淡路大震災の話聞いた。一度も両親から阪神・淡路大震災のことを聞いたことがなかった。そのため、語り継ぐという機会に初めて両親に聞くことができよかったと思う。また、阪神・淡路大震災について毎年1.17に近づくとテレビで報道されたり、新聞に載っていたりと自分で調べるという機会がなかったので、このような機会に、阪神・淡路大震災について深く調べることができ、よかった。父から震災の話聞くのが初めてだったため、とても印象に残ることが多くあった。父と母どちらも被災者であることを再確認することができた。両親ともに、大きな被害を受けていない。だからこそ、聞ける話や語り継ぐことが多くあった。大きな被害を受けた人の話はいろいろなところで聞いてきた。人と防災未来センターや災害と人間の授業で講義される方、語り部さんなどの方から聞いた。しかし、阪神・淡路大震災ではあまり被害を受けず、外側から見た震災の話は私はあまり聞いたことがなかった。そのため、両親の話はとても新鮮で、心に残ることが多くあった。だから、私は被害が大きかった人の話と被害は少なかったが被災された方、どちらの人の話を聞くことがとても大事だと思う。この聞いた話をこれからも広げていきたい。そのため、これからも防災にかかわっていこうと思う。私は、災害を経験していない。しかし私は、災害を経験していないことが強みだと思う。今後、南海トラフ巨大地震は私が生きていく中で必ず起こるといわれている。だから私は、この三年間で学んできたこと、経験してきたことをいかし、自分の命は自分で守り、乗り越えていきたいと思う。そして、私は警察官になってからも、防災にかかわっていく。一年生から三年生まで学んできたことや外部講師、出前授業、ボランティア活動などを通して経験してきたこと、今回の語り継ぐで、両親から聞いた話、これらが無駄にはしない。警察官になり、これらを生かし、人の命を守りたい。そして、災害に強い街を作っていこうと思う。自分が今できる防災を探し、災害時には市民のリーダーとなり、市民の人を助けたい。これが私の一番の夢であり、目標である。今回語り継ぐという機会に、改めて自分の夢について考えることができ、また、両親に阪神・淡路大震災のことを初めて聞くことができ、本当に良かった。私がこれまで話してきた夢の話や目標の話これらを必ず実現させたい。

1. 17 からのちをつなぐ

市場 香帆

1 はじめに

今から 24 年前の 1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分。私たちの兵庫を震度 7 の激しい揺れが襲い、6434 名の尊い命が奪われた。私は阪神・淡路大震災から 5 年後の 2000 年に生まれたため、その出来事を体験していない。大きな地震を経験したことのない私たちに何ができるだろうか。それは、今までに起こった災害について知り、広めていくことだと考える。同じような悲しみを繰り返さないために、教訓を未来に繋ぐ使命が私たちにはあると考えている。そこで、私は一番身近な存在である両親と祖母に阪神・淡路大震災の体験談を話してもらうことにした。曖昧になりつつある記憶をつなぎ合わせ、あの日それぞれが体験したことを語ってくれた。

2 母の話

(1) 地震発生

まだ寝ていて今まで経験したことのないすごい揺れで飛び起きた。隣の部屋の台所の食器棚がとてもしゃがみ揺れていたのを覚えている。平屋の古い木造の家だったが、家は無事だった。姫路は被害が少なく、家が壊れたりけがをしたりしたということは聞かなかったが、近所で空き家になっていた古い瓦屋根の家は瓦が落ちて壊れていた。携帯電話を持っていなかったため、何が起こったのか全く分からず、とにかく怖かった。

(2) 母の友人

神戸に親戚がいる友人の祖母は古い木造の家だったので下敷きになって亡くなったと聞いた。仕事も神戸に通っていたので以前の建物がなくなってしまった。様子を見た時はショックだったと聞いた。

(3) 後悔

父が会社に行くと言ったとき、「行かんといて」と言ってしまった。「行って」と言えたら良かったのに、と今思うととても後悔している。

3 父の話

(1) 覚えていること

あの時まで地震で目を覚ますことは経験がなかった。当時は姫路の木造平屋の社宅に住んでいたが、今まで経験したことがない大きく長い揺れで目を覚ました。食器棚は転倒していなかったが、中の食器類がぶつかる音には驚いた。とりあえず、隣で目を覚ました母を落ち着かせた。家の詳細確認もしたかったが、先に会社に電話し状況確認したところ、すぐにでも応援がいる状態であったため急いで向かった。

(2) 会社の状況

父は電力会社勤務である。三交替で勤務している職場へは一番に駆け付けたが、被害状況の確認もままならない状態であった。現場確認が必要な箇所が多くあり、影響の大きなところから順次回っていった。神戸の方はもっとひどいみたいだが、まだ状況確認中とのことだった。姫路の現場状況を手分けして確認後、会社へ戻ると神戸の状況や復旧方針、応援体制が検討されていた。

後日談ではあるが、当時は自分の家が被災した社員もいたが、電気の早期復旧を目指していた。数日で復旧できたのは電力会社の使命感と誇りがあったからだと感じる。

(3) 会社での取り組み

- ・震災での被害状況や復旧記録などを踏まえて設備計画や災害復旧訓練に活かしている。
- ・震災から 20 年以上が経ち、震災を体験していない世代が入社してきている。新入社員への研修として当時の記録や経験を継承する取り組みを行っている。

(4) 今感じること

- ・大震災までは震災や災害を他人事だと思っていた。
- ・命の大切さ、助け合いや思いやりのすばらしさ、有効な備えなど過去の災害体験や教訓をきちんと継承していくことが次の災害の備えにつながっていくと感じる。

4 祖母の話

(1) 地震発生

母方の祖母は、震災当時も今も高砂市阿弥陀町に住んでいる。阿弥陀のあたりはほとんど被害がなかった。地震が起こった時は寝ていて気が付かなかった。

(2) 婦人会での活動

神戸の方で大きな被害が出ているということを知り、所属していた高砂市の婦人会で神戸に市販のおにぎりやパンなどの食料をバスに乗って持って行くことになった。いつもの道は通れないため、大回りをして北の方の道から行ったため、かなり時間がかかった。お昼頃に出発して、2, 3時間ほどで帰った。小学校などの人が集まっているところに持って行ったが、被災した人とは直接会っていない。バスが通れるところしか行ってないため、被害の大きかったところは見えていない。

(3) 母のいとこ

芦屋に住んでいた祖母のいとこは、避難してきた人を家に泊ませたという。芦屋は神戸と同じように被害が大きかった。

5 話を聞いて

今回話を聞いて、姫路の方は被害が少なかったということを改めて知った。電力会社に勤務している父が震災直後、寝る間を惜しんで電気の早期復旧に向けて活動したということは、私が環境防災科を受験する際に聞いたことがあった。私が覚えている限りでは、それが初めて聞いた家族の被災体験であった。その時、自分の仕事に対して強い責任感を持って行動した父を尊敬した。その後、関西電力の方が外部講師として震災当時のお話をしてくださった際、父が話していたのと同じように電気の早期復旧に向けて懸命に活動したことを聞いた。その結果、たくさんの人に安心感を与えることができたとおっしゃっており、父の仕事は多くの人々の生活を支えているのだと感じた。しかし、父からそのことについて詳しく聞いたことや、母や祖母の口から震災の経験を聞くのは初めてであった。

震災が起こってすぐ、祖母が神戸へ物資を届けに行ったことを初めて知り、驚いた。そして今でも、母があの日々の記憶について後悔の気持ちを抱いていることは知らなかった。どれも今回のこの「語り継ぐ」がなければ聞くことができなかつたかもしれない。貴重な話を聞いてとても良かったと思う。

しかし、阪神・淡路大震災から24年という時が流れて、風化が進んでいるのではないかと感じた。話を聞いていく中で、姫路では被害が少なかったということもあり、大きな揺れを経験したにも関わらず震災当時の記憶は薄れてきていることを感じた。人間は忘れていく生きものであるが、もう二度と同じ被害を繰り返さないために、あの日々の記憶は忘れてはならない。

私は普段から、参加したボランティアの内容などを家族に話すようにしている。そのため、私が環境防災科で学ぶようになってからは家族で防災について考える機会が多くなったように思う。地震に対する危機感を家族により強く持ってもらうためにも、私が学んできた防災の知識をこれからも共有していきたい。

6 環境防災科に入学したことでの変化

(1) 人前で話すこと

私は以前、人前に出て話すことに苦手意識を持っていた。しかし、環境防災科で出前授業やボランティア、授業の中でのプレゼンテーションや発表を重ねるにつれ、その意識は少なくなったように思う。その力を周りの人に防災を伝えることに活かせるらしいと思う。

(2) 行動範囲

生まれ育った姫路市から離れた神戸市にあるこの舞子高校に一人で通うようになってから、行動範囲がとても広がった。環境防災科は兵庫県内の様々なところから通っている子がいるため、以前はあまり知らなかった土地にも自然に関心を持つようになった。それはとても良いことだと思っている。なぜなら、特定の場所だけでなく様々な場所に住む友達とつながっておくことで、何か起こった時にそれだけ広い地域の情報を得ることができるからだ。これからも、環境防災科のみんなとのつながりを持ち続けていようと思う。

7 環境防災科で学んだこと

(1) 無知の怖さ

3年間舞子高校環境防災科の生徒として防災を学んできた身として今思うことは、この科に入学して本

当に良かったということだ。この3年間で、ほかの高校生ならなかなかすることのできないたくさんの方を体験してきた。例えば、1年生の「災害と人間」という授業では、一年間を通して様々な職業の方に阪神・淡路大震災の体験についてのお話をさせていただいた。

災害が起きた時に一番怖いことは、知識がないことだと私は思う。知識があれば救える命がたくさんあるということ、何度も耳にした。環境防災科に入学する以前は、地震や津波は怖いという意識はあっても、どこか他人事のように考えていた。しかし、防災を学ぶようになってから、ふと「今地震が起きたらどうしよう」と考えるようになったことに気が付いた。これから大きな地震が発生した際、もし何も知識がなかったら・・・と思うととても怖い。以前の私のように、災害を他人事と捉えている人はたくさんいると思う。我が事意識を持って防災を学ぶことが大切だと思う。

せっかく学んだ防災の知識を、自分だけのものにせず、周りの人たちに伝えていこうと思う。そして、そこからまたその周りの人に防災の輪が広まっていったら私はとても嬉しい。

(2) 伝えること

環境防災科に入学してから、普段あまり関わる機会のない人たちとの交流をたくさんした。例えば、聴覚に障害がある小さな子どもたち、視覚に障害がある同世代の子たち、特別支援学校に通う生徒との交流や、出前授業だ。その中で感じたのは、伝えることの難しさだ。気を付けるようにしたのは、以下のようなことだ。

- ・分かりやすいようにかみ砕いた言葉を使う
- ・口を大きく開けてゆっくりと話す
- ・強調したいことは何度も繰り返して伝える
- ・言葉だけでなく、文字やイラストなど、視覚的な情報も入れる
- ・楽しみながら防災を学んでもらえるようにする

具体的には、劇やクイズ、防災体操などを通じて、防災を学んでもらった。印象に残っていることは、教室で先生がビニールシートを「ザブーン」と言いながら動かすと、児童の一人がおもちゃの台の上に登っていたことだ。津波が来たら高いところに逃げるということがしっかり伝わったと分かり嬉しくなった。自分の伝えたいことを相手に正確に伝えることは難しいけれど、少しの工夫を加えるだけでどんな人にも伝えられるということを実感した。また、防災を伝える際に気を付けなければいけないことがある。それは、間違ったことを教えないということだ。間違った情報はその人の命を奪いかねない。分からないことは素直にわからないといい、正確な情報だけを伝えるように心掛けた。

(3) 備えの大切さ

自然災害が私たち人間に及ぼす影響は驚くほど大きく、人間はちっぽけな存在だと感じる事が多くある。自然災害の恐ろしさを知るたびに、防災の重要性を身に染みて感じる。私は実際に大地震を体験したことがないため、起震車体験をした時の衝撃はとても大きかった。震災の映像や資料を見て学ぶだけでは、地震の本当の恐ろしさは感じる事ができていなかったのだと実感した。この大きさの揺れにいきなり襲われたらきっとどうすることもできないだろうと強い恐怖を感じた。そして、しっかり備えをしておかなければならないと危機感を覚えた。非常用持ち出し袋を用意していても、家具の固定や耐震化など建物自体を頑丈にしておかなければ元も子もないと思った。地震はいつ、どんな状況の時にやってくるか分からない。「地震は忘れたころにやって来る」という教訓を常に心に留めておかなければならない。

8 これからの私と防災のつながり

(1) 私の夢

私の将来の夢は、動物介護士になることだ。動物介護士とはその名の通り、動物、主に犬や猫などのペットの介護をする職業のことである。人間の高齢化が進んでいるのと同じように、食生活や生活習慣などが改善されるにつれてペットの高齢化が進んでいる今、注目の高まっている仕事だ。勤務場所は、老犬ホームやデイケア施設などの介護を必要とするペットたちのいる場所が一般的だが、動物病院、ペットシッターの派遣会社、ペットホテル、ペットの保育所、トリミングサロンなど様々な場所がある。具体的な仕事内容は、餌やりや排泄の際の介助、散歩や遊び、足腰のトレーニングやリハビリ、器具を用いた運動の介助、おむつ交換、動物病院への送迎など、動物たちが快適に日常生活を送るために必要なお手伝いをする事だ。お世話の内容は一匹ずつ異なるため、それぞれの動物としっかり向き合いながら、その子にあった仕事をする事が大切である。

この夢を持つようになったきっかけは、私は小さい頃から動物、特に犬が大好きで動物に関わる仕事

にずっと憧れていた。そして、動物に関わる仕事を色々調べているうちに、この仕事の存在を知り、私も人間の助けを必要としている犬や猫たちなどを支える動物介護士になりたいという思いを持つようになった。

(2) 夢と防災

私がこの職業に就くことができたなら、やりたいことが4つある。まず1つ目が、職員だけでなく動物たちも交えた避難訓練をすることだ。もしもの時にパニックになってしまわないように、定期的に行っておくべきだと思う。2つ目が、災害が起きた時の行動を職員全員に考えてもらうということだ。災害時に、「何をしたらいいのか全く分からない」となってしまうのは、動物たちはもちろん自分自身の命を守ることも難しいと思う。そこで私は職員全員に災害時の行動のマニュアルを配るなどして対策をとりたい。とは言え、「想定にとらわれるな」という教訓がある通り、マニュアルだけを頼りにするのではなく、柔軟な考えを持っておくことが必要だ。普段から職員同士で防災について話をするなどして少しでも災害について意識を持っておくことで、実際に災害が起こった時の行動は違ってくるのではないだろうか。3つ目が、備えの大切さを伝えることだ。そこで、私たち人間と同じように、動物たちの食料や水などの備えもしっかりとしておく必要がある。だが、せっかく備えておいても口にしてくれないとなれば意味がないため、普段から非常食を時々あげておくなどして、それぞれの動物にあった非常食を常備しておくことが重要である。また、継続して薬を飲んでいる動物のための薬やサプリメント、お薬手帳なども忘れてはならないため、必要なものをきちんと把握しておくことが大切だ。突然の自然災害から動物たちを守ることができるよう、普段から防災を徹底しておきたい。

(3) 防災を知ってもらうために

私たちは災害大国と呼ばれる日本に住む以上、災害と無縁で生きていくことはできない。30年以内に70～80%の確率で起こるとされている南海トラフ巨大地震から生き延びることができるかどうかは、自分自身の備えによって分かれる。そんな中、日本では防災についての関心は阪神・淡路大震災より以前に比べると明らかに高まってきているといえるだろう。とはいえ、以前の私のように地震のことをどこか他人事のように捉えている人や、具体的な行動に移せていない人はまだまだ多いと思う。まずは防災に興味をもってもらえるように誰にでも分かりやすく自分の言葉にして伝えることを心掛けたい。

また、災害時の救助の中で最も大切とされるのは共助だ。阪神・淡路大震災でも、共助が一番多い割合を占めており、地域の人々の協力により助かった命がたくさんある。それを聞くと職員や近所の人などと普段からコミュニケーションをとってお互いのことを知っておくことの大切さを感じる。災害時に連携した行動が出来るように、横のつながりを大事にして組織としての団結力を培っておくことで、共助をスムーズに行えるようになるはずだ。災害大国と呼ばれる日本で生きていくため、また大切な人や動物の命を守るために、この3年間で身につけた防災を新しい場所でも私なりに広めていけたらと思う。どんな状況でもその場において最善の行動が出来るように、これからも私は防災に向き合っていきたい。

過去から未来へつなぐバトン

戒居 繁秀

1 はじめに

あの日、阪神・淡路大震災から24年が経過した。私が住んでいるところは兵庫である。だから長田に近い被害も相当受けた。そのため小学生中学生の頃から阪神・淡路大震災の話に触れてきた。話を聞かせていただき防災訓練を行い、何かしら防災に関わってきた。高校になり舞子高校の環境防災科に入学させていただき、より本格的に防災に関わる機会も得られた。だからこの地元に住む人間として、濃く防災を学んだ学生として今度は私が語り部として学んできたこと、聞いたことを伝えていきたいと思う。

2 私が体験していない阪神・淡路大震災

(1) 阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災は今から24年前の1995年1月17日午前5時46分52秒に発生した内陸型の直下型地震だ。原因は震源の兵庫県北淡路の近くを通過する野島断層からの地震。日本で初めて震度7が観測されM7.3を記録した。死者は6434人で死者のほとんどが圧死。行方不明者3人、負傷者43792人、全壊約105000棟、半壊約144000棟、全半壊約250000棟という大きな被害をもたらした。密集家屋が多かった長田などの下町は火の海になった。現在は町区画整理事業などで道路や家の間隔が広くなり、火事が燃え広がりにくくなっている。

そして当時全国からたくさんのボランティアに来ていただき「ボランティア」という言葉が知れ渡ったことから「ボランティア元年」と呼ばれる。臼井真さんの「しあわせ運べるように」や環境防災科ができたきっかけであり、日本の防災意識が格段に上がった。また公助の弱さが浮き彫りになり、たくさんの課題が見つかり復興していく中で神戸が日本の防災を率いていく要となった災害だ。

(2) 母の話

① 地震発生

いつも通りの日常、それが一瞬にして崩れた。ものすごい揺れと音で目が覚めた。揺れが起きた時、なにが起こったかわからずただおびえながら揺れに身をまかせた。数十秒の揺れがとても長い時間を感じたという。しばらくして「大変なことになっている」と理解することができた。横を見ると弟(叔父)が落ちてきたテレビに頭をぶつけ血を流している。弟のことを気かけ、ふすまを開けようとするがビクともしない。地震でふすまが歪んでいるようだった。少しすると兄(叔父)が1階から2階に上がってきてなんとかふすまを開けてもらい出たところ、父(祖父)がタンスの下敷きになっているので一緒に助けようとしたが、暗く何も見えなく電気もつかないのでロウソクを持ってきて明かりをつけ助け出した。その時、母(祖母)が夢中になりすぎて髪の毛が燃えた。もうパニックになり恐怖で家を飛び出した。「今思えば周りの家が崩れてきたり落ちているもので怪我したり危険だなと思った」と言っている。パジャマ1枚で飛び出していたので兄がジャンパーを持ってきてくれた。

それから家族と親戚で小学校に避難した。校舎が開いていないので運動場で待機した。待機している間とても恐かった。「大変な状況のはずなのに周りは静まりかえり、西の空が赤黒く染まっていて火事が起きているのに消防車、パトカーなどの音も一切聞こえずかなり不気味だった」と言っている。それからどのくらい時間が経ったかわからないが校舎が開き、教室に避難した。

② 避難所

避難所では食べ物が無く、寒さがひどかったので母(祖母)が家に持ち帰ってきた缶詰めや毛布や残っているご飯を食べた。少しして食べ物が配られるようになったが最初のうちは乾パンばかりであった。しばらくするとパンやおにぎりも配られるようになった。食べ物は子供や高齢者を優先して配られた。衛生面もとても悪くお風呂はなく「水のいらぬシャンプー」だけであったし、トイレはプールの水で流していたが水が間に合わず便が溢れかえり劣悪な状況であった。

そして、余震が多くヘリコプターの音が長時間しており緊張で浅い眠りしかできず、親戚や家族が寄り添って眠った。また、電話が通じず友人や遠くの親戚の安否確認ができない状況で公衆電話は行列ができていた。治安も悪くなっており、「女の子が襲われる」「空き家、スーパーなどに泥棒が入る」「家にあったストーブ、灯油が盗まれる」という最悪な状況であった。母の家族の中の役割は井戸の水で洗濯することだった。生きるために毎日が大変だった。

そんな中、感動で涙を流し人の温かさに触れる機会が四つあったという。

一つ目は甲北高校の担任であった先生が探してくれ「生きていてよかった」と言ってくれたことだ。この当時、電車も道路もぐちゃぐちゃで交通機関や車で来ることは苦勞したと思う。それなのに自分を想ってわざわざ来てくれたことに感謝したという。

二つ目は友達が車でお風呂に連れて行ってくれたことだ。震災から1か月後のことだった。蛇口から水が出ることに感動し、頭を洗ったとき「髪の毛がこんなに軽くなるのだ」とお風呂に入られることにありがたさを感じたという。

三つ目は遠い親戚が来てくれ気遣ってくれたことだ。家を少し直してくれて、その時「バイクやからそんなに持ってこられないけど」と言って食べ物を持ってきてくれて温かさを感じたという。

四つ目は高校の同級生がお弁当を持ってきてくれたという。とてもおいしく感じ「ありがたくて食べるのがもったいなかった」と言っていた。

③ 進む復旧と戻らない日常

しばらくすると復旧が進み自衛隊が給水車、炊き出し、お風呂を用意してくれた。地域では助け合いが広がり井戸を掘りだしてその水で洗濯をさせてもらったり灯油を分け合ったりした。ライフラインは電気、水道、ガスの順で復旧した。ガスの復旧にはとても長い時間がかかったらしい。

復旧はしてきたものの「二階が潰れて近所のおばあちゃんが見つからない」「兄の同級生がなくなった」など暗い話がたくさんあった。

時間が経つと少しずつ日常が戻ってきた。1ヶ月後には学校に通い始めたという。

初日に学校に登校したとき満足にお風呂に入られていなかったのが臭くないか気にしながら行ったらしい。

そして、父(祖父)の目が悪く、音や人の動きに敏感で健常者よりストレスが大きく家が無事だったので自分たちが住んでいる家で住み、食事のたびに避難所に食べ物を取りに行った。

④ 現在の状況

母はしばらく震災の話が出来なかった。今回は私に出来事話を話してくれたが本当は話すのも思い出すのもいやらしい。しかし、今回私に話してくれたことは一部分で「一日一日が必死すぎて、記憶が少ししか残っていない」「嫌なことは抜け落ちているかも」と語っている。

また、「ゆれるん」に乗った際、地震の恐怖がよみがえり恐く涙が出てきたのである。

(3) 話を聞いて

今回、身近な人の話を聞いて本当に地震は恐ろしく軽く見てはいけないということを身にしみて感じた。24年経った現在でも多かれ少なかれ阪神・淡路大震災で受けた影響や心の傷が残っていると考える。例えば、物理的な影響では、地震が起こったために引っ越しをしたり、経済的にダメージを受けたりである。なぜなら家がなければ生活が出来ず、ローンという大きな経済負担がかかるからである。

精神的な影響は母のように地震のことを思い出したくなかったり「ゆれるん」に乗るのが怖かったりという心の傷だ。それらを考えて私は地震の話をするときは気遣い、これから発生する南海トラフ巨大地震に備えて、少しでも家族の被害を軽減し悲しむ人がでないように自分にできることから防災に関わってほしいと思った。例えば、自分や家族を守る防災ではベッドに笛を設置しスリッパなど足を守るものを近くに置こうと思う。非常用持ち出し袋も準備しようと思う。非常用持ち出し袋は置く場所が重要である。一般的には物置に置いてしまいがちだが、それでは災害時うまく取り出せられない。そうすると非常用持ち出し袋の意味がなくなってしまう。だから玄関に置くのが良いといわれている。もっとベストなのは家の色々な場所に置くことだ。だから私は玄関と寝室など色々な場所に置こうと考えている。またたくさんの人を守る防災では、身近な場所から、地震の怖さや防災の大切さを伝え、情報を発信してほしいと考えている。

3 震災の良かった点・悪かった点

(1) よかったこと

震災が発生したことにより地域の人々に一体感が生まれ、助け合い支えあい精神が生まれた。そして、「あたりまえで繰り返しの生活・日常」のありがたさ、「人間同士のつながり」の大切さを再び実感することができた。ライフラインの脆さも浮き彫りになり、対策を考えられるようになった。またボランティア活動が一般化され多くの人に人に知れ渡った。共に、防災意識が格段に上がり環境防災科ができ、南海トラフ巨大地震に備える準備ができるようになった。

(2) 悪かったこと

たくさん犠牲者がでて、たくさん家が倒壊し、たくさんの人たちに深い心の傷を残した。

また、「人の美しさ、温かさ」とは反対に「人の汚さ、悪さ」も浮き彫りになった。例えば、我先にと自分のことしか考えない被災者。災害に乗じて他人の家の物を取ったり盗んだりする火事場泥棒。自分の欲望が抑えられず他人の身を傷つける犯罪者などだ。

4 舞子高校・環境防災科

(1) 環境防災科に入学したきっかけ

私が環境防災科に入学したきっかけは消防士になろうと考えていたからである。環境防災科に入り防災の知識や志を勉強し、防災のことに詳しい消防士になろうと思った。

しかし、現在は理学療法士を目指している。

(2) 環境防災科としての3年間

環境防災科のカリキュラムの3分の1が防災の専門科目である。

専門科目の勉強は座学だけでなく外部講師の方々に講義をしていただいたり、淡路島の野島断層や六甲山フィールドワーク、NTTの会社など校外学習や体験授業をさせていただいたり、被災地に直接伺いボランティア活動を行ったりと授業を返上して行うことがあった。ここで3年間の活動をまとめていこうと思う。

1年生の時は、主に外部講師の方の講義が多く、たくさんの視点から防災に触れていくことができた。そして、ちょうどこの頃、熊本地震が発生したので1年生ながらクラス40人全員で被災地の熊本に訪れボランティアをさせていただくことができた。被災地を見て私はものすごく衝撃を受けた。なぜなら、防災の勉強をして間もないころに被災地を見、全壊した家や崩れた熊本城を見たからだ。倒壊した家など画像では見たことがあったものの、リアルでは見たことがなく、地震の恐ろしさが体の芯にまで伝わってきた。

1年生ではこのような経験ができとても良い経験になり防災と向き合ううえでの基礎知識を培うことができた。

2年生では防災との関わりがより体験・活動的になった。六甲山フィールドワークなどだ。

この経験などで、観察力、調査力を成長させられることができたと思う。

3年生では今までの集大成として夢と防災を関連させプレゼンテーションを行ったり、防災に関することをグループワークし発表したりするなど情報や知識、考えなどを伝える能力を高めることができた実感している。

私の高校生活の残りの3分の2では、勉強と部活に費やした。

5 将来なりたい自分

(1) 夢と防災

私の今の将来の夢は理学療法士だ。私になりたいと思ったきっかけは3つある。1つ目は中学時代に腰椎分離症になり1年間運動できなかった時である。担当の方は自分のことを気遣って下さり、身体はもちろんのこと心まで元気にしてくれた。私自身の心の支えになり理学療法士さんの温かみに触れることができたことでこの仕事は自分も行い自分自身の手で元気になってもらいたいと考えようになった。

2つ目は今年の一月に祖母が足の手術を行い、リハビリを行っていたので再びこの仕事に触れる機会があった。おばあちゃんを見ていると明確に心身ともに元気になるのを実感できた。そしてお見舞いに来た僕たちにも優しく接してくれた。そのようなことがきっかけでこの職業に就きたいと思うようになった。

3つ目は普段聞けないような「ありがとう」を聞くことができ感謝と笑顔をみられるからだ。そして、自分の行為で患者さんがだんだんと元気になっていくのが実感できる。これが理学療法士の魅力でやりがいだと考える。

(2) どう関わっていくか

私はこの仕事をするにあたって主にソフト面から関わっていきたいと思う。そして災害前と災害後で活動を分けることができる。災害前は災害が発生したときに備えての患者さんの体づくりだ。歩くのも大変な体では非難がしにくく生き残れる可能性が低くなってしまふ。だからそのための体づくりと診察中にお話をできる場面があるので防災の知識を伝えたいと考える。そして、災害後は災害で傷ついた人々のケガのリハビリなどに励み、環境防災で教えていただいた「鬱とか不安になるのが普通やで」などの心の面からもしっかり防災に関わらせていただきたいと考えている。

(3) 理想の自分

私が考えている理想の未来の自分は、あらゆる人に親切にでき人の心の支えになり、自分の言動や感情をコントロールでき、なおかつ自分のやるべきことをしっかりできる人間だ。現在の自分は誘惑に負け、やるべきことから目を背けたり、感情や体調、気分流されたりすることがある。それでは自分を大切にしているといえず身近な人にも大切にできない。これは防災にもつながる面があると思う。だから私は自分を律し、まずは生活習慣から意識していきたいと思う。

(4) 15年後の理想の自分

15年後の自分の夢は、一流の理学療法士になり、結婚し子どもを授かり、その子供とスポーツをしたり奥さんを大切にしたりして幸せに暮らすことだ。そして車もほしい。そのためには今を精一杯生きることがその理想につながると思う。

6 おわりに

私は考える。何のために「語り継ぎ」をするのかと。震災を風化させないためであるという答えがあるだろう。もちろんそれは間違っていない。しかしそれだけではないと考える。経験を伝えるだけで終わってはならず、その災害で得た教訓を次の災害で生き残るための力にして活かすことが重要だと考える。

なぜ題名を「過去から未来へつなぐバトン」にしたかという、震災の教訓を未来へ「つなぐ」とこと頃の人との「つながり」が大事だとも思ったからだ。

私がこの「語り継ぐ」で一番感じたことは人とのつながりの大切さである。これは題名である人との「つながり」という点でつながる。母の震災の話を知っていると覚えていない部分も多い中、人に助けられたり励まされたりという話はよく覚えていた。母は震災当時、大変であったし怖いこといやなことなど無意識に忘れようとしていたのかもしれない。しかし、その中でも人に助けられたり励まされたりという経験が母の震災の心の傷を少し癒しているのかもしれない。だから、日頃から身近な人や近所の人とのつながりを大事にしているといざという時に支えあいができるかもしれないので日頃のつながりが大切だということに改めて感じた。

そして、神戸は防災意識が比較的高い方だろうが、まだまだ防災に関心がない若者が多い。他の都道府県の災害を経験していない人々は神戸に比べてより防災意識が低いだろう。だから過去の過ちや教訓や災害の怖さなど少しでも知って意識してもらえるように身近な人から「語り継ぎ」を通して伝えて行かなければいけないと思った。幸い、私には環境防災科で学ばせていただいた、知識と表現力がある。だからそれを活かしたいと強く考えている。

また、現在、南海トラフや内陸直下型地震が起こると言われている。南海トラフに関しては、30年以内に発生する確率は80%近くになっている。それは誕生日の日かもしれないし今日起こるかもしれない。ちょうど昨日(2018年6月18日)に、大阪で震度6弱の地震が発生した。この神戸にも震度4がきたらしい。私自身その時バスに乗っていたのであまり揺れは感じなかったが、携帯電話からなる緊急防災情報の音だけでとても驚いてしまい恐怖を感じた。母は家にいたが家の物が落ちてきて怖かったと言っていた。震度4でもこの威力なのだ。もし自分がその時、地震に弱い室内や火を使っていたらと考えると本当に命の危機を感じた。「地震が起こっても何とかなるだろう」や「自分は死なない」という正常性バイアスに惑わされず、「自分や大切な家族の命を奪う災害がいつ起こるかわからない」という焦りや警戒を少し持って、暮らして頂きたいし暮らしていきたいと思う。

「日常が非日常を支える」という言葉を聞いたことがある。私は本当にその通りだと思う。災害でも日常生活でもそうだ。日常でできないことが緊急時できるはずがない。この言葉は“準備は自分を助ける”という風にも言い換えることができる。それは南海トラフにもつながることだが非常用持ち出し袋の準備、災害時の家族との集合場所の相談、災害用伝言版ダイヤルの知識の準備、ベッドには笛とスリッパを置く、家具の固定、耐震化など災害前から“準備”することが自分たちの命を守る確率を上げ、防災や減災につながると思う。

7 さいごに

もう一度、私が「防災の勉強をする原点」を考える。私の原点は、誰かが悲しむ姿を見たくないというものだ。私の中に占めるウェイトはほとんどその思いだ。他にも悲しい思いをしている方の力になりたいとも思う。その思いは理学療法士を目指した一つの要素でもあるだろう。

私はこの3年間で学ばせてもらったことに感謝し無駄にせず、いざというとき大切な人を守る大人

になり、防災に生涯を通して少しでも関わっていきたい。

今伝えたい、あの日の記録

大塚 愛未

はじめに

今から24年前の1995年1月17日午前5時46分、淡路島北部を震源として発生した阪神・淡路大震災。6434名の尊い命が奪われた。大好きだったまちが一瞬で消えた。私はあの震災を経験していない。しかし、経験した人からお話を聞き、語り継ぐことはできる。これからは私のような経験していない世代が語り継いでいかなければ、あの日の出来事を風化させてしまうだろう。そこで私は、三宮のマンションで一人暮らしをしていた父と、当時南あわじ市に住んでいた祖父、2人の叔母に当時の話を聞いた。

1 父の話

(1) 地震発生

当時大学生で三宮の8階建てマンションの6階に住んでいた。その日は大阪から友達がきていたため友達はパイプベッドで、自分はこたつで寝ていた。突然の突き上げるような激しい揺れで目を覚ました。色々なものが飛んできたため、友達が寝ていたパイプベッドの下へ潜り込んだ。2人とも怪我はなかった。揺れが収まり、部屋の中を見渡すとシンクにためていた食器が床に散乱していた。それほど大きな縦揺れだった。地震後すぐに、母から電話がかかってきた。しかしそれ以降電話は一切つながらなかった。外に出ようと試みたがドアは開かず、蹴とばしてなんとか外に出ることができた。エレベーターは使えなかったため、6階から非常階段で降りていった。マンションの屋上に設置されていた貯水タンクが傾き、水が非常階段に滝のように流れてきた。

(2) 三宮の状況

外へ出ると、交差点の反対側のビルが傾いている。斜め向かいの建物が燃えている。道路の真ん中が陥没している。悲惨な状況だった。線路が歪み電車は脱線し、三宮センター街のアーケードも落下していた。ガス漏れのため家の中には入れず、近くの小学校に避難した。避難してきた人が火をおこして暖をとっていた。炊き出しも行われていた。友達はその日の昼に大阪の家まで歩いて帰った。

(3) 淡路島に帰れない

実家がある淡路島に帰ろうと思い、ハーバーランドから津名までの船が運航しているか確認するため、船乗り場に向かった。しかしハーバーランドの岸壁が壊れ、船は出航できず、その日は淡路に帰れなかった。夜になり、電気が復旧したという噂を聞いてマンションに戻るとテレビがついた。そこで初めて震源が淡路島だったということを知った。余震は続いていたがその日はマンションで寝ることにした。

翌朝、淡路島への船が出ているか再び確認するためハーバーランドへ向かった。そこには自分と同じように淡路島に帰りたい人が数人いた。淡路島への船は明石からなら出航していたため、ハーバーランドから明石までタクシーを拾い、そこにいた数人で明石に向かった。山側を通って向かったため8時間もかかった。明石に着き、岩屋まで船で帰ることができた。同じ船に乗っていた人が、岩屋から津名まで車で乗せてくれることになり、津名から家まではバスで帰ることができた。三宮のマンションに荷物を取りに帰れたのは3月だった。

(4) 今思うこと

当時は情報がなかなか手に入らずとても困った。食料は家にパンなどがあったため確保することができた。以前に住むか迷っていたもう一つのマンションは地震で潰れてしまったため、もしもう一つのマンションを選んでいたらどうなっていたかわからない。今思うと、あの揺れでよく生きていられたなど感じる。当時コンタクトをしていなかったため、地震でメガネが壊れてとても困った。「メガネはケースに入れて枕元に置いておく」とても小さいことかもしれないが大切なことだと思う。

2 祖父の話

(1) 地震発生

ドーン！バリバリバリー！と大きな音がした。タンスの上に置いてあった段ボールが落ちてきて、妻と2人で布団をかぶって必死に身を守った。すぐに別の場所で寝ていた娘たちと三宮で一人暮らしをしていた息子の安否確認をした。娘たちは無事だったが、三宮にいる息子のことが心配で仕方なかった。地震発生直後、固定電話はすぐにつながり、5分だけの通話だったが息子が生きていることを確認できた。しかしその後は一度も電話はつながらなかった。隣の家の様子を見に行くと、みんな机の下に隠れていて無事だった。前の家は屋根が真ん中でパカッと割れ、棟が家の中に落ちていた。近所のお宮さん

では狛犬や灯籠が倒れていたため、地域の人が集まってみんなで元通りに直した。お寺では屋根の傾斜が急なため、まだ新しくなったお寺でも屋根の瓦が全て落ちてしまっていた。近くのお墓も倒れていた。淡路市では液状化も発生していた。テレビの淡路島の報道は被害の大きかった北淡町ばかりだった。

「神戸は食料が足りていないだろう。味噌汁やおにぎりを息子に持っていこう」と考え、なんとか三宮にいる息子を迎えに行こうと、妻と洲本まで向かった。しかし船は出港しておらず、神戸に行く手段がなかったため、仕方なく諦めることにした。翌日、息子は自力で実家に帰ってくることができた。

約1ヶ月後、息子と2人で三宮のマンションに荷物を取りに向かった。しかし阪神高速道路が倒壊してしまっていたため、道も、自分がどこにいるのかさえも分からない状況だった。

(2) 祖父が周りの人から聞いた話

地震発生時、新聞配達をしていた人から聞いたお話によると、自転車で配達をしていて、地震の揺れで視界が波のようだったという。また、漁に出ていた人によると、地震発生前は空が妙な色をしていて、海では地震に気付かなかったが、陸のほうを見ると白い煙と真っ赤な炎が見え、急いで帰ったそうだ。祖父の知人は、被害の大きかった淡路市で区画整理が始まったため土地を売り、引っ越したという。そのようにする人も少なくなかった。

(3) 今思うこと

もしあの地震がお昼時だったら、阪神高速道路を通る人やその下の一般道を通る人は多くなるため被害がもっと大きかっただろう。住んでいた地域の被害は少なく、電気が使えて火災も起こらなかったことが幸いだった。田舎の人は、災害が起きても「なんとかなる」と思っているかもしれない。水は井戸や池の水から確保できるし、食料もなんとかなるだろうと思っている。地震は忘れたところにやってくる。もうみんなあの日のことを忘れてしまっているだろうな。

3 2人の叔母の話

(1) 高校2年生だった叔母

下からのドーン！という突き上げで目を覚ました。棚が倒れて本が落ちてきたぐらいだったが、木造建築の2階の部屋だったため、木がメキメキと音を立てて揺れ、家が潰れるかと思った。恐怖で腰が抜けて、隣の妹の部屋まで這っていった。「大丈夫か！外に出たら危ない」と叫ぶ父の声が聞こえ、しばらく妹の部屋で待機した。当時三宮で暮らしていた兄の安否が気になり、連絡したが電話はつながらなかった。しばらく音信不通の状態、親戚からも兄は大丈夫なのかという連絡が来た。当時は明石海峡大橋はまだ開通していなかったため、兄を迎えに行くには船しか手段がなかった。両親は余震が続く中で兄を迎えに行くべきかどうか迷い、もめていたそうだ。そんな時、テレビで兄が住んでいる三宮のアパートが中継で映されていた。倒れかけのアパートが映され、「建物に近づかないでください！」という報道者の声が入った。兄はちゃんと生きていいのか、本当に心配だった。当時、阪神・淡路大震災は「阪神大震災」と呼ばれていて、メディアは神戸ばかりを取り上げた。震源は淡路島北部なのにテレビで淡路島は全く報道されず、淡路市でも大きな被害が出ていたことを後から知った。「神戸がすごいことになっている」と報道されるばかりで、淡路島がどうなっているのかは誰もわからない状態だった。

幸い、家にはあまり被害が出なかったため、いつものように学校に行った。自宅が倒壊していたり、親戚を探しに行っていたりした人が多く、クラスでは10人ほどしか登校していなかった。先生は安否確認で授業どころではなかったそうだ。その日は体育だけ授業を受けて全員下校した。次の日からクラスメイトはなかなかそろわなかった。

(2) 中学3年生だった叔母

姉の隣の部屋で寝ていた。ベッドにしがみつからないと飛ばされそうな揺れだった。落ちてくるようなものを置いていなかったため、怪我などはなかった。家自体もあまり被害は出ず、普段通り生活できた。当時中学校はテスト期間だったため、姉と同じくいつものように学校に行った。中学校は高校と比べ校区が狭いため、ほぼ全員が登校できていた。試験は普段通り行われたが、試験中も余震があった。中学校の周りは被害がほとんどなかったため、試験が午前中で終わり、家に帰ってテレビを見て初めて大きな災害だったことを知った。

(3) 2人の叔母が今思うこと

自宅周辺では火災が発生しなかったことが幸いだった。当時は携帯電話がなかったため、情報を得られずとても不便だった。高校では、学校で何かしようという動きになったが、どこで何を必要としているのかわからなかったため何もできなかった。それに比べると今は簡単に情報収集ができるため、とても便利になったと思う。今まで大きな地震がなかったため、備えは全くしていなかったし、知識もほと

んどなかった。あんなに大きな地震を経験しても今備えはできていない。また、明石海峡大橋が当時は建設中だったため、地震の後に作られる橋の安全性は大丈夫なのか？という噂が広まっていたらしい。

4 話を聞いて

今まで、なんとなく家族から当時の話を聞いたことはあったが、ここまで詳しく話を聞かせてもらったのは初めてだった。この「語り継ぐ」を書くにあたって、一番身近な人から当時の様子を聞くことができて良かった。父や祖父は周りの状況を鮮明に語ってくれたため、当時の状況がとても目に浮かんだ。父の話を聞いて、三宮の悲惨な状況の中で父が生きていられたことは奇跡だったのかもしれない、あの時父が無事でよかったと心から思った。また、「昔は携帯電話がなかったから今はとても便利になった」という言葉は家族みんなが言っていたが、安否確認が簡単ではなかった当時の状況を考えると、淡路島に住んでいた祖父母や叔母は本当に心配だっただろうと思う。

環境防災科で阪神・淡路大震災についてたくさん学び、色々な方のお話を聞かせていただいたが、あの日あの揺れを経験した一番身近な家族に聞いた話は、どのお話よりも印象深かった。同じ場所である地震を経験していても、人それぞれの被災体験がありそれぞれの思いがあった。家族で当時のことを語り、そして今後の災害についても考えることができたのはとても嬉しかった。阪神・淡路大震災は忘れられてはいない、忘れることのできない出来事だったのだと改めて感じた。

5 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に興味をもち始めたのは小学6年生の時だ。毎年1月17日前後に行われる地域とのふれあい行事で、環境防災科の先輩が出前授業に来てくださった。体育館で全校生徒を対象に、クイズやグループワークを行い、防災について考えた。防災をほとんど知らなかった私でも、あの時間はとても楽しかったと今でも覚えている。そして、初対面の私たちに優しく、面白く防災を教えてください、とてもキラキラしていた環境防災科のお兄さん、お姉さんに憧れたのが最初のきっかけだった。

中学3年生の進路を決める時期になり、地元の高校を受験するか環境防災科を受験するか本当に悩んだ。そんな時、青少年交流の家で行われている防災ジュニアリーダー合宿に環境防災科が参加しているという情報を父から聞き、その日の夜に少し見学に行かせてもらった。私が行かせていただいたときは、小学生と高校生がグループワークをし、その後避難所生活を体験するために就寝用の段ボールを用意しているところだった。ラジオ局が来ていて、インタビューをされている環境防災科の先輩もいた。私は父と車の中でそのラジオを聴いた。この防災ジュニアリーダー合宿の見学をさせていただいたことで、私は環境防災科を受験することを決意した。地元の友達と離れ、全く知らない土地にある舞子高校に一人で通うという決断は私にとって本当に大きな決断だった。

(2) 入学して

環境防災科に入学し、私にはやってみたくいことがあった。それは出前授業だ。小学生の時に憧れた環境防災科の先輩のように、今度は私が子供たちに防災を伝えられる高校生になりたいと思った。実際にその機会はたくさんあり、積極的に出前授業に参加した。聴覚特別支援学校の幼い子供たち、近隣の小学校、地元の小中学校など多くの出前授業を経験してきた。中でも私が一番やりがいを感じたのは母校での出前授業だ。南海トラフ巨大地震で甚大な被害が出ると予想されている地元での防災教育は、何よりも自分で自分の命を守れるようになってほしいという思いで取り組んだ。子供たちが真剣な眼差しで防災を学ぼうとしてくれる姿がとても嬉しかった。私が小学生の時に憧れた場所で、憧れた先輩に一步近づけた気がした。出前授業をしていく中で感じたのは、人に防災を伝えることの難しさだ。特に、小学校低学年や特別支援学校の子どもたちに伝えるときには、いかに簡単に、具体的に、わかりやすく伝えるかが大切だ。単に「机の下に隠れよう」と言っても、果たして全ての場合でそうすべきなのか、どうして机の下に隠れるのかなど、一つ一つの言葉の裏側を考えなければいけないため、とても大変だった。「間違った防災は命を奪うことになる」ということを常に頭に置いて3年間出前授業に取り組んできた。防災を身近なものとして捉えてもらえるような防災教育が必要だと感じた。

3年間防災を学ぶ中で感じてきた人と人とのつながりの大切さは、クラス内でも感じる事ができた。環境防災科は3年間クラス替えがない。その分クラス内の仲も深まり、他のクラスよりも団結力があると思う。入学後すぐに現地に行くことになった熊本地震のボランティアや、内容を一から考えなければならぬ数々の出前授業など、大変な思いをするときもあったが、一緒に悩み、助け合い、いつも明るくクラスメイトがいたから頑張れたのだと思う。卒業後、3年間共に過ごしてきたみんなや防災につい

て気軽に話せる存在がいなくなるのはとても寂しく思う。しかし、環境防災科で出会えた素敵なクラスメイトとのつながりをこれからもずっと大切にしていきたい。

6 将来の夢と防災

私の将来の夢は保健師になることだ。病気の治療をサポートする看護師に対して、保健師は病気になる前の予防をし、地域の健康的な生活をサポートする職業だ。環境防災科で防災を学んでいく中で、「災害弱者」と呼ばれる人たちが災害時にどれほど不便で苦しい思いをしているのかを知った。私は、そのような「災害弱者」と呼ばれる人たちの心と身体の健康を守り、親身になって寄り添える保健師になりたいと思うようになった。保健師は主に保健所や保健センターなどで働き、乳幼児や妊婦さん、高齢者や障がいのある人などの地域住民と日頃から関わっていく。乳幼児の検診や育児相談、地域住民の食事や運動などの指導、健康診断、健康相談、自宅訪問などを行う。

警察や消防、自衛隊は災害時に、救助の最前線として活動しなければならない。保健師もまた、災害時は自分や家族が被災していても真っ先に被災地へ足を運び、健康面から関連死を防いでいく。まず一つは衛生管理だ。避難所生活はどうしても衛生状態を確保しにくく、衛生状態が悪化すると生活する人々の健康にも悪影響を及ぼす恐れがある。そこで、トイレやお風呂がしっかりと清掃・消毒されているか確認したり、感染症の拡大を防ぐために手洗いうがい、マスクの着用を徹底したりと、保健師ならではの視点から避難所の衛生を守ることができる。二つ目は被災者の健康管理だ。生活物資や食料がきちんと行き届いているか、体調を崩していないかなど、避難所で過ごす人々が健康に過ごせるような配慮が必要だ。さらに、熊本地震で多発したエコノミッククラス症候群を防ぐために、車中泊を続けている人への声掛けも重要である。三つ目は被災者の心のケアをすることだ。災害後は誰もが精神的に不安定になるため、悲しみや苦しみを誰にも話せず一人で抱え込んでしまった結果、PTSDやうつ、孤独死に陥ってしまう。特に仮設住宅での生活は高齢者にとっては精神的な負担が大きく、孤独死が多発してしまう。私は、定期的に訪問を続け、不安や孤独を感じている人とのたわいないコミュニケーションを通して、保健師ならではのアドバイスで寄り添っていきたい。

また、日頃からの防災に深く関わることができる職業でもある。例えば、防災に関するポスターやチラシを作成し、保健所や保健センターなど多くの地域住民が訪れる場所に掲示、配布することだ。各家庭への自宅訪問の際にも配布すれば必ず目を通してもらえると思う。さらに、応急手当の方法を指導する講習会や職場での避難訓練も定期的の実施したい。応急手当の方法や避難経路、避難場所を知っておくことで、災害時公助に頼らず、自分の力または住民同士で助け合えるような地域になると思う。保健所や保健センターには赤ちゃんから高齢者まで幅広い世代が集まるため、全ての人の命を守る避難行動が大切である。

保健師は、誰がどのような一日を過ごしているのか、避難する際に手助けは必要か、持病はあるかなど、地域住民の細かい情報を把握しているため、災害時のニーズが具体的に分かる。このような地域住民への深い理解やつながりは、災害時に大きく活かされるだろう。私は保健師として、地域の健康的な生活をサポートするとともに、地域の防災力も高めていけるような人になりたい。

7 語り継ぐ

被災地への募金活動をしていると、「神戸も阪神・淡路大震災の時に全国からたくさん助けてもらったからね。」と言って募金してくれる方がいる。東北の小学生を神戸に招待したときには、「神戸のまちみたいに復興できるように頑張るよ。」と言ってくれた小学生がいた。私は環境防災科でのボランティア活動の中で、このような被災地同士のつながりをたくさん目の当たりにし、絆の強さや人の温かさを何度も感じてきた。私は、これから防災を語り継いでいくにあたって、災害の恐ろしさや教訓を伝えるだけの語り継ぎではなく、助け合いの素晴らしさや人の温かさも伝えていきたいと思う。

防災を学んできたからといって、災害時に必ず命が助かるとは言えない。3年間防災を学んできて、たまに起こる小さな地震の揺れは眠れないほど怖い時もある。しかし、もし今の自分が全く防災を知らなかったらどうだっただろうか。きっと自然災害の恐ろしささえ知らず、備えなど何もしていなかったと思う。無知ほど怖いものはない。日本に住んでいる限り、災害から逃れることはできず、無知は通用しない。私は震災を知らない世代だけではなく、全ての人に防災を知ってほしい。環境防災科で防災を学んできた責任として、私はこれからも防災と関わり、防災を広めていきたい。

「伝えることを決して忘れるな」

大面 崇平

1 はじめに

私は、阪神・淡路大震災から5年後に生まれたため、震災のことを何も知らない。しかし、語り継がなければ、その災害は無かったことになってしまう。そんな中で私は今回祖父、祖母、母、母の知人から震災当時の話を聞くことにした。

2 祖父の記憶

当時、56歳。祖父は現在も住んでいる明石市魚住町の自宅で被災した。会社に行くためにそろそろ準備をしないといけないと思ったときに、ドスンと突き上げるような強い揺れを感じ、横で寝ていた祖母に「布団にもぐれ」と叫んだ。棚に積んであったテープ類などが散乱した程度で特に大きなケガなどはなかったが、余震が何度も起こったために、しばらくの間は布団からは出ることができなかった。その後娘の部屋を見に行くとベッドの位置が移動しているのを見て、あれは地震だったのだと理解できたという。全員が無事であったことを確認し肩をなでおろした。しかし、家の被害を確認して回ると和室にあったタンスなどの扉が開き、中のものが落ちていた。外に出ると目の前にあった祖父の母が住む家の瓦屋根が落ちたりなどしていたが、祖父がすべて拾い修復した。翌日、岩岡に住む親戚の男性がポリタンクに井戸水を貯めて持ってきてくれた。さらに、祖父の会社の取引先である奈良の会社の方がお寿司を持ってきてくれた。祖父は携帯電話を持っていたが、通信局が被災したために使用ができなかった。さらに10円玉を入れて通話ができる公衆電話を見つけたが大勢の人が居たので使用ができなかった。震災から3日後、祖父のおじさんが長田区に住んでおり、長田区が壊滅的な被害が発生していると聞き5時間ほどかけて自転車で向かった。その道中において祖父は街の様子をカメラで撮影し、のちにその写真は東京ビデオフェスティバルにおいて審査員特別賞を受賞した。長田区に到着した祖父は各避難所を回りおじさんを探した。おじさんの近所に住む方の情報提供により無事安否を確認することができた。しかし、おじさんの住む家は全壊していた。その後帰宅した父は大阪にある会社に行くために再び家を出たが通常1時間程度で通える道を4時間かけて通勤した。交通手段が無くなってしまったことから、その後祖父は1か月程度会社に泊まり込んで働いた。震災を経験し、祖父は地震の恐ろしさを学んだと共にインフラの大切を思い知らされた。また、多くのボランティアが神戸を助けてくれたことから、助け合いの大切さ、素晴らしさを理解した。

3 祖母の記憶

当時、53歳。祖母は現在も住んでいる明石市魚住町の自宅で被災した。最初の小さい揺れでは目が覚めず、ゴーンという大きな揺れで目が覚めた。祖母は何が起こっているか分からずあたふたしていた。TVがつかなかったのでラジオからの情報に頼った。それ以来、ラジオの大切さを痛感した祖母は枕元にラジオを置いている。震災の1年前に自宅の工事で瓦を軽い瓦に変え、さらに家の中には柱が多かったことから家が潰れることはなく、引き出しなどが飛び出る程度で特に被害はなかった。家には被害はなかったために、近隣の小学校などに避難することはなかった。さらに、家の周りには山が多く近所の人は普段から買い溜めをしていたので約1週間分の食料は確保できていた。しかし、水道が止まったので水洗トイレの水を流すことができなかったが、早期に復旧したので、生活にはあまり支障がでなかった。その日の夕方、高砂に住む祖母の弟が心配し、食料を持って自宅に駆けつけてくれた。震災から1週間が経過し、電気などが復旧しTVからも情報を得ることができ、祖父と共に「助かって良かったね」と話したそうだ。

4 母の記憶

当時、23歳。ベッドで寝ていると下から突き上げるようなドーンという強い衝撃を感じた。しばらくの間は何もすることができずにいた。少し時間が経過してから辺りを見回すと壁に掛けてあった大きな絵が落ちていた。それから母は姫路にある会社に出勤するため駅に向かうも、電車が完全に止まっており、近所に住む同僚と車で会社に向かった。会社は姫路にあったために被害はほとんどなかったが、三宮にある本社が全壊したという情報が入った。姫路では建物の被害はほとんど見受けられないが、コンビニやホームセンターなどに行くと、食料やカセットコンロ、ポリタンクなどは品切れ状態だったという。しかし、母の会社は県内のみならず県外にもあるため、全国各地の会社から救援物資が送られてき

た。その中にはポリタンクもあり、母はその中に水を入れ自宅に持ち帰った。その後、須磨に住む母の同僚が行方不明になっていることを知る。3週間後に連絡がついた時には、家が全壊し避難所にも入れず家族全員で車の中で過ごしているという。会社の人たちが協力し日用品などをかき集め、上司の方が須磨まで物資を届けてくれた。また、大蔵谷に住む別の同僚は水道が止まり、お風呂に入れなかったために母の住む実家にお風呂に入りに来た。しかし、ストレスから顔色はとても悪く全身にアトピーが発症していたという。当時は連絡手段がほとんどなく情報が入らずにいた。避難所などにある仮設の電話機で連絡を取ろうとするも回線がパンクし使用ができなかった。災害が起こる前から安否確認の手段などを話し合い決めておくことが大切だと知った。

5 母の知人の記憶

当時、23歳。加古川に住む母の友人は戸倉スキー場に行くために高速道路を走っていた。突然車がガタガタと音を立て始め車が壊れたのかと思った。しかし、当時は情報を得る手段がなかったために、そのままスキー場に向かいスノーボードをしていた。ところが、リフト乗り場のおじさんに「神戸が大変なことになってるで」と聞きそこで初めて地震があったことを知った。しかし、事態の深刻さを理解できずに1日中滑っていた。帰り道車を走らせていると高速道路が封鎖されていたという。普段なら2時間程度で帰れる道りを4時間以上かけて帰った。その帰り道車から流れるラジオでは延々と行方不明者の名前を読み上げていたという。翌日明石にある自身が経営するお総菜屋さんに行くとき多くのお客さんが店に押し寄せ長蛇の列ができていた。それから3日間商品がなくなるまで売り続けた。しかし、物流が完全に途絶えていたためにそれ以降の営業はできなくなってしまった。その後本格的な営業を再開できたのは3週間後のことだ。店を再開できるまでの間、垂水に住む友人の元へポリタンクに水を入れ3日に1回のペースで通ったという。母と同様に一切の情報が入らなかったことから、現在のように携帯電話が普及し、リアルタイムで情報収集できる環境があることはとても大切だと話してくれた。

6 環境防災科への入学

私が環境防災科への入学を決めたのは、小学4年生のときだった。3月11日に東日本大震災が発生し、TV番組ではすべてのチャンネルが震災に関する報道をしていた。心の中では他に见たい番組があるのにも思うこともあった。そんなある日、いつものようにTVを見ていると被災地ボランティアに関する番組を見つけた。神戸で防災を学んでいる高校生が、バスで東北を訪れ、ボランティア活動や東北の高校生と一緒にワークショップなどをするという内容だった。その様子を見た、私は高校生という若い年代ながらも、授業として防災・減災を学ぶことができ、さらには被災地で大人の人に交じって泥かきなどを行っている様子に心が引かれた。その生徒こそが、舞子高校環境防災科の生徒だったのだ。高校生のうちから防災・減災を専門に学び、さらには被災地でボランティア活動ができるなんて、と思い私はすぐに環境防災科への入学を決意した。その時はまだ小学生ということもあり、周囲の友達からは「まだ、中学生にもなってへんのになんか分かるわけないやん」と馬鹿にされることが多々あったがそんな言葉には耳も傾けず、ただただ環境防災科に入学することだけを考え、無事入学することができた。

7 環境防災科での学び

環境防災科では様々な経験を通して多くのことを学ぶことができた。募金活動、被災地支援ボランティア、ネパール訪問、消防学校体験入校、六甲山フィールドワークなど、その他にもたくさんの活動に取り組んできた。その中でも特に印象に残っているのは「熊本地震被災地支援活動」だ。環境防災科に入学してまだ間もないころに地震が発生した。震度7が2回も発生したということだけでただ事ではないなと思いながらも、それ以上考えることはなかった。まさか2か月後に自分たちが現地に行くとは思ってもしなかった。入学してまだ2ヶ月しか経っていない私たちは、環境防災科とは言っても地震に関する知識などなにも備わっておらず、環境防災科という名前を背負っているだけだった。現地に行っても何かできることはあるのか、余震が続く中で安全は確保されているのかなど、ただただ不安でいっぱいだった。そしてその不安は的中することになる。連日降り続く大雨の影響で予定通りの活動などほとんどできず、神戸に帰ってからもずっと何をしに行ったのか、自分たちは熊本の方々の助けになるようなことができたのか、自分に問いかける日々が続いた。しかし3年生になった今思う。ボランティア活動とは、決して瓦礫の撤去のような目に見える活動だけではないのだと、商店街を歩き被災者の方からお話を聞き心に寄り添うこと、被災地でお土産を買い経済を活性化させること、さらには熊本で地震があったと

忘れず、熊本のことを思うことだけでも1つの立派な支援なのだ。ボランティアと聞くと正義の味方のような雰囲気があり、つつい人の役に立っていると天狗になりがちだ。しかし、ボランティアを必要としている人がいない限りそもそもボランティア活動ができない。自分たちの力を必要としてくれている人がいること、自分たちを受け入れている場所があることに感謝しなければならない。常に感謝と謙虚な気持ちを持つことを忘れず、これからも支援に携わっていきたいと思う。

8 近年多発する災害の恐怖

2018年は災害の恐ろしさを身をもって感じた。大阪北部地震をはじめ、平成30年7月西日本豪雨災害、台風被害、北海道胆振東部地震など多くの災害が発生した。中でも、大阪北部地震や平成30年7月西日本豪雨災害などは近畿周辺で発生したために地震の恐怖や大雨の恐ろしさを思い知らされた。大阪北部地震が発生した際私は学校でトレーニングをしていた。しかし、音楽を聴いていたために緊急地震速報に気づかず、突然揺れに襲われた。環境防災科で「防災・減災」を学ぶものとして恥ずかしかった。学校というある程度の安全が保障されている場所にいたからこそ落ち着いて行動することができたが、もし一人でいるときに地震が発生したら私は適切な行動をとることができたのかと。平成30年7月豪雨災害の際は大雨警報が発令されているにも関わらず、私は友人の家に遊びに行っていた。JRなども動かず帰る手段も無くなり、どうすることもできなかった。自身の危機管理能力の無さに落胆した。今回の出来事を機に「防災・減災」を教えるためには言葉だけでは伝わらないと感じた。自分自身が行動し態度で示すことこそが「防災・減災」を教える上で重要なことなのだ。

9 「なりたいな」から「絶対になる」へ

私の将来の夢は消防士になることだ。消防士になろうと決めたきっかけは、幼稚園の年長の時に幼稚園で防災訓練が行われた時に真っ赤な消防車とカッコいい消防士さんを見て自分も消防士という職に就きたいなとなんとなく思うようになったことだ。小学校低学年くらいまでは、「消防士になれたらいいな」くらいの気持ちでいたが、小学校4、5年生くらいになったところに転機が訪れた。それは何かというと横浜市消防局を舞台にした「SR-特別高度救助部隊-」というドラマに出会ったことだ。それを機に、今までは「消防士になりたい」程度の考えだったものが、「絶対に消防士になるんだ」という強い気持ちに変わった。また、中学2年生のころにはトライやるウィークで明石市消防本部に行かせていただき、救助訓練や放水訓練に参加し、実際の災害現場に出動して行く消防士の方を目の当たりにし、自分もこんな消防士になる、という理想の消防士像ができた。さらに、高校生になると消防学校の体験入校、三木市消防本部での職場体験、垂水消防署での職場体験など、数多くの経験をしていくうちに消防士になるという思いは増々強くなった。しかし、夢物語だけでは消防士になることはできない。消防士とはどんな仕事をしているのか、どんな役割を担っているのかを理解する必要がある。そこで、消防士という仕事について少しだけお話をしたいと思う。消防士の仕事は簡単に言うと人々の「生命」と「財産」を災害から守る仕事だ。消防の仕事には「消火」「救急」「救助」「防災」「予防」の5つが主な業務とされている。「消火」、火災が発生するといち早く現場に出動し、火災現場からの出火をくい止めると同時に、現場や近隣などからの人命救助活動を実施する。また、延焼を最小限に抑えるため、出火状況や風向きなどを素早く把握し消火活動にあたる。非常に危険のともなう状況がつづくので、周辺の見物人を安全な場所へ避難させたり、消火の妨げとなる活動現場の障害物を取り除いたりするのも重要な仕事となる。火災の件数は、それほど多いものではないが、日頃から訓練を重ね、すぐに火災現場に駆けつけられるように常に出動の準備をしている。「救急」、119番の通報を受けて、交通事故をはじめ、事故によってケガを負った人、また急病人に対して応急手当を施し、医療機関に搬送することが任務だ。救急車には3人の隊員が乗車し、うち一人は救急救命士の資格を持っていることが一般的だ。現場における応急手当は、高度な処置と的確な判断が必要となるため、資格をもつ救急救命士が同乗し処置にあたる。「救助」、災害現場などで人命救助を行う。火事、交通事故、山の崩落地、河川や海が主な活動現場となることが多い。火災現場では、逃げ後れた人を救助し、交通事故の現場では、車にはさまれたり閉じ込められたりした人を助け出す。現場到着と同時に速やかに救出活動を行い、消防隊などと連携して人命救助にあたる。山の崩落現場では、崖崩れで生き埋めになった人、土砂の下敷きになった車両から人を助け出すことが任務となる。また、夏場に多い河川地域での水難事故では、川遊びをしていて溺れてしまった人の救助を行う。「防災」、災害を未然に防ぎ、被害を最小限に食い止めるために不可欠な任務の一つ。万一の事態に備えて、地域住民の防災に対する意識を高めると同時に、基本的な行動や避難路を知ってもらうため、町会・自治会を中心に、消火器や起震車などを活用して初期消火、身の安全の確保、

救出・救護の訓練指導を行う。小学校などで防災訓練を行うこともある。そのほか、火災や地震のレベルを想定したり、地域の地形に基づく被災パターンを想定したり、地域ごとの実状にあった訓練を行っている。「予防」、建物の防火上の安全性や消防用設備等の設置について、現場の実状を審査・検査し、その結果に基づいて指導を行う業務だ。工事後の用途変更にともなう際にも同様の審査・検査・指導を実施し、建築物の防火と安全確保に努めている。工事中や竣工時には、実際に建築現場に出向き、施工状態を確認し、防火に対する基準を満たしているかなどを厳しく検査する。その他にも事務作業を主な仕事としている人も居り、各部署が連携し、協力しながら、日々の業務にあたっている。これらはどれも、決して簡単なものではない。だからこそ、強い責任感を持つことができ、やりがいを感じるができるのだと思う。自分が生まれ育った町、お世話になった町を守るために必ず消防士になってみせる。

10 さいごに

私は今回この「語り継ぐ」を作成するにあたって、授業以外で初めて自分の家族から阪神・淡路大震災の話聞いた。今までは家族と震災のことを話すなんて、なんか辛気臭い気がして自分からは避けてきた。しかし、このように話を聞くことができ本当に良かったと思っている。普段滅多に話すことのない、祖父や祖母とも話をすることができた。自分が経験した阪神・淡路大震災という恐怖の体験を話してくれたことに感謝しなくてはならない。冒頭にも述べたように震災を経験していないからといって立ち上がらなければ、阪神・淡路大震災はいつの日か人々の頭の中から消えてしまう。一刻も早く震災を経験していない世代が、経験した世代からリアルな話を聞き、さらに次の世代に伝えていかなければならない。その責任を担っている1人としてこれからも活動していきたい。私の語り継ぐを最後まで読んでいただきありがとうございます。

「語り継ぐ」

大森 桃花

1 はじめに

阪神・淡路大震災以降に生まれた私は震災を経験していない。これからは震災を経験していない人の方が多くなっていく。震災を忘れないためには語り継ぐことが必要だ。だから私は同じことを繰り返さないために語り継いでいきたい。今回、神戸市垂水区で体験した母と西宮で体験した卓球の先生から話を聞いた。

2 母の体験

(1) 地震発生

「ゴードンッ」今までに聞いたことのない音が聞こえた。この音に違和感を覚えた瞬間、体が下から突き上げられていた。すぐに横で寝ていた当時1歳5か月の娘にかぶさった。すると、背後から父のうめき声が聞こえた。父の背中にワープロが落ちてきていた。台所にある食器棚からはたくさんの食器が飛び出していた。飛び出したのは手前か上に置いていた食器だった。下の奥に置いていた食器は、棚に敷いていたシートにより落ちてくることはなかった。

(2) 地震発生後

家にいたら危ないと思い、必要最低限の荷物だけ持って家を出た。娘が1泊出来る用意は常にしていたため、おむつや粉ミルク、着替えの心配はなかった。玄関に行くには、割れた食器が散乱している台所を通らなければならなかった。そのため、母と父はスリッパを履いて歩いて行った。この時の娘は母に抱っこされていた。

北区にある祖父母の家に向かった。信号は点いていなかったが混雑はしていなかった。北区では地震の被害がそれほど大きくなかったが、祖父母の家ではガス、水道、電気が止まっていた。しかし、数時間後には電気が復旧した。電気が復旧したためテレビのニュースを見ると、燃えている神戸の街が映し出されていた。復旧が早かったためなんとか生活をする事ができた。復旧が遅ければ加古川に住むいとこの家に行くつもりだった。北区に着いてすぐ、そのいとこの家に、もしかしたら行くかもしれないということをお電話で連絡した。ガスが日中に復旧したためそのまま祖父母の家で過ごすことになった。そのことをいとこの家に連絡した。母が公衆電話を使ったのはいとこの家に連絡をした2回だけだった。

近くのスーパーにはお客さんがたくさん来ていた。父と伯父は救援物資が配られると聞いてすぐに並びに行った。その間母はお腹の中に姉がいたため負担をかけないように家から出ることは少なかった。水道の復旧が遅かったため、水を貰いに行ってもらった。

家の電話が繋がるようになり、祖父母の家へ連絡が入るようになった。父の友達が垂水まで来て家の片付けを手伝ってくれた。家の片付けは食器棚から飛び出して割れた食器類を捨てるだけだったため、時間はあまりかからなかった。

(3) 自宅に帰宅

家の近所の人に電話をすると、ライフラインが復旧したという確認が取れた。そのため、家に帰った。祖父母の家で過ごしたのは2週間ほどであった。家に帰っても冷蔵庫の中にある食料はもう食べられなくなっていた。近くのスーパーへ買い物に行ったが残っている商品は少なかった。

家の中は柱が傾いたり、風呂のタイル、その他の場所にもひびが入ったりしていた。半壊と診断された。目の前にある公園は被害が少なかった。

3 先生の体験

(1) 地震発生

就寝中にいきなり襲い掛かった地震は、最初地震とわからず、巨人が外を歩いてきたかと思うくらいの縦揺れと横揺れが起き、その揺れは数十秒間続いた。鉄筋コンクリート造のマンションだったのもあり、家屋の倒壊は免れた。しかし、家中の家具はひっくり返り様々な場所で食器やほかの家具が散乱していた。私はリビングの端で寝ていた。ピアノやテレビ、タンスが側に置いてあったため、その全てのもが私を目がけて倒れてきたが、奇跡的にそれらのもの同士が倒れ掛かってきた際にぶつかった。隙間に入ったため服が挟まれるだけで身体に傷はなかった。幸い家族全員無事で安否確認も出来た。父が「また次の余震がすぐに来るかもしれないから、いつでも動けるように」と家族全員をリビングの真ん中に集めた。

(2) 地震発生後

地震直後は恐ろしいくらい静まり返っていた。当時小学5年生だった自分はその静けさもあり、次の地震がまた来るのではないかという恐怖で身体の震えが止まらなかった。

数分後、「大丈夫ですか」というマンションの管理人さんの声が外から聞こえてきた。父が「大丈夫です。家族全員無事です。」と答えた。その後、父がいざという時に外に逃げられるように玄関の扉が開くかどうかを慎重に調べに行った。父が玄関に行く途中、ひっくり返った家具の上、食卓テーブルの上を歩いていくという、何とも違和感のある光景を目にした。扉が開くかどうかを確認した後、火元のチェックを行い、冷蔵庫から食料と飲料を持ってきた。喉を通る状態ではなかったが飲み物だけ無理矢理口にしてすぐに動けるように備えた。建物が倒壊するような状態でもなく食料もたくさんあったため、下手に動く方が危険だと判断しとりあえず時間が経つのを待った。

次第に外が明るくなった。7時過ぎ頃、停電していた電気が点いたためまずテレビをつけて状況を確認した。そこで本当に大きな地震が起きたんだという現実を目の当たりにした。特に神戸ではあちこちで火災が発生していて、高速道路が根こそぎ倒れている。さらに、バスが高速道路から落ちそうというありえない光景ばかりが目に見えてくる。家の近くでは山陽新幹線が走っている高架や、阪急をこえるための国道171号線の高架も崩落していた。少し離れた阪急伊丹駅も崩壊していて、駅の2階部分に停車していた電車が今にも落ちてきそうだった。まだまだ被害がはっきりしていないところも多くあり、ニュースを見ているのも辛かった。電話は時々通じる状態だったため、大阪に住む親戚に連絡を入れた。ここで驚かされたのが、電話に出た祖父は「はい」といつも通り。母親がそっちは大丈夫なのかと聞いても、何のことかと全く動揺している素振りがなかった。地震のことを話すと「確かに今朝ちょっと揺れたねー」と言っていた兵庫と大阪でこんなに揺れや被害も違い温度差があるのかと家族皆驚いた。後からわかったことだが、西宮では震度7、大阪中部南部は震度4で大阪に住む親戚は皆いつも通りの朝を過ごしているとのことだった。

しばらくしてマンションの住人同士でも安否確認を行った。誰も犠牲者がいなかったため、喜ぶ姿も多く見られた。神戸の状況に比べると奇跡的だが、辺りはガスの臭い等が漂っていて決して安全な状況とは言えなかった。

地震発生から2日後、大阪方面の阪急西宮北口駅―梅田駅が復旧した。両親は家の片付けに専念するため、私と弟は大阪の親戚の家に避難も含めて預けられることになった。親戚の家に着いたが被害状況等、兵庫とは別世界で何事もなかったという感じだった。親戚の家に着いてからようやく同級生とも連絡を取り合い安否確認が出来た。通っていた学校全体は西宮の中で2番目に被害が大きかった。

2週間ほど経ち自宅に帰った。丁度2月から学校に登校うようになったが、とても授業や勉強どころではない雰囲気だった。時間が経つと共に前向きになり、少しずつ日常を取り戻していった。

(3) 震災を経験して思ったこと

生きているということはそれだけでもありがたいこと、当たり前ではないこと。私はいくつもの奇跡が起きたため今を生きている。そのことを痛感させられた。

今でも1月17日には亡くなった同級生の子の家に友人がたくさん集まって当時の話をしている。20年以上経つとそれは同窓会のようなものになっているが、この集まりが大事なつなぎとなっている。

4 環境防災科

(1) 入学前

私は昔から人の役に立ちたいと思っていた。人のために行動することが好きだった。そのため、ボランティア活動や募金活動を行っている環境防災科の生徒に憧れていた。環境防災科の一員になりボランティア活動を行いたいという思いを持ち始めたのは中学生の頃だった。また、私の姉は東日本大震災が起きた年に入学し、実際に被災地訪問へ行っていた。その様子を間近で見っていたため、環境防災科に入学して同じようなことを行いたいと思ったことが入学のきっかけである。地震のことや防災のことは少しだけ興味があったが、正直それよりも人の役に立ちたいという思いの方が強かった。

(2) 入学後

入学してからは、環境防災科でしか出来ないことをたくさんさせていただいた。入学前までは少ししか興味を持っていなかった地震のことや防災のことを今ではもっと知りたい、学びたいと思うようになった。しかし、防災のことを学んでいると恐怖感が増してきた。今まで学んできたことを災害時に活用できるのか、まず自分の命を守れるか。こう考え始めるととても怖くなる。環境防災科は市民のリーダーとなって引っ張っていかなければならない。今まで学んできたことを活かせるよう、誇りと自信をも

って行動していきたいと思う。

ボランティアの中で最も印象深いのは熊本被災地支援活動に行かしていただいたことだ。入学してすぐに起きた熊本地震、当時1年生だった私たちは戸惑っていた。被災地に訪問することは初めてだった。また、東北にも行かせていただいた。実際に自分の目で見たり、聞いたり、感じたりすることが出来た。しかし、自分の目で見ても想像できない場所があった。経験しないとわからない恐ろしさがあることを学んだ。他にも様々なボランティアに参加させていただいた。環境防災科だから出来ることだと思う。社会に出るとこのような機会は少なくなる。環境防災科に入学出来て良かったと思った。

5 夢と防災

(1) 子どもと関わること

私が子どもと関わりたいと思ったのは弟が生まれてからだった。弟や弟の友達と遊ぶ時は必ず「一緒に遊ぼう」と声をかけてくれる。甥も生まれたので子どもと関わる時間が増えた。子どもの好きなこと、はまっていることが分かるようになり、一緒に遊んでいくうちに子どもの可愛さを感じるようになった。子どもと一緒に遊んだら楽しい、笑顔になれると思えた。また、周りの友達からも子どもと関わることに似合っている、子どもに好かれやすいと思うと言ってもらえたため、将来どんな形でも良いので子どもと関わっていきたいと思った。

子どもたちと遊んでいるとき、地震のことを考える子どもがいた。子どもも地震のことを考えていることや、小さいころから災害のことを考えることの大切さを改めて知ることが出来た。私は、子どもと関わる時に過去の災害のことを語り継いでいきたい。その中で大切にしたいことは命の大切さを教えることだ。誰もが命が大切なものという事はわかっているはずだ。しかし、これからの世代は震災で亡くなられた方との直接的な関わりは減っていき、自分の大切な人が亡くなってしまふ悲しさ、辛さはわからない人が増えてしまうと思う。私自身震災を経験していないし、身近な人で亡くなった方はいないが環境防災科で学んでいく時にもし自分の家族や友達が亡くなってしまったらどうしようと思ひ、泣きそうになる。私は子どもたちと一緒に自分の大切な人が亡くなったらどれだけ辛いかを考えていきたい。私が東北に行かせていただいた時、お寺の住職さんが「災害で亡くなった命だけを特別扱いしてはならない。災害以外で亡くなられた方も一つの大切な命。」とお話していただいた。災害のことを話していく中で、災害で亡くなったからといって特別扱いしないことも教えていきたい。子どもは楽しいことにはすぐに興味を持つが、楽しくないことはすぐにやめてしまう。災害のことを語り継いでいくことが私たちの役割であるが、子供たちに伝えるときは堅苦しくなく簡単に楽しく覚えられるように伝えていきたい。

(2) 素敵な家庭を築くこと

私の家族はとても仲が良い。休みが合えば必ず出かけに行く。帰宅時間がバラバラなため一緒に晩御飯を食べられる日は少ない。しかし、晩御飯がバラバラであっても就寝時以外は皆同じ部屋にいる。どんな話でもしっかりと聞いてくれる。試合や行事の時は毎回見に来てくれる。どんな時でも応援してくれ、支えてくれるそんな家族が大好きだ。家族という時間が一番落ち着く。一番幸せと感じる。家族が増えたためさらに明るい家族になった気がする。誰も命を失ってほしくない。命を守るために家族に必要なものを見つけることが今の私に出来ることだと思う。出来る備えは怠らないようにしたい。私も将来明るく仲の良い家庭を築きたい。

6 まとめ

(1) お話を聞いて

環境防災科に入学してたくさんの方からお話を聞かせていただいた。しかし私は、震災を経験した方に自分から話を聞くことは出来なかった。語り継ぎたい気持ちはあるが、話を聞くことが怖かった。震災を経験していない私が聞いても話してくれないと思っていた。今回、自分から話を聞くことが出来てよかった。これを機にたくさんの人に話を聞いていきたいと思った。

2人の話を聞かせて頂いて思ったことは、人との関わりが大切ということ、今生きていることがありがたいということだ。普段から周りの人との関わりがあれば災害時に助け合いが出来る。私が以前住んでいた場所(母が震災を経験した場所)は近所の方とたくさんコミュニケーションが取れていた。普通の雨の時でも「気をつけや」と心配してくださっていた。災害以外の場面でも助け合っているから安心出来るのだと思う。人との関わりは何十年も続いていく。どの場所に行っても人との関わりを大切にしたい。今こうして生きていられるのは震災時無事だった母と父のおかげだ。美味しいご飯を食べられるこ

と、いつも通り学校に行くこと、家族がいること、住む家があること、お風呂に入ることなど、小さなことでも当たり前と知っていることは全てありがたいこと。災害はその当たり前のことが一瞬にして無くなってしまう。全てのことに感謝して生活していきたい。

(2) 私の経験

私が経験した地震は震度4までしかない。私のはっきりと覚えているのは3つある。1つ目は中学1年生の時だ。家で寝ていた時に起きてすぐに目が覚めた。違う部屋で寝ていた私に母が「こっちにおいで」と言ってくれ、守ってくれていたのを覚えている。2つ目は中学2年生の時だ。私は最初地震だと気づかず、後ろの人に椅子を揺らされているだけだと思っていた。何人かの生徒が地震と言っているのを聞いて初めて地震だと気が付いた。3つ目は高校1年生の時だ。学校で授業を受けているときに起きてすぐに机の下に潜ったのを覚えている。家族の顔が浮かんできた時は心配で泣きそうになった。私のはっきりと覚えているこの3つの地震は阪神・淡路大震災に比べると規模が小さい。しかし、大きな地震を経験したことがない私からすると、小さな規模の地震でもとても怖く感じるのだ。また、高校で防災を学び始めると少しの音や揺れに敏感になった。過去の災害や防災について学んでいるので余計に怖く感じたのだ。しかし、少しの音や揺れを感じた時、地震が起きた時など、怖さを共有できる友達がいる。この3つの地震や高校生活を思い返してみると、どれも周りの人に助けられていた。周りの人の助け、支えがあることで今の私がいる。だから私はこの3年間で学んだことを活かして助ける側にまわりたい。

7 最後に

阪神・淡路大震災から24年が経ち、震災を経験していない人が増えてきている。震災は時間が経つと忘れ去られてしまう。次に来る災害で同じ被害を出さないために過去の災害から生まれた教訓を知る必要がある。そのためには語り継いでいかなければならない。一部の人だけが知っていても意味がない。一人一人が防災に目を向けないと命は守れないと思う。私たちが生きている間に災害と呼ばれるものは必ず起きてしまう。防災の知識があるのとないのとでは、災害時の行動が変わってしまう。災害で命を失いたくない。自分の大切な人の命が命を失ってほしくないと思う。

私は環境防災科に入学して初めて防災について学び、防災のことに興味を持った。もっとたくさんの人に防災に興味を持ってもらいたい。私は、小さい頃に地震の勉強はしていたがここまで詳しく学んでいない。しかし、小さい頃に学んだことは今でも身につけている。小さい頃から行う防災教育の大切さを考え直すことが出来た。小さい頃から意識を高く持つことは難しいが少しのことでもいいので防災を知ってもらいたい。次世代に過去の災害のことを語り継ぐのはもちろんだが、環境防災科で学んだことも伝えていきたい。どの道に進んでも私らしく語り継いでいきたい。

「語り継ぐ」

加藤 昌也

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していない。しかし、6年ほど前から家族で防災を意識するようになり、阪神・淡路大震災のことを聞く機会が増えた。その中でも、当時北区に住んでいた父と、大阪に住んでいた祖母に話を聞いてみたいと思い、当時のことを聞いた。

2 父の体験

私は父から震災当時のことを聞いた。当時父は三菱重工に勤めていて、妹と祖母（父の実母）と祖父（父の実父）で四人暮らしをしていた。ここからは、父の目線で書いていく。

（1）発生時

突然激しく揺れて何事かと目を覚ました。一階で寝ている母の様子が気になり、部屋を出ると、自分の部屋から一階に下りる階段までの廊下の窓ガラスが割れていて、ますます何事かと考えた。一階に降りると母は無事で、妹も父も無事だった。窓を開けると近所に住んでいる人たちが出てきて、「大丈夫でしたか？」と軽く話し合った。

（2）揺れがおさまってから

6時頃になると家の中の興奮は収まり、情報収集をするためにラジオをつけた。すると、DJが「阪神高速道路が倒れています。余震が続いているので外に出ないようにしてください」と呼び掛けていた。その時ようやく「地震が起きているのだ」と分かった。すぐに気づかないほど混乱していた。

ラジオを聞いてから、その日は外に出るのをやめ、家の中の片づけをした。

（3）食料

水は最初の三日ほど出なくて、自衛隊のタンク車から水をもらっていたが、すぐに水も出るようになり、ガスも通った。しかし、近所のスーパーなどには食料が置いていなかったから、大阪や姫路にバイクで買い出しに行った。

（4）買い出し

明石、姫路、大阪の順番で買い出しに行った。

最初は明石に行っていたがすぐに食料がなくなり、姫路に行くようになった。ほどなくして大阪に食料を買いに行くようになったが、初めて大阪に入ったとき目を疑った。神戸の長田区や中央区と大違いで、昼間からパチンコを楽しむ人がいた。あんなに被害を受けたのは神戸だけなのかと思った。

（5）交通状況

いつも使っている一般道路はずっと渋滞で、バイクでやっと通れるほどの道幅しかなくなった。特に山を通る道ではところどころ道が崩落していて怖かった。

（6）一週間後

ようやく道路も通れるようになり、和田岬にある会社に行くことができた。

和田岬に行くまでに長田区を通るのだが、普通に火事が起きていて動揺した。

会社については、まず自分の作業場を片付けて、終わったら他の人の片づけを手伝っていた。

その日のお昼ごはんはおにぎり二つと缶詰だった。帰り道は大開と長田を通る道で帰ったが、大開では道路が陥没していて、長田では会社に行くときに見た火事がまだ燃えていた。

この日、一度会社に行ったきり、また自宅待機になった。

（7）助けてもらったこと

しばらくしてから、嫁の実父から「困ってることはないか？」と連絡がきたので、屋根の瓦が取れたことを伝えた。すると、見たこともないくらい大きなブルーシートを持ってきてくれた。

大阪から北区まで山を通る道しかなく、地震発生時より少し改善されたものの、まだ通りづらい道を通して自分たちのためにブルーシートを持ってきてくれたことにとっても感謝したことを覚えている。

（8）印象に残ったこと

印象に残ったことは地震そのものだと言っていた。現在は転職して、阪神高速道路株式会社勤めているが、地震の時にこの職業についていたら家に帰れないほど忙しかったと思うと言っていた。

3 大阪の祖母の体験

大阪に住んでいる祖母は、当時も大阪に住んでいて、娘（私の母）、母（私の母の実母）、父（私の母

の実父)の三人で暮らしていた。ここからは祖母の目線で書いていく。

(1) 揺れた瞬間

当時、JR西日本の東西線の海老江駅の近くのアパートに住んでいた。地震が起きる少し前に目が覚め、5時台だったのに妙に外が明るかったのを覚えている。すると地震が起こった。

(2) すぐにしたこと

揺れた瞬間、すぐに娘に布団をかけた。自分のことは考えていなかった。

(3) 揺れが収まってから

この大きな揺れは、当時工事していた東西線が爆発したとと思っていたが、東西線は無事だったので地震だと気づいた。

(4) 被害

被害は、大きな食器棚が数センチ移動しただけだったが、一つ下の階では、食器棚や電子レンジが倒れていて、自分が住んでいる階とは大違いだった。アパートの角部屋にあたる部屋にはひびが入っていて、地震の大きさを知った。

4 感想

今回、初めて身近な人から震災の話聞いた。私が環境防災科に入学してから全く災害の話や、防災の話をしてこなかった。私も、「父さんは地震の時も北区に住んでたから被害はなかったはず」と聞こうとしなかった。なぜ、父と祖母に聞こうと思ったかという、歴代の先輩方の語り継ぐを読んでいて、北区と大阪の記述が少なかったからだ。それに、データでは北区と大阪は被害が甚大ではなかったが、体験した本人は何を感じていたのかが気になり、今回、当時のことを聞いた。先に、大阪の祖母に話を聞いた。一番印象に残ったのは、工事中の東西線が爆発したとと思っていたことだ。話を聞いているときもそのことが頭から離れず、メモもほとんど東西線の話になってしまった。父から聞いた話で印象に残ったことは、北区も意外と被害を受けていたことだ。被害のデータは、基本的に死傷者数や倒壊家屋の数が出される。そのデータだけを見れば、確かに北区は被害が少ない。しかし、北区を囲む山々は至る所で土砂崩れが発生し、バイクでなければ通ることはできない状態だったようだ。

私は、これだけ多くの話を聞いて恥ずかしく感じた。なぜなら、これだけたくさんを経験した親に聞こうとしなかったからだ。今回、このような貴重な話を聞けてよかったと思う。

5 将来の夢

私は将来の夢はまだ決まっていない。しかし、やりたい仕事がたくさんある。

1つは書店員になることだ。なぜ、書店員かという理由は2つある。

1つ目は、単純に本が好きで、もっと多くの人に本の魅力を知ってもらいたいからだ。2つ目は、いろいろな事件、事故、災害を風化させないためだ。

コンピュータがなかった時代は、戦や事件、事故、戦争などをすべて書物にして残していた。このおかげで、今日、私たちは過去の出来事を知ることができている。「過去の出来事を知りたいならインターネットでいいじゃないか」という人もいるかもしれない。だが、インターネットに載っている記事はすべて事実とは限らない。インターネットは手軽で便利で扱いやすいが、思わぬ罠が仕掛けられていることもある。セキュリティシステムはどんどん進化しているが、犯罪の手口も進化していると聞く。私は、そんな面倒なことをしなくても図書館や本屋に行けば安全に正確な情報が手に入ると思っている。本はその時代にあった出来事を語り継ぐには欠かせない道具であり、後世に残す宝物のようなものだ。私は書籍の楽しさを知ってもらうだけでなく、過去の出来事をもっと多くの人に知ってもらいたいと思う。

次に、ラジオ局の職員になることだ。理由が2つあって1つ目は、これもまた本と同じように好きだからだ。「ラジオよりテレビのほうがいい」という人もいるかもしれない。確かに、テレビは映像で流れていて、見るだけで内容がわかる。しかし、ラジオにはラジオにしかない良いところがある。ラジオは音だけなので、余計な情報が入ってこない。つまり、音に集中することができる。これによって集中力が上がるのではないかと考えている。また、ラジオは一方的に聞くだけなので傾聴の姿勢も身につくと考えている。

2つ目は災害時に多くの人を助けたいからだ。

災害時に「助ける」といえば消防や警察、自衛隊が救助するというイメージが強いが、ラジオも情報を発信することによって多くの人を助けている。例に、カトリックたかとり教会にあったFMわいわいは、災害時に一般的に放送される情報を英語に翻訳して放送し、多くの外国人を救った。過去に発生した関

東大震災では、根も葉もないデマが流れ多くの在日朝鮮人が殺害された。理由は、政治的に邪魔だったなどはっきりとしていないが、このようなことが起こるのは異常で、忌むべきことである。私は、二度とこのようなことが起こらないように、外国人にも平等に情報を提供していきたいと考えている。

最後に、エンジニアだ。

エンジニアの中でもなりたい職業が二つある。一つ目はテーマパークのエンジニアだ。これは遠足に行ったときに「なりたい」と思った。アトラクションを陰から守る存在に強いあこがれを抱いた。もう一つは消防車など、消防関係の道具を作る会社だ。私の性格は、表に立って活動する主人公的な性格ではなく、裏でサポートする性格だと思ふことが多々ある。「消防士を裏から支える」私の性格にピッタリだと思ったからだ。

私はこの二つ以外にもなりたい職業がある。例えば、テーマパークのスタッフや、プログラマー。文房具店の店員など、就きたい仕事やなりたい職業がたくさんある。しかし、まだフワフワとしている。私は、まだ防災を勉強したいと思っている。だから、大学でも防災を学ぶつもりだ。そして、大学で防災を深く学んだうえで改めて自分は何がしたいのかを考えてみようと思う。

防災は答えがなく、何とでもかかわれる力を持っている。だから、将来、どんな職業に就いても防災とかかわっていきたい。

6 きっかけ

私が、環境防災科に進学しようと思ったきっかけは二つある。一つは、中学二年生の時に持っていた夢で、二つ目はボランティア活動だ。

私は中学二年生の時、消防士になりたいと思っていた。私が通っていた中学校の通学路に消防署があり、いつも訓練風景を見ていて楽しそうだなと思っていた。また、テレビで見た東日本大震災の救助活動がとてまかっこよくて、自分も消防士になって多くの人の命を救いたいと思ったからだ。

ボランティア活動というのは、私が参加していた竹灯籠の竹を切るボランティア活動のことだ。

私は中学の頃から誰かのために活動するのが好きで、よくボランティア活動に参加していた。その中でも、一年、二年と参加したボランティアが竹灯籠のボランティアだ。このボランティア活動では竹林から竹を切り出し、灯籠の形に加工することで、一年生の時は何のためにしているかわかっていなかった。しかし、中学二年生の時、阪神淡路大震災のことに関心を持つようになり、どこで、何のために使われるのかを知ったうえで、参加するようになった。

本格的に環境防災科を目指した理由は、「消防士になるために、災害のメカニズムや対応などを詳しく勉強したい」と思ったのと、「他の高校に比べてたくさんボランティア活動に参加している舞子高校に進学して、さまざまな活動に参加したい」と思ったからだ。

7 私たちにできること

私は、その気になれば何でもできると思っている。会社を立ち上げたり、世界を旅したりすることができはずだ。しかし、実行に移すにはかなりの気持ちが必要になる。実行するための案を考えたり、資金を集めたりすることはできる。しかし、いざ実行するとなったときに相応の気持ちがないと失敗や挫折、妥協を許してしまうことになる。私は、その物事に対する気持ちが足りず失敗してしまうことがたくさんある。私は前に出て発表するのが苦手で、とことんまで準備しないと失敗したり、後悔する発表になってしまう。これは私の趣味にも同じようなことが起こっている。この「気持ちが足りない」のは、実行する物事の内容の好みではなく、自信だと考えている。苦手な発表でも、何日も前から準備し、練習しておけば自信がついてうまく発表することができる。何かを決めて実行するのをためらうとき、よく「気合が足りない」とか「根性がない」と言われたり、思ってしまうかもしれないが、それは間違いだと私は考えている。不安になるのは自信がない証拠。すべての物事に自信があり、失敗を恐れぬ性格なら、どんなことも成功し、運もついてくるだろう。私は根拠の無い自信ではなく、しっかりとした自信を身に着ければ、どんなことも限りなく成功すると考えている。自信をつけるには、相当の努力が必要になる。勉強が苦手な人は、たくさん勉強して自信をつけるしかない。スポーツでも同じで、大会になると緊張してしまい、普段通りにプレーすることができないという人は、何度も大会に出て大会の空気に慣れるしかない。苦手なことにあえて取り組むのはとても苦しいと思う。しかし、この苦しみを乗り越えたら、苦手だったことは間違いなく本人の力になる。私たちにできることは、たくさん勉強や練習をして自信をつけることだと私は思う。

8 3年間学んで分かったこと

私が3年間学んで分かったことは、災害は日常に潜んでいるということだ。

「災害」といわれると、地震や津波がイメージされるが、災害はそれだけではない。自然災害以外にも、人為災害や労働災害が存在する。人為災害や労働災害は、自然災害と違って人の些細なミスから発生してしまう。例えば、糸魚川北大火が挙げられる。店主の不注意で火事になってしまい、当時の気象状況も相まって、広範囲にわたって被害が出てしまった。自然災害なのではないかという声も上がっているが、私は人為災害だと考えている。

必ずしも災害は非日常に起こることではなく、いつも日常に潜んでいる。しかし、被害を減らす方法はある。それは、基本的な防災である。災害は、事前に備えておくだけで被害を減らすことができる。いつ発生するかわからない災害だが、備えておけば助かる確率は大幅に上がる。

だから、私は日々防災を大切にしていきたい。

9 調べてみたいこと

私には調べてみたいことが2つある。1つは、地震の前日にあったことである。

震災を経験した人に話を聞くと、必ずと言っていいほど前日におかしなことがあった。インターネットでも調べると、同様に不可解な現象が発生していることが分かった。私が聞いた話は、「カラスがいつもより多く飛んでいた」「帰り道の六甲山のトンネルから、雨も降っていないのに大量の水が流れていた」など、いつもと違うことが起こっている。また、東日本大震災の前日のことを調べてみると、「震災前日に激しい海鳴りが聞こえた」「鳴くと地震が起きるといわれているキジが何度も鳴いた」など、同じようにおかしなことが起きている。しかし、どの情報も明確に地震と関連づいていない。どの事例も偶然に起こる現象で、科学的に証明することができる。私は、この偶然に発生する現象の中には地震と深い関りがある現象があるのではないかと思う。なぜなら、偶然に起こる現象でも地震が発生する一週間以内に必ずその現象が見られているからだ。具体的な方法は全くなく、実現できないかもしれないが、もし、調べることができれば深く調べたい。

もう1つは風水害についてだ。この「語り継ぐ」を書いている2018年には様々な災害が日本を襲った。平成30年7月豪雨や台風21号。北海道地震など、連続して災害が発生した。特に台風20号と21号は非常に強い台風で、連続して日本列島に襲来した。この2つの台風は「今年最も強力な勢力」と言われた台風で、原因は、海上で弱まるはずの勢力が地球温暖化の影響で勢力を維持しながら日本に襲来したからだといわれている。今年、このような台風が来襲したということは、来年からも同じように、または、それ以上の台風になるかもしれない。これから起こりうる災害を調べていきたいと思う。

10 語り継ぎたいこと

今回、話を聞いた二人に後世に語り継ぎたいことを聞いた。

二人は、いざというときのために準備しておくかと答えてくれた。2018年である現在、南海トラフ巨大地震の発生が懸念されている。この地震では間違いなく多くの被害が出る。その被害を最小に防ぐには、政府が準備するのではなく、個人個人が準備し、備えなければならない。結論を言ってしまうと、個人が完璧に備え、避難することができれば、被害はゼロに近くなるはずだ。しかし、そうでない人もいる。私たちは支えあわなければならない。たとえ、違う言葉を話す外国人であっても、言語の壁を越えて助け合わなければならない。その時のために、英語を勉強しておくなど、準備しておかなければならない。基本的なのは、非常持ち出し袋の用意だが、それ以外にも家具の固定や耐震化。避難経路の確認など、日常で簡単に準備することができる。今、私たちが苦手な勉強も準備の一つだ。私はほかの友人やクラスメイトよりも勉強が苦手だ。勉強の重要性は十分に分かっているのだが、苦手で仕方がない。しかし、このまま勉強することをやめては、単位もなくなるし、いざというときに誰の役にも立てなくなる。それは嫌だ。だから私は嫌でも勉強する。今勉強することがどんなに重要か、また、非常時にどんな役に立つか考えてみてほしい。今、私たちがしていることは、すべて非常時の時のための準備なのだとは私は考える。

そして、私は聞いたことや学んだことをすべて使い、後世にこの阪神・淡路大震災のことを伝えていきたい。

「悪魔が来た日」

金田 実緒

1 はじめに

私が「語り継ぐ」を書くのにあたって真っ先に思ったことは「書くのが嫌だなあ」ということだった。最初に断っておくが、書くのが面倒くさいからとかいうふざけた理由ではない、単に不安だからだ。なぜなら私たち若い世代は震災を経験していない、阪神・淡路大震災について知っていることといえば授業で習ったことや講師の方から聞いたお話ぐらいだ。正直に言うとまだ他人事のような気がしている。そんな私が書いていいのだろうか。私の答えは「否」である。語り継ぐのであれば震災を経験した母や父をパソコンの前に座ってもらって書いてもらったほうがよっぽど有意義なのではないだろうか。私はそう思う。けれどそれは「私」の思っていることであり震災を経験していない私たちだからこそ語れる、語れることがあるのもまた事実なであり、私もそれを肯定している。そんな矛盾を抱きながら私は書いている。読むにあたってその事実を知ってほしい。

2 母の話

(1)はじめに

「悪魔が来た日」なんて一風変わった題名をつけるきっかけとなったのは母の話からである。

(2)地震発生当日

当時の母は20歳、住んでいた場所は舞子高校付近だった。前日の1月16日は特筆することもなくいつもと変わらない日常を過ごしていた。「いつも通りご飯を食べてお風呂に入って、いつもと変わらない明日が来ると思っていた」地震発生時、母は布団で寝ていた。突然今まで体験したことのない大きな衝撃に襲われ、母は布団を頭からかぶり、ベッドの縁に必死にしがみついた。このとき母は「悪魔が私を殺そうとしている」と思った。揺れが収まってから父(私からすると祖父)の「おーい、大丈夫か？」と家族の安否確認をしていた。この時姉が「地震？」とつぶやいていて母は漸く今さっきの出来事が地震によるものだと理解した。おそろおそろ布団から顔を出すと目の前にはテレビが転がり、布団の上には電気が落ちておりもしこれが頭に上だったら…と思うとゾツとした。幸い家族に大きな怪我はなかった。その後それからだれからともなく外に出た。すると近所の人たちもみなパジャマ姿で不安そうな顔して外に出てきていた。周りでは「無事?」「大丈夫?」など話し合っていた。そのあと一旦家に戻り、みんな割れた皿を集め、片付けた。片付け終わったら再び寝た。

(3)震災から一週間

暫く仕事は休みだったが、一週間すると仕事に行くようになった。しかし、途中までのバスや電車は止まっていたので少しの間は近くの会社の人と車に相乗りで通っていた。震災から少しして、三宮から御影までの高速バスが出た。母は、垂水から三宮までスニーカーを履いて、リュックサックを背負って歩き、三宮から電車に乗って仕事場に通った。とても印象的だったのは、みんな三宮をぞろぞろとスニーカーを履いて、リュックサックを背負って歩いていたことだった。当時はみんなスニーカーなんて履かず、ヒールを履いてリュックなんて背負わず仕事場に行っていたものだからとても異様な光景だと感じた。それに三宮からバス乗り場までの道のりに、たくさん居酒屋があり、それらのほとんどが潰れていた。そして、中で腐っていく食べ物の匂いが日に日に強くなっていて周りには、鼻が曲がるような悪臭が漂っていた。

住んでいた団地は、幸い潰れなかった(ヒビはいつている)避難所にはいかなかったが、水が出ないので舞子高校に行き水をもらいに通っていた。なかなかお風呂に入れなくて、垂水の銭湯に行っても行列ができていて、入るのに時間がかかった。やっと入れたと思ったら、風呂場は、赤だらけでお湯がちよろちよろしか出なくて嫌だった。

3 祖母の話

(1)はじめに

当時の祖母は専業主婦をしていた。夫、娘の三人暮らしだった。

(2)地震発生当日

前日周りでは特に何もなかったが、ニュースでどこかの海岸で海の魚(死骸含む)が大量に浮き上がってきていたことや雲の色が異様だったと聞いていた。地震が起きた後「あれは地震の前触れだったのか」と感じた。「今思うと単なる偶然かもしれない」と祖母は笑っていた。地震が起きた瞬間は何が何だか全く分からなかった。当時ベッドで寝ていたが、地震の揺れで目を覚ました。わけもわからぬままベッドに必死にしがみついた。揺れが収まり家

を見渡すと、悲惨な光景が広がっていた。食器棚は倒れ、テレビも倒れ、自分がここに住んでいた今までの景色はなくなっていた。外に出てみるとみんな不安そうに外をみていた。地面はひび割れ、ガスのにおいが充満して鼻が曲がりそうだった。近所の人との情報交換も終わり中に入ってテレビをつけてみると、そこには真っ赤な空の長田の街が映り込んだ。とても衝撃的だった。まるで映画を見ているようだとも思った。みんなまた余震が来るのではないかと不安になっていた。散乱した食器を片付けた後、夫(私からだ祖父)と娘(私からすると母)は食器を片付けるのを終わると寝始めたが、自分は全く寝られずにいた。それからのことは、詳しくは覚えていない。なぜなら親戚の家が灘にあり電話もつながらず、心配で仕方なかったからだ。翌日、交通はほぼ動いていないが、夫と二人でバイクに乗って灘へ向かった。ヘルメットを二人ともかぶってなかったが、今は緊急時、そんなものは関係ない。道はがたがたで乗り心地は最悪だった。親戚のもとへ向かっている最中、灘にある親戚の家は平屋なので潰れていないかととても不安だった。けれど、屋根が軽いからか平屋は潰れてはなかった。しかし、隣にある新築マンションが前に倒れ掛かってきており、バイクで通る際にととてもヒヤヒヤした。幸い親せきのみんなに酷い被害はなく、安心した。この時漸く肩の力が抜けた気がした。

(3) 一週間

電気は通っていたが、水もガスもなく、とても困った。せめてガスだけでもガスコンロを買いに行ったが、みんなも同じことを考えていたようで、売り切れていた。家にあるガスコンロ一つじゃキツイと思っていたが、夫が趣味でやっていた釣り道具の中に、お湯を沸かしたりできるものがあったととても重宝した。夫もどこか誇らしげだった。他にも釣り用の防寒具は暖かくあまり寒さで困ることはなかった。当時パートのアルバイトをしていたが震災の後連絡は来なかった。

(4) 1カ月

水がやっと届いて一安心した。水が来るまでは、舞子高校に来ている水の配給をもらってきたり、夫はほかの地区までバイクで向かい、水をもらってきたりしていた。当時は冬まただ中で手がかじかんでとても痛かった。水を運ぶ肉体労働よりもこっちのほうがつらかった。他にも風呂に入れずタオルで拭くだけだったり親戚のお風呂に入れてもらったり、垂水にある銭湯まで洗面器をもって行ったなど本当に大変だったので、水が来てからは、様々なことが楽になり生活も落ち着いた。

4 感想

震災の話は、小さいころ何度か聞いたことはあったが、詳しくあれはどうだったか、困ったことはなかったか、印象に残ったことは、など質問をしたことがなかった。子供心にも母や、皆を傷つけてしまうのではないかと遠慮していたし、何よりも聞くことが怖かったのだと思う。なので、震災当時の話を詳しく聞くのは初めてだった。そして、震災の話聞くことで相手の気を悪くしたり嫌な思いをしたりしないかととても心配していた。しかし、二人ともそんなことはなく、むしろ祖母は「今だから言うけど、とても良い教訓にもなったしいい経験でもあった。」とまで言っていた。私はその時とても驚いた。

震災の話を知っているとよく、「他のところの方が大変だから」とか「他より被害はひどくなかったから」など「他のより」という言葉をよく耳にした。当時住んでいた場所では、震度6弱ほど来た場所でもかなり被害があったはずだ。けれど、自分のことより他人のほうを気にかけていてとても印象的だった。近くに舞子高校があったが、配給には水以外いかず、バイクに乗って開いているスーパーまで買いに行った。「もっと困っている人がいるのに、貰うのは気が引ける」と。

話を聞いた二人とも「震災当時も今もまるでパニック映画を見ていたようだ」と言っていた。いつまでたっても現実味はわかかなかったと言っていて、私はとても印象に残っている。災害を経験していない世代が災害に現実味がないと思っても、理解できるが、災害を経験している人たちでも現実味がなかったという事実はとても驚いた。

二人の話を聞いて「家族の様子はどうだった？」と質問した時だった。母は「両親は地震後皆が不安がっている中、とても冷静だった」と言っており、祖母は「私はとても慌てていたが、夫と娘は肝が据わっていてとても怖がっている様子には見えなかった」と言っていた。家族でもこのように見えている景色が違うのだなど、とても興味深く思った。祖父にも話を聞きたかったが、もうこの世にいない。なぜもっと早くこういったことをやらなかったのか後悔した。

5 私のやりたいこと

私のやりたいこと。それは人を笑顔にすることだ。

私は昔から人を驚かせたり笑わせたりなにか一工夫して人を喜ばせるのが大好きだった。人を笑顔に

したいと強く思い始めたのは、多聞東中学校で吹奏楽部に入り、小椋先生(部活の顧問)に出会ったことだ。小椋先生は「神戸の森をつくろう」プロジェクトというのに参加していた。神戸の森をつくろうプロジェクトとは地福寺の和尚様が気仙沼の海辺に木を植えることで、津波を防ぐことや被災者に対しての鎮魂、被災体験を未来に伝える、ということを行おうとするものである。東日本大震災では、一本のケヤキの木にしがみつ、10人の方々が命を救われたという話がある。玉津中学校の人達はこの話を和尚様から聞いて、東日本大震災被災地支援活動としてこの取組みを支援することを決め、東北に「神戸の森をつくろう」プロジェクトを開始した。市内の学校等にも参加を呼びかけ、神戸市にこの取組みを広める活動を始めた。生徒達は、この活動を通じて被災地の方々へ「忘れていませんよ」というメッセージを発信し続けるとともに、木を植えることを通じて支援活動をつづけている。

小椋先生は多門東中学校に来る前は玉津中学校吹奏楽部の顧問で、生徒と一緒に東北に行ってチャリティーコンサートを開くなどしていた。そこで、多門東中学校吹奏楽部を筆頭に活動に参加することを決め、玉津中学校吹奏楽部の方々と一緒にチャリティーコンサートを開き、今も募金を集めて東北に送っている。

私が誰かを笑顔にさせたい、と明確に思ったのは中学2年の夏休み、東北に二泊三日の訪問をしたときだった。当時の私は、新幹線に揺られながら自分に何ができるのかどんなことが起こるのか期待と不安を持ちながら東北に向かった。東北に行き私達は、最初にお祭りに参加した。演奏が終わって屋台の食べ物を食べながらいろんな人から様々なお話を聞いた。「来てくれてありがとう」と言われたのがとても嬉しかったのを鮮明に覚えている。私自身、向こうの方が迷惑になっていないか不安だったからだ。その後地福寺のお寺の一部屋で寝袋に入ってみんなで雑魚寝した。

二日目は朝から地元の方々が、キュウリなどの新鮮な野菜を持ってきてくれた。とても美味しかった。持ってきてくれた方が「持ってきたかいがあった」と笑っていた。その後海辺近くの丘に行って植樹を行った。道の途中で家の基礎部分だけが残っているところがたくさんあり何とも言えない感情が込み上げた。植樹した後は海に向かって「忘れないよ」という多聞東中学校の生徒全員で東北の方々に励まそうと思い作った歌を歌った。その後は地福寺に戻り、階上小学校のみんなと一緒に「忘れないよ」「幸運運べるように」の歌を歌うなどして交流をした。その時に子供たちがすごく楽しそうに笑っていてなんだかこっちが励まされたような気がした。

最終日は朝早くに復興の龍を見に行った。復興の龍とは 岩井崎海岸にある松の木の一つであり、そしてそのあたり一帯で唯一津波に流されなかった木でもある。その木をある角度から見ると龍のように見えるので復興のシンボルとして残されていた。その後、地福寺でこの東北訪問最後のチャリティーコンサートを行った。演奏が終わり、楽器の片づけをしているとある人に「演奏してくれてありがとう、また来てね」と言ってくれた。その一言が凄く嬉しかった。この言葉を聞いて私は誰かの力になりたい、防災に関してもっと深く知りたいと思い、防災やボランティアを学んでいる環境防災科に入ろうと決意した。

6 将来の夢

私の将来の夢はユニバーサルスタジオジャパンのクルーになることだ。クルーは清掃員やエンジニア、販売員、ペイント、写真家、裏方など多く50もの分類に分けられるが、一番やりたいと思っているのはアトラクション担当のクルーだ。特にジョーズという船に乗っているクルーになりたいと思っている。きっかけは最近行った高校生最後の遠足で友達とジョーズに乗った時だった。クルーの人を見ていて私だったらこうするな、とか、こうしたいなとか、いろんなことを感じながら乗っていた。気が付くと、家に帰るころにはジョーズのクルーをやりたいという強い思いが生まれていた。

防災面での関わりはたくさんある。これから来るといわれている南海トラフは大阪に震度約6強、津波の高さは約3メートルと言われている。ユニバーサルスタジオジャパンは何メートルか土をかさまししているのであまり危険がないと言われている。しかし、災害は何があるかわからない、想定外が訪れるかもしれない。だから、日常的に災害をとらえていこうと思っている。地震が起きた時にできるだけお客様を不安にさせず、安全に避難誘導ができるクルーになりたい。勿論災害時でなくともお客様の身の安全を第一に考え、仕事をしていこうと思う。

7 西日本豪雨災害支援ボランティア

私は、今年、夏休みの上旬頃西日本豪雨災害支援ボランティアに参加した。西日本豪雨というのは、正式名称は、平成30年七月豪雨。死者227人行方不明者10人(平成30年度9月現在)と平成以降

の豪雨災害では史上最悪の死者数だといわれている災害である。被害が拡大した原因としては、真砂土層という花崗岩で構成されており、風化が進み、砂状・土状になっている層のことで水に弱い。そこに長期間大量の雨が降ったことによる、土砂災害の発生。そして台風7号と梅雨前線が重なったことと言われている。私が行こうと思った理由は単純で、被害を受けた方の助けになりたいと思ったからだ。生徒約35人前後、教師数人で被災地に向かった。最初、岡山県総社市の災害ボランティアセンターへ向かう予定だったが、総社市の災害ボランティアセンターの方から、人手が足りているので、倉敷市の災害ボランティアセンターのほうへ行ってください。と連絡がはいり、倉敷市の災害ボランティアセンターへ向かった。そして、そこでマッチングを行った。マッチングとは、誰かの助けがほしい人と誰かの助けになりたい人をつなぐことです。マッチングをした後、倉敷市真備町にあるサテライトでミーティングを行った。内容としては、体調管理はしっかり行うこと、近くにある簡易トイレの場所についてなど様々だった。そして、私たちは二つのグループに分かれて、活動を行った。私たちが活動した周辺は、近くに川があり西日本豪雨の影響で川が決壊し、住宅の多くが浸水してしまった場所だ。砂埃がずっと待っていて景色は良いとは言えなかった。速く元の景色に戻れるように頑張ろうと思った。

片方のグループは、ひたすら家財道具を運び出していた。よくわからない機械や冷蔵庫などとても大変そうだった。一番きついつと言っていたのは、畳の運び出し。畳は、水分をたっぷり吸っていて重く、カビも生えていたり腐っていたり、運び出すのに苦労したし、なにより匂いがきつく辛かった、ときいた。

私たちのグループは、壁の中の土を取り除き、床を掃除し、土を運び出す作業だった。竹材という竹を組んで出来ている壁で、竹を取り外して土を取り除いた。カッターで竹を組んでいる紐を取り外すとき、辛かった。そこに長年住んでいた方にとってその家は、思い出がいっぱいあるのだと思う。私がおの方の位置にいるとしたのなら、そんな光景は見たくないと思った。災害がとても恐ろしいものだと実感した。

印象に残ったのは、被災者の方とお話しした時だ。被災者の方が「こういった災害の現実を若い人に見てもらって、今後伝えていって教材になればいいな」ということをお話ししていてとても驚いた。被災地は教材ではない。環境防災科の私たちが最初に学ぶことだ。けれど被災者の方が教材にと言っていて、不思議な気持ちになった。そして、この語り継ぐを書くことに対し、少しだけ抵抗感がなくなった気がする。

今後、高校を卒業して、こういったボランティア活動をこれからもしていきたいと思っている。けれど本当にできるかはわからない。なのでこの活動で感じたこと、経験したことは忘れず家族や友達に伝えていきたいと思った。

「語り継ぐ」

熊地 翼

1 はじめに

僕は阪神・淡路大震災を直接経験していない。だが、経験していないからこそ親や先生などから聞いた話を周りの人に伝えることができる。自分が聞いた話を自分だけで留めるのではなく、その聞いた話を多くの人に知ってもらうことで初めて「語り継ぐ」ということになるのではないかと思う。この機会に多くの事を聞き学びたいと思った。

2 阪神・淡路大震災の概要

1995年1月17日5時46分に発生したマグニチュード7.2の明石海峡の淡路島よりを震源とする地震に伴う地震災害。死者6434名、負傷者4万名以上、住宅全半焼7000以上にのぼる。道路・鉄道・電気・水道・ガス・電話などの生活インフラは寸断されて広範囲において全く機能しなくなった。これ以降、都市型災害および、地震対策を語る上でライフラインの早期の復旧、活断層などへの配慮、建築工法上の留意点、仮設住宅、り災認定等の行政の対策などが注目されるようになった。もともと日本は地震大国であり、日本の大型建築物は大地震にも耐えられない構造であるとわかり、1981年には大幅な建築基準法の改正が行われた。しかし日本の建造物が安全であるとする報道に基づいた誤解をしている市民も多く1982年以降に建てられたビル・マンション・病院・鉄道の駅舎などでも広範囲にわたって倒壊・全半壊が多く見られた。

3 母の話

まず震災前の地震に対する考え方で、僕の母は、阪神・淡路大震災が起こった当時神戸市北区に住んでいた。母はそれまで地震を経験したことがなかった。そのため、これからこんなに甚大な被害の出る地震が起こることを全く考えていなかった。また地震の対策は全くしていなかった。震災当日の話は、震災が起きた時、時間は午前5時46分だったので寝室で寝ていた。すると突然大きな揺れが起きた。その揺れがすごく激しかったので目を覚ました。一階で寝ていたので揺れというより窓ガラスのガタガタの音やモノが動く音が長くすごく怖かったのを覚えている。トイレの水やガス、電気が止まりどうしたらいいか分からなかった。突然の激しい揺れにまず状況を把握しようとした。家の物はすごく散らかっていた。『とりあえずここから移動しよう』と祖父が言ったので車で母と祖父と祖母と弟は車の中で時間をつぶした。夜になっても余震がありお風呂に入っているときにも余震で浴槽のお湯が波のプールみたいだった。震災後の生活は、仕事をしていたのだが電車も湊川駅まで行けず長田駅で降り、そこからバスに乗り継ぎで行った覚えがある。違う日は新神戸から自転車に乗り新在家駅まで出勤した。たくさんの一軒家が潰れ横断歩道手前まで家屋が崩れていた。あちこちに目には見えない粉塵がまっているため常にマスクを着用していた。

4 叔母の話

震災前の地震の考え方は、関西には大きな地震が来ることはないと言われていたので全く来るなんて思っていなかった。そのため、地震を想定した準備(防災グッズや避難場所など)をしていなかった。次に震災当日の話で、外に出ると道路に亀裂が入っていてお店が傾いていた。公衆電話しかつながらなかったので外国人の方や遠くから来た人も長蛇の列ができていた。住んでいたマンションも傾いたのでお金と仏壇だけを持って元町から神戸駅までガラスの降ってくる中を歩いた。次に震災後の生活で被害の軽かった姉の家で避難した。余震で怖くて眠れなかった。亡くなった方がテレビで流れ、知り合いが出てきてショックだった。死者が増えるたびに、被害の大きさを実感して、また恐怖で眠れなかった。次に震災で困ったことは、自分の住んでいるマンションに帰れなかったこと。交通機関が止まっていて、両親や兄弟の安否がすぐに確認できなかったこと。お店が閉まっていて食べ物や生活用品など購入できないこと。会社が潰れて、仕事にいけないこと。今震災当時を振り返ってみて思うのは、地震への備えが大切だということ。そして、避難場所や防災グッズなどを常に確認して、家族や近隣の方などと話し合うのが大切だということ。

5 今後の災害と今までの災害

まだ僕は、阪神・淡路大震災も東日本大震災も熊本地震も実際に経験したことはない。しかし、6月18日に起きた地震は南海トラフ巨大地震が起こる前兆なのではないかと思っている。確実にそうとは言われてはいないが今南海トラフ巨大地震が起こる確率は70から80パーセントにもなっていることからしても今回の地震が前兆となっていると言っても過言ではない。東日本大震災の時僕は友達と公園で遊んでいた。すると母から一本の電話があった。今テレビですごいことになっているから帰ってきなさいと言われた。何事かと思って帰ってみると町の家ほとんどが流されている映像を見た。以前に阪神・淡路大震災の過去の映像は見たことがあったが、実際にその時間に東北地方は被害を受けていて衝撃を受けたし、とても怖かった。だからこそ今回の南海トラフ巨大地震ではできるだけ被害を少なくすることを徹底しなければいけない。防災教育という面でももっと全国で力を入れていかないといけないと思う。南海トラフ巨大地震が起きないでほしいとは思っても必ず来るので、怖いという気持ちはあるが、今はどれだけ被害を少なくできるかをしっかり考えて日々生活していきたい。

6 突然起きた災害の連続

2018年夏以降突然災害が連続して起こった。その一つ一つと僕が考えたことについて話していきたい。まずは、6月に起こった大阪北部地震だ。この地震では最大震度6弱を観測した。ガスは11万2千戸が供給停止になり復旧に7日間を要した。僕がこの地震を通して気になったのは、命より校則問題というもので、緊急地震速報で携帯が鳴ったことに対して確かに普通の時に携帯が鳴って指導されるのは当たり前だ。緊急の事態なので教師は事実確認をしっかりと、非常時になることをもしそれどもしてはいけないこととするなら、それをしっかりと伝えておくべきだろう。次に平成30年7月豪雨だ。この災害では西日本を中心に、台風7号と梅雨前線の影響で集中豪雨が起きた。豪雨災害として平成の中で死者が100人を超えたのは初めてだ。この地震では多くの課題が発見された。ライフラインが回復しない影響で病気の人の対処が遅れてしまうことであたりトイレの問題であたりだ。この災害で出た課題を二度と繰り返さないためにしっかりと議論をしなければならぬと考える。次は台風21号でこの地震で最も印象に残ったのは空港での被害だった。飛行機が飛ばないため訪日客や観光客の費用が莫大なものとなってしまった。この災害で思ったことは旅行に行ったときにもし災害が起きたらどう対応するかを考えておかなければならぬと思った。また、ニュースなどで台風がどのくらいの強さで来るといふ事前情報を耳にしたり目にしたりしていつもの台風と違う状況になると思った人が71.3%いたにも関わらず逃げないというのが今の状況である。その状況はとても危険なことでそれが続いてしまうと被害を受けてしまう方が増え死者が増えると僕は考える。最後に北海道胆振東部地震だ。この地震は震度7を記録し地震のマグニチュードは6.7であった。この地震で僕が気になったのはブラックアウトという現象だ。今までブラックアウトという言葉聞いたことがなく初めて耳にしたので、最初はどうなものなのか分からなかったが火力発電所が停止したことにより大規模な停電が起こったことをいうのだと分かった。全国で初めての事が起きたということでまだまだ起きていない災害があるのではないかと考えた。このように一定時期に複数の災害が連続して起こることは十分に起こりうることなので備えをしておくことが大切だ。

7 環境防災科

環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、いろいろなボランティアや消防学校体験入校などがあり、その多様な学び方があることにひかれたからだ。正直環境防災科に入るまでは全く防災について考えたことがなかった。だから最初は不安のほうが大きくて神戸に住んでいるのに阪神・淡路大震災の事も全く分かっていないことにも気づかされた。時間がたって少しずつ学んでいくうちに段々と分かるようになっていった。それというのも、授業の3分の1ほどが専門科目と呼ばれるもので正直驚いた。入学する前は、ボランティアなどに力を入れているのは知っていたが、授業にも力を入れているということに気づかされた。その授業1つ1つがすごく内容の濃いもので外部講師として様々な専門家の人が来てくださったり、阪神・淡路大震災の事について詳しく学んだりしてすごく知識が入っていくのを感じた。ボランティアで一番印象に残っているのは、熊本でのボランティアだ。初めて被災地に行くとボランティアするのは正直怖かった。僕が熊本に行くと何ができるのだろうとか何もできなかったらどうしようと思った。だが実際熊本に行ってみると雨のせいで予定は変更になったものの自分の中ではしっかり役に立てたのではないかと思った。初めて被災地に行ってみてすごく衝撃を受けた。壊れている家などを今まで実際に見たことがなかったので動揺してしまった。その夜ミーティングを皆でして、考えさせら

れることが多かった。でも、やるしかないと思った。この熊本ボランティアを通して人の役に立つことを改めてしたいと思うようになった。すごく貴重な経験ができたと思う。また、環境防災科で学んだ事はこれから先大学に進むにしても職業に就くとしても必ず生かす場面があると思う。防災を詳しく学んでいない人達は、地震が来てもたいしたことないだろうとか何の対策もしてなくても何とかかなるだろうと思っている人は大勢いると思う。それを僕は間違っていることだと教えていきたい。しっかり防災に関心をもってくれるような説明をしていきたい。次に授業について詳しく説明していきたい。まず「災害と人間」という授業では、外部講師の方がわざわざ舞子高校までおこし下さって、阪神・淡路大震災当時の事を語ってくださりすごく勉強になるし、知識も身につく。他にもいろいろな科目があり英語と防災を混ぜていたりして本当に多様だ。この環境防災科で学んだ事は一生大切にしたい。

8 防災を日常に

防災を日常と結び付けるのはすごく大切なことである。日ごろから災害が起きた時の行動を考えていれば被害は少なくなるだろう。環境防災科の皆は日ごろから備えている人が多いが、そうではない人達もそうしているかと言われれば、おそらく違うと思う。だからこそ、ここで日ごろの備えの大切さを伝えたい。まず、代表的なのは家具の固定をすることだ。阪神・淡路大震災では多くの方が倒れてきた家具の下敷きになり大怪我を負った。大震災が発生したら家具は必ず倒れるものと考えて転倒防止対策をしておく必要がある。次に食料であったり水分であったりも日ごろから備えていないと災害が起きた時に困る。また、非常用持ち出し袋を作っておくのも非常に大切なことだ。災害が起きた時にすぐに必要なものを持って外に避難する事ができるからだ。次に、避難経路や避難場所を確認しておくことも大切である。避難経路や避難場所を確認しておくことで災害が起こった時に焦らないで済む。日ごろからの防災を考えることの大切さは実際に経験してからでないとなんか分からないという意見もあるかもしれない。もちろんその意見は間違っていないのかもしれないが、命にかかわってくることだし、防災対策をしているとしていないとでは大きく被害の度合いが変わってくる。だから僕は防災対策を積極的に話していきたいと思う。もう一つこの地震で起きた問題がある。それは、SNSによるデマ報道だ。ありもしない情報を流し、それを見た人がデマの情報を信じてしまうとパニックに陥ってしまうことがある。その情報が真実であるかを見極めるために情報源を確認し確定で本当だと言える情報化を受け取るようにするべきだ。

9 自分の将来

僕は将来何になりたいかはまだ決まっていない。だが人の役に立てて自分の能力を最大限に生かせる仕事に就きたいと思っている。防災を今まで深く学んできて、改めて人の役に立つ仕事がしたいと思ったし、人から信頼されるような人になりたいと思っている。具体的には決まっていないが興味がある職業がある。それは銀行員だ。銀行員とは金融業界を代表する職業であり、日本ではだれもがよく知っている職業の一つだ。銀行員の仕事内容を一言でいうとお金に関する様々な取引をサポートすることだ。まず、一般の人が一番イメージしやすい業務として、「預金業務」がある。預金業務というのは銀行口座を通してお金を預けたり引き出したりするお客さんの預金を管理する業務だ。銀行の窓口やその後方で入出金の手続きをしているスタッフの姿を見たことがある人は多いだろう。さらに、銀行に欠かせない業務として、「貸付業務」がある。貸付業務は、その名の通り、資金を必要としている人にお金を融資する業務のことで、銀行はその利率をもらうことで利益を得ている。貸付業務は、企業が事業拡大のための運転資金を確保するときや、個人が住宅を建てるために大金を必要とするときに、その資金繰りの土台を支える役割を果たす。一方で、万が一にも融資先が倒産したり破産したりして資金を返せなくなってしまうと、銀行は大損害を被ることになる。そのため、融資にあたっては、金額や貸付の期間が妥当かどうかの判断を含めて、銀行員の調査や審査が大変重要な意味をもつ。融資を担当する銀行員は、とても責任の重い仕事をするようになるのだ。「預金業務」と「貸付業務」以外で、一般の人たちの生活に深くかかわっている銀行の仕事と言えば「為替業務」だ。為替業務というのは、債権や債務の決済をするために振り込みや送金を行う業務のことだ。よく知られているものとして、電気料金やガス料金、水道料金や電話料金など公共料金の口座振替がある。銀行の機能が発達して、こうした口座振替での決済が広く用いられることによって、利用者にとっては大きな利便性がもたらされたと言えることができるだろう。こうした業務以外にも、貸金庫の管理、手形の引き受けなど、銀行にはお金に関するさまざまな業務がある。(参考：<http://careergarden.jp/ginkouin/work/>) また、防災との関わりも多くある。こういった点から人から信頼されないと成立しない職業なので魅力を感じている。しかしまだ曖昧なと

ころがある。だから僕は大学に進学しようと思っている。大学に進学することによって本当のやりたいことをみつけることができると思うからだ。大学に進学することで親にはお金の面などで迷惑をかけると思うが、大学を出ていい職業について親孝行できればと思う。大学では防災活動にも力を入れていければと思う。僕が行こうと思っている大学はあまり防災とかかわりがない。だから僕が積極的に防災の事を詳しく学んでいない人たちに教えていければと思う。

10 防災との関わりを大切に

僕はこの環境防災科で学んだ事を生かして、社会に出た時に率先して動ける大人になりたいと思っている。今現代の世の中では地震があった時にパニックになってしまってどうしたらいいのかわからない状況に陥っている。そこを僕は率先して動きたいと思っている。それは簡単なことではない。しかし、一人まとめる人がいるだけで全く被害者数も変わってくると思うし、何よりも僕は一人でも多くの人の命を救いたいと思っている。そのために今は環境防災科で防災の事をしっかり学んでいきたい。

11 母や親戚の人に話を聞いてみて

親戚の人に話を聞くのを最初は戸惑った。なぜならその話を聞くことで嫌な思いをさせてしまうのではないとか嫌な体験を思い出させてしまうのではないかと思ったからだ。しかし、母や親戚は快く話してくれた。話を聞いてみてもやはり、当時は生きることに関心一杯だったのだろうなと思った。僕も熊本に行ったときに壊れている家を見たけどその時は本当に気持ちが沈んでしまったので母も同じ感覚だったのではないかと思う。その中で地震が起きた後はすごく苦しい生活を送っていたのだなと思った。それでも負けずに立て直してきた母や親戚たちはすごいと思う。先ほども言ったが今回聞いたことを自分だけで納めておくのはもったいないと思った。また叔母の話では知り合いの人がなくなってショックを受けたというものがあつたが、自分の知り合いが突然亡くなってしまったら本当に悲しいだろうし、考えられない事だなと思った。今回聞いた話を一生心にとめて、自分の命を大切に家族を大切にしていきたい。また、地震があった時のために非常用持ち出し袋などの防災グッズも用意しておきたい。

12 まとめ

今回語り継ぐという授業を通して自分の夢についても改めて考えることができたし、防災の重要性を改めて知ることのできた時間だった。災害は忘れたころにやってくるとよく言われる。今まで起きた災害の教訓などを語り継いでいかなければ風化してしまって、また同じような被害が出てしまう。その時にあの時もっとこうしておけばよかったなどは遅い。そうならないためにも語り継ぐということを大切にしていかなければいけないと思う。自分に必要な情報を見極めて行動することを心掛けていたただきたいと思う。

1 はじめに

私は2000年に生まれた。阪神・淡路大震災からは5年後になる。私は震災を経験していない。だから、当時の状況や心情を伝えることはできない。しかし、話を聞き語り継ぐことはできる。今回は母、叔父、叔母から話を聞くことができた。そして、その話を聞いて自分は、これからどのような行動をしていくのかを考えていきたい。

2 母の話

(1) 震災当日

両親は明石市に2人で暮らしていた。震災当時、私の母は激しい揺れと同時に目が覚めた。何が起きているのかわからないまま、ただただ自分の身体を守ることに必死だった。固定されていない家具は倒れ、その上に置いているものが落ちてきた。幸いにも母には怪我はなかった。揺れが収まり、体を起こしてリビングへ向かうと揺れによって割れた食器が散乱しており、とても歩ける状況ではなかった。このような状況から、地震だと知るまでは大きなトラックが家にぶつかってきたものだと思い込んでいた。現在の情報を確認しようと思っただけでもテレビがつかず、情報を収集することができなかった。ようやく自動車のラジオで地震だということを知った両親は、小学校へ避難しようとしていた。しかし、外に出て周りを見渡しても誰も避難する様子がなかったため、まず母方の祖父母の家が徒歩で行ける距離だったため、祖父母の安否確認にいった。その次に当時、加古川市に住んでいた父方の祖父母の安否確認へ自動車で行った。神戸市のように道路にひびはなく、交通規制もほとんどなかったため渋滞もなかった。両親とも被害はなく、とても安心した。

地震発生からまだ余震が続いていた。余震が来るたびに外に避難していた。余震に備えて土足で家の中に散乱している大切なものを整理したり、食器を片付けたりしていた。常に恐怖と隣り合わせで過ごしていた。

(2) 震災から

余震が続く中で、すぐに避難できるように家の中では常に土足で生活していた。ライフラインの被害は一時的だったため生きていくためには十分だった。食料は必要最低限あり、地震発生からとても困ったということはあまりなかった。だから、被害が大きかった友人に何が必要かを聞き、準備して父と持って行った。友人が必要としているものは、「水が止まり、使えないので水のいらぬシャンプーがほしい」とよく言われていたのを覚えている。

母の住んでいる地域ではほとんど不自由なことはなかった。母は「神戸と明石では被害の大きさのレベルが違う」と言っている。

3 叔父の話

(1) 震災当日

ドンと音が聞こえ強い揺れを感じた瞬間に目が覚めた。上下に強い揺れがあつてから横揺れに変わった。あまりにも恐ろしかったのでベッドで寝ていた叔父は、身動きができず、少しの間起き上がることができなかった。起き上がり部屋の中を見渡すと、部屋にあるものすべてが倒れていた。家は半壊にまで崩れていた。

叔父は漁師なので、仕事は早朝から始まる。とりあえず、仕事場に向かって仕事仲間の安否確認をしに行こうとしたが、部屋のドアが地震によってずれてしまい開けることができなかった。たまたま仕事仲間が助けに来てくれたおかげで部屋から出ることができた。それからようやく仕事場に向かうと機械が全部倒れ、作業できる様子ではなかった。船を見に行くと、船がひっくり返っていた。その光景を見て、これが現実だということを理解できなかった。

(2) 震災から

余震が続く中、夜中はトラウマで眠ることができなかった。淡路の方からドン、ドン、ドン、と3回鈍い音が聞こえて、この3回目の鈍い音で地震が来るのが分かる。この音が聞こえると動けなくなってしまっていた。余震がずっと来ていたのが一番恐かった。常に緊張した状態で生活するのは苦しいことだった。

叔父は叔父の両親と兄と漁師の仕事ではのりの養殖を営んでいる。地震発生からまともに仕事できる

環境ではなかった。しかし、放っておくとのが伸びていってしまい販売できなくなってしまうので、祖父の船を借りて次の日から仕事を再開した。船に乗り、海に出て行っているときに地震が来たときは、エンジンが止まって船が動いていない感覚になった。叔父は動けなくなるほどの地震が来るかもしれないという恐怖心の中でも、仕事は仕事と割りきっていたようだ。

叔父は私に教えてくれた。「漁師は海で仕事をする。だから、常に命の危険と隣り合わせの仕事や。けどな、地震はほんまに恐かった。死ぬかとも思った。人生でこれ以上に恐い体験をすることはもう考えられない。」と言っていた。

4 叔母の話

(1) 震災当日

叔母は当時、明石市に住んでいた。家は鉄筋コンクリートだったため壊れることはなかった。3階で寝ていた叔母は、部屋にある日本人形の入れ物が落ちて、ガラスも割れていた。そんな中、裸足のまま無我夢中でリビングまで降りて行った。揺れが収まるとすぐに叔母の祖父の部屋の家族全員が集まった。懐中電灯を片手に家の中や、近所を見て回った。そして叔母の母がすぐに元栓を閉めに行った。少し落ち着いてきてから屋上に行き、淡路の空を見ると、朱色で何か不気味で気持ち悪い感じがした。叔母の父が工場を経営していたので家が潰れてしまった近所の方々が大勢工場に避難しに来た。工場で数日間を過ごす人もいた。

(2) 震災から

叔母は神戸大丸の地下1階で働いていた。いつもは電車で仕事場まで向かっていたが、須磨までしか電車が通行できなかったため、須磨から歩いて仕事場まで行っていた。数時間かけて到着すると、地下1階は潰れてしまっていた。だから、製造をする工場への手伝いとしてポートアイランドへ歩いて向かった。これが1週間程度続いていた。このような生活が続いているのを叔母の父が知り、原動機付自転車を買ってくれた。これで毎日朝5時に出て8時に到着する。3時間かけてポートアイランドまで通勤していた。長時間同じ道を進んでいると辛くなった。そんな日が続く中で、ある日、被害を受けているにも関わらずブルーシートをかぶせて喫茶店を開いているのを見つけた。その喫茶店は被害を受けたたくさんの方が集まる場所になっていた。叔母は1か月間毎日、老夫婦2人で営むこの喫茶店に通い続けた。この場所が叔母の心の支えとなっていた。この喫茶店は仕事場までの道のりでちょうど中間地点ぐらいだった。叔母は喫茶店に寄って、コップ一杯を片手にいろいろな人たちと話をすることが楽しみに変わっていった。叔母は「名前も知らない人たちが優しく自分に接してくれて本当に嬉しくて幸せだった。」と言っていた。

(3) 喫茶店

叔母は自分がお世話になった喫茶店を結婚してから5年目になるときに訪れていた。その時には、老夫婦は病気で亡くなっていた。しかし、老夫婦の娘が後を継いでいた。老夫婦の娘は震災当時のことをよく聞かされていたらしい。老夫婦は偶然にも叔母のことをよく話していた。そのことを聞いた叔母は自然と涙が流れてきた。震災当時にお世話になったことを老夫婦に「感謝の気持ちを伝えたかった。それだけが心残りやわ。」と教えてくれた。その喫茶店には今でも当時被災した人たちがたくさん訪れている。このように震災をきっかけに今でもつながり続けている。

5 母、叔父、叔母の話を聞いて

今回は3人の経験者から当時の話を聞くことができよかった。話を聞いていくにつれて地震は恐ろしく、一瞬にして多くのものを奪ってしまうものだと改めて感じた。

私たちは震災を経験していない。そして、これからも私たちと同じ経験していない世代が増えていくことは誰もが分かっているだろう。阪神・淡路大震災を忘れさせないためには、教訓を語り継いでいくしかない。そうしなければ、また大災害が起こった時に同じことを繰り返してしまう。同じことが起こらないようにするために語り継ぐことがどれだけ大切なのかを私は再確認することができたし、今までたくさんの方に教えていただいた話や今回、聞くことができた話を絶対に無駄にはしたくない、無駄にできないと感じた。

6 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科を知ったきっかけは中学3年生の時だ。担任の先生に勧められて、私は初めて舞子高

校の環境防災科を知った。将来は消防士の仕事に就きたいと考えていた私は、絶対に環境防災科に入りたいと強く思った。

(2) ボランティア

環境防災科に入った4月に平成28年熊本地震が発生した。地震発生直後から環境防災科で募金活動をはじめ、周りの人たちの支えを受け、4泊5日で被災地支援活動に行くことになった。これは環境防災科13~15期生の全員が参加した。一人ひとりそれぞれの気持ち、覚悟を持って現地に向かったと思う。私たち15期生は、熊本市と熊本城の視察やボランティアセンターの片付け、最終日には荒井さんと一緒にお茶碗プロジェクトの活動をした。しかし、私は部活動の関係でお茶碗プロジェクトは活動できなかった。この活動の中で印象に残っていることが2つある。1つ目は、ボランティアセンターの片付けである。活動内容は荷物の整理や周りの草抜き、前日の豪雨によって濡れてしまったものを拭いたり、くまモンの土嚢袋を作ったりした。

2つ目は、熊本城と熊本市の視察をしたことだ。熊本城の周りを歩いた。崩れてしまった石垣、瓦が落ちてしまった熊本城の姿を見た。

熊本市では商店街を歩き、被災した人のニーズや地震発生当時の気持ちを聞いてまわった。その中で「いち早くシンボルである熊本城を修復してほしい」という声が多くあった。それを聞いた私は熊本の人たちにとって熊本城は心の支えになるものだと知った。自分の中で大切にしているものがなくなるということは辛く、苦しいことだと分かった。

私は熊本から帰ってきてから、自分は役に立つことができただろうかと考えていた。何かやりきれない気持ちでいっぱいだった。この気持ちを同じ部活動の先輩に相談した。そうすると先輩から「被災地で活動することだけがボランティアではない。自分たちにできることをすればいい。」と声をかけていただいた。募金活動の継続や被災地の状況などを知ってもらうことなどもボランティアだと知った。この経験から被災地を忘れないという強い気持ちが私の中で芽生えた。

(3) 3年間を通して

環境防災科の3年間で多くのことを経験し、学んできた。この3年間で防災と向き合ってきた時間は本当に貴重である。この3年間学んできたから言えることは、災害大国である日本で大切なのは防災教育だと考える。防災教育を学ぶ中で、人の温かさやつながりも学ぶことができる。この3年間で大切なことを学ぶことができたと思っている。

7 将来の夢

私の将来の夢は、消防官になることだ。消防官になるという夢を持つようになったきっかけは、自分のまちやたくさんの人たちを守りたいと思ったからだ。

2011年3月11日に東日本大震災が発生し、大きな被害を及ぼした。私は、当時小学校4年生だった。津波が家や車などをすべて流してしまう映像を見たときは、恐いなぐらいとしか思っていなかった。しかし、自然災害と常に隣り合わせの状況の中でも、目の前にいる救助者を助けるために休むことなく働き続ける姿に私は憧れを抱いた。それが、消防官になろうと初めて思ったきっかけである。

私が消防官になることができたならば、災害時の被害を0に近づけたい。被害を0に近づけていくためには、災害に強い地域、まちをつくる必要がある。そのためには、住民による自主防災活動をより促進、活性化し、地域やまちごとの防災体制を作り上げることが重要だと思う。自分たちの命やまちは自分たちの力で守ることができる防災体制を築きあげていく。私はそれに関わっていききたい。阪神・淡路大震災では救助された方々のほとんどが自助、共助によるものだった。自助と共助の重要性をしっかりと知ってもらいたい。知ってもらうことで事前にどのようなことをしておけばいいのか考えると思う。そして行動してもらおう。それが被害を少なくするための近道だと私は考えている。公助を待つのではなく、市民一人一人が自分の命は自分で守ることができるまち、周りで助け合えるまちを作りたい。

災害が発生した時の被害を0に近づけていく。これは消防機関だけではできない。災害時には市民との協力が必要になってくると思う。そのためには普段からのコミュニケーションを通して、信頼関係を築いていきたい。そしてお互い支え合える関係になれば復旧、復興といった事後の回復も早く行うことができると思う。だから、私はこれらのことを大事にして自分のまちやたくさんの人たちを守っていききたい。

8 最後に

私はこの3年間で様々な視点から多くの防災を学んできた。この3年間で学んできたことを今後にも十分に発揮していきたい。そして、より多くの人に語り継いでいきたいと思っている。震災のことを語り継ぐことも大切だが、私が環境防災科で学んできたことも語り継いでいきたい。ここで学んだことはどれも大切である。これらを語り継いでいくことによって身近の人たちの防災力を高めていくことができる。それから、その周りの人に語り継いでいってもらうことで、より多くの人たちに広がっていくと考えている。私自身、環境防災科に出会わなければ防災のことに関心を持っていなかっただろう。環境防災科を知るきっかけをくれた中学校の先生、環境防災科に入ってから関わってくださったすべての人に感謝している。だからこそ、私は環境防災科であるということに誇りを持ち、自分ができる「語り継ぐ」ということをこれからは震災を経験していない世代にしていく。そして、ずっと次の世代へと「語り継ぐ」が繰り返し行われていってほしい。

「語り継ぐ」

坂口 樹

1 はじめに

私は2000年生まれの18歳だ。1995年の阪神・淡路大震災の5年後に生まれたので、当時の震災を体験していない。阪神・淡路大震災から今年で24年がたつ今、若い世代のほとんどが当時の震災を体験していない。そんな中最近よく耳にするのは「風化」という言葉だ。震災から24年の月日が流れ、語り継ぐ人や機会が少なくなってきた。被災した方にとって一番つらいのは震災が風化し、忘れ去られることだ。二度とあの時と同じ被害を出さないために震災を経験していない私たちができることは経験した人から当時の体験したことを聞き、それを若い世代へと語り継いでいくことだ。そのため、私が3年間環境防災科で学んできたこと、震災当時について聞いたことを以下の文章に記し若い世代へと語り継いでいきたい。

2 概要

名称：兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）

日時：1995年1月17日午後5時46分

震源地：淡路島北部

震源の深さ：16 km

規模：マグニチュード7.3

最大震度：震度7

死者：6434名

行方不明者：3名

負傷者：43,792名

「阪神・淡路大震災について（内閣府 防災情報のページ）」より

3 父の話

(1) 地震発生の瞬間

私の父は当時、父と母と2歳の姉の三人暮らしで垂水区の5階建ての団地に住んでいた。午前5時46分、どんどん大きくなりこちらに迫ってくるような「ゴォー」という音で目を覚ました父は「何の音だろう」と気になり立ち上がろうとした瞬間、「ドンッ」という音と、下から突き上げられるような小刻みな縦揺れに思わず両手両ひざをつき、立てなくなった。突然揺れが横揺れに代わり、しばらくその揺れが長く続いた。揺れている間は何もすることができず、ただ揺れが収まるのを待つしかなかった。寝室には大きな家具を置いていなかったため、家具の下敷きになることはなかった。今までに体験したことのない揺れにパニックになりそうだった父であったが、横を見ると母と姉が寝ていたため、「おい！」と体を揺さぶり二人とも叩き起こした。

(2) 公園へ避難

冷静さを取り戻した父は、家には危険だと判断し、急いで母と姉を連れて着の身着のまま家の近くにある公園へ避難した。垂水はほとんどが山で地盤が固く、団地ということもあったので、一階部分が崩れたり、建物が傾いたりすることはなかったが所々にひびが入っていた。団地の敷地内にある公園に着くとそこには誰もいなかったため、近所の人々が心配になり不安になったが、少しするとぞろぞろとほかの人たちも避難してきた。公園の横にある小さな発電所からは、大きなサイレン音が鳴っていた。地震が起こったことは分かっていたが、それ以外に情報が全くなかったため、近所の人に聞いても、「停電でテレビつかへんし、携帯も繋がらへん」と言われ、ただ電気が回復し情報が入ってくるのを待つしかなかった。しばらくして電気が回復するとたくさんの情報が一気に入ってきた。「ガソリンスタンドが爆発したみたいやで！」「長田の方が家倒壊したり、火事になったりして大変なことになってるみたいやなあー」と今思うとありえない情報も入ってきていたのだが、今のように便利な機能を持つスマホのようなものはなく、そのときは自ら情報を入手する方法がなかったため、周りから入ってくる情報を信じるしかなかった。しかし、間違った情報を信じることは時に命を落とすことにもつながるが、運よく父の身には何も起こらなかった。

(3) 灰

公園へ避難し、しばらくたつと、空から黒い灰のようなものがたくさん降ってきた。長田のまちが広

範囲にわたって火事になっているということは知っていたので、すぐにその灰が長田のまちの焼けくずということが分かった。ドラマのようなことが目の前の現実で起こり、父はその時初めて、この世の終わりのようなものを感じた。

(4) 不幸中の幸い

父は当時、大きなコンテナを運ぶトラックの運転手をしていた。基本的に運搬が主な仕事だったので、阪神・淡路大震災のとき倒壊した阪神高速道路をよく利用していた。その日は定休日ではなく、たまたま会社が休みだったので、家で被災することとなった。なぜ休みだったのかは今でもわかっていない。もし仮に仕事が休みではなく、いつも通り出勤し、阪神高速道路を走っていたら、大けがを負っていたかもしれないし、最悪の場合死に至っていたかもしれない。高速道路が倒れるほどの地震だった日にたまたま仕事が休みになったのは、不幸中の幸いだった。

4 震災後思うこと

(1) 復興

震災を経験していないとはいえ、震災当時の動画や写真を見て、被害状況の大きさが伝わってきた。当時の被害状況からみて、今の神戸はものすごく復興していると思う。しかし、中にはまだまだ復興していないと思っている人もいて、人それぞれ感じていることに違いがあると思う。一つ言えるのは、震災から時間がたつにつれて少しずつではあるが、復興し続けている。震災前の姿に戻ることはないので、一日一日確実に良い方向へと変化していくことが、阪神・淡路大震災と同じような被害を出さないまちづくりにつながると思った。

(2) これからの生活

地震は頻繁に起こるものではないし、「自分が生きている間は起きないだろう」と思っている人も少なくはないだろう。だが、災害大国日本に住んでいる限り生きている間に一度は地震を体験するだろう。地震は突然やってくる。大きな地震が来てもその災害が忘れ去られ、人々が油断している時に襲い掛かってくるので、教訓を生かそうにもそう思っている人が少数で、同じような被害が出てしまう。だからといって、生活する中で常に災害に警戒するということは出来ない。しかし、災害に対して準備をすることは出来る。例えば、災害用持ち出し袋を用意することや、家族と避難した後に合流する場所を決めておくことだ。これからはいつ災害が起きても良いように準備をしておくことが大切になってくる。

(3) 防災訓練について

日本にいれば一度はみな防災訓練をしていると思う。小さい頃からしっかり防災教育をしていれば、災害が起きても、勝手に体が行動に移すことができるようになると思う。父も小さい頃から避難訓練をしていたので、地震が収まったあと、建物の中には危険だと判断し、公園に避難することができた。

5 環境防災科で学んだこと

(1) 自分たちにできること

私は3年間環境防災科として、防災に関することを専門的にたくさん学んできた。だから、一般の人たちよりは、地震が来た時の対処法や、その後の心のケアの仕方などの知識はある。ただ、唯一私たちに足りないことは、震災を体験していないことだ。いくら防災や減災のことについて勉強したとしても、実際に被災した時にバイアスなどによって習った通りに行動できるとは限らない。環境防災科の先輩で、被災地にボランティア活動をしに行った方がいた。地震が起きて、揺れた直後は習った通りの行動が出来たが、揺れが収まった後どうすればよいか分からなかったという。

ボランティア活動をしてよく聞かれることは、「阪神・淡路大震災についてどう思いますか？」という質問だ。当時、私たちは生まれていないので、震災を体験しておらず、当然震災当時の地震の揺れや怖さはわからないし、被災した人の気持ちもわからない。しかし、3年間防災について専門的に学んできた。そこで学んだことは、防災の知識を私たちの物だけにするのではなく、多くの周りの人に伝えることだ。今まで学んできた難しい専門的なことだけ教えるのではなく、どんな些細なことでもいい、今まで学んできたことを一人でも多くの人に知ってもらうことが、当時の震災を経験していない私たちができることだ。

6 夢と防災

(1) 将来の自分

私は、小さい頃から人の役に立つ職業に就きたいと思っていた。その中でも特になりたいと思ってい

たのは、警察官だ。小学校低学年までは、具体的な理由はなく、あの出来事が起こるまではただかっこいいからという理由で警察官になりたいと思っていた。本気で警察官になりたいと思ったきっかけは、東日本大震災だ。東日本大震災では何人も警察官が命を落としたが、その多くが避難誘導の最中だった。津波がすぐそこまで迫っているのにもかかわらず、一人でも多くの命を救うために、最後まで任務をやり遂げた警察官にあこがれを持った。警察官の中でも、私は白バイ隊員になりたいと思っている。理由は、白バイ隊員になることができれば、事故現場はもちろん災害時にも迅速に行動することができ、一分一秒でも早く対応することで多くの命を救うことができると考えたからだ。しかし、環境防災科へ入学し災害に関することについて学んでいくうちに、阪神・淡路大震災では家屋の倒壊などによって道路がふさがれ、警察や消防などの地方公共団体が救助に行けなかったという事実を知り、たとえ警察官になれたとしても災害時には活躍できないと思うと、とてもつらかった。その時、災害時に人の役に立てられないのであれば警察官になる意味がないと思い、初めて警察官の夢をあきらめようと思ったが、学校の授業で、将来の夢について調べる機会があり、調べ学習をしているときに、災害時用の白バイがあることを知った。その白バイは、オフロードバイクを改造したもので、たとえ地震で電柱が倒れたり、家が倒壊し瓦礫で道が塞がったりしても、災害現場へと急行できる。また、この白バイにはカメラが搭載されており、災害現場へ行ったときに、撮影している映像がそのまま本部へと送られ、被災地の被害状況を確認できるようになっている。この事実を知ったとき、私はもう一度警察官になることを決心した。

今まで白バイ隊員の仕事は地域のパトロールや違反者を取り締まることだけだと思っていたが、自分の将来と防災を結び付けて調べることで、災害時にも白バイはとても役に立つことが分かった。阪神淡路大震災のときのように、地方公共団体による救助が遅れることは二度と起こってはならない。そのため私は白バイ隊員になり、災害時でも迅速に行動し、都市部だけでなく山間部の田舎や普通車両では通れなくなり道路が遮断された地域も支援し、一人でも多くの命を救えるような人間になりたい。

7 熊本被災地支援ボランティア

高校に入学し、まだ右も左もわからない状態の時に熊本地震は起こった。そして、突然被災地へボランティア活動をしに行くことになった。まだ入学して2ヵ月しかたっておらず、防災についての知識もなく、詳しい情報もテレビからしか入手できなかったのも、正直不安でしかなかった。

私がさせていただいた活動は主に3つ。まず1つ目は、NPO法人ひまわりの夢企画のお茶碗プロジェクトのお手伝いをさせていただいた。被災者の方の役に立とうと一生懸命活動をした。すると、熊本の方に思いが届いたのか、「ありがとう」や「孫が来てくれたみたいでうれしいわ〜」などの声をいただき、私たちが逆に元気をもらった。

2つ目はボランティアセンターの片付けだ。ボランティア団体の方たちとともに活動をし、そこではボランティア活動をした人にしかわからない経験を語っていただいたりして、ボランティアをする人たちでコミュニケーションをとることで、ボランティアをする人々の間で絆が深まっていくのが分かった。どのボランティア団体の方たちを見ても、「少しでも誰かの役に立つのだ」というこころざしは同じだった。

最後3つ目は熊本市内の視察だ。熊本城の石段は崩れており、その周りにはビルにはひびが入っていて、いつ倒壊してもおかしくはない状態だった。そのまま商店街へ向かうこととなり、その時は阪神・淡路大震災の時のように人々は混乱に陥り、活気がない状態をイメージしていた。しかし、商店街へ入るとイメージとは真逆の姿がそこにあった。熊本の方は被災してすぐで、つらい思いをされている方が多いはずなのに、いつも通りの生活を送っているように見えた。私は観光に来ているのかと勘違いするくらい、驚きを隠せなかった。

熊本へボランティア活動をさせていただいて、こちら側が元気をもらう場面がいくつもあった。熊本の方は自分の生活のことで精いっぱいにもかかわらず、私たち高校生を迎え入れてくれた。熊本の方たちと会話をする中で、熊本のよい部分を見つけることができ、熊本の印象ががらりと変わった。私は熊本がとても好きになった。

8 西日本豪雨災害（平成30年豪雨災害）ボランティア

私は8月9日に岡山県真備町にボランティアで訪れた。2018年（平成30年）6月28日から7月8日にかけて、台風7号および梅雨前線の影響による集中豪雨で、西日本を中心に全国的に広い範囲で大きな被害が出た。岡山県では、バックウォーター現象という川の合流地点で片方の水位が高くなることで、

もう片方の川が流れにくくなり、決壊してしまう現象が起きた。現地へ入るとまず目に入ったのは、瓦礫の山だ。高速道路の下に数百mにわたり瓦礫の山が積まれていた。瓦礫の撤去が追い付かず、この前まで使っており、思い出が詰まった家具などが置かれていると思うと悲しい気持ちになった。

作業の内容としては、水につかって使えなくなった家具を外に出し、トラックに積むという作業だった。被災者の家に着くと、家の前の道路が砂だらけになっていた。また、2階の屋根に近い部分に泥で線が引かれていた。豪雨により水位がそこまで来たという証拠だった。自分の家に置き換えて考えてみると怖くなった。家の庭からトラックまでの距離は短かったが、決して楽な作業ではなかった。冷蔵庫などの家電を運ぶのに体力を使ったのは当然だったが、一番印象に残っているのは畳を運んだ時だ。当然一人では運ぶことのできない重さだったので4、5人で運んだが、つらかったのは匂いだった。泥水につき、湿っていたので腐敗臭がしていた。「くさい」と思わず声に出そうなくらい、においがきつかったが、被災者の前では言えずに皆が我慢して作業をした。8月ということもあり、体力面で心配な部分があったが、皆で協力することで少しでも役に立つことができたと思う。しかし中にはやりきれない思いの生徒もいた。それは、作業終了の時間が来ても、家の中にはまだ瓦礫があったからだ。ボランティアをする中で、そういう気持ちになることは仕方がないが、少しでも被災者の方が喜んでもらえるのであれば、それでも立派なことだと思う。

9 感想

今回この「語り継ぐ」を作成するにあたって、家族に震災当時のことについて話してもらうことは、正直恥ずかしい部分があった。しかし、今では聞いてよかったと思う。そして、話を聞くことで、父の防災意識が思ったよりも高いことが分かり、安心できた。私が普段学んでいることを話す機会がなかったのだが、この「語り継ぐ」のおかげで自分が学んできたことを共有することができた。こうやって身近な人に防災を広げていくことで、一人でも多くの命を救うことにつながるということが実感できた。これまでの災害の教訓を生かし、これから来る災害による被害を少しでも少なくするには、「語り継ぐ」のが一番だと思う。将来、自分の周りの人が被害にあわないためにも、私は阪神・淡路大震災を語り継いでいきたい。

震災当時の「想い」 現在の「想い」 つなぐ「想い」

佐藤 峻輔

1 はじめに

1995年1月17日、神戸を中心に巨大な地震が襲った。その時の様子や感覚は私にはわからない、知らない。そのような世代が次々と増えていく。しかし、風化させてはならない。たかが一人の18歳。一人では何もできない。しかし、広めていくことができる。だから、母、先生の経験談を「語り継ぐ」。

2 母の話

(1) 1995年 1月17日 早朝 神戸市垂水区

母は当時、勤務先が遠いため起床したところだった。寝ぼけ眼をこすり、布団を払いのけようとしたとき、地震が発生した。咄嗟に布団をかぶり地震が収まるのを待った。その後2階の寝室から1階に降りると、食器類が割れ、散乱し、足の踏み場がない状況だった。玄関前に置いている客用スリッパを使い用意を済ませ、家を出た。幸い、被害が少ない地域だったためけがをすることはなかった。

(2) 職場で

母の勤務先は、明石方面のコープだった。そこにつくと、陳列棚からは、棚上げした商品が倒れ、床に散乱していた。開店できる状況ではなく、数日間休業を店長に言い渡され、帰宅。数日後、職場では、棚から落ちた商品を袋に詰め、1,500~2,000円の量をまとめて1,000円で売るといい、袋詰めを従業員全員で行った。

(3) ライフライン

被害が少ないといえども、ライフラインは止まる。そのことについて聞くと「とくには、生活に支障はなかったけど、強いてあげるならお風呂は困ったね。親戚の家に行ってお風呂を借りて帰ることを一週間に一回ぐらいでしていたかな。」親戚の家は加古川で自宅からは、片道1時間半かけていっていた。自分と両親の三人で行っていた。「この時に、水道や電気、ガスが必須やとすごい思った。」と語ってくれた。

3 先生の話

(1) 1995年 1月17日 早朝 西宮市

当時、25歳で寝ていた。コープに住んでおり、地震の経験は今まであったはずだが、揺れで建物の2階部分が折れる勢いの地震だった。怖い、恐怖がとても強かった。幸い、実家と自分の家はずぶれず、食器が倒れてくるのみだった。実家が家から自転車で5分のところにあった。まずは、地震発生後、実家に電話を掛けた。すぐにつながり母親に「すぐに扉を開けなさい。」と言われ、ドアを開けた。そして、実家に仕事の用意を済ませ向かった。出勤するために阪神電車の最寄りの武庫川駅まで自転車で向かった。しかし、列車は運行していなかったため、自転車で出勤することを決めた。実家に行ってから武庫川駅に向かうまでの記憶が飛んでいた。それほど、地震の大きさと衝撃が大きかった。

(2) 職場まで

職場に行くまで、道路では亀裂がとても多かった。そして、持ち上げて避けながら走っていたが、今津あたりで行けなくなった。また、行く道中で建物が崩れている光景を目の当たりにした。

(3) 職場で

そして、勤務先の学校について。どの先生よりも早く着いた。その時には、近所の高層マンションの住民とみられる方が学校に避難してきていた。当時、若かったので、災害時の学校の知識がなかった。それは、周りの先生も同じだった。学校に避難された方に入ってもらうのか。また、どこに入ってもらうのが全く分からなかった。しかし、学校が建設された場所は、埋め立て地であったため、液状化の心配があり、避難所としては、運営できなかった。避難されてきた方にも、ほかの避難所に行ってもらった。

そのあと2番目にきた化学の先生と一緒に校内を回った。事務室や職員室では、書類などでいっぱいになり、「机がここにあるはずなのに。」と思うほどに散乱していた。また、化学の先生は実験で使う薬品が心配になり、早くに来たので、化学室へ向かった。幸いなことに化学室は、大丈夫だった。また、校舎をつなぐ渡り廊下は校舎と1mの間が空いていた。これを見て、改めて「すごい大変なことが起こったのだ。」と思った。しかし、家に帰ってテレビをつけるとこんなものは序の口だと感じた。長田の大火事を見た時がとても大変だったのだと気づいた。その時に、「想像力が足りない。」そう強く感じた。

そして、埋め立て地だったため学校は、避難所でなく、支援物資の倉庫となった。一度きた支援物資を他の避難所へ再分配する拠点である。分配は地域の自治体が行っていた。学校は、20 日前後で再開できた。避難所になっていないため、学校は生徒が登校できれば再開は可能だった。しかし、交通網が復旧しなかったため、バスや電車が少なく、歩いてきている生徒もいた。また、被災時に遠方へ引っ越し、そのまま転校していた生徒もいた。学校再開前は、生徒の登校確認を行っていた。震災で亡くなった先生の代わりにクラスを持った。登校確認の電話を行っていると、とある生徒から「先生。明日もかけるから出てください。」という言葉もらった。生徒たちは、亡くなった子もいるけど、友達と会うことで元気になった子も多かった。

(4) 先生が感じたこと

先生は「学校は、生徒はいやいや言いながら来ているけど、毎日どこかそこに行けばいい場所があること。それこそが幸せなんだ。」と語ってくれた。また、「失ったときに初めて行っていた場所が意味のある場所だ。という重みを知る。」と語ってくれた。

そして、震災当時にとっても悲しくなったことがあった。大阪に行った時である。親戚の家が大阪にあり、被災してから一回、大阪に行ったのである。兵庫と大阪は、隣同士の県と府だ。そして地震も経験していた。しかし、普通だった。あまりにも普通すぎたのである。兵庫では、ライフラインが止まり、避難生活を余儀なくされている方がたくさんいた。しかし、大阪は以前と変わらない生活を送っていた。それを見るとなぜか悲しくなったのだ。

また、自然を見て悲しくなる時もあった。1 月に起きた阪神・淡路大震災。刻々と時間が過ぎていき春になった。そして桜が咲いているのを見て、「自然は強い。この花は咲くが、あの子はもういない。」と思い、悲しくなった。

(5) 今でも心掛けていること

「寝ている部屋には何も置かない。イレギュラーはあるが、これは何があっても守るようにしている。」と語った。周りの方や、生徒で亡くなった方は、圧死で亡くなるが多かった。実際、死因の 1 位は窒息、圧迫死である。そのため「備蓄はしてあるけど、身を守ることがまず一番。」と語った。

4 環境防災科で

(1) 入るまで

私が防災に強く向き合ったのは、2011 年に発生した東日本大震災である。

小学生の頃の私は、避難訓練や、放水訓練などの防災訓練を盛んに行っている地域で生まれ、育った。そのときは、こんなにめんどくさいことを毎年、毎年…と考えていた。その考え方が一気に変わった出来事がある。

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、東北地方を中心に M9.0 の巨大地震が発生。当時、11 歳だった私は、塾から帰宅するとテレビには忘れもしない、否、忘れられない光景がそこにはあった。端には日本地図、ひっきりなしに流れる警報音、災害用伝言ダイヤルの放送、流れてきた映像すべてが、まさしく「この世の終わり」そのものだった。化学工場が爆発し火災。今までは過去の映像（阪神・淡路大震災）を見るだけだった。しかし、リアルタイムで起こっているとすると話は違う。ただ呆然となった。そして、津波の映像が流れてきた。黒く濁った液体が車や建物、人、生き物、町のすべてを奪っていく。その光景を目撃し、自分の無力さ、人間の虚しさ、はかなさを深く感じた。この無力さを胸に今の自分を変え、自分には何ができるのか、自分の日ごろからの行いはよいのか、常に防災意識が高いまちで、高齢化が進みつつあるまちだからこそ、自分が他の人の経験や苦悩、様々なことを広げていかなければならないと考えるようになった。

そして、2015 年。受験が迫り、焦っていた。その中、自分の 1 つ上の先輩が「環境防災科は、防災と強く向き合えるところだ。」とおっしゃった。そこで様々な勉強や体験談、体験ができることを知った。自分の考え、内容が一番にでき、満足でき、より自由に高みを目指せる学科を知り、すぐさまことを調べた。

(2) 入って

私は、この科に入って様々な苦悩を繰り返してきた。特に一番大きかったものは、「熊本地震」だった。入学して、一週間がたち、高校生活に慣れてきたとこだった。朝起きると「熊本で最大震度 7 の地震を観測しました。」というニュース、あまりにも早すぎる。私が最初に抱いた感情だった。東日本や中越、四川に行ったという経歴は知っていたが、入学からすぐ、まだ環境防災科の「か」の字も習っていない時だ。その時の募金活動もよくわかっていない状況でなおかつ、熊本の概要までもわからない自分に情

けなさと同時に、恥ずかしさを感じた。それから2か月後、熊本にボランティアに行った。現地では、地震で地盤が緩んでおり、豪雨も重なり土砂災害警戒情報が熊本行きのバスでひっきりなしになった。その時、恐怖をととも感じた。熊本、益城町に入ると、景色が一変した。建物はすべて崩れ、1階がない建物だらけ。亀裂の入った家から出てくる人。建物らしきものがあつた敷地。寸断された道路。そこには、街で会った面影はどこにも見当たらなかった。「自分には何もできないのか。何もできないまま終わるのか。」帰ってから、今でもその苦悩が大きい。しかし、話し合える友人、先生方がいて今の私がいる。「このままでは終われない。」そう言った使命感にかられ、様々な支援の形を考え、行ってきたいと思う。

5 平成30年7月豪雨

私は、8月9日にボランティアで岡山県の真備町を訪れた。「水害」に触れることがあまりなく、実際に水害にあった地域に行くことが初めてだった。地区に入り、何も無い土地に様々なものが廃棄されていた。そこでは、木材だけでなく、機械、車も見かけられた。この量のものが雨にさらされ、水につかっただけでなく、家財道具を収集する車に乗せる作業を行った。様々な思い出の品が家の外に出ており、胸が張り裂ける思いだった。莫産や家具、家電用品、ガラス破片など散らばったものを車に積んでいった。一息ついたとき、隣のお宅を見ると、木々の上に木の幹が横たわっていた。「これはどうしたのですか」と聞くと「この豪雨でここまで上がってきたんだ」と語ってくれた。その後、その方のお宅には、二階の窓のすぐ下に線が入っていた。「そこまで水位が来たんだ」と。その時、水害の恐ろしさがようやくわかった気がした。約5時間の活動を行ったが、まだ完了せず、全体の10分の1に満たない活動だった。まだまだ動いていかなければいけないと感じ、継続していく。現地で感じたことを伝えていき必要があると感じた。

6 将来の夢と防災

(1) きっかけ

私は、東京ディズニーリゾートで働くキャストになりたいと思っている。私の家族は遊園地が大好きで年に一回以上は、遠出し「東京ディズニーリゾート」に行っていた。「自分の好きな場所で働けたらいいな。」と考えていた。しかし、さらに、この思いを突き動かしたのは、「東日本大震災」だった。戦慄の光景を見て1か月が過ぎようとしたころ、私の目には驚きのニュースが入ってきた。「東京ディズニーシーの神対応!」という見出しだった。ずっと好きだったディズニーの行っていることを確認したいなと思いついた。地震で震えているお客に対し、常に場内アナウンスとキャストが接する。また、段ボールやビニール袋などを裏から持ち出し、防寒に。と配布。また、お土産で販売されている菓子類を配ったり、ぬいぐるみを防災頭巾代わりに配布したり、など様々な対応を行っていた。当時、災害の光景に圧倒され、悲しく思う気持ちがあったが、この対応を見て、自分が行いたいことが確定した。

(2) 防災との関係性

こういった対応をとったディズニーシー。実は、このような対応をとれたのは様々な要因があった。その一つは、防災訓練である。年に1回、多くても学期に1回であることを当たり前だと思っている方が多いと思う。テーマパークではなおさら、あまり防災訓練を行っているイメージはないと思う。実際、私もそうだった。しかし、とある記事を目にした。「東京ディズニーシーは2日に1回防災訓練を行っている。」という記事だ。キャスト全員が真剣に取り組んでいるが、不安感をあおらないため、笑顔を絶やさないと忘れず行っている。このことで企業としては最大級で防災に取り組んでいると私は考えた。また、「逃げ遅れゲスト」という看板を立て、災害時に起こりそうなことを想定し、実践して行っている。研修もきっちり行われOJTの訓練も欠かさなかった。マニュアルはあるが、顧客のニーズは刻々と変わっていく。ましては災害ではなおさらだ。

しかし、彼らは、「会社にとって大切にすべきことと優先順位『SCSE』」という考え方がここにはある。これは、Safety, Courtesy, Show, Efficiency (安全、礼儀正しさ、ショー、効率)の頭文字をとったものだ。優先順位には、ショーよりも安全が来ている。これはその優先順位に沿った対応を全員が行った結果であるといえる。上からの指示を仰がず、判断が間違っていれば先輩が正す、よければ実行し、のちに褒めてもらえる。このような企業だからこそこのような対応ができたのだと考える。つまり、東京ディズニーリゾートにとって防災とは、常にゲストのことを考えるためには絶対的に必要なものである。だからこそ、自分が聞き、知識として蓄えた部分と、自分の経験を生かしてより安全なパークにしていきたいと思う。

7 感想

私は、母と先生の話聞いて、経験した人には衝撃が大きく、鮮明に覚えているのだと感じた。そして、母がこんなにも真剣に語ってくれたことがなく、照れ臭かった。節目では語ってくれるが真剣に聞いて、真剣に話すことは最初で最後かもしれない。母は被災の度合いも低かったが、経験したことのない経験をたくさん語ってくれた。自分の住んでいる地域に大きな災害があり、経験をした人から聞く機会をもらえ、発信できる機会までもらえ恵まれていると感じた。また、学校の先生の話聞き、近所では被災の度合いはまだ少ない方だが芦屋や西ノ宮の話聞けて、先生と話す機会も少ないと思う。「近畿や神戸なんかで地震は起きないだろう。」と考えていた母は、地震は起こるものだという考えが変わった。また、経験していないことが地震の怖さを知らないと関連付けなくてよいと思った。先生の話聞くだけで、身の回りのものと置き換えると悲惨であると感じた。地震を知らない。経験したことのない年代の人が徐々に増え、神戸から、阪神・淡路大震災を経験している人がいなくなる時代がいつか必ず来る。そうであっても、地震が起きたことを忘れないように伝えていき、後世につなぐことが必須だと感じた。

8 最後に

阪神・淡路大震災から24年。様々な風景、建物、人。すべてが被害当初よりもよくなり、明るくなり、新たな神戸を作ろうとしている。県政150周年を迎え、神戸港も開港120年がたった。新しくなるということはよい点もある。それと同時に悪い点も帯びている。なぜなら、震災の跡がなく、忘れ去られるかもしれないという点だ。忘れ去られることほど恐ろしいものはない。日本は地震大国だ。頻繁に起こっており、最近では、南海トラフ巨大地震が想定されて、特集を組まれている。しかし、この想定はどこから出ているのか。それは、過去の地震だ。過去があるから、未来がある。つらい過去がたくさん日本にはある。特に災害で亡くなる方は昔から多い。その経験があるからこそ私たちが生きている。それを決して忘れてはならない。そのために、環境防災科があると私は考える。だからこそ、自分には忘れさせてはならない。風化させてはならないという使命がある。この「語り継ぐ」を作成し、様々な方に読んでもらいたい。経験していない人には、当時の恐ろしさや葛藤、勇気を与えることなどその時にしかわからないものを読んで感じてほしいと思う。

また、自分たちも知った気になってはいけない。社会の中では必ず「見えない点」がある。それを学んできたことで十分に力を発揮し、応用し、被災地から未災地へ。経験している人から経験していない人へ。つなぐ。これができてこそその本当の意味で「語り継ぐ」になるだろう。

「語り継ぐ」

志方 宥紀

1 はじめに

1995年1月17日5時46分52秒。まだ夜明け前の大地を揺らし、6434人の命を奪った未曾有の大災害から24年の歳月がたった。この震災を受けて、様々な分野で研究が進み、地震対策がとられ、法律が制定された。また、地域コミュニティの大切さを再認識し、日本社会にボランティア活動を根付かせていく契機となった。

今、どれだけの人が阪神・淡路大震災のことを覚えているのだろうか。もう覚えているという表現すら適切ではないのかもしれない。現在、兵庫県内で阪神・淡路大震災を体験していない者は4分の1いるといわれている。今後この割合はどんどん増えて、被災者と未災者の立場は逆転するのだろう。もし、阪神・淡路大震災を体験した人がいなくなってしまうたら、被災した神戸の話有谁が語り継いでいくのだろうか。きっと、先人の残したビデオや写真、絵や書記に残された情報が震災を伝える手段となってくるだろう。だが、それだけでいいのだろうか。もちろん、被災者の生の声というのは、ものすごいパワーを秘めていて、私たちを突き動かす「なにか」を持っている。だから、被災者の生の声をきけるビデオや写真、絵や書記などの媒体は、震災を語り継いでいくうえで欠かせないものだ。しかし、私はそれだけでなく、震災を伝える未災者の語り部が必要だと思っている。画面上の面識のない人からの言葉より、目の前の友達の言葉のほうがすんなり耳に入ってくるからだ。

小学生の頃、親の被災体験をインタビューするという宿題が嫌いだった。友達の悠々と両親の被災体験を話している姿を見ることも好きではなかった。両親が被災していないことが恥ずかしかった。いつしか、阪神・淡路大震災を体験していない自分も許せなくなっていった。被災者の震災時の話を聞くと悲しくて苦しいのに、その一方で、被災者に一線ひかれたように感じていた。この「語り継ぐ」作成でも私の嫌な感情が沸き上がってきた。だから、どうしても文章に起こせなかった。それでも書き記しているのは、私のように、未災者であることに罪悪感を抱いている人がいると思ったからだ。環境防災科の卒業生のお話を伺ったのも、被災・未災に関わらず、防災を同じように学び、ボランティアを行い、「語り継ぐ」を書き残しているからだ。

今回、環境防災科の2期生・11期生・14期生の方にお話を伺った。目的は「語り継ぐ」を語り継ぐためだ。私は、語り継ぐことは、世代を超えて思いを抱き続けることだと思っている。表題の通り、まさにこの冊子そのものである。高校で防災を学んだ高校生は今後どのような道を歩むのだろうか。

2 河田 のどか (2期生)

河田さんは阪神・淡路大震災を小学1年生で体験した。その後、環境防災科に進学し、卒業後も大学でボランティア活動を続け、現在はNPO法人さくらネットの職員として防災・減災学習の推進に取り組んでいる。

(1) 震災の記憶

地震発生少し前に目が覚め、地鳴りと共に体が浮くように上下左右に揺さぶられた。皿がスローモーションのように飛んでいき、次々と割れる光景を目にした。保育士の先生はダンスの下敷きになり即死。長田区にあった祖父母の家は半壊した。祖母父の家にある、兄が生まれたときに植えられたどんぐりの木も跡形もなく壊された。その時、家と共に思い出までも奪われたように感じた。

河田さんは、自身の「語り継ぐ」を書く時、眠っていた震災の記憶とともに、震災の恐怖もよみがえってきたという。

(2) 「語り継ぐ」をだれに読んで欲しかったのか。何を伝えたかったか。

「語り継ぐ」を書いた時、誰かに読んでほしい、何かを伝えたい、この被災体験を語り継いでほしい、といった思いはなく、ただ自分の気持ちをストレートにつづった。その時、自分と向き合い、自分の体験を整理できたことで、自分の気持ちを自分の言葉で表現できるようになった。「語り継ぐ」は、仕事先で出会う人が読んでくれていることもある。環境防災科進学に賛成でなかった父が「語り継ぐ」の冊子を読んで「環境防災科にあってよかったなあ。」といってくれた時は書いてよかったと思った。

(3) 防災の考え方は高校生の頃と今とで変化があるか。

高校で「知らないことが原因で多くのいのちが奪われた」事実を知った。阪神・淡路大震災では、直接死の約78%が圧死・窒息死だった。地震発生後15分以内に約4000人が亡くなったと言われている。災害の知識や事前の備えがあれば守りたいのちがあったかもしれない。防災は、「守れるいのちを増やす

こと」だと考えるようになった。その考えは、今も変わっていない。しかし、防災を通して自分が果たす役割は、経験や立場と共に変わっていったと思う。

大学3年の時、中国で四川大地震が起こった後に現地へ赴き、地元の学生に「被災体験を持つ大学生」として寄り添った。少し先の未来を想像する一助になれたかもしれない。社会人になって1年後に発生した東日本大震災では、小学生の成長を心配する先生方に「小学生の時に被災体験がある若者」として出会った。阪神・淡路大震災を体験した私たちが大人になった姿を見せることで、安心感を持ってくれた先生がいた。小学生の時に東日本大震災で被災した中学生には、「同世代の時に被災体験がある大人」として自身の今までの生き方や葛藤をありのままに話した。そして、3つのメッセージを送った。「怖いと思うのは自然なこと。あなたが弱いからじゃないよ。」「周りとは比べなくても大丈夫。そのままの自分の気持ちを大切にしよう。」「悲しかったことも。辛かったことも。嬉しかったことも。伝えたいことを伝えて大丈夫だよ。」

これは小学生の時に私自身が求めていた言葉なのかもしれない。阪神・淡路大震災の1年後、作文に阪神・淡路大震災のことを書いた。作文を見せた時、母が悲しそうな顔をした。それからは無意識に震災のことに触れなくなっていたが、中学3年生の時に環境防災科生の新聞記事を読み、私も震災と向き合おう、と思った。震災について学ぶ中で、子どもの頃の恐怖心もよみがえり、苦しい思いを何度もしたけれど、今もこうして防災に携る仕事をして生きているのは、応援して下さる方々と、私の「語り」を受け取って下さる方々がいるからだと思う。

幼い時に震災を体験をした私は、臆気で断片的な震災の記憶しか残っていない。大きな被害もなかったため、「被災者」と「未災者」の狭間にいると感じる。被災体験がなく、防災に取り組む人の中には、「自分が震災を語ってよいのか。」と悩み、被災していないことに罪悪感を持つ人もいる。震災を語り継ぐことに、「被災者」「未災者」の線引きは必要なのだろうか。私は、被災体験の有無は大きな壁ではないと思っている。語り継ぐことは、実体験だけではなく、気づきや疑問、思いなど、未来へのメッセージが含まれていると考えているからだ。被災体験の有無にとらわれず、「語り継ぎたい」と思っている人たちに繋いでほしい。「被災者」と「未災者」のつなぎ手になり、「未災者」の語り継ぎを応援することが、自分の役割の一つだと考えている。

3 成尾 春輝 (11期生)

成尾さんは、当時神戸市垂水区に住んでいた母のお話を聞いた。まだ住み始めて1年しかたっていない地域での被災。成尾さんは被害の大小に関係なく、各々に物語があったことを記している。

(1) 「語り継ぐ」をだれに読んで欲しかったのか。

執筆時は、特に読んで欲しい人を想定して「語り継ぐ」を書いていなかったが、今考えると、特に災害ボランティアの経験がある人、関心のある人に読んでもらいたいと思っている。それは、母の被災体験が比較的被害が小さいと言われる地域のことであり、あまりスポットライトが当たらない体験だったからである。災害ボランティアの人員は往々にして被害の大きなところへ配置されてしまう。メディアの影響等もあるが、なかなか注目されない場所はどうしても出てきてしまう。母の被災体験は、だれが被災者か、どこまでが被災地かという問いを私たちに突き付ける。改めて災害を考え直すことが出来るだろう。だから災害に関心のある人に読んでもらいたいと思っている。

(2) 「語り継ぐ」で何を伝えたかったのか。

上記で書いた、あまり注目されない場所にもつらい体験があるということを伝えたかった。ただ、それ以上に当時意識していたことは、震災体験のない人間はどのように「語り継ぐ」活動にかかわるかということだ。「語り継ぐ」文章の後半では、「体験していないは関係ない。」と書いた。これはもちろん震災体験の有無に意味がないということではなく、被災体験がない人も、災害体験の伝承には貢献できるはずだという意味だ。その出発点は、自分事としてとらえることだと思う。それが伝われば、と思っている。

(3) 防災の考え方は高校生の頃と今とで変化があるか。

現在、大学の研究は、東日本大震災で広島県に避難された方を対象に行っている。この方たちは「被災者は被災地にいる。」という「当たり前」があるために、あまり注目されない方たちだ。おそらく、あんまり取り上げられないところを見るという意識が「語り継ぐ」執筆を機に定着したからかもしれない。このように変わっていない面もあるが、変わったところもたくさんある。特に変わったと感じていることは、災害ボランティアは体験することが一番大切であると思っていたことだ。だけど、大学でさまざまな学問を学ぶ中で、それぞれの学問でこれまで蓄積されてきた理論が非常に重要であることに気づか

された。理論と実践をうまく組み合わせることが活動をより有意義にしてくれると今は思っている。

4 後藤 謙太 (14期生)

後藤さんは、母、父、祖母、人と防災未来センターの川原耕一さんにお話を聞いた。家族に加え、人と防災未来センターの方にお話を聞きに行ったのは、「語り継いでほしい。」という思いを人一倍抱いている語り部のお話も書き残すべきだと考えたからだという。

(1)「語り継ぐ」をだれに読んで欲しかったか。

特に自分と同じ10代の人に手に取って読んでもらいたい。高校在学時に、東日本大震災で被災した10代の語り部のお話を聞いた。自分と同じくらいの年齢の子が、生まれた場所が違うというたった一つの違いで、自分と全く違う生活を送り、自分が想像できないほどの葛藤や苦悩にさいなまれていることに衝撃を受けた。同年代の人の言葉は重い。だから同年代の人に情報を発信していきたい。そこで思いついたのが同世代同士のネットワークの形成だ。防災に関心を持つ友達がいれば、自然と防災に興味をわき、自ら防災に歩み寄ってくれるだろう。

(2)「語り継ぐ」で何を伝えたかったのか。

災害による犠牲者が出ることを前提としたような防災・減災ではなく、犠牲者ゼロを目指した防災・減災にしようとする努力をあきらめないことだ。きっと1人1人が浅くとも広い防災知識を身に着けることが出来れば、必ず成し遂げられる。防災を伝えるためにはその分の知識を蓄えなくてはいけない。だから大学で防災を深く学びたいと思っている。歴史に興味があるから歴史と防災を関連させて防災を伝える活動をするのも面白いと思っている。防災を通して命の大切さを知った。同じように多くの人に命の大切さを伝えていきたい。

(3) 防災の考え方は高校生の頃と今とで変化があるか。

大学に進学して間もないからまだわからないけれど、防災と少し距離を置くことで物事をより広く見渡せるようになったと思う。授業も「防災」という枠組みのものはないから自分の力で防災とくっつけていかなくてはいけない。大変な作業だから立ち止まることは多い。高校生の頃のように犠牲者ゼロを目指した防災・減災ができると言い切れなくなってきた。だが、1人1人が防災意識を持つ必要性は今でも必要だと思っている。

5 お話を聞いて

「環境防災科を卒業した後、どんな道につながっているのか。」と漠然とした将来に不安があった。今回先輩方の話を聞いて分かったことがある。それは、先輩方は環境防災科を卒業した後、自身の力で道を切り開いていることだ。インタビューの際、河田さんに「命って何？」と聞かれた。答えられなかった。考えたこともなかった。いや、考えるきっかけがあったのかもしれない。でも気にも留めなかった。きっと道を切り開くには、立ち止まってでも自分と向き合い、物事に向き合い、相手に向き合う必要があるのだ。私がインタビューした先輩方は環境防災科卒業後も防災に関わっている。防災は防災という枠組みがあるわけではない。私は点在していると思っている。だから「見よう。」と意思をもって見つめないと防災は見えてこない。だから先輩方のように災害と共に生き、自分の道を自分で切り開いていくためにも、物事を正面からだけでなく、側面や裏面まで見ようとする努力を続けたいと思っている。

インタビュー後の今も胸に残っている先輩方の言葉がいくつかある。

1つ目が「被災者は、被災者とか未災者とかなんて考えていないよ。」という河田さんの言葉だ。私は、被災者に積極的に話しかけることができない。「未災者である自分が話しかけたとしても、相手を傷つけるだけだ。」と思い、被災者と一線を引いてきた。だけど、それはただ逃げていただけだ。被災した方に寄り添えないのではなく、被災した方に寄り添わなかったのだ。

河田さんの言葉を受けてから、被災者や未災者の枠にとらわれることなくボランティア活動することを心掛けている。将来、未災者である自分が災害を知らない世代にも災害の教訓を伝えられるように、自分を変えていきたいと思う。

2つ目が「どこまでが被災地か。」という成尾さんの言葉だ。災害が発生すると、マスメディアの情報を頼りに行動することがほとんどである。しかし、マスメディアが取り上げるのは被害が大きい順だ。必然的に被害の少なかった地域は目を向けられなくなっていく。そして、私たちはそうとも知らず、マスメディアが提示した情報の中からはしか災害をしろうとしない。私は阪神・淡路大震災を理解したつもりだったが、垂水区でも避難所が開設されたことは全く知らなかった。東日本大震災の被災地に訪れた際も、報道と現実とのずれの衝撃があった。きっと、注目されていないだけで、大変だったこと・つら

かったこと・うれしかったことなど、いろいろなお話が身近に転がっているのだろう。被害の大小にこだわらず、一人一人の物語に目を向けていきたい。そのために、座学だけでなくフィールドワークを大切にしたい学びを続けていこうと思う。

6 夢と防災

私の夢は救急救命士になって困っている人の場に真っ先に駆け付ける人になることだ。でもその前にやっておきたいことがある。それは、今の救急救命制度をよりよくすることだ。救急救命士とは、救急車に同乗し、傷病者を病院に搬送する間に処置を行う仕事である。その特徴は特定行為と呼ばれる、本来医師にしか認められていない医療行為を限定的ながらも行えることだ。しかし、問題点がいくつかある。

救急救命士の資格は単独では実質使用できず、そのほとんどは消防官として働くために消防士の資格も有している。消防官になる理由は、救急救命士の職場は消防署と一部の病院（自衛隊など）に限られているからだ。また、救急救命法第41条に「搬送途上のみ特定行為の実施を認める」と記されており、職域拡大の妨げとなっている。だから救急救命士が医療従事者としてその資格を十分に発揮するには消防機関に所属し救急隊員として現場に行かなくてはいけないのが現状である。また、職場が限られていることで、救急救命士は現在飽和状態にある。つまり資格を有していても使うことができないために医療関係の仕事に就くことができず、まったく違う仕事についている人がたくさんいるということだ。尚且つ医師や看護師免許と違い医療行為は搬送時に限られるため、資格を取得したとしても一般人として扱われてしまっている。さらに、救急救命士は災害時に特定行為を行うことが難しい。それは特定行為が医師の指示の下で行われる行為だからだ。医師の指示を仰げない緊急時には、困っている人の傍に駆け付けることができたとしても専門性の高い医療行為は限られてしまう。

今、日本の医療体制は大きく変わってきている。熊本地震の際にも医師の指示を仰げない状況下での特定行為を容認した事案が報告されている。私は救急救命士になる前に防災のことをしっかり学び、災害に強い医療体制づくりに携わりたい。

7 次の環境防災科の方へ

環境防災科に進学してからどんな思いを胸に抱いているだろう。中には、先の見えない「防災」という学びに不安を抱く人がいるのではないだろうか。しかし、今勉強している「防災」の知識や知恵はどの学問にも密接に結びついている。そのことを認識し、追究するには「防災」という枠組みを自分自身で広げていかなくてはいけない。不安でいっぱいだろうが、その不安を抱いているのは君一人ではないことを知っていてほしい。

今回、環境防災科の先輩方にインタビューしてわかったことがある。それは、「災害」に触れるたびに感じた、苦しさ・悲しみ・共感・面白さ・気づきなどの様々な感情が先輩方の心に根付いているということだ。環境防災科で得た経験は、環境防災科でしか得られない経験だ。だからその経験を得ることを十分に楽しんでほしい。

「語り継ぐ」

下川 真七佳

1 はじめに

1995年1月17日 午前5時46分 淡路島北部を震源とするM（マグニチュード）7.3、震度7の地震が神戸を襲った。多くの犠牲者を出し、町を壊したこの地震が阪神・淡路大震災だ。死者6434名、行方不明者3名、負傷者4万名以上、全壊・半壊家屋あわせて24万棟以上に上る。

私は、阪神・淡路大震災を経験していない。これから先、私のように大震災を経験していない人が増えていく。また、経験された方々の記憶はどんどん風化していつてしまう。これから先の未来のために、私は語り継ぐ。少しでも、阪神・淡路大震災の教訓を知ってもらいたい。阪神・淡路大震災の記憶を風化させたくない。

2 父の話

(1) 震災発生当日 17日

私は、当時2年目の若手消防職員として、消防署の分署に配属されていた。震災当日は、公休日であったため自宅で就寝していた。未明の早朝、ベッドの中でゆっくりと横揺れから始まり、地震かなと思っていたところ、今まで感じたことのない地面からの突き上げるような強い押し上げと同時に体が宙に浮くのを感じた。さらに、棚などに置いていたすべての物が落下してきた。しばらくすると、なんとか揺れが収まったので、状況を把握するために部屋のドアを開けようとしたところ、普段の力では開けなかったため、少し強めに力を入れドアを開放した。

その後、同居している両親の安否を確認後、近くに住む当時婚約中であった妻の安否を確認するため、自宅を出発し、乗用車でそのマンションへ向かった。途中、国道2号線の大きな交差点の信号は消えていた。まだ夜は明けていなくて薄暗く、いつもよりも周囲は異常な静けさを保っていた感じだった。婚約者のマンションへ到着し、6階の部屋へ行くと、大きなタンスや食器棚も倒れていた。それらの倒れた家具の下を確認したが、不在であったため、心配ながらもすぐに次の行動を起こすことにした。

勤務先から非常招集（この地震後、震度5で明石市職員は全員参集となる）は、まだ発令されていなかったが、これは尋常ではないと判断し、すぐに職場へ向かうことにした。その道中、車内のラジオで、明石海峡が震源地であると聞き、おそらく明石市内の被害発生状況が一番ひどいのではないかと、不安がよぎった。

午前6時過ぎに職場へ着くと、既に救急車・消防車・救助車は出動中であり、私が到着して間もなく、次々と他の職員も自己参集し始めた。当務隊は、出動したまま帰ってこなかったため、自分を含め参集してきた職員は、普段連絡車として使用しているバンで、出動することとなった。（資機材も、必要最小限のホースや筒先、消火栓キー、簡易担架のみ）

現場は、ガス臭が周辺に漂っていた。私たちは、あちこちでガス臭がしているが、特定できないため、通報者に対し火気を使用しないように広報するしか方法はなかった。また、ガス会社についても、出動多数であり、連絡等不能状態であった。出動場所が転々としていたが、私たちは資機材を持っていないため、主な活動は同様のガス臭通報への対応のみで、次から次へと現場を転々とした。

どのくらい時間が経ったのかわからないが、分署へ戻り他の職員と交代した。その後、食堂のテレビで上空からの放送映像を見たとき、啞然とした。阪神高速が横倒しになり、多数のビルが倒壊し、まるで映画（ゴジラ）のワンシーンのように思えた。さらに次から次へ状況が判明していく中、神戸市内の多数の場所で火災が発生しているとの情報や映像が流れ、今のところ明石市の被害は神戸市と比べ、少しはましであることが分かり始めた。

夕方頃には、多くの他市の消防車両がサイレンを流しながら分署前を通過していくのを見ながら、もし市内の状況が収まれば、私たちも神戸市へ行かねばならないのだと思いながら勤務を続けた。

(2) 震災発生翌日 18日

後日、明石市からも応援隊として派遣することが決定し、順番に長田消防署へ交代勤務することになった。長田消防署へ行く道中は、道路があちこち寸断されていたため、かなり回り道をしながら向かうことになった。目的地に近づくにつれ戦時中の空襲後のような、ひどい状況が現れ、ショックを受けた。

長田消防署の前の道路には、各市から参集された部隊、及び車両が道路を埋め尽くしていた。長田地区は大規模な火災が連続して発生したため、防火水槽の水もなくなり、地震のため水道管は破裂し、消火のための水が尽きていた。それにより明石市消防の主活動は、海水を消防車のポンプで汲み上げ、遠

くの火災現場へ送水するという重要な役割が与えられた。

庁舎に入り、神戸市消防局職員に話を聞くと、ほぼ家には帰っていない状況だと聞き、疲労も限界だと本音を漏らしていた。私たちにも食事の配給があったが、日にちが経った給食用のコッペパンで、硬くてカサカサだった。神戸市の消防職員は、応援に来た我々よりも相当厳しい勤務状態であり、食事さえもろくに取れていないことが予想できた。甚大な被害を受けた神戸市のため、そしてその市民のために尽力している神戸市消防職員に対して、私たちが少しでも役に立に立つことができればという気持ちで活動した。

(3) まとめ

その後、神戸市消防局職員の書記が出版され、私たちが知らなかった当時の活動の困難状況や、また目の前で助けられなかった命があったこと、市民からの罵声の中、火と戦った隊員の話を知ること、この職に対する大変さと誇りを持つことができたのと同時に、災害という巨大な敵に対する自分たちの無力さを感じた。

あれからもう二十数年経ち、震災当時の記憶も薄くなってきている。自然災害を無くすことは不可能だ。でも、被害を最小限に抑えるということは可能である。当時の状況を次世代へと語り継ぎ、かなわない大きな災害にただただ立ち向かうのではなく、どのように被害を減少させ、どのように一人でも多くの命を救うことができるのか。阪神・淡路大震災の教訓を活かし、生命・財産・町を守ることが我々消防職員の責務だと再認識した。

3 母の話

17日の明け方ドーンドーンと大きな音と共にマンションに衝撃を感じて目が覚めた。はじめは、大型トラックが突っ込んだのでは？と感じたが、直後、経験したことのない揺れがおこり、横になっている身体全体がはずむように飛び跳ねた。同時に家中の物が大きな音で倒れ、私が寝ている布団にも洋服ダンスが乗った。一瞬圧迫を感じたが、ダンスの下からなんとか抜け出すことができた。窓ガラスは割れ、テレビも2mほど先へ飛んでいた。冷蔵庫のドアはへこみ、食器棚も倒れた為、前方に並べていた高価な食器は割れていた。

外の様子が気になったので、外へ出てみると公衆電話に行列ができていた。一人の男性が、10円を差し出し「使いますか？」と声をかけてくれた。その時のやさしい気持ちが忘れられない。

実家の両親の安否を確認したあとは、パジャマの上に上着をはおり出勤した。自宅が神戸の職員は、家に火がまわるのをふせぐ為に、バケツリレーをしたと聞いた。でも、到底追いつかず炎が廻ってきた時には、若者が老人をふみつけて逃げていたと言う話が今でも心に残っている。

当時、市役所職員の業務はさまざまだったが、私は市内に住む介護サービスを利用している高齢者の安否確認及び水の供給、室内の瓦礫排除等を担当した。とくに、上層マンションに住む老人世帯へ階段で水を運ぶのが大変だった。仮設住宅に移動した世帯にも安否確認や身の回りの介護を他の職員と連携して行った。お米の値段も高騰したが仕方なく注文を依頼されたこともあった。自分自身も被災者ではあったが、少しでも市民の方の力になればと思いながら懸命に働いたことを覚えている。

4 私の夢

(1) きっかけ

私の将来の夢は消防士になることだ。消防士である父親に憧れを抱き、自分も人の命に携われる職業に就きたいと思ったことがきっかけだ。最初は、ただ何となく「カッコいいな」「消防車に乗って仕事ができるっていいな」と思っているだけだったが、消防士という職業をよく知っていくうちに、「人の役に立ちたい」「人の命を救いたい」という思いに変わっていった。

(2) 女性消防士

消防と聞くと、男性の世界だとイメージする人も少なくはないだろう。以前、友人に将来の夢を聞かれ、消防士になりたいと言うと、「男の人しかできないよ」と笑われたことがある。なぜか悔しかったことを覚えている。そのとき、絶対女性消防士になってやると決意した。

でも確かに、消防士は、体力が必要になる職業で、女性には厳しい世界かもしれない。傷病者を搬送する際は足手まといになるかもしれないし、消火活動の際にホースも一人では持つことは難しい。でもその逆で、女性にしかできないことがあると私は思う。女性の隊員がいることで傷病者の方に安心感を持ってもらえ、女性の隊員がいるから心を開いてくれる方もいるのではないだろうか。「防災」「減災」などの言葉や、「消防」という堅苦しいイメージを女性ならではの柔らかい雰囲気で見身近なものに感じて

もらえるのではないだろうか。

女性にしかできないことで人の命を救いたい。女性という性別を活かして消防の力になりたい。一度きりの人生、誰かのために命をかけて働きたい。

私は、人命救助の最前線で活躍する女性消防士になる。

(3) 救急救命士

私は、消防職の中でも救急救命士の資格を取得したいと思っている。救急救命士とは、救急車に搭乗して特定医療行為を行う人のことだ。私は、傷病者に安心感を与えられ、的確な判断を素早く行える救急救命士になりたい。また、災害現場では、環境防災科で身につけたコミュニケーション能力を活かし、身体の手当とともに心のケアも行い、一人でも多くの方の助けになることが、私の消防士になってからの最大の目標だ。人の生死に携わるということは容易なことではないが、私は全力で救命活動を行いたい。

(4) 環境防災科

私は、消防士になりたいという一心で環境防災科に入学した。環境防災科という学科の存在を知ったのは、中学2年生の時だ。父の職場に、舞子高校環境防災科出身の職員が数名在籍しており、父に「どの職員も気が利く良い子ばかりだよ」「消防士を目指しているのなら環境防災科に入ってみたら」と紹介された。そして実際、オープンハイスクールに参加させていただいたとき、自主的に仕事を見つけ、その時々に必要な行動を瞬時に判断し、動いている先輩の姿をたくさん見た。かっこよくて、私も自主的に動ける人間になりたいと思ったのと同時に、父が環境防災科出身の職員の方々を慕っている意味がよく分かった。そのときから舞子高校環境防災科に入学することが、消防士という夢を叶えるための最初の目標になった。

高校生のころから防災を専門的に学ぶことができる学校は数少ない。そんな学校で学べるという誇りを持ち、日々の生活を大切にしていきたい。舞子高校で学んだ防災知識を活かし、市民の安全を守ることでできる消防士になる。

5 感想

(1) 「語り継ぐ」こと

今回、語り継ぐ15を書くにあたり、両親から改めてしっかりと阪神・淡路大震災当時の状況を聞くことができた。当時の様子は、私の想像をはるかに超えた悲惨な状態で、二度と同じ被害を繰り返したくないと強く思った。私にできることはあるだろうか。私には何ができるだろうか。そう考えるきっかけになった。今、高校生という立場でできることはとても少なく、自分ができることは限られてきてしまう。そんな中で、「語り継ぐ」ということは、今自分のできる最大限の防災かもしれない。大きな災害を経験した方々からお話を聞かせていただき、そのお話や教訓を、自分と同じように大きい災害を経験していない人たちに伝える。震災の記憶を風化させない。教訓を意味あるものにする。同じことを繰り返さない。私たちが語り継ぎをすることが、これから先の未来で起こる自然災害に立ち向かう盾になってほしい。

「語り継ぐ」ことは、自分の町・大切な人々・たくさんの思い出や財産などを守ることにつながるだろう。今回、「語り継ぐ」を書くことを通して、今自分にできることを精一杯したいと思うことができた。

(2) 環境防災科に入学した意味

私は今回、環境防災科に入学した意味を改めて考え直すきっかけとなった。将来の夢をあきらめかけ、環境防災科に入学したことを後悔したこともあったし、普通の学科に通っていれば、将来の選択肢がもっと広がっていたかもしれないと思ったこともあった。でも、3年生になりどんな職業とも「防災」は関連付けることができ、どんな職業でも目指すことができるのだと、同じクラスの仲間から教えてもらった。だからこそ私は、女性消防士になり、環境防災科で学んだことを活かしたいと改めて思い、将来の目標を明確にすることができた。

これまで、多種多様な職業の外部講師から講義をしていただき、いろいろな場所へ校外学習をしに行かせていただいた。地震が起こるメカニズムや、防災に関連する言葉の意味を知るなどの基本的なことから、今まで勉強したことを活かし、被災地支援をどうするかというところまで様々な「防災」を学ばせていただいた。そんな中、この環境防災科で学んだすべてのことを活かし、「語り継ぐ」ことが私たちの使命なのではないかと感じることもできた。

今舞子高校に入学してからの3年間を振り返れば、私にとって環境防災科は大切な居場所であり、自分を成長させてくれる唯一の場所になっていた。環境防災科に関わってくれた先生方、クラスの仲間、

外部講師の方々やボランティアでお世話になった方々、そして、3年間舞子高校環境防災科に通わせてくれた両親に感謝したい。

6 最後に

私の「語り継ぐ」を読んでいただき、少しでも防災に興味を持っていただくとともに、防災の重要性を感じていただければ幸いだ。これから先、発生するとされている南海トラフ地震で、一人でも多くの命を救える人になれるように頑張っていきたい。

ありがとうございました。

～追記～

上記の文を執筆した2018年6月当時はまだ、ただの夢であった消防吏員になるという目標。これを追記している11月現在、夢は現実となった。

私は、来春から消防吏員になる。それは、守られる立場から守る立場になるということでもある。これから先、様々な困難が待ち受けていることだろう。そして、その中には、私一人の力では到底太刀打ちできないものもあるだろう。しかし私は、決して諦めることなく、仲間とともに立ち向かい乗り越えていきたい。

I promise I will protect you from disaster.

「語り継ぐ」

白壁 敬太

1 はじめに

阪神・淡路大震災から24年が経った。1995年1月17日、僕はその時生まれていない。そのため、阪神・淡路大震災は経験していない。環境防災科に入りたくさんの人に24年前のことについて教えてもらうが、自分が体験していないため正直想像がつかない。どんなに怖くて悲しくて大変だったあの日のことは、僕はわからない。でも、阪神・淡路大震災という多くの命を奪った災害を決して忘れてはいけない。あの日を忘れないため、震災を知らない人のために語り継ぐことは大切である。

2 阪神・淡路大震災

(1) 母の話

当時、姫路で仕事をしていて家の2階で猫と一緒に寝ていた。地震が起きる前、いきなり猫が暴れだして母をひっかいてきた。それで目が覚めた瞬間、大きな揺れが襲った。棚に置いていた物が落ちてきたりして、いつもとは違う地震とわかり、布団で頭を守り揺れがおさまるまで動かなかった。揺れの長さがとても長く感じた。幸い、家やライフラインなどの倒壊や遮断などもなく過ごすことができた。その後、会社に行き中の物が倒れたりして整理などをした。

(2) 父の話

父は当時、姫路で仕事をしていて、1月17日は、神戸の県庁に出張がありその準備をして姫路の職員住宅で寝ていた。寝ていると「ゴゴゴゴゴゴ」と音が鳴り、クレーン車が来たと思った瞬間、大きな揺れが襲った。その時に地震が来たと分かった。この音は、地鳴りだったのだ。部屋の中は、物がたくさん落ちておりすぐに動ける状態ではなかった。その日、県庁に出張だったが中止の連絡がきた。もし、県庁の近くで泊まっていればたぶん死んでいただろうと言っていた。母と同じで家やライフラインなどは大丈夫で普段通り過ごすことができた。地震の後すぐ会社に行き、作業服や食料を持って緊急車両で神戸土木事務所に助けに行った。

(3) 母と父の話を聞いて

二人の話を聞いて、二人とも地震にはあったがその後の生活に困ったことはなかったが、会社や家の中の物が倒れたりしていてそっちの作業が大変だったと聞いた。どちらも地震の揺れで死を意識したと言っていて、姫路で死を意識していたので神戸の人はどんなにすごかったのかと思った。父と母に阪神・淡路大震災のことを詳しく聞いたことがなかったので知れてよかった。

3 環境防災科に入学するまで

(1) 幼稚園

僕は、3歳から6歳まで豊岡に住んでいた。4歳のときに台風23号に遭った。僕の家族は、父と母と1つ上の兄の4人家族で母にはお腹に赤ちゃんがいた。父の仕事は土木関係でこのときは仕事場に行っていた。当時、家には僕と兄と母の3人でいた。雨と風が本当に強くて4歳だった僕はとても怖かったのを覚えている。そのときは、電気が止まっていた。母には赤ちゃんがいるので僕の友達の親が心配して迎えに来てくれて友達の家に行った。車に乗るときに一瞬外に出たが、風と雨で飛ばされそうになったのを覚えている。その日の夜は友達の家で過ごし電気が通っていなかったのでロウソクを立てていた。災害後、家に帰ると家の近くが茶色の大きな池みたいになっているのを見た。幸い僕の家は浸水にはあっていなかったが、いつも行っていたスーパーマーケットが浸水していた。

(2) 小学校

小学2年生の時に神戸に来た。学校では毎年1月になると「しあわせ運べるように」を歌ったり、図書室で阪神・淡路大震災の本を見たりしていた。また、炊き出しや消火訓練などもした。その時に、阪神・淡路大震災のことを知った。先生からも当時の話などを聞いて地震は怖いということを知った。

(3) 中学校

中学生になって自分の進路について考えるようになった。どこの高校にしようか迷っていた時に部活動の先輩が環境防災科に行っていてどのようなことをしているかなどをたくさん教えてもらった。それから環境防災科について色々調べていくうちに僕が4歳の時に経験した台風23号のときにボランティア活動をしているのを知った。このことを母に伝えると当時、高校生たちが掃除やタオルなどを配ったりしていたと言っていた。このことを知って環境防災科に入ろうと思った。

4 環境防災科に入って

僕は、環境防災科に入って本当によかったなと思っている。普通の高校生では体験できないことや勉強、ボランティアなどをたくさんしてきた。校外学習や外部講師のお話などから阪神・淡路大震災や東日本大震災などの様々なことを学んだ。学んだ中で一番大切だと思ったのが、普段から備えることだ。備えることは自分の命や家族、友達などを守ることに繋がる。阪神・淡路大震災でも多くの人が家具や物による圧死によって亡くなったが、家具の固定や物の配置、防災の知識を知っていれば死者も減っていたと思う。東日本大震災では、津波の備えをしていなかったために流された人がたくさんいた。また多くの人が亡くなった場所では、とりあえず人に合わせてしまう考えがあったからだと思う。自分の意志では動かず周りに人がいるから大丈夫だと思ってしまう。これらから、備えというのは非常に大切ということだ。また、人に流されず自ら行動する行動力も大切ということも学んだ。今後起こると言われている南海トラフ巨大地震で少しでも少ない被害で済むように備えていかなければならない。備えるために僕たちが、たくさんの人に防災の知識を教えていかなければならない。

(1) 一番印象に残ったこと

環境防災科に入って一番印象に残ったのが、消防学校だ。町にいる消防士の人たちが普段どんな訓練を受けているのかという興味があった。体験は1年生と2年生のときにした。命を守る仕事として真剣に訓練をしている消防隊員を見た。とてもかっこよかった。厳しかったり優しく説明してくれたり、切り替えが早くとてもすごくて驚いた。体験授業では煙体験と地震体験をした。

煙体験では真っ白な煙の中を進んでいくもので、本当に何も見えなくて怖かったが消防隊員は、煙と炎がありながらも進んでいくのでとても驚いた。

地震体験では、地震を再現できる車に乗り阪神・淡路大震災や東日本大震災の時の地震の比較などを体験した。震度6や7では何かにしがみつかないとじっとできない状態で家具の固定がどれだけ必要なのか身をもって体験した。また、寝ているときに大きな地震が来たら、パニックになって安全な姿勢や行動ができないと思った。だから、非常用持ち出し袋の用意を枕元においておいたりすることが大切だと思った。この体験で改めて、地震というのは恐ろしいと思った。

2年生のときは、消火訓練をした。ホースをつなげて実際に水を出して壁に向かって放水した。僕が思っていた威力より何十倍も強くて、持っているのがやっとなかった。でも、消防隊員の方は、普通の顔をして持っていてとても驚いた。また、消防士は体をしっかり鍛えないといけないのだと思った。消防学校で多くのことを学んだ。搬送法やロープのくくり方など、いざというときに必要なことを教えてもらった。この体験を忘れずに今後活かしていきたいと思った。

5 熊本地震

2016年4月14日、16日熊本で震度7の地震が起きた。約2か月後の6月21日から25日まで熊本に被災地支援活動に行った。当時、僕は高校1年生で入学して間もなくのことだった。まだ、防災について何も知識がなく熊本がどういう状況になっているかわからないまま行くことが決まってとても不安だった。

(1) 活動1日目

大雨の影響でボランティアが出来ず熊本市内と益城町の被害状況を視察に行った。熊本市内の視察では、熊本城の石垣や壁などが倒れており被害の大きさに驚いた。商店街を回りお店の人に当時の状況や現在の状況などを教えてもらった。

益城町では、倒壊した家や建物がたくさんあり、ブルーシートが目立った。この光景を見たとき言葉が出てこず、自然災害という恐ろしさを目の当たりにした。

(2) 活動2日目

熊本市内のボランティアセンターの清掃と無料食器市のビラ配りをした。ボランティアセンターの清掃では、大雨で濡れた物資や道具を拭いたり、草むしりをしたり物資を運んだりした。

無料食器市のビラ配りでは、集会場周辺の家を回って被災者の方に訪ねてビラを配って行った。僕は、友人と一緒に家を回ったが全壊や半壊している家がたくさんあった。初めて見る光景で気持ちの整理がつかなかった。その中で一番印象に残っているのが、細い柱一本で家全体を支えている家があり今にも倒れてきそうで本当に怖かった。また、回っている途中にやせ細った子猫がいて、僕たちのところに近づいて食べ物を欲しがるようにずっと鳴いていた。その場を離れようとしてもずっとついてきて、胸が苦しかった。このときに思ったのが人だけが苦しいのではなく、動物たちも苦しんでいると感じた。

(3) 活動3日目

無料食器市のお手伝いをした。全国から送られてきたお皿を無料で提供するという被災地復興支援活動でNPO法人の「ひまわりの夢」が主催していて、それをお手伝いさせていただいた。集会所にたくさんのお皿が運ばれてきて、それを運んだり並べたりした。被災者の方が選んだお皿を僕たちが持って家まで送った。また、無料食器市に来てくださった方にメッセージとひまわりの種を配った。たくさんの方が来てくださって本当に嬉しかった。雨であまり満足のいくボランティアが出来ていなかったので達成感を感じた。

(4) 被災地支援活動を終えて

最初は何もわからない状況でとても不安だったが、活動していく内に自分がやっていることに自信をもつことが出来た。宿泊先の菊池農業高校の方々との交流などもできてとても良い経験になった。熊本に何が足りないとかどういふ支援をしていくかなどの具体的なことをこれから考えていきたいと思った。

6 将来の夢

(1) きっかけ

僕の夢は、理学療法士になることだ。その夢を持つようになったきっかけは、僕が中学3年生の春に父親が脳梗塞という病気にかかり左手と左足に麻痺が残ったときのことだ。そして、入院生活が始まって毎日のリハビリがあり、リハビリには理学療法士や作業療法士の先生が色々な施術をしてくださった。毎日のリハビリのおかげで動かなかった手や足がほとんど動くようになり、半年後に退院することができ、会社にも復帰することができた。父の病気を通して、僕も病気や怪我で困った人を助けたいと思い理学療法士になろうと思った。

理学療法士と作業療法士でどちらになろうか迷ったが理学療法士になろうと思ったのは、自分も膝を手術したことがあってその時にお世話になったのが理学療法士の方だったので理学療法士にしようと思った。

(2) 夢と防災の関わり

理学療法士は、基本的に病院で働くので、病院にいるときに災害が起きることや、起きたときに患者をどうやって避難させたりするのかとか、災害の後の怪我や病気で人を助けることが多いと思う。また、病院がどこにあるのか、海に近いとか山や川に近いなどの地理的にも防災に関わってくる。だから理学療法士は防災とかなり関わると思う。

それら以外にも、東日本大震災を契機に災害リハビリテーション支援のためのボランティアチームPhysical Support Volunteer Team (PSVT) というのがある。そのチームは、理学療法士と医師、アスレティック・トレーナーグラフィックデザイナーといった他職種の有志を集めて結成したそうだ。どんなことをするのかというと、発災直後より救援物資の輸送や高齢者に向けた情報発信をはじめ、日本理学療法士協会からの一次派遣隊や災害リハビリテーション支援チームとして各地で支援活動を実施している。また、各避難所・仮設住宅で活動している医療チームと連携し、リハに関する情報提供や生活不活発病などの予防を目的とした運動指導、避難所や仮設住宅内の環境調整、補装具の提供などを行っている。僕は、将来、理学療法士になったらこのボランティアチームに入って災害で困っている人を助けたいと思う。

(3) 防災を広げるために

これらのことから、理学療法士は防災に対して深く関わっているが、自分が理学療法士になったときにどうやって防災を広めていくかが問題だ。まず、病院に配属されたらその区や市の地図やハザードマップをみて病院周りの環境を調べる。そして、患者の治療中に防災について話したり、どういうところが危ないかなどを聞いてくれる範囲で伝える。病院にも色々な提案を出して、未然に防ぐことができるところを無くしていく。できれば、医者、看護師などの勤務している人たちと講習会などをひらいて、防災について、避難の仕方、患者の対応などを一緒に考えたりしていきたい。また、この世界で大切にしていきたいのは、一人一人の意見や考え、気持ちなどを大切にすることだ。自分の考えだけが正しいと思わないで人が何人もいれば考え方が何通りもあるということを肝に銘じて、患者に接していきたい。

また、自ら率先して行動をすることや、発言をすることも大切にしたい。自分から行動をしていくことで新しい何かをつかめるかもしれないから。しかし、失敗をするときもあると思う。この失敗が僕は大切だと思う。失敗から学び次に活かすことが大事。災害も同じで、教訓を活かして次の災害に備えることが大切で、それが出来なければ、同じ過ちを繰り返していつこうに進歩しない。また、いつも人に

頼っていても自分は進化していきにくいと思うので、何事にも挑戦していきたい。

7 感想

今回、自分の親に阪神・淡路大震災のことを聞いてみて、両親は、どちらも大きな被害にはあっていないが当時の状況やどんな気持ちだったのかなど知ることができた。また、自分が環境防災科に入る前と入った後の心の変化や経験を通して変わったことを振り返ることができる良いきっかけになった。環境防災科で学んできた、たくさんのことを多くの人に語り継いでいかなければならないと思った。

これから高校を卒業していき大学や就職をしたときに防災について学んできたことを伝えていくことは大切だと思う。でも、高校を卒業したらあまり防災について考えなくなったりすると思う。だから、卒業しても環境防災科の人との交流をして忘れないようにしたい。

(1) 今年の災害について

2018年、災害の多さに僕はとても不安に思っている。西日本豪雨から始まり、大阪北部地震、台風20号、21号、24号、北海道胆振東部地震など今年の日本は以上に災害が多かった。その中でも気になったのが地震だ。大きな地震が多くあり、たくさんの人が恐怖や不安に思ったと思う。また、和歌山県南部の地震があり南海トラフ地震の前兆かと思うことがあった。これから思うのは、南海トラフ地震も近いうちにくるかと思った。この先、大人になり仕事や結婚などたくさんを経験をしていく中で災害というのは絶対に関わってくるのでこの環境防災科で学んだ3年間を活かしていきたいと思った。

(2) 岡山ボランティア

8月9日、僕は岡山県の真備町にボランティアに行った。2か月近く経ち復旧復興が進んでいると思った。しかし僕が見た光景は全然違っていた。道路は茶色く、空き地や川岸には山積みのゴミがあった。住宅街では、家の外側にどこまで水が来たかわかる茶色の線が入っていた。2階の半分まで線が入っていてとても驚いた。ボランティアの内容は、家の中の家具やゴミを外に出し、トラックに積んでいくという作業をずっとした。その日は、曇りだったがとても暑かった。僕は、タイムキーパーをした。とても疲れたが現地の人役に立つことができ良かった。これでボランティアを終わるのではなくこれからも僕ができるボランティアをしていこうと思う。

(3) 大阪北部地震で体験したこと

大阪北部地震で自分が実際に地震を体験したとき震度は4だったが、最初パニックになったが、すぐに冷静になることができた。母は、とても驚いていてずっとパニックになっていた。母の手を見ると震えていた。僕にどうすればいいのかなど興奮状態になりながら聞いてきた。それで電気やガス、電話、情報など学んできたことを活かすことができた。もし普通の高校生だったなら何もわからずただ隠れているだけだったと思う。そう思うと防災を学んでいることは、とても大切だと感じた。南海トラフ巨大地震がくるときは何百万の人が地震や津波でパニックになると思う。その時に冷静で考えて行動したり指示を出したりできる人になることが防災につながると思う。僕はそういう人になりたい。

これからも環境防災科で学んだことを活かしてたくさんボランティアや支援をやっていきたいと思った。

「語り継ぐ」

鈴木 みなも

1 はじめに

私は、震災から5年後の平成12年に生まれた。震災を経験していない世代の一人だ。そして私の生まれ育った赤穂市は、神戸市からとても遠く、震災当時も震度4の地震がきて、ゆっくり揺れた程度で、被害はほぼ全くなかった。そのため、小さいころから震災について周りの人たちから話を聞く機会は少なく、知識も薄く、災害・防災への関心も神戸の人に比べると低かった。

そんな私ができることは、防災を学び、私と同じような震災や災害が身近でないと感じている人たちに伝え、語り継いでいくことだと思う。

当時も今も西宮市に住んでいる大叔母の話、赤穂市に住んでいた祖母、父の話を語り継ぐ。

2 大叔母の話

(1) 発生直後

当時、西宮から姫路に通勤していた大叔父はいつものように5時45分に家を出た。大叔母は玄関まで大叔父を見送り、もう一度寝ようと布団へ入り、毛布を頭から被った。その直後、ドンッと下から突き上げられ、姿見がドサッと倒れた。とっさに柱を掴んだが、掴んでは飛ばされる、の繰り返しで、空中浮遊してしまう感じだった。

大叔父は家からちょうど3歩ほど出たところだった。なぜ電線が揺れているのだろう程度しか感じなかったと言っていた。

大叔母は長い揺れの間、「もう死ぬ」と思ったときに、小学校の時の記憶が走馬灯のようによみがえった。戦後間もない世の中は、決して皆が裕福ではなく、学校に弁当を持ってこられなかった生徒もいた。その生徒達が学校の倉庫で昼休みの時間が終わるのを待っているという記憶だった。なぜその記憶だったかは今もわからない。

揺れがおさまってから、娘が大丈夫なのか確認するため、娘の部屋に急いで行った。すると、娘の上に本棚や本が倒れていた。「お母さん、助けて!」と言われ、慌てて本棚をどけた。寒かったため、布団をかぶっていたから、冬でよかったと思った。

台所では、ウイスキーとはちみつがぐちゃぐちゃになっていた。ピアノも倒れ、テレビは端から端まで飛んでいた。こういった物は、最初のドンッというときに全部落ちたような気がした。

少し高台にあった自宅からは、下のほうの街で火災の煙が上がっているのが見えた。海側は、埋め立て地だったため、液状化の被害が大きかった。

西宮市では、古い家に住んでいた方や、淡路から瓦を取り寄せた屋根の家に住んでいた方が多く亡くなった。

(2) その後の生活

市民体育館の避難所に、一晩だけ避難した。家族では「自分はいいから」と、避難所でもらったごはんの遠慮のしあいになった。ラーメンをもらうために近くの公園の行列に並んだり、とにかく水がなかったため、体育館の横の池、神社の湧き水、破裂した水道管などから出ていた水を汲んだりした。体育館の中では、チラッと横を見ると亡くなった方々の死体がずらっと並んでいた。大きな柱があるというだけで、安心感が違った。なるべく太い柱の近いところにいるようにした。

たくさんの物資が送られてくる中で、寒いからたくさんいるだろうと全国からたくさんの毛布が届いた。しかし、毛布は地震では破れたりしなかったため、足りている人が多く、届いた分はたくさん有り余ってしまっていた。少し遠かったが、尼崎にお風呂があったため、そこに入りに行っていた。ガスはカセットがあったため助かったが、水道と電気は復旧が遅く、とても困った。それでも、神戸よりは被害が少なかったため、「おたく贅沢やわ」と言われそうで我慢をした。

大叔父は「会社は休めない」と、姫路の仕事場までがれきが散乱する道を通ったり、遠回りをしたりして8時間かけて通勤した。西宮に帰る時には、姫路に住む大叔父の妹の家に寄り、水と食料を車に詰められるだけ詰めて帰った。

ボランティアの方々がたくさん来てくれ、いろんなことをしてくださった。しかし、おにぎりを運んでもらう、遊んでもらう、となんでもしてもらった状況が続くと、周りから「あの人たちは恵まれているな」という意見も出てくる。被災した側は、仕事もなくなり、することがなく、被災者意識が高くなるため、いろんなことをしてもらおうのが当たり前になってしまう。どこまでをボランティアの人に任せれ

ばよいのかが難しいと感じた。

(3) 伝えたいこと

- ・ 神戸に地震が来るとは思っていなかった。災害はいつ来るかわからないから、備えておかなければならない。
- ・ 開き戸の食器棚はストッパーをつけておく。
- ・ 棚の上にものを置くときには、天井との隙間をなくすように置く。
- ・ 平屋の屋根の軽い家が地震に強い。(田舎の駅など)

3 祖母の話

地震発生当時、祖母は祖父と一緒に赤穂市の自宅で寝ていた。突然、大きく横に揺れだし、家の梁と柱がミシミシと鳴り出した。寝室の天井の上を物置にしていたため、それが落ちてきそうで、とても怖かった。それ以来、家をリフォームするまで天井の上に物を置くことはやめた。

神戸の状況は、いつものように朝ごはんを食べ、テレビをつけた時に「えらいことになってるわ」と初めて知った。赤穂市からは、船と車で支援物資を送っていた人もいた。

大祖父が「戦争の爆撃でやられたのとは全然違う。テレビや新聞とは違うんじゃない」と言っていたこと、魂が抜けたようになっていたことが今でも忘れられない。

4 父の話

地震発生時は、赤穂市にある家で寝ていた。突然、大きく横に揺れだし、「長いな～」と思った。

ちょうどその日は大阪にコンサートへ行く予定だったため、「コンサートはいけへんな」というくらいしか考えていなかった。しばらくしてからテレビで神戸の様子を見て、それどころの話ではないことに驚いた。

父は小学校教諭をしている。発生から3週間ほどたった2月ごろに神戸へ行き、学校が避難所になっているため、夜も帰れないくらい休みなく働いていた神戸の小学校の先生の代わりに、夜の電話番号、なにか質問されたときに答えるというのをやってくれないかといわれ、手伝いをしに行った。3人ずつの交代で避難所になっている学校へ行き、夜の当番や物資の仕分けをした。そのころにはもうだいぶ復旧してきていた。

5 話を聞いて

大祖母さんは、昔のことだからあまり覚えていないかもしれないと言いながら、初対面の私にたくさん話をしてくださった。そして最後には「聞きに来てくれてありがとう。本当によかったわ」と言ってくれた。震災を経験していないからこそ相手が伝えようとしてくれたり、聞くだけでも誰かの役に立てたりすることがあると思い、嬉しかった。

身近な人の体験を聞くことは初めてだった。それぞれの人がいろんな思いをしてきて、忘れられないことがあり、今日まで生きてきたことを初めて近くで感じた。自分が聞いて終わりではなく、これから伝えていくことを忘れないようにしたい。

大祖母さんや家族の話を無駄にはしていない、自分が災害にあった時に、あの時もっと伝えていれば、こうしていればと後悔しないようにしたいと強く思った。

ボランティアする人が何もかもをしてしまい、助けすぎてしまうというのは前から気を付けなければいけないと思っていたが、される側もそれが当たり前だと思わないようにすることも大切だと感じた。支援する側は「支援している」という優越感を持たずに、支援される側は「なんでもやってくれる」と思わないように、自分がどちら側になったとしても考えられるようにしていきたい。

6 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

中学3年生の時、私は自分の行きたい高校がなかなか決まらず、迷っていた。将来の夢も見つからず、成績も微妙なまま1学期が終わり、焦りを感じていた時、私が地域の防災対策を高校生がしている様子を映したテレビを観て小さく「楽しそう、やってみよう」といったのを父と母が拾ってくれ、受験を勧めてくれた。防災には元々興味がないわけではなかったが、「舞子高校 環境防災科」というのは聞いたことがなく、学校にもパンフレットがなかったため、あまり乗り気ではなかった。中学校の先生と相談すると、「すべり止めの私立高校も受かっているし、合っていると思う。受けてもいいんじゃない？君な

らいける。」と言ってくれ、それならと受けてみることを冬休みに決め、夢をみつけるきっかけにもしてみようと思った。

(2) 入学してから

合格発表の日、自分が合格したのを確認したとき、嬉しいという気持ちもあったが、いざ合格したとなると、家は遠いし、友達もいないというような不安が多く、「受かってしまった」という気持ちのほうが大きかった。

この学科を受けると受験直前に決めたことと、いわゆる「未災地」から来たことで、災害や防災に対する知識や意識を十分に持っているわけではなかった。そのため、学校が始まり、防災の専門科目の授業を受けだしたとき、周りの子たちが「自助・共助・公助」や、地震の計算、震災の発生日時などをすでに知っていたことに驚いた。「自分は後れを取っている」と差を感じ、追いつけるように一生懸命やろう、遠いからという理由で手を抜いたりしてはいけないと初めて思った瞬間だった。

入学してすぐに熊本地震が発生した。今までは、「たまたまついてくるニュースで災害のことが流れていたらみる」程度だったのが、その時から「自らニュースをつけて災害の情報を得る」というふうに分の中での災害に対する意識が変わった。

初めて参加したボランティアが熊本地震の被災地支援募金活動だった。初めてで緊張していたが、振り向いてくれたり、神戸は募金してくれたりする方がたくさんいて、とてもあたたかさややりがいを感じた。そのボランティアのおかげでこれからはいろいろなボランティアに参加し、役に立ちたい、防災を広げたいと思った。

私は、よく小学校や幼稚園、聴覚特別支援学校や特別支援学校などへの出前授業のボランティアに参加した。どの学校へ行っても、子どもたちが素直に聞いてくれ、とてもうれしかったし、発表が苦手な私に少し自信を持たせてくれた。そして、それぞれの子たちに対する伝え方があることを知った。クイズや劇などで楽しく学んだり、特別支援学校なら可視化をしたり、聴覚支援学校なら手話を使ったりといったことだ。自分が学んだことをどう伝えるのかをしっかりと考えることの大切さを知った。

7 東北への訪問

私は、環境防災科に入学してから、1年の夏休みと春休み、2年の夏休みと春休みの計4回東北へ行った。夏休みには、ジュニアリーダーとして参加した。大川小学校を視察したり、多賀城高校と交流をしたりして、今まではテレビや写真などでしか見たことがなかったものを、初めて自分の目で見て、聞いて、たくさんを感じ、衝撃の連続だった。二度と同じことを繰り返してはいけない、地元に帰って伝えなければと、語り継ぐことの大切さを実感した。

春休みには、夏休みに神戸で交流した宮城県の小学生に会いに行った。夏休みでは初めて、幼稚園児のときに震災にあった子たちと触れ合った。その時、震災のときのことを話してもらった時間があつた。話していくうちに、親が亡くなったという子や、話し出すと泣き出してしまう子が何人かいた。いつもはとても楽しそうに遊んでいた、笑っていたりする子たちにも、幼かったときに起こった出来事が7年経った今でも大きな存在として、心に深く残っていることを知った。

これからは、東日本大震災を経験していなかったり、あまり覚えていなかったりする子たちが大きくなり、風化していくと感じることが多くなると思う。そんな中でも、震災になんて負けずに、たくましく大きくなってほしいと思った。また、自分もたくさんの人に伝え、風化させないようにしたい。

これから、たくさんの方が復興している、まだまだ復興していく東北に足を運び、震災を忘れないようになってほしいと強く思う。

8 夢と防災

今の私にはまだ具体的な夢は見つかっていない。しかし、そんな中で考えた今の私の夢とは、家族を守る強いお母さんになることだ。

こう思ったきっかけの一つは、春休みに読んだ本でお母さんという立場はとても大切だと思ったからである。その本の内容とは、自閉症の子を持つお母さんの東日本大震災のお話だった。災害が起こった時には、お母さんが少しだけでも知識を持っていれば、対応できることや行動がしやすいことがたくさんあることを改めて知った。だから、自分もお母さんになる時には、強いお母さんになりたいと思った。

お母さんは、災害が起こった時、家族の中心、そしてリーダーにならないといけないことがあるかもしれない。

もし、災害時にお父さんが仕事に行っていたり、行かないといけなくなったりしたとき、お母さんが支えないといけない。女だからと言って頼ってばかりではいけない。

家族の安否の確認をして、まずは生き延びることを考え、情報を集める。そして、そうなったときに困らないように日頃から非常持ち出し袋を用意しておいたり、家具の固定をしたり、家族で地震が起きたときの集合場所などを話し合ったりと、基本的な対策をきちんとやっておきたい。

そして、地域の人との関わりも大切にして、いざというときに助け合えるような関係を築いておきたい。田舎だと自然に関係が築かれていく傾向があるが、都会だとマンションだったり、若い人が多かったりして難しいところがあるかもしれないので、場所によって、臨機応変にいろんな方と接していけるようになりたい。もしペットがいれば、動物のこともきちんと考えて、家族で対策をとっておきたい。

そして、子どもや近所の人など、たくさんのことを考えて行動しなければならない。そのときのために、お母さんは自分の子どものこと（個人情報、性格、好き嫌い、落ち着く方法など）や、自分が今住んでいる町のこと（被害想定、避難場所・避難所の位置確認など）をきちんと把握しておきたい。

母親としても環境防災科の生徒としても、自分が高校で学んだことを、ボランティアや出前授業で培った子どもに分かりやすく伝えたり教えたりすることを活かして伝えたい。これまでで習ったり学校で習ったりする防災知識はもちろん、こうすればもっと良くなるというようなことも伝えていきたい。専門的な話をこちらから一方的にするだけだと、聞く側も疲れると思うので、話し方も考えられるようになりたい。

今のように防災に関わることは少なくなったり、周りの人と防災や災害について話せなかったりする壁にもぶつかったりすると思うが、お母さんとして、その地域に住む1人として関わる方法、広げる方法を見つけていきたい。

9 最後に

今回、語り継ぐを書くにあたって、たくさんのお話を聞き、阪神・淡路大震災を忘れてはいけないと改めて強く思った。それぞれの人それぞれ思うことがあり、今もなおいろんな思いを抱えている人がいること、それがどの災害にもあることを忘れてはいけない。

平成最後であるこの年にも、地震、豪雨災害、台風と例年にも増してたくさん災害がとても多く起こった。災害は遠い存在ではなく、日本というこの災害大国に住んでいる以上、これから生きていく上で、常に隣り合わせであること、また、災害の恐ろしさを改めて実感させられた。

つい、まだ大丈夫だと正常性バイアスが働いてしまいがちだが、いつ起こってもおかしくない、災害は忘れたころにやってくるという言葉をおぼえて、備えをしていきたい。また、備えも「後でやろう」「また今度にしよう」ではなく、思ったとき、教えてもらったときにすぐするようにしたい。周りの人もみんなそうなるように、社会全体の防災意識が高くなってほしい。

今年は多くの災害が起こり、社会が災害に注目していると思う。言い方が良くないかもしれないが、これから起こるさらに大きな災害に備えたり、私たちが防災を広めたりするいいタイミングかもしれない。

まだまだこれから来るであろう災害に、たくさんの方が残してくれた、伝えてくれたことを少しでも活かし、1人でも多くの命を救えるように、これからの時代を担う自分たちから語り継いでいきたい。

「語り継ぐ」

住田 萌栗

1 はじめに

1995年1月17日5時46分、阪神・淡路大震災が発生した。今は2018年となり、震災から23年が経過した。年が経つにつれ風化がみられる。地震で大きな被害を受けた神戸も今はその面影がほとんどなく、地震が起きたとは全くわからない街並みとなってしまった。しかし、私たちの次世代のために語り継いでいかなければいけない。だから、阪神・淡路大震災が発生していたとき、神戸で暮らしていた人はどのような体験をしたのか、身の回りの方々や私が体験聞いてみたいと思った方々にお話していただいた。いつも隣にいる人なのに、なかなか当時の話を聞くことがこれまでにない方々だった。

2 母の1.17

当時、私は神戸市垂水区星陵台の社宅に夫と暮らしていた。

(1) 阪神・淡路大震災発生

魚を焼いたり、お味噌汁をつくったり、朝ごはんの支度をしていた。そしたら「ウー」という音が鳴り、あれっ地震かな？と思った。でもすぐ収まるだろうなと思い、身構えることもなく、そのままの状態でしたら、地震はおさまるところか揺れがどんどん激しくなり、突き上げられるような感覚になった。おさまる前に台所はそのままにして、夫が寝ていたところに行き、布団で身を隠した。地震がおさまると台所に行こうとすると家具は倒れ、食器も壊れてしまっていた。そんなことよりも、当時飼っていた猫が、地震に驚いたのかどこかへ隠れてしまった。だから、見つけられるまで1時間ほどしばらく捜し続けた。やっと見つかった後、親の安否確認のために電話をした。夫の両親はすぐ安否が確認できたが、自分の母はなかなか連絡がつかなかった。電話がつかないのは電話が地震の影響でひっくり返ったままで、それを母がまだ片づけができていないからだろうと思った。

(2) 祖母の安否 垂水区から兵庫区へ

部屋の片づけをしながら母のことが心配になり、兵庫区にある母の家に行くことにした。車で行くとしたが、渋滞の影響で全く前へ進むことができなかったため、一度家に戻り、バイクで夫と2人乗りをして再度向かった。ラジオのニュースでは最初に垂水区のマンションの被害について話されていたし、震源は淡路の方だから淡路から近い垂水の被害が一番大きいと思っていた。でも、須磨あたりからどんどん景色が変わってきた。見慣れた建物が倒壊していて、神戸市長田区の西代まで行くと煙が見えた。高架道路にひびが入っていたが、その時は通ることができた。でも、避難している車がたくさんでなかなか前に進むことができない。そのうち左右が火事で戦時中のような様子になっていた。消防車も来なくて、家から避難してきたであろう人たちは、どうすることもできず車の中に避難していた。

(3) 祖母の被災

何とか母の家近くに着いた。古い家は倒壊していて、母が住んでいたアパートの前にあったタバコ屋さんやペションコになっていた。そこに住んでいた人たちを救出するため、近所の人たちが協力し合っている様子があった。母のアパートは傾いてしまっていて、1階は潰れてしまっていた。2階に住んでいた母は地震が起こった後、同じアパートに住んでいた人と駅の方に行っていたらしく、帰ってきたところで偶然会うことができた。とりあえず出せる貴重品だけ持って、避難所に指定されていた小学校に行くことになった。母をそのまま神戸市垂水区の星陵台の自分の家に連れて帰りたかったが、バイクで2人乗りをしてきたため、母だけを残していったん家に戻り車でもう一度くることとなった。兵庫区と垂水区を往復している間も悲惨な状況が見えた。近所に普通にあった店は潰れ、見慣れたまちが火事で燃えている様子が映画のような、嘘みたいな、夢のような世界に見えた。そして、やっと母を迎えに行けた時は、もう暗くなってしまっていた。

(4) 自宅での暮らし

家はひびがいて雨漏りがする状態だったが、住むことはできた。ライフラインはすべて止まっていたが、電気は比較的早く復旧した。水は水道局に取りに行ったり、近所の人が水を取りに行くからみんなのタンクなどを集めて、水を取りに行ってくれたりした。垂水の被害しか知らない人は大変だと思ったかもしれないが、兵庫区まで行くと、私たちは被災したとは言ってはダメだと感じた。夫は翌日から会社に行き、復旧のための作業を行っていた。その間、母と二人の時間を過ごした。母は放心状態のような感じで気が抜けていた。様子がしばらくおかしかった。お風呂はガスが使えないから、加古川の健康ランドのようなところに行ったり、鈴蘭台に住んでいた夫の知り合いである方がおいでと、

誘ってくれたので行ったりしていた。トイレは流せないから、たまたまお風呂にためていた水で流した。電気が復旧したときは電気で何とかできるものを求めて、スーパーやコンビニに行った。従業員の方も大変に違いないのに、地震が発生して1週間後にはあけてくれた。ほとんど物はなかったが、買えるものは買って過ごしていた。しばらくは冷たいものしか食べることができなくて、温かいものがほしいと思っていた。兄がそんな状況を聞きつけて電気鍋を京都から持ってきてくれて、すごく助かった。母は5日間ほど私の家で過ごし、そのあとは垂水区にあった父の家で過ごすこととなった。地震が起きた時などに人の優しさや悲しさが見えると思った。この震災が起こったのは、12月にアメリカから帰ってきた矢先のことだった。だから、自宅までアメリカの友達から電話をしてくれた。このとき、アメリカでも阪神・淡路大震災が大きなニュースになっていることを知った。家周辺では、修理が追い付かないため、しばらくの間ビニールシートがかけられている家が多く見られた。母を私の家に呼んで2日後くらいに母のアパートに行き、大事なものを取りに行った。その時、床に転がっていたビールがもう一度行った時には、誰かが家に入り取っていったのか無くなっていた。震災が起こり1週間後、三宮に写真を撮りに行った。若いときによく歩いていた風景が全く変わってしまっていた。

(5) 震災をとおして

震災はいろいろなものを変えてしまう。命が亡くなったり、けがをしたり、人間関係までも変えてしまう。阪神・淡路大震災は、友達と「神戸は天災が少ないからいいところだ」と話していた矢先に起こってしまった。だから全く備えなんてしていなかった。だから、震災が起こり、備えの大切さを知った。震災で一番印象に残っているのは母のことだ。私の母以外の親戚や友達などは被害を受けずに住んでいた。だから、母の気が抜けた様子が忘れられない。そして、震災を経験して思ったことは、当たり前であることが当たり前でなくなることがある。だから、日々の当たり前である生活や人間関係を大切にしなければいけないと感じた。

3 父の1.17

(1) 地震発生

地震が発生したときは寝ていた。そして、電気がすぐに消えてしまった。そのあとは猫を探すなど妻と同じ行動をしていた。兵庫区にバイクで向かっているとき、震源より遠くなる方が被害が大きくなっていることに気が付いた。須磨区に入るとあちこちで家が倒れていて、長田区に入ると道が陥没したり、火事が発生していたりした。バイクだったため凸凹になってしまっていた道でもなんとか進むことができた。

(2) 会社へ出勤

地震が発生した日は義理の母を探すため、会社には行くことができなかったが、次の日から出勤した。電車は1週間くらい動いていなかったためバイクで会社に行った。会社の工場が液状化で泥だらけになってしまっていた。被害の状況を確認するため1週間は泥をスコップで取り除いていた。泥を取り除くと、工場の床の基礎が破損していることがわかり、工場を修理するため、工場の中にあるすべての機械を外にだすことになった。その時、港の壊滅的な被害のため船の荷物関係で、港で働いていた人たちの仕事がなくなってしまっていた。そのため、その人たちが工場にきてくれて、工場の機械を運び出す作業を手伝ってくれた。1週間ほどかかり、工場の中を空っぽにすることができた。そこから復旧のため、基礎の修理がはじまった。平日は工場の復旧活動に関わり、土日は生産活動のために、長崎の同じ会社に行くために姫路まで電車で行きそこから新幹線に乗って行った。このような生活が3か月くらい続いた。3か月後、神戸の会社でも生産できるようになり、震災前のような仕事ができるようになった。

(3) 生活

食事は会社にあった缶詰やレトルトカレー、パックのごはんなどで何とかしていた。電気の復旧は比較的早かったので、温めて食べることができた。こういう災害が起きてライフラインが止まったとき、水はとても貴重となるためカップラーメンやカップ焼きそばといった救援物資は贅沢品であまりうれしくなかった。それにカップ焼きそばはその貴重な水を捨てなければいけないため送ってきても、食べることができなかった。会社の食堂では、日持ちがする、あんぱん、メロンパンというような菓子パンがたくさん置かれていた。日持ちがしないサンドウィッチなどの総菜パンはなかなか出回らなかった。食事をするときには地震で食器が割れてしまったため、紙皿や紙コップを使っていた。その、紙皿や紙コップを使う際も汚れないように、サランラップを敷くなどして、何度も使えるように工夫した。お風呂は1週間くらい入ることができなかった。震災が起きた季節が冬で、あまり汗をかくことも無かったため、まだ良かったなと思った。これがもし、夏だったらと考えると大変なことになっていただろうなと

思った。

当時は携帯がなかったため連絡を取るのにとっても苦労した。公衆電話に人が殺到し、長い列をつくり、電話で安否確認を行っていた。地震の時はなかなかつながらない理由の1つとして、回線の独占があるからだと思った。だから、今は携帯もほとんどの人が持っているし、メールで安否の確認をしあうと、阪神・淡路大震災のときのような状態にならないと思う。

4 話を聞いて

この「語り継ぐ」のインタビューをするまで両親からきちんと阪神・淡路大震災の経験を聞いたことがなかった。環境防災科に入り、たくさんの方々の経験を聞いていく中で、ずっと母や父が経験した話を聞いてみたいと思っていた。だが、いつどのように話を切り出せばいいのか分からなかったし、もしかしたら、両親は震災の話をあまりしたくはないのかもしれないと思っていた。それに、いつもそばにいる人だからこそ、真剣な話をどのような表情で聞けばいいのかという恥ずかしさから聞くことをずっと後回しにしてしまっていた。でも、今回話を切り出してみると嫌な顔をすることなくすぐに話し始めてくれた。

実際に聞いてみて、私は驚いた。私の祖母が兵庫区に住んでいて、地震でとても大きな被害を受けていたとは知らなかった。祖母は身近にいた人だけれど、「地震は怖かった」ということしか聞いたことがなかった。祖母は地震が発生してから、しばらくして京都に引っ越した。「地震が怖かったから、もう神戸には住みたくない」ということが引っ越した理由だと母から聞いたことがある。祖母が住んでいたアパートは、1階部分がつぶれてしまうなど大きな被害のため、全壊の認定を受けた。祖母はそのアパートの2階に住んでいた。想像するだけでも怖くなってしまふ。そんな状況に祖母がいたなんて信じられなかった。そして、生きてくれていてよかったなと思った。両親の友人や私の親戚の多くのほとんどの人が神戸に住んでいたのに、亡くなってしまった方や大きな怪我を負う人がいなかったのは本当に稀なことで幸せなことだと感じた。

そして、父は家族がいるのに震災の次の日から出勤し働いていた。しかも、平日だけではなく土日は長崎に行かなければいけなかった。家族のこのほうが大事にしたいはずなのに、会社を優先しなければいけない状況はとても辛かっただろうなと思った。でも、父は家族の安否が取れていたから、まだ良かったほうかもしれない。会社に来ていた人の中には、まだ家族や友人の安否が確認できていない人が作業をしていたかもしれない。そう思うと、神戸の復旧のために働いてくれた方々に本当に感謝しなければいけないなと思った。

5 私の将来の夢

今の私の将来の夢は具体的ではないし、これからまた変わるかもしれない。でも、この環境防災科で学んだことは必ず生かしていく。防災は必ずどこでも必要となってくるということは知っている。例え、職業につかなくて家庭を守る人になったとしても、やることはたくさんある。そして、地域の中でも私しか知らないような知識がたくさんあるだろう。

私の将来の夢は、国際協力、国際ボランティアとして活動することである。この夢は漠然と中学校から持っていた。この夢を持つようになったきっかけはきちんと覚えていないが、1つは世界の文化に興味があったということだろう。中学校から地理を学ぶようになった。どの勉強も得意ではなくて、興味もなかったが、地理だけは先生の話を中心に聞き、課題にも張り切って取り組んでいた。世界のことを学ぶことがとても楽しかった。今も、その気持ちは変わっていない。もう1つの理由は東日本大震災だろう。東日本大震災は私が小学4年生の時に発生した。津波がまちを飲み込んでいく映像を見て、衝撃だったし、本当に起こっていることだと信じられなかった。しばらくたって、将来私はこのような災害で困っているような人の役に立てる人になりたいと考えるようになった。これは環境防災科の受験を決めた理由でもある。このようなことを考えているときに世界で困っている人たちを知った。ニュースで知る、世界の現状。紛争、感染症、食糧不足、子供の労働、災害…。日本では困ったことがないようなことばかりで困っている人が世界にはたくさんいる。そして、私たちがどれほど恵まれているかということを知った。多くの日本人はこのことを理解しているはずなのに、当然のように食べ物を捨てる。賞味期限が切れたから、もうお腹がいっぱいだから、美味しくないので。という日本人の感覚や自分の生き方が恥ずかしく感じるし、情けなくなる。だから、恵まれている私にできることを困っている人たちにしたいと思ったのだと思う。高校に入り、JICAやCODEの吉椿さんのお話を聞いて、しっかりとした将来の夢になった。

具体的には何も決めていない。ただ役に立ちたいというのが今の気持ちである。国際協力としてボランティアをするのは、専門の知識がどうしても必要となってくる。私は防災を専門に学んでいるが、まだ教えることができる立場ではない。だから、これからも防災を学んでいき、人に教えられるような立場の人になりたいと思う。それに、世界の防災がどこまで進んでいるのかということもわかっていないから、現地に行って実際に見るということから始めたい。また、私は海外の文化に興味があるため、それを防災に繋げていきたいと考えている。例えば、世界には女性や身分差別が残っている国がある。これは昔からのその地域の文化である。このような文化があることを知っておくことで、その地域ではどのような支援が必要で、どのような防災をしておくべきなのかに配慮できるようになるだろう。このように、自分が好きなことの知識をさらに深め、それを将来に繋げていきたいと思う。

このように、私の夢は具体的にどんなことがしたいのか決まっていない。だから、何がしたいのかが決まるまで、役に立ちそうなことをコツコツとしていきたい。例えば英語の習得である。世界にはたくさんの方の言語があるが、英語で通じることが多いと思っている。だから、外国人の方とコミュニケーションを取るために英語が話せるようになりたいと思った。そして、英語がある程度話せるようになったらほかの言語にも挑戦していきたいと思っている。この他に、私は色々な資格を取ってしていきたいと考えている。具体的にどのような国際ボランティアがしたいのか決まっていないが、国際ボランティアをするためには、ライフラインのことや建築のことなど、何か専門知識が必要になってくる。防災のことはもちろんだが、様々な場面で活躍できる人になりたいという思いがあるので、頑張っていこうと思っている。

6 最後に

阪神・淡路大震災では甚大な被害を受け、6,434人という多くの犠牲者がいるのにも関わらず、風化されてしまいそうになっている。風化されることで将来、防げたはずの犠牲者がでてしまうかもしれない。そうさせないためにも語り継ぐことを大切にしていきたい。そして、経験した話を聞くこともこれからも続けたい。阪神・淡路大震災を受けた時、障がいを持っていた人だったり、外国人だったりなどハンデがあった方々もたくさんいるだろう。また、私たちが全く知らない被害で苦しんでいる方々もいるかもしれない。このような、あまり知られていない人の経験も聞き、伝えていきたい。そして、それを活かして防災活動を行なっていきたい。

今回、この「語り継ぐ」を作成するあたり協力してくださった方々、本当にありがとうございました。

未災者に伝えるのか、被災者に伝えるのか

住吉 悠

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していない。震災の6年後に生まれたのだから仕方のないことだ。

しかし、震災と無縁の生活をしてきたわけではない。

私の家族は全員が被災者だ。それも、舞子高校のすぐ隣のマンションで被災したという。小さい頃から震災に関する様々な話を聞いてきた。家族と話し合うことも多々あった。小・中と、震災学習を重ねてきた。そして3年前、私は舞子高校の門をくぐった。

今思えば、震災と無縁どころか、ある意味では密接に関わってきたのかもしれない。

2 母、祖母の経験

「あの日は成人式があったからなあ……戻って来とったんや」

母はそう前置きをして話し始めた。その当時、母は東京で働いており、家を出ていた。しかし、ちょうど成人式を迎える、ということで実家に戻ってきていた。私の家族は幸か不幸か、死者どころかケガ人もいなかった。お気に入りの食器がことごとく割れたが、しかし人命と比べると些細なものだ。目立った被害は家財道具と住居の破損のみだったのは不幸中の幸いだ。

地震発生時、母は寝ており、祖母は起きて朝食の準備をしていた。叔父、叔母、祖父は母と同じく眠っていた。低い地鳴りの音がしたと思えば、すさまじい衝撃に襲われる。当時母たちが住んでいたのは舞子高校のすぐ隣で、マンションの9階。自分の部屋に直撃したかのような衝撃に対し、トラックが突っ込んできた、などという事故である可能性はすぐに打ち消した。

地震の揺れに対して、母と祖母が口をそろえて言ったことがある。

「地震の揺れが1分以上続いたんちゃうか思った」「1分くらい揺れてたんとちゃうかな」

実際のところ、揺れは1分に満たない。しかし、長く感じさせるほどの揺れだった。

この時、紙一重で生き残った人物がいる。当時高校生だった母の弟、つまり私の叔父だ。

叔父は箆笥と本棚の間で寝ていた。地震の揺れによって箆笥と本棚の両方が倒れてきたが、互いに支えあってわずかな空間が生まれていた。叔父はその隙間で生き残ったのだ。そして、もう一つ。その時叔父は地震によって目覚めて——いない。もし目覚めていたら、身を守ろうと何か行動していただろう。しかし、叔父の場合は動かなかったことが功を奏した。動いていたら叔父の命はなかつただろう、と祖母は話す。というのも、箆笥と本棚が互いに支えあってできた空間はとても狭く、身動きが取れないくらいだったのだ。寝返りの一つでも命の保証はできない。叔父は、いくつもの幸運の結果生き残った。

揺れが収まった後、食器棚の扉を抑えていた祖母は風呂場に行き水を汲んだ。数分すると水は止まってしまったが、隣の住民は風呂にひびが入っており、風呂に水を溜めることができなかったことから、この点でも母たちは幸運だったといえる。

母は揺れが収まるとくるまっていた毛布から抜け出し、妹（私の叔母）と弟と父（私の祖父）の安否を確認した。同じ家の中とはいえ、リビングと和室にはテレビがあり、大きめの電子レンジがあり、もちろん冷蔵庫や洗濯機もあった。しかし、先ほど述べたとおり、ケガ人はいなかったため、起きていなかった叔父を除きすぐに合流できた。叔父も、祖父によって箆笥と本棚の間から抜け出すことができた。

ここで、再び幸運な出来事を記そう。リビングのテレビは倒れていたが、その時リビングにはだれもおらず、また和室のテレビはほとんど動いていなかったのだ。和室のそれは、リビングにあったものよりも大きく、動いていればとんでもない凶器になっていたことだろう。電子レンジは宙を舞ったが、だれにも当たっていない。私の家族は、いくつもの幸運が重なったおかげで誰もケガすることなく生き残った。

しかし、さすがに住居そのものは無事とは言い難い。食器はことごとく割れ、リビングは物が散乱し、生活ができるような状況ではなかったのだ。そこで、一時的に舞子高校の体育館に避難した。……とはいえ、翌日には自宅の片付けのため避難所を出ていった。避難所を出た理由としては、「人が多すぎて、休めへんかったから」と言っていた。

祖父、祖母には兄弟が多くいたが、彼らも全員無事だった。地震発生後すぐは連絡が取れず、安否がわからなかったがしばらく経ってから全員が無事であると判明。このことについて祖母は「幸運やけど、家族のほとんどを亡くしたのは人にちょっと申し訳ない」と言っていた。

地震発生後しばらくは小学校の避難所の方で配給をもらい、自宅でそれを食べる、という生活を続け

ていた。一番困ったのは水を自由に使えないことだ。トイレに行くことを少しためらった。ガスに関してはそれほど困っていない。普段からカセットボンベをよく使っていたためだ。

母は仕事があったため、東京に戻ろうとしていた。しかし、地震の影響で近隣の電車が止まっており、北の方を回って名古屋まで行き、そこから東京まで行った。東京に帰り仕事に出ると、「大丈夫だった？」「神戸大変なんだった？」「無理に仕事しなくていいよ」など、心配の声をたくさんかけられた。母は、地理的な距離はあっても「誰かを心配する」といった心理的な距離は小さいものだと感じた。

3 北海道胆振東部地震と叔父家族

2018年(平成30年)は日本の災害史に刻まれることだろう。6月に発生した大阪北部地震を皮切りに数多くの災害が発生したためだ。その中の一つ、9月6日の未明3時8分ごろに北海道で発生した地震、平成30年北海道胆振東部地震について述べたい。

奇しくも私の誕生日からちょうど半年後、叔父の誕生日の4日前に発生したこの地震で、私の叔父は再び被災者となった。前述の筆筒と本棚の隙間で生き残った叔父だ。叔父は現在、北海道苫小牧市に住んでいる。結婚を機に本州を離れ、奥さん(叔母と呼称する)の故郷、江別市に近い場所で居を構えている。一人の子宝にも恵まれた。そんな幸せいっぱい叔父家族を襲ったのが地震だ。

札幌市よりも震源に近い苫小牧市は震度5強だった。その時叔父は自室で就寝中、叔母は3歳の子ども(従妹と呼称する)とともに就寝中だった。人的被害はなく、物的被害もほとんどなかったが、従妹が夜泣きをしたり叔母が不安でなかなか寝付けなくなったりした。叔父は阪神・淡路大震災を就寝中とはいえ経験していたこともあり、家族を支えたという。新築で耐震基準を満たしていたことも大きい。

しかし、大規模停電の影響は大きかった。9月だったので気候的な問題はあまりなかったが、情報を得られず困ったと電話越しに言われた。私たちも安否はわかっていたが、満足に連絡が取れず不安だった。

4 話を聞いて感じたこと

地震当日の話を中心に聞いていたが、私の家族は本当に幸運だったと思う。被害らしい被害といえば家財道具と住居の破損のみ、人的被害はゼロである。また、住居の破損といってもひび割れ程度のものだ。隣家のように風呂が使えなくなったわけではない。少し片付けただけで住むことが可能なレベルの破損だ。

祖母の兄弟は地震のあと亡くなったが、災害関連死などではなく病に負けた。北海道胆振東部地震でも亡くなった人はいない。つまり、地震が原因で亡くなった人は私の身近にいないのだ。

私が家族の被災経験を聞くのはこれが初めてではない。小学生の頃から、幾度となく聞いてきた。しかし、感じ方は話を聞くたびに変わっている。小学生の頃は、「へー、そうなんだ」。中学生の頃は、「大変だったんだなー。でもみんな無事ってすごいなー」。そして今は。

もし叔父が寝返りを打っていたとしたら、筆筒か本棚に押しつぶされていたろうし、母が成人式で帰ってきていなければ被災することはなかっただろうが、安否がわからないことにもどかしさを覚えていたかもしれない。もし大きい方のテレビを和室に置いていなければ、リビングはもっと酷いことになっていたのかもしれないし、発生した時間が昼間だったらみんなのいる場所がまばらで、安否確認ができなかっただろう。祖父はタクシー運転手だったことから、もしかすると倒れた高速の下敷きになっていたのかもしれないのだ。いくつもの幸運が重なった結果、家族は誰も死ぬことはなく、こうして私は様々な話を聞くことができている。……と、このように思っている。

環境防災科で3年間学ぶことによって、私は様々な視点を得ることができたのだと実感している。それは、同じ話を聞いたのにもかかわらず、感じたことが違うことからわかる。では少し、私について話をしたい。

5 私の今まで

私は家族の中で唯一震災を体験していない。しかし、同年代の中ではかなり震災に触れることが多い方だと自負している。私は小学生の頃から、震災学習を重ねてきた。毎年1月17日が近くなると、震災メモリアル行事をし、講義をしていただいたり『しあわせ運べるように』を歌ったりなどする学校だった。

当時私の住んでいた加古川市では、学校によっては『しあわせ運べるように』を歌わないところもあった。神戸市で生まれ育った人にとっては驚くことかもしれないが、これは事実だ。兵庫県内でも、す

で風化は始まっている。違ふとらえ方をすれば、兵庫県外ではもっと風化している、ということだ。

幸運なことに、小学校に続き中学校でも震災学習を行っていた。東日本大震災が発生したのは私が小学4年生の時のことだったため、そちらの話もあったが……震災学習の大半は、阪神・淡路大震災に関するものだった。例えば、震災当時の神戸新聞社のドキュメンタリーを見たり、神戸市長田区の六間道商店街で商店を営む方にお話を伺ったりなどだ。もちろん、1月17日が近づくと震災メモリアル行事を行っている。私が舞子高校を知ったのはその時だ。

私が中学1年生の時の震災メモリアル行事に当時3年生だった舞子高校環境防災科の生徒が話をしに来てくれた。その時初めて「舞子高校」の存在と「環境防災科」の存在を知り、また母にそのことを話すと「震災前は舞子高校の近くに住んどったんやで」と言われ、重ねて驚いた記憶がある。

中学3年生になって進路を考えた時、真っ先に「舞子高校環境防災科」を思い浮かべた。

今まで防災についてたくさん学んできた、ボランティアにも積極的に参加している、ここで終わってしまっているのか？ いや、続けるべきだ。ならば、目指すべき学校は舞子高校しかない。

漠然とした思いで舞子高校環境防災科に入学したが、4月に一つの大きな災害が発生した。

観測史上初、2度の震度7を観測した地震。平成28年(2016年)熊本地震だ。私たち15期生は入学早々6月に現地で活動することとなった。もちろん、現地で活動することだけがボランティアではない。だが、駅前で募金活動をしているだけでは聞くことのできない声を聴くことができた。

私は垂水駅前での募金活動に幾度となく参加してきた。高校1年生の4月25日に始まり、この3年間での参加回数は群を抜いているだろう。しかし、回数が大切なのではないと感じている。回数よりも継続することに意味がある。だから私は、参加回数をここには記さない。ただ、何度も継続して参加した、とだけ記そう。

継続、という観点で言えば『10年続くボランティア』に2年目から参加している。「災害メモリアルアクション KOBE」という人と防災未来センターが主催の活動だ。このメモリアルアクションは、「震災を知らない世代」である私たちがどのようにして防災、減災に努めていくか、また、阪神・淡路大震災の教訓をどのようにして伝えていくか、といったことを主として高校、高等専門学校、複数の大学が参加している活動だ。この活動を通して、私は自分の未熟さを知ることができたし、自分が誰に対して伝えたいのか知ることができた。

6 自分が伝えたいこと

私が伝えたい相手とは、災害を経験していない「未災者」と災害を経験した「被災者」の両方だ。

メモリアルアクションの活動の中で疑問がわいた。「いろんな活動してるけど、自分がホンマに伝えたいのは未災者なんやろか。もしかして、被災した人にこそ伝えなアカンことがあるんとちゃうか」

確かに、震災を知らない若い世代に防災教育をするのは重要なことだろう。しかし、本当にそれだけでよいのだろうか。私はそうは思わない。何らかの災害を経験したことがあるからこそ生じるであろう「油断」、「判断ミス」。それを防ぐためにも、私は被災経験のある人にこそ防災教育をすべきだと考えている。

「過去にない大きさの災害」は発生すれども、「過去にない小ささの災害」は発生しえない、というのが私の持論だ。普通の日常が災害の大きさ0だと仮定したならば、それより小さくなるはずがない。しかし、大きな災害は極論を言ってしまえばどこまでも大きくなりうる。つまり、過去の災害では大丈夫だったとしても、それが今後の災害に適應されるかといえば、否だ。私は「安全神話」を完全否定する。日本に根を下ろしている限り、私たちは災害と隣り合わせの日常を過ごすことになるからだ。

また、伝える相手としてもう一つ考えているのが、大人世代だ。これは私の経験に基づくものだが、テレビやラジオ、新聞といったメディアに触れない人は『花は咲く』を知らない。悲しいことだが、これは事実だ。また、多くの人々が『しあわせ運べるように』を知らないどころか、阪神・淡路大震災の発生年月日を知らない。兵庫県外に住んでいる知り合い23人に聞いたところ、ほとんどの人が答えられなかった。もちろん、大半が成人済みだ。つまり、風化は私たちが思っている以上に進んでいる。この事実を知った時、私はとてもショックだった。だが、これは防災にあまり触れていない場合では一つの当たり前なのかもしれない。だからこそ、私は大人世代にこそ防災の働きかけが必要だと感じた。

もちろん、そう簡単に物事がうまくいくとは思っていない。私一人にできることは、せいぜい正しい情報を伝え続けることだ。しかし、誰かの心に少しでも引っかかれば、少しは変わるかもしれない。

7 将来の夢

ここからは私情も交えて話をしたい。私の将来の夢はいくつかあるが、その中からイラストレーターだけをピックアップして記したいと思う。

私がイラスト系統の職に就きたいと考え始めたのは小学5年生の時だ。しかし、その当時はイラストレーターではなく漫画家を目指していた。転機が訪れたのは高校2年生の6月頃だ。1枚のイラストを通じて様々なことを伝える、1枚のイラストの中にいくつものストーリーが詰め込まれている。それは私が真に描きたかったものだった。

ここで私が述べたいのはそういうことではないが、前提条件として知っておいてもらいたい。

私が目指す「イラストレーター」という職業だが、その中にも様々な種類がある。キャラクターデザイン、ポスターデザイン、工業・医療系統のイラストレーターなどなど……。これらに共通するのは、いずれも「専門的な知識を必要とする」という点だ。

ここで誤解を防ぐために1つ述べさせてもらおうと、イラストレーターと画家は全く異なる職業である。

具体的にどう違うのかというと、「依頼を受けて綿密な打ち合わせののちに絵を描く」職業なのか、「自分の描きたいものを自由に描く」職業なのか、ということだ。イラストレーターという職業は依頼主がいて初めて成り立つ職業である。

「いつ」「どこで」「誰に向けて」「どのように」そのイラストを使うのか、という用途がはっきりと決まっているのがイラストレーター。それに対し、画家は「誰に頼まれたわけでもなく」描き、販売する職業である。これらを踏まえたくえで私の夢について記したい。

私はイラストレーターの中でも、キャラクターデザインとポスターデザイン、そして防災関連のイラストを中心に手掛けていきたいと思っている。先ほども述べた通り、イラストレーターは「専門的な知識を必要とする」職業だ。この点において、私は防災について「専門的に」学んできたという自負がある。

私は、防災に何の興味・関心も抱いていない人にこそ防災を伝えたい。その時、何が一番手っ取り早いかというと、「視覚的に」訴えかけることだ。しかし、若者の活字離れが問題となる昨今、文字で伝えるのはあまり効果的ではないだろう。そこで私はイラストという形で防災を伝えたいと思った。イラストであればちらりと目にしただけで大体の内容を理解することができる。だが、それでも問題はある。イラストを描いたとしても、そのイラストが目につかなければ意味がないのだ。ここで私がポスターデザイン系のイラストレーターを目指す理由につながる。

例えばまちなかに貼ってあるポスターに防災関連のものが混ざっていたとしよう。まじまじと見つめる人はほとんどいないだろうが、目の端には映っている。何度も目にすればおのずと記憶されるものだ。

私はそういった形で、ほんの少しずつであれ防災を伝えていきたいと思っている。

8 最後に

私が先ほど述べた「夢」は、本当に夢物語のようなもので現実化するかわからない部分が多い。しかし、だからと言ってあきらめるつもりは毛頭ない。

この「語り継ぐ」の執筆中も、大阪で震度6弱を、私の住む神戸市垂水区では震度4を観測する地震が起きた。……だというのに、震源に近い大阪府在住の知り合いはあろうことか「地震の揺れが絶叫マシンみたいで楽しかった」と言っていた。これを聞いた時、私は信じられなかった。

その時母と祖母は外出中で、私は自宅で一人きりだった。私は突然の揺れに対して恐怖のあまり身動きが取れなかった。震度4でそれなのだ。それに対し、震度6弱で「楽しかった」。別に怖がれ、などと言うつもりはない。しかし、危機感を持ってほしいと思った。

私は災害に対する意識が薄いというのは災害に対する危機感の無さと直結するものなのだと知ることができた。そして同時に、私が防災を伝えるのはそういった人々に対してだ。

「未災者」であれ「被災者」であれ、「大人」であれ「子ども」であれ、災害について正しい知識を持って、自分がそういった場面に直面した時に「悔いのない行動をとってもらいたい」がゆえに、防災について知ることは重要だと思う。

私は、災害で失われる命を少なくしたいからこそ、阪神・淡路大震災を経験していないが伝える側でありたいと思ったのだ。もちろん、知る努力はする。

たくさん話を聞いてきたからこそ言えることは、「たくさん聞いて、自分の中で混ぜ合わせて1つにする」作業は大変だが最も重要なことである、ということだ。

長くなったが、ここまで書き連ねてきたことはすべて私の思いそのものだ。私しか理解しえない部分

はもちろんある。しかし、こういった人間もいるのだと心の隅にでも留めておいてもらえたら私は嬉しい。

最後に、どうか災害を侮らないでほしい。人間は非日常に対し、正しい行動をとれなくなりがちだということを記して、私の話は終わりとさせてもらおう。

——私を育て、私に災害経験を話してくれた母と叔父と祖母に最大の感謝を。

「語り合う」

高田 凜太郎

1 はじめに

僕は2001年2月7日に生まれた。阪神・淡路大震災は、小学生のころ受けた授業で初めて知り、その後母から体験談を聞いた。僕は大きな地震を経験したことはないし、残念ながら、その時の思いや感情も想像するしかない。しかし、想像する、「考える」ことはできる。「未経験者だから語り継げない」と言うのであれば、また、同じことを繰り返してしまう。当時を「語り継ぎ」、今を「考える」ことができるのは今を生きる人だけだ。未経験者だからこそできることがある。僕はそう信じている。今からそれを伝えようと思う。

2 母の話

1月16日、夜。神戸市垂水区に住む私は、社会人一年目を迎えていた。「明日も出勤だ」と二階にある自分の部屋に向かった。家は、父、母、自分の三人暮らしだ。そして、いつものようにベッドに入り、眠りに落ちた。

瞬間だった。「ドンッ！！！！」という下から突きあがる重たい衝撃で目が覚めた。「え？」何が起きたのか、なんだろうかと思ったその時、いきなりすごく激しく縦に揺さぶられた。身を守ろうにも、動くことができない。「怖い」や「地震！？」と思う前に、ただただ驚き、何が起きたのかわからなかった。必死でしがみついた。…揺れは1分ほど続いた後ようやく止まり、その時やっと「あ、地震か」と思った。私はとりあえず部屋を出ようと思い、立ち上がった。ベッドの足元近くには本棚が倒れていたが、部屋は暗く、周りの状況ははっきりとはわからなかった。幸い部屋のドアは難なく開き、私は一階に下りて行った。一階に下りると、食器数枚が食器棚の中で割れていること、デロンギが倒れていること以外は特に目立った損害はなかった。父、母はすでにリビングにいた。「地震？」と私が聞くと、母は「南海地震かな？」と答え、すぐに父とともに緊急対応に当たった。当時の父と母の年齢はそれぞれ69歳と、67歳。二人とも戦争を経験しているのだから、すぐに行動を開始していた。まず、雨戸をすべて開け、水道とガスが両方使えることを知ると、すぐさまご飯を炊き始め、鍋、お風呂など様々なものに水を張った。水は出るには出たが、少し茶色がかっていた。テレビをつけると、「大きな地震があった模様です。」とだけ報道していた。少し茶色っぽいご飯五合が炊き上がり、もう一度炊こうとした時、外からガスのおいが漂ってきた。「隣の家かどこかで、ガス漏れが起こっているな」と父が言い、ガスを止めた。その後、庭に炭の火鉢を出してきて、シャケを焼いた。炭火のシャケは皮肉にもすごくおいしかった。ひと段落付いたころ、会社に電話しなければと思い、何回もかけ直したが、会社にはつながらなかった。どうしようかと思っているときに、テレビの映像を見て、「大変なことになっている」と初めて知った。自分が知っている町が燃えているのを見て、強いショックを受けた。昼頃、京都に住む友人から「無事！？」という電話がかかってきた。大丈夫、と伝えるとともに、会社への伝言を頼んだ。友人はテレビの映像をずっと見ていたが、航空撮影がいつも須磨あたりで止まってしまうのを見て、「垂水は壊滅した」と思っていたようだ。しばらくたつと、会社から電話がかかってきて「これそうなら、ホテルを手配するから来てくれ、無理なら1か月休みを取っても構わない」と言われた。幸い、家の被害はあまり大きくなかったため、会社には出勤することにした。ただ、電車は今まで通り走っていたわけではないので、京都のほうを回り、大阪にある会社に出勤した。だんだんと情報が入り、震災の報道が増えていくにつれ、テレビの中の死者の数も日に日に増加していくのが目で見取れた。最初は一桁だったのに、4000、5000と増えていく数字が恐ろしくて、ショックで、目が離せなかった。

3 話を聞いて

当時のことを振り返り、母は「あまり覚えていない」と、初めは言っていた。衝撃と揺れは覚えているが、その後の詳しい対応などについては、話を追っていくにしたがって、だんだんと出てきた。母と、祖父と祖母の良かった点は、決して取り乱したりしなかったことだ。祖父と祖母が戦争を経験していたこともあの緊急対応の早さにつながったのだろう。現在、地震が収まった後に火が付くことはないし、万が一火災が起きたりすると危ないので、すぐにお米を炊くということはやっつけたいが、それより、あの地震の後でそれだけ素早く動ける祖父と祖母の冷静さには驚いた。また、母は「津波の心配はしていなかった」と言った。当時住んでいた家の場所なら、間違いなく来ないとは思いますが、100%とは言えない。また、一連の緊急対応をする中で、「大きな余震が来るかもしれないから避難する準備をし

よう」ともならなかったそうだ。熊本地震が示しているように、余震というのは災害後警戒しておくべき大きなことの一つだ。これらを知っていたら、きっと緊急対応も変わったのではないかと思う。今回聞いた母の話は、自分の周りの人や将来の自分の子供にもしっかりと伝えていきたい。

4 防災教育に「研究」を

ここからは、僕個人がこの環境防災科に入り、考えてきたことを書こうと思う。環境防災科に入るまで、僕にとっての「防災」は、言わば退屈なものだった。毎年、同じ時期に同じような話を聞き、同じような知識をただインプットし、最後は歌を歌って「命の大切さ」に気づく。もちろん、やっていることは素晴らしいし、もし、この「防災教育」を本当に真剣に、意味を考えて受けるならば、間違いなく力になってくれるだろう。ただ、実際にこの「防災教育」が小学生、中学生の僕らのほとんどにもたらしたものは、「防災は退屈で、あまり面白くない『授業』だ」という冷めきった考え方だった。環境防災科に入り、学んでいくうちに「防災は本当に大切で、僕たちのための『生き延びる方法』だ」と思うようになったが、それは、今までのような受動的な「学習」ではなく、「なぜ」必要なのか、「どうしたら」良いのだろうかを考える能動的な「研究」だったからではないかと思う。誰かが発見したことを誰かに教えてもらうこと、これを「学習」だとするならば、自分で調べ、考えて答えを出すこと、これが「研究」だと僕は思う。簡単に言うと、「教科書を見る作業が学習、教科書を作る作業が研究」というわけだ。従来の退屈な「学習」は、それ自体が悪い、というわけでは決してない。最低限の知識は必要だし、ほとんどは受け手の気持ちの問題だ。しかし、結果として多くの子供たちが、いや、大人たちが防災に対する関心がないことは、この「学習」のせいだと思う。

「研究」と聞くととても大それたことのように聞こえるが、簡単に書くと、「自分で考える」ということだ。災害時、一番大切なものは間違いなくこれだと僕は強く思う。年齢、場所、状況にかかわらず、「自分で考え、行動する」ことは何よりも重要だ。なぜなら、「自分の命は自分で守る」しかないからだ。小学生であれ、中学生であれ、老人であれ、隣にいるのがわが子であってもまず、「自分の」命を守る。高台へ走る。これが、多くの犠牲を出しながらも、何十年、何百年と津波と戦い続けた、東北の人々の答えだ。これは今なお「津波てんでんこ」として語り継がれている。津波てんでんこの例のように、災害時は何歳であれ（あまりに小さい子はどうしようもないが）、「自分で」判断し、行動しなければならない。それは、「大人がそばにいない場合」に限らず、「大人がそばにいても」だ。大人になるにつれ、人は「バイアス（偏見）」を持つようになってしまう。「災害が起きても、自分は死なない。」「どうせここまでは津波来ないよ。」と、思い込んでしまう（正常性バイアス）。これは、大人が「経験から」物事を判断するからだ。今の状況を「そのまま」受け入れ、どうしたらいいのかを考えることができる大人は少ない。逆に年齢が浅いほうが、余計なバイアス（常識）にとらわれず、「最善」を尽くしやすい。「地震が来た。津波が来るかもしれない。高いところに逃げよう。」一見簡単に見えるこのプロセスも、大人は満足に行うことができない。「地震が来た。津波が来るかもしれない。ああ、でも予想は2m?ならウチは大丈夫だな。」「この前はここまで来なかったし。」「みんなはスマホで動画撮っているし、避難してないし。」常識や経験に乗っ取って判断することは、たしかに普段の生活では大切なことかもしれない。しかし、非常時に自分たちの命を守れないのなら、まったく意味がない。災害時では、大人のその常識や経験が思い込みとなって僕たちの邪魔をする。だから、何歳であっても「自分で考え、行動する」とことは大切なことなのだ。

そしてそのためには、やはり、受動的な「学習」ではなく、「自分で考える」、「研究」を防災教育の場に取り入れていかなければならない。なぜ「必要」なのか、「どうしたら」いいのだろうかを「自分で考える」ことによって自分の命を自分で守る。防災頭巾をかぶって、先生の指示に従わなければならない防災では、自分は守れない。しかし、「自分で考えて、行動する」ことは非常に難しい。つづいて、どうしたらそれができるか、僕なりに考えたことを、書いてみようと思う。

5 自分で考え、行動する力

災害時、「自分で考え、行動する」にはやはり、日常から自分で考え、行動しなければならない。しかし、これが本当に難しい。「自分で考える」ことは、簡単なレベルのものだと多くの人が当たり前に行っていると思う。それこそ、「考えるだけ」なら誰もがができるだろう。しかし、レベルが上がってくると、話は別だ。少し話が変わるが、僕は「考えること＝結論を出すこと」だとは思わない。なぜなら、(特に災害時には)「分からないこと」のほうが圧倒的に多いからだ。分からなくてもいい。解けなくてもいい。考え続けること、思考を放棄しないことが重要だと僕は思う。「考えること＝結論を出すこと」という考

え方では、結論が出ない、答えがない（あるかもしれないが、見つけられない、見つかっていない）問いに対して、思考を放棄してしまう可能性があるからだ。簡単に言えば、難しい問題はすぐ諦めてしまうようになってしまう、ということだ。そして、災害時においての問題はたいてい、これといった正しい答えがない。たとえ分からなくても、不安でも、考えて、考えて、「最善を」尽くさなければならない。思考を放棄し、周りに流され、「考える」ことをやめてしまったら、「最善」は尽くせないだろう。日常から自分で「考える」ためには、一見答えがないような問題に出会ったとしても、「僕には無理だ」と思って簡単に諦めずに、考えてほしい。そうして様々なことに対して、「自分ならどうするだろう」と考えるクセをつければ、非常時でも自分で考えることができると思う。例え答えが出なくても、自分の力で、自分なりに日々様々なことを考え続けることが大事なのだ。

では、考えたことを実際に「行動」に移すには、どうすればいいのだろうか。多くの人が「考える」ことはできても「行動する」ができない理由は、二つある。一つは、「行動には責任が伴う」ということだ。行動と責任は表裏一体だと僕は思う。例えば、「〇〇へ逃げましょう」と提案した場合責任は提案者に大半が行ってしまう。従った方にも責任がある、とも言えるが、大川小学校の例が責任問題の重さを物語っているように、言った人とそれを受ける人の関係の違いによって提案者の発言の重さは変わってくる。「あんたのせいで」、「どう責任をとってくれるのだ」と言われるのが怖くて、提案ができなくなってしまふ。これは逆も言える。先ほど説明したように、思考を放棄してしまった人は、自分で何かを決めるということを嫌う。それはその問題が大きければ大きいほど、必要とされる判断力、決断力が大きければ大きいほど、だ。思考を放棄し、自らの行動(判断)を他人に任せる。言い換えれば、「責任を他人に押し付けている」わけだ。だってあの人ここに逃げようって言ったから。私は悪くないわ。だってみんなあっちが安全だって言っていたじゃないか。俺のせいじゃないだろ。「おまえのせいで。」誰かのせいにしても、一度ミスをしてしまえば、ゲームオーバーだ。一人一人が自らの行動や発言に責任を持って行動するには、やはり、一人一人がそれぞれで考えたことに向き合うしかないと思う。そして例え自分がその状況において責任をとれる立場でなくとも、自分の意見はしっかりと提案し、あとの責任は個々に任せる。最後の最後は、やはり、自分で決めなければならない。これが現状の最善だと個人的に思う。二つ目は「まわりの行動」だ。100人いるうち、避難しようとしているのがあなた1人だけだったら、果たして避難するだろうか。自分以外の全員が、「あそこまで登れば大丈夫だ」と言っている中、あなたはさらに何百メートルも離れた高台の避難所まで逃げられるだろうか。集団に合わせないといけないという日本の価値観は、災害時、邪魔にしかならない。だから、自分が避難すべきだと思ったならそれはするべきだし、もし仮にそれで実際に予想していたものが来なかったとしても、なんのマイナスにもならない。変に周りに合わせて被害を受けるくらいなら、自分だけでも逃げたほうが賢明だ。

6 未経験者に何ができるのか？

以上の話を踏まえて、ここからは未経験者に何ができるのかを書いていこうと思う。災害の経験をしていない者のことを未災者という。結論から言うと、未災者ができることは「備える」ことだ。「語りつぐ」ことができればベストだが、その前に、ケガをしない、災害で絶対に死なない、ということが大前提だ。そしてそのために、過去の災害を知る、自分ならどうするかと「考える」。話を聞く。そして、実際に「行動する」。日々「考える」ことで意識的に備え、実際に「行動する」(備える)ことで具体的にも備える。経験がないから、解らない、では亡くなってしまった人の、残された人の思いを無駄にしてしまう。経験していないけれど、他人事と思わずに備え、そして絶対に死なない。災害経験者にも言えることだが、これが未災者にできることだ。

7 未災者だからこそ、できること。

未災者に何ができるか、は定まったが、「未災者だからこそ」と言われると結構難しい。僕が出した結論は、「距離感が近い」ことによって「防災を伝えやすくなる」ことだ。もちろん、個人個人で災害に備えることも立派なことだが、防災を広め、備える人が増えればもっと素晴らしい。防災を広めるにあたって、経験者が未災者に広める場合は、一方的になりやすいと僕は思う。経験者は未災者に「語る」のである。しかし、未災者が未災者に防災を広める場合は、未災者は未災者と「語り合う」のではないだろうか。どうしたらいいのか、自分達ならどうするか。同じ「災害を経験していない者」として、何ができるのか、同じ気持ちで一緒に「考える」ことができるという訳だ。災害経験者と未災者の違いは、大きな点でいえば意識の差だと思う。一度死ぬほど怖い目にあっている人が持つ災害に対する危機感と、授業で習っただけの人が持つ危機感では大きな差があることは明白だ。それに、経験者はいつの時代も

高齢化していく。年齢がかなり上の、危機感が高い経験者から「語られる」より、同年代の、同じ気持ちを持つ未災者と「語り合う」ほうが、未災者の災害に対する意識は高まるのではないだろうか。簡単に言えば、「先生に教わるより、友達に教えてもらうほうが分かる時があるよね。」ということだ。ただ、ここで大切なことが一つある。教える側、一緒に考えようと言う側の未災者は絶対に間違ったことを言わない、しっかりと学んでから一緒に考える、ということだ。そもそもの狙いは「災害で絶対に死なないこと」だ。そのために防災を伝え、みんなで備える。そして防災に対する「意識」を高めるために、未災者同士で語り合う。「距離感が近い未災者」が「防災を伝えること」によって、経験者にあって未災者にはない意識の差を少しでも縮めることができる。そうすることで、過去の災害も語り継ぐことができる。未災者だからこそ、できることは、「語り継ぐだけでなく、語り合える」こと、「防災を同じ未災者に広められる」ことだ。

8 今、

この「語り継ぐ」を通して今、僕は改めてこの環境防災科に入ってよかったと心から思う。環境防災科に入るまで、なにも考えず、ただただ楽な方に流されて過ごしてきた。それこそ、考えることを放棄し、なんでも誰かのせいにしてなんとなく、日々に流れて行っていたような気がする。「考える」生活に入ってから、毎日発見の連続だ。小さいころのように、純粋な好奇心で何かを追い求めることが、いつのまにかできなくなっていたのだなど、高校生ながらに思う。このCMは、なぜこの音楽を使っているのだろう。なぜ、先生は今こう言ったのだろう。あれはなんだろう、どうしてこうなっているのだろう。興味がわく。知りたい。毎日が、本当に楽しい！そして、それはいろいろな人との出会いのおかげだということも最近分かってきた。少し大人になれたのかもしれない。仲間と、「なんでやろ」といいながら考える時間が、家に帰って家族と話したり、先生に疑問をぶついたりする時間が、とても幸せだ。だからこそ、僕は本気で防災を広めたいと思う。同じ未災者として、来たる南海トラフ巨大地震に備えるために、そして、みんなが死なないために、今、僕ができることをやろうと思う。僕には夢としての具体的な職業がまだない。正直、将来どうなっているのかは見当もつかない。それでも、たとえどんな職業についても、僕は防災をやめない。今まで学んできたことは絶対に忘れずに、地域の、周りの人のために使う。今、環境防災科15期生として過ごしていることを誇りに思い、将来、周りの人の役に立つ人になりたいと思う。そして、この母の話は必ず後の世代に語り継ぎ、周りの人と一緒に考えようと思う。僕が今、できる最善を常に考え、行動し続けていく。

「語り継ぐ」

高橋 史大

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に発生した兵庫県南部地震から24年が経った今、震災に関するテレビの放送や、人々の震災に関する意識や関心は年々弱まっている。風化しているのだ。どうして風化してしまうのだろうと考えてみた。私なりの一つの答えを出してみた。それは、震災を経験していない私たちの世代が原因であるということだ。震災を経験していない私たちが語り継がなければ必ず風化してしまう。しかし、逆を言えば、震災を経験していない私たち次第で風化を弱めることができる。

2 私なりの語り継ぐ

震災を経験していない私たちが語り継げることは少しのことかもしれない。それでも、一人でも多くの人に知ってほしく私たちの世代が語り継ごうと思う。今回、自分なりの「語り継ぐ」をしようと思う。

3 父の話

(1) 震災発生

震災発生当時、父と母は北区にある1階建ての平屋に住んでおり、あまり阪神淡路大震災の影響を受けてはいない。だから、人に助けをもらう立場よりも、人を助ける立場だった。いつものように寝ていると、揺れを感じ飛び跳ねるようにして起きた。慌てて起き、身の安全を守る行動をした。しばらくすると揺れは収まり、落ち着いてきた。身の安全が確保でき、家の外に出てみると、瓦が崩れ落ちていた。その光景にとっても驚いた。家に戻りテレビをつけると、阪神高速の橋脚がグニャグニャに曲がっていて、どこの話？と思った。

(2) 発生1時間後

1時間後、テレビで、長田の街で火事が発生しているのを知った。長田の街は、水道が遮断されていて、なおかつ長田特有の狭い路地があり、消防車も通りたいところを通れず、ただただ見ているだけだった。地震発生当日の夕方頃には、垂水の塩屋に住んでいた、父の兄とその奥さんと1歳のむすめ1人が、父の家に泊まりに来た。父の兄の家は、水道もガスも通っておらず、3人で泊まりに来たのだった。さらに、父の知り合いも水道が遮断されていて父の家に洗濯をしに来た。父の家の近くにあるスーパーには、いつもとは、比べものにならないくらいの人々が来ていて、食料は取り合いで、すべて売り切れた。ブルーシートがとても需要が高く、すぐに売り切れになった。また、ガソリンは、ガソリンスタンドに行っても、たくさんの人がいるということから、1人ちょっとずつと言われた。家を直す工務店に電話が殺到し、対応できなかった家は、ブルーシートで覆うのみだった。電話がつながるはずもなく、当時は、携帯もないため、公衆電話には長蛇の列ができていた。

父が、会社にお弁当を持って行くと、ハーバーランドでは、独特の臭いがしていた。電線が垂れ下がり、道路には、座り込む人もいた。母の知り合いには、三ノ宮のエレベーターに閉じ込められて、どうしようもない人がいた。

4 話を聞いて

今回、初めて両親に詳しい震災当時の話を聞いた。今回の機会がなければ、一生聞くことはなかったと思う。今までたくさんの外部講師や、語り部さんから話を聞いてきたが、それとは違う緊張感があった。父が話しているのを聞いていると実際の風景が頭に思い浮かんできて、とても分かりやすかった。父の話を聞いて、思うことがたくさんあった。初めて聞くことばかりでとてもいい経験になった。震災当時の状況や、父と母の被災状況も知れてよかった。

父と母は、幸運なことに、大きな被害は出なかったが、周りの人や、親戚の人、知り合いの方には大きな被害を受けた方がいた。また、近くのスーパーで食料が売り切れになったことや、ガソリンスタンドでは、ちょっとのガソリンしかもらえなかったことなど、身近にこのような経験をした人がいたことがわかって、よかった。また、高速道路の橋脚が曲がっているのをテレビで見て、どこの話が分からなかった。と言っていて、それほど阪神・淡路大震災は現実味のない被害をもたらすほどの地震だったのだろうなと思った。

今回、父の話を聞いて、色々なことを感じた。自分の家族から聞いたということもあり、少し変な感じもしたが、聞いてよかったと思っている。今回聞いたことを忘れず、無駄にせず、今後も活かせると

きが来たら、活かしていきたい。また、聞いた話を私たちと同じ、震災を経験していない世代の人たちにも語り継いで、少しでも風化を防ぐことができたらと思う。

5 ボランティア

環境防災科はとてもボランティアが盛んな学科だ。私が環境防災科に入学して初めて参加したボランティア活動は、熊本地震被災地支援募金活動だ。垂水駅のいかなご広場で行われた。初めてのボランティアということもあり、不安と緊張でいっぱいだった。活動場所につくと、3年生と2年生がいて、グループ分けをした。すると、先輩方が注意事項や大切なことを私たち1年生に教えてくれた。とても助かり頼りになった。募金活動を始めていくと、たくさんの方が募金をしてくださり、とてもやりがいを感じた。また、被災地の現状を言ったほうが、募金をしてくださるというのを聞いて、なるほど。と思った。しかし中には、私たちの活動に対して、透明性を疑う方がいて、初めての募金活動だった私は怖かった。でも先輩が、臨機応変に正しい対応をしてくださり、とても助かった。活動時間は、短かったが、とても充実し、有意義な時間になった。

また、2年生の時に参加した淡路島で行われた、ボランティアにも参加した。内容としては、防災に詳しい専門家の方が数十名と東日本大震災で被災された方が集まって講義を行うというのが、メインだった。淡路の北淡震災記念館の米山さんもいらっしゃり、とてもためになる話を聞かせていただいた。

さらに、講義の合間に会場に座っていると、テレビ関係の方が来て、取材をさせてほしいと言ってきて、実際にテレビカメラでインタビューを受けた。人生で初めてのテレビカメラのインタビューだった。実際には、テレビでは使われなかったが、初めてのインタビューで、とても緊張して、思うように話せなかった。しかし、このインタビューを受けたことにより、学ぶこともたくさんあったし、インタビューを受けて、思っていたことを話すことの難しさ、緊張している中での言葉遣いなどを学んだ。一人でインタビューを想定して、話すことは簡単だけど、やっぱり、テレビカメラの前での発表は、緊張してしまった。

一番身近のボランティアでは、舞子山手の餅つきに参加した。初めて、地域の方と接するボランティアに参加した。マンションの真ん中にある広場で行った。広場に行ってみると、何人かの方がすでにいて、テント設営などの準備をしてくれていた。私たちの仕事は、臼で餅をつくこと、出来上がった餅をカットしてきな粉をつけることだった。私は主に餅をつくことを行った。最初は、まだ米の状態で、餅になるまでが長く、単調な作業なのでとてもしんどく感じた。

しかし、地域の方と一緒に作業を行うことで、世間話をしたり、学校の話をしたりするなどして、コミュニケーションをとることができた。また、高齢の方のお話し相手にもなったり、子供と一緒に遊んだりして、関わりも持つことができた。

このボランティアで一番思ったことがある。それは、先輩方のすばらしさだ。私が困っていたり、仕事がなく暇をしているときも、先輩方は、仕事をしていたり、後片付けなどをしていた。その姿を見て、自分も先輩方のようになりたいと思った。その時、ボランティアでのあるべき姿を教えていただいた気がした。

6 環境防災科に入って

(1) 環境防災科としての3年間

環境防災科は、防災を専門に学ぶ学科だ。全国に2校しかない。カリキュラムの3分の1が防災の専門科目だ。もちろん決められた教材などはなく、先生方がいいものを選んで私たちに授業をしてくださる。3年間で様々なことを学ばせてもらった。昔の災害の名前や、災害に関する法律に名前など、すべてが初めてだった。しかし、3年間学ぶことによって、防災や災害の知識が全くなかった私でも、人並み以上の知識を得ることができた。授業の内容として3年間で振り返ってみる。1年生では、外部講師の方の講義が主だった。消防署、警察署、水道局などのたくさんの方の話を聞かせていただき、災害・防災を詳しく学ぶための基礎知識を身に付けた。2年生では、1年生の時と比べ、体験型へと変わっていった。印象に残っているのが、六甲山フィールドワークだ。この活動では、断層や岩石を見させてもらった。3年生では、今まで学んできたことを活かして、より詳しく学んだり、将来の夢と防災について考えたりした。

(2) 印象に残っていること

私が環境防災科に入学して一番印象に残っていることは、2016年におこなった熊本地震被災地支援ボランティアだ。その時私は、舞子高校環境防災科に入学したばかりで、ボランティアの行い方や知識、

気をつけることなど全く分からないまま行ったのを覚えている。私は、このボランティアが人生初のボランティアだった。正しい感情なのかかわからないが、被災地にボランティアに行くことはとてもワクワクしていた。自分自身が、被災地に足を運んで人の役に立てると思うととても楽しい気持ちになった。しかし、ボランティアについて全く知識のない自分が、役に立てることがあるのだろうか、迷惑をかけるのだろうかという不安と緊張があったのも覚えている。日程としては、4泊5日だった。

このボランティアで行なった活動の中で特に印象に残っている2つの活動がある。1つめの活動は、熊本城の視察と、熊本城周辺の街歩きだ。熊本城は、今回の地震で甚大な被害を受けた。石垣が崩れてしまったり、瓦が落ちてしまったりなど、とても残念な姿になってしまっていた。街歩きで聞いた方の話によると、熊本城はみんなのシンボルや心のよりどころということを知った。また、町の復興よりも熊本城の復旧を先にしてほしいという人もいた。熊本市民にとって熊本城は、重要な役割を果たしているのだなと思った。

2つ目の活動は、無料食器市だ。これは、荒井勲さんという人が主催しているボランティア活動だ。全国から、使わなくなった食器などを集めて、被災地に無料で寄付するという活動だ。まずは、地域に宣伝のため、張り紙を張っていく作業を行った。団地の掲示板に張ったり、電柱に張ったりした。正直なところ、あまり人は来ないのだろうなと思っていた。しかし、当日になると、開始時間からたくさんの人が並んでいて、とても驚いた。私は、被災者の方が欲しいと言った食器を探す仕事を行った。そこで、被災者の方から、並べていた食器の色違いや、大きさの違うものが欲しいと頼まれることが何回もあった。そんな時は、在庫の中から確認したり、友達に聞いたりして探しまわった。そして、欲しいと言われたものがあり、渡すと「ありがとう」という言葉をかけていただき、とても感動した。被災者の方にお役に立てたと実感することができ、ボランティアの本質がわかったような気がした。このほかにもたくさんのことを経験させてもらったし、感じることもたくさんあった。たくさんの人の協力があってこそこのボランティアだった。この経験は私の人生において、とても重要なものになったし、二度と忘れられない経験になるだろう。

7 将来の夢

私の将来の夢は、消防士になることだ。

消防士になりたいと思うようになったきっかけとしては、私は小さいころから、困っている人や助けを求めている人や助けが必要な人に対して、力を貸したい、その人の役に立ちたいという思いが、とても強く心にあったからだ。そんな中、消防士になりたいと心に決めた出来事が起こった。それは、2011年に発生した、東北地方太平洋沖地震だ。当時私が、小学5年生のときに発生した。そのとき私は、学校で劇をしていた。しかし、劇が終わってゆっくりしていると、東北の方で大きい地震が発生したということを知った。地震が日本で発生するのはあまり珍しいものではなく、私自身も特に異常に思うことなく、地震が起きたのか。と思うぐらいだった。

家に帰っていつものようにテレビを見ようと思って、テレビをつけたら、東北地方太平洋沖地震のことを取り上げている番組だった。地震に対してはあまり興味がなかったのでチャンネルを変えたら、どのチャンネルも東北地方太平洋沖地震のことを取り上げている番組ばかりで、とても驚いた。最初は、流されている家や車、あたり一面水だらけの街の様子を見ていた。それまで町の人が普通の生活をしてきた町が、水だらけになる。その時、初めて津波というものを知った。同時に、自然災害の怖さを知った。地震発生からしばらくたっても、テレビでは東北地方太平洋沖地震のことを多く取り上げていた。しかし、震災当日の日の報道としばらくたった日の報道で差が出てきた。当日はただただ流されている家や、津波に飲み込まれた街の様子を映していたが、しばらくすると、被災者の方を救助している消防士の方、レスキュー隊の方が映っていくようになった。その中には、瓦礫の中で、救助犬を使った救助方法や、ヘリコプターからの救助方法などがあった。このような消防士の方のたくましい姿を日に日に見ていくうちに、人のために働くことのできる職業、自分も困っている方を助けたいという思いが強くなった。

また、中学2年生の時の「トライやるウィーク」では、実際に消防署に行かせていただき、消防士の方と訓練させていただいた。訓練内容は、放水訓練、ロープ訓練、酸素ボンベ訓練などを行った。放水訓練では、水圧がすごく、持っていたホースを放してしまった。しかし、消防士の方が補助をしてくださり、何とか耐えた。その時、消防士の方がとても頼りになったのを覚えている。また、ロープ訓練では、様々なロープの結び方を学ばせていただいた。ロープは消防の中でとても重要な道具のひとつだ。救助の時には必要不可欠だ。いろいろな結び方があり、難しいものもあり覚えるのが大変だった。消防士の

方はなんでも簡単にしていて、さすがだな。と思った。

このトライやるウィークでは、実際に消防士の方と訓練をさせてもらい、とてもためになった。今までは、テレビの前でしか見たことがなかった消防士の方と訓練をすることによって、そこでしか感じることはできないことや、経験ができた。この経験は、自分の将来の夢である、消防士になるという気持ちをより強くした。

8 感想

今回、私が直接父から震災当時の話を聞いたのは初めてだった。あまり被害を受けていない父の視点から見る阪神・淡路大震災は、新しく知ることが多かった。今までの環境防災科での学んできたこととは違うことも学ぶことができた。このような機会があったからこそ、知られることができたのだろうと思った。

9 最後に

私はこの3年間いろいろな視点から防災について学んできた。今回聞いた話だけでなく、今まで学んできたこともしっかりと語り継いでいきたいと思う。

また、この「語り継ぐ」をたくさんの人に読んでもらい、一人でも多くの人に防災の大切さ、災害から身を守る方法などを考えて実行してほしい。

これからの人生で防災や災害に関する勉強は減っていくと思うが、積極的に関心を持って日常に取り入れていけたらいいと思う。そして、環境防災科で学んだことをフル活用していきたい。

「語り継ぐ」

豊田 瑞季

1 はじめに

今から24年前、阪神・淡路大震災が起こった。18歳の私はこの震災を体験していない。しかし、私は阪神・淡路大震災のこと語り継ぐ。語り継ぐ人がいなくなれば、いつかすべての人の記憶から消え、風化していくからだ。

私はこの「語り継ぐ」で、自分と自分にかかわるすべてのものの未来を考えていく。今、これを読んでいるあなたも、一緒に未来のことを考えてもらいたいと思う。

そして、この「語り継ぐ」が防災に興味を持つきっかけになることを願う。

2 母の体験

(1) 衝撃が襲う

午前5時46分、突然ジェットコースターに乗せられているような感覚に襲われ、目を覚ました。立ち上がろうと思ったが、体に強烈な重力がかかり立ち上がることができなかった。その時地震だと気が付いた。地震の揺れは5分ほど続いたように感じられた。その間、倒れるタンスを目にしてとても恐ろしく思った。揺れが収まった後も恐怖でしばらく動くことはできなかった。恐怖のあまり「お母さん！お父さん！どこ！」と何度も叫んだ。父がすぐさま私のもとに駆け付けてくれたが、途中でガラスの破片を踏んだらしく足から血が噴き出していた。父が走ってきた道には真っ赤な足跡がついていた。父が自分のために駆け付けてきてくれたことと、家族の顔を見られたことで、とても安心した。

しばらくして地震での興奮が収まったので、部屋の片付けをすることにした。本棚の上半分が倒れ、洋服タンスは倒れて扉が壊れていた。お気に入りの本が破れたり折れ曲がったりしたことがショックだったが、それよりも命が助かったことが嬉しかった。

部屋の片付けが終わり、台所へ向かった。台所は食器棚のガラスが割れ、割れた皿やグラスが散乱していた。踏みつけると危ないと思い、スリッパをはいた。スリッパをはき、改めて台所を見ると、床やガラスに血がついていた。父の足はここで傷ついたので、家族全員にスリッパをはいてもらった。割れたガラスや食器類はひとまず段ボール箱に入れることになった。そのまま一通り片づけを終えるといつの間にか辺りは暗くなっていたため、余震に耐えながら家族全員で眠った。

(2) 変わる

その日からは生活が変わった。大学へ行っても人が少なく、心配になって連絡しても連絡がつかない人もいた。いつもとは違う周りの様子に地震の大きさを実感した。大阪の大学に通っていたため通学には電車を利用していたが、電車の中から焼失した長田のまちが見えた。変わり果てた長田のまちを見て、自分は普通の生活を送ることができて良いのだろうかと思った。毎日長田のまちを見ているうちにだんだん罪悪感を覚えるようになってきたため、電車の中では本を読むようにした。何冊も本を読み、冊数を数えるのも面倒臭くなってきた時、長田のまちに新しくきれいな建物が建ち始めていた。それを見て「これから長田のまち復興していくんだ」と感じた。胸の中にあった罪悪感は、いつの間にか姿を消していた。

(3) 元通りの日々

ライフラインも住居も無事だったため、ほかの地域と比べると早い段階で震災以前の生活に戻ることができた。しかし、この元通りの生活に違和感があった。元通りでは同じような地震が起こった時、また同じ被害を受けてしまうのではないかと思ったからだ。何か自分ができることはないのか。ほかに同じことを考えている人はいないのか。行政は対策を取ってくれるのか。そう思ったが、自分ひとりの力では何かを起こすことができず、何もしないまま終わった。そして、元通りの日々が始まった。

(4) 今を見つめる

きれいな建物が立ち並び、多くの人が行き交うまちを見ていると、ふと思う。また長田のまちのように消えてなくなってしまうのではないか。不安になる。まちが新しくなるたびに、過去が忘れ去られてしまっているように感じる。過去の良かったところを忘れ、新しいものだけが正しいといわんばかりにまちには高層ビルが立ち並ぶ。それは古いものの中にある、教訓だとか経験だとかをすべていらぬものとしてしまっているのだ。そんな風感じてしまう。私は新しいものを求めるからこそ、古いものを見てほしい。新しさだけを求めるのではなく、古さの中にある良いところを取り入れて、より良いものにしてほしい。

良いと思えるまちには、子供のいる家庭がたくさん引っ越ししてくるだろう。そして、そのまちを気に入りきつと住み続けてくれる。住み続けている人が多いまちはたくさんメリットがある。子どもを地域で見守りやすいし、お母さん同士で集まって交流もできる。どこに誰が住んでいるのかもわかるから、不審者もすぐに捕まえられる。災害時にはこれらのメリットに加えて、地域で団結できるということも加わるだろう。地域で団結して、お互いがお互いを助ける共助が行われることだと思う。良いまちは、自分自身の命を救うまちのことなのだと思う。

3 祖母の体験

(1) 午前5時46分

その日はいつも通り家族の朝食を準備していた。味噌汁を温め、ご飯を器によそって、鮭をグリルで焼いていると、鍋の中の味噌汁がわずかに揺れた。小さな地震かと思い、そのまま朝ご飯を作り続けようとしたところに強い衝撃が襲い、倒れてしまった。コンロの火が付いたままでは危ないと思い消すために立ち上がろうとしたが、立ち上がれない。周りに身を守るものがなく、準備したばかりの朝食をただ眺めることしかできなかった。揺れが収まった後、家族の安否を確かめなければならないと思いきやすぐに寝室へ向かった。

(2) 助け合いのころ

揺れは大きかったものの、被害は大きくなかった。家は山中にあり、水道局の分所が山の上にあった。さらにガスは都市ガスではなくプロパンガスを使用していたため電気以外はすぐに使うことができた。しかし、山の下の人たちはちょうど都市ガスへと変えたところだったため、ガスが止まり、水道も止まってしまった家庭が多くあった。地震でガスが止まり、電気も水道も使えない人々に風呂などを貸そうと思いついた。最初は知人に風呂を貸していたが、いつしか知らない人がやって来るようになり、その人たちは食べるものにも困っているのだと訴えた。祖母はそれに応え、食べ物も暖かい毛布も与えた。次の日も、その次の日も助けを求める人が家にやってきた。助けを求める人たちを見て、地震の被害の大きさを感じ、恐ろしく思った。1週間ほど経つと家を訪ねてくる人は減っていき、気が付くと誰も訪ねては来なくなっていた。満たされた名前も知らない人たちは満足したようにどこかへ去っていた。

(3) 作業は続く

程なくしてライフラインの復旧が終わった。しかし、部屋の片づけは終わらない。飛び散ったガラスに瓦の補修など、後片付けに追われていた。いつの間にか世間では阪神・淡路大震災は終わったものとする空気が漂い、ギャップを感じた。そのギャップを埋めるように一つ一つ丁寧に片付けを行った。しかし、片付けがすべて終わっても自分だけが世間から切り離されたような感覚があった。家族にも相談できず、孤独感からか時折涙が出た。そんな自分が情けなくて余計に涙が出た。

(4) これからを考える

これから生きていく若い世代には自分と同じような思いをしてほしくない。あの時少しでも地震への対策をしていたらと思うことがある。例えば、飛び散ったガラスを踏んで夫の足が血まみれになったことや、食料を買い置きしていなかったためけがしたままの足で買い物に出かけなければならなかったこと。これは事前の備えがあれば防げたことだと思う。防災についてもっと興味を持っていれば若い世代の子たちはつらい思いをしなくてもよいので、防災に関心を持ち、友人や子供たちにも伝えてほしい。そうすることでより多くの人が助けられることだろう。

4 語り継がれて

(1) 思うこと

母と祖母の話聞き、私はとても驚いた。環境防災科に入学してから、阪神・淡路大震災のことやそのほかの地震のことなどは、頻りに話題に上がっていたため、被災当時の状況について新しい話が聞けることはないかと思っていた。しかしそれは間違いであった。こちらから聞こうという意識があればいくらかでも新しい話はでてくるし、それに対して質問しても、聞けば聞いた分以上の答えが返ってくる。なぜ被災してから24年経っても新しい話が聞けるのか。それは被災者自身が年を取るから他ならない。人は年と共に考え方が変わる。昔は面白く感じていたテレビ番組を今見返すと面白く感じなくなるのと同じで、被災者が被災当時に思っていたことを今は思っていないかもしれない。この理由で新しい話が聞けると思った。

(2) 考えること

被災者の考えが変わるのならば、当然、その人の語り継ぎの内容も変化していく。ならば、語り継ぎは一度だけではなく、二度、三度。一日だけではなく、一年。十年と続けていくことで昔は話せなかった話が話せるようになるのではないかと思う。それは書いてある本を見返すこととは違い、生きている言葉をつかむことだ。だから被災した直後だけでなく復興してからも語り継ぎは行っていくべきだろうと考える。もし、一度だけの語り継ぎだったとするのならば、それはそのことばのままで時を止め、いつまでも成長することはないだろう。

5 未来へつなげる

(1) 南海トラフ巨大地震

30年以内に70%~80%の確率で起こるとされている南海トラフ巨大地震。この数字を見ると、だれでも危機感を感じるはずだ。しかし、実際に何らかの備えをしておく人は一体どれだけいるのだろうか。人には正常性バイアスという自分だけは大丈夫だ。地震なんて起こるはずがない。と思いついてしまう特徴があるため、残りの20%の確率にかけようとするのだ。20%は起こらない。それは間違いであると知ってほしい。そして南海トラフ巨大地震が発生した時、兵庫県では29,097名の死者が予想されている(ひょうご安全の日推進県民会議『新ひょうご防災アクションーさあ、防災アクションを実践しよう!ー』より)。これは、神戸市の高校に通う学生の約7割と同じ数である(神戸市高校生42,009 ※兵庫県及び神戸市発表の平成29年度データより)。このことから、いかに被害が甚大であるかがわかる。

(2) 夢

私は亡くなった方を棺に納めるための作業を行う、納棺師になりたい。きっかけは私が小学5年生の時に祖父を亡くしたことだ。納棺師を志してからずっと納棺師になりたいと思いつけてきたが、環境防災科に入学してからたくさんの方のことを学び納棺師になりたいという思いがより強くなった。環境防災科で学んだことを活かし、災害時に活躍できる納棺師になりたいと思っている。具体的には、災害時に棺に納めることができないご遺体を棺に納める活動をしたい。災害直後は火葬が間に合わず土葬されることがしばしばある。東日本大震災では、小学生や中学生の通学路に番号札が張られた棺桶が何百も埋められた。その様子を見て通学がなくなった子どもは少なくない。また、遺族もいつまでも土葬されたままの状態を見るのはたいへんつらい。だから私は、そんな遺体をきちんとした手順で棺に納め、残された方たちが前を向けるようにお手伝いしたい。

大切な人の死と向き合うのはつらい。苦しい。悲しい。「なぜあの人が死ななければならなかったんだ!」と怒りもわいてくる。災害時、これらの感情はぶつけどころがない。自然災害は誰かが起こしたわけでもなく、突然人々を襲う。予測不可能で抗うことのできない理不尽な暴力だ。それで傷を負ったとしても、誰かを責めることはできない。だから大切な人を失ったとき、消化できない気持ちが蓄積し、絡み合っていく。納棺師という職業はその感情の絡まりをほどくことができると思う。亡くなった方の体を、傷つけないように丁寧に拭き、安らかに天国へ登れるように化粧を施し、そっと棺の中に納める。この一連の作業を終え、残された家族と顔を合わせるとき、亡くなった方は表情で遺族に語りかける。その表情を見たとき、複雑に絡まった感情はきっとほどけるだろう。このお手伝いができるのは納棺師だけだ。私は、亡くなった方と残された家族のどちらにも寄り添いたい。そして、この活動が残された家族が前を向くはじめての一步となり、大切な人の死を受け入れられるようになると信じている。

(3) 未来へつなげる

これから、阪神・淡路大震災をはじめ、東日本大震災や北九州豪雨災害などの平成の世に多大な影響を与えた災害は徐々に風化していくだろう。災害を経験した人が減り、その人たちから語り継ぎをされることもなくなっていく。そうしていつか完全に忘れ去られ、また災害が起こる。そして過去の災害と同じ被害あるいはそれ以上の被害を出してしまう。これは最悪の状態といえるだろう。

しかし、私たちが語り継ぎを行った場合はどうか。災害を経験した人は減るものの、語り継ぎをする人数はどんどん増えていく。そうするとどうだろうか。一人一人が語り継ぎ、語り継がれる存在となる。災害はいつの間にか忘れられる存在ではなく、世間に浸透したものとなる。この状態ならば、もしまた大きな災害が起こっても被害をできる限り小さくする対策がとれる。

近年、地震や台風のほかにも異常気象やテロなど災害と呼ばれるものが増え続けている。これからは生きる私たちは災害の被害をいかに小さくするかが課題になるだろう。そこでは防災が重要な役割を

果たすだろう。自分の命は自分で守る、人の命は自分が助ける。すべての人が生きていくために防災がある。決して堅苦しいものでも人を縛るものでもない。どうか楽な気持ちで防災と向き合ってほしい。

6 おわりに

私はここまで4ページ分語り継ぎをおこなったが、語れていないことも多くある。この語るができなかった部分は、あなた自身が考え、調べ、語り継いでほしい。そうして、多くの人の記憶に残してほしい。そうすることで、阪神・淡路大震災は人々の記憶に残り続けるだろう。

阪神・淡路大震災を悲惨な出来事で終わらせてはいけない。そのために未来へつなげることができるのは、私たちだ。

私たちには、南海トラフ巨大地震が待ち受けている。私たちが語り継ぐことによって救える命がある。ならば今、語り継がないでどうするのか。

私はこれからも語り継ぎ、より多くの人に防災に取り組んでもらいたいと思っている。そして、南海トラフ巨大地震で1人でも多くの人を救うことができれば本望である。

「語り継ぐ」

夏山 禎炯

1 はじめに

阪神・淡路大震災から24年という年月が経った。私は震災の5年後に生まれたため、綺麗な街並みの神戸しか知らなかった。しかし兵庫県立舞子高校環境防災科で阪神・淡路大震災について学んできて、被害の大きさや地震が多く尊い命を奪ったこと、今日の、地元神戸に至るまでのたくさんの人々の苦勞と経緯を知ることができた。実際に震災を経験していない者が震災を語り継いでいくということは非常に難しいことである。だが経験していない者が語り継いでいかななくては、いつかは忘れ去られてしまう。だから私はたくさんの人にお話を伺ってきた。そして貴重な体験談を後世に伝えていかななくてはならないという使命が私にはある。これから、経験していない者だからこそ出来ることを考えながら語り継いでいきたいと思う。

これは両親の体験談と私の思いから完成したものだ。

2 体験談

(1) 母の話

阪神・淡路大震災の10ヵ月前の3月に子供を連れ尼崎から神戸市北区に転居。そして三男を1994年9月に出産し新たな場所と家族で楽しい日々を過ごしていこうと思っていた。その矢先に阪神・淡路大震災が起こった。

1995年1月17日1階で母は三男と一緒に寝ていた。大きな揺れで目が覚め、2階で寝ていた父と2人の兄の安全が気になり様子を見にいき、家族全員の無事を確認した。ひとまずほっとした。命に関わることもなく、家においてある家具などにも被害はほとんどなかった。玄関に置いていた陶器が割れただけで済んだ。

明け方まで停電はしていたものの、ガス・水道は使うことができた。停電がおさまりテレビを点けてみると、そこには荒れ果てた三宮や火の海となった長田の街の様子が映っていた。その見たこともない光景に一瞬にして体が震えた。

北区はライフラインに影響はなかったが、しばらくの間は東西を結ぶ有馬街道が渋滞していた。そのため、近くのスーパーには米やたまごなど色々なものが届かず並んでいなかった。しかし幸いなことに小さな子供が3人いるということもあり、米農家さんと年間契約をしていたので米には困らなかった。またコープこうべの個人配達買い物に行かなくて済むのでとても助かった。

震災後には昼夜問わず毎日のように余震が続き、小さな子供が3人いる中での買い物や家事は今までのものとは違いととても不安だった。

北区は幸い日常生活が普段通り送れていたもので、父の会社関係の家族が入浴や食事をとりに毎日訪れた。同じ神戸でもあまりにも異なる日常に災害の恐ろしさを感じるとともに、心を痛めた。自分たちができることは些細なことで、大きく町の復興に関わることはできない。自分たちのできることを精一杯しながら復興を願うばかりだった。

(2) 父の話

自動車会社を2店舗経営しており神戸市中央区の三宮と神戸市北区の唐櫃に店があった。どちらの店もかなりの被害を受けたので会社の様子が気になり早朝より三宮へ出発した。新神戸トンネルは地震が起こったことにより通行料が無料になっていた。いつもは自家用車が走るトンネルには三宮の瓦礫を三木の方まで運ぶトラックなどが行きかっていた。見たこともない数のトラックが走っており、その光景は異様だった。

瓦礫により真っ白になった三宮の会社へ通い続ける日々はとてもハードだった。地震により会社にあった商品である自動車が使えなくなってしまったので、地方や東京まで自動車を買に行ったり会社を立て直すために走り回ったりした。その仕事で体を酷使してしまい結核にかかってしまう。入院は免れたものの長期間何十種類もの薬を服用し続けなければならなかった。もともと健康的だった体は病弱になってしまう。そのため今では抗生物質が効かない体になってしまった。

父のまわりでは当たり前のように職業や住居を失う人が多くいた。幸いなことに知り合いで命を失う人はいなかったが、かなりの人が生きながらも経済的に、身体的につらい日々が長く続いた。自分も含め周りの人がこれからどうしていくかという不安と絶望感でいっぱいだった。

3 両親の話を聞いて

私はこれまでたくさんの人から阪神・淡路大震災のことについて聞いてきた。しかし一番身近な存在である両親には話を聞いたことはなかった。震災当時に大変な思いや苦勞をしてきたことが初めて分かった。阪神・淡路大震災の直後、町も混乱している中で必死に兄たちを育てていた母の姿や、父は自分の会社が被災してしまい家族を養うために休みなしで働く姿を私は見ていないが、そういった大変な思いをしながらも頑張ってくれていたことを知ると感謝の気持ちがこみあげてくる。この語り継ぐ活動をしなければ私自身こういった両親の苦勞を知ることはなかったと思う。逆に今まで苦勞してきたことを知らずにいたことを申し訳なくも思う。両親の話は新鮮さがあったためか自分の心にすんなりと入ってきた。

幸い両親は地震で命を落とす危険性は無かったものの、もし命を落としていれば今の私はこの世に存在していない。そんなことを考えていると本当に両親やその周りの方たちには感謝したいと思う。だから、これからは生かされていることを自覚して感謝する気持ちを忘れずに生活していきたい。またほかの人に命は大切であるということも伝えていきたい。

私がいつか子供ができて親という立場になった時には大切な家族を守るために防災活動をやりたいと思う。特に警戒しなければならないのは南海トラフ巨大地震である。自分の住んでいる地域はどういった災害が予想されるのか、外出中に地震が起こった時はどのように避難すれば良いかをあらかじめ想定しておく。登山をしていて山頂でくつろいでいる時や海の近くでショッピングを楽しんでいる時、車の運転中などいろいろな場面を想定することが大切だと思う。また共通の、避難先をあらかじめ決めておく目安もスムーズにできる。避難所に行くときは家の玄関の扉に「私は〇〇の避難所に避難しています。無事です。」と置手紙をしていると更に安否確認がやりやすい。

しかし、これらのことを1人で行っていてもほとんど意味がない。だから家族で食事の時間にでも少しこのような会話を盛り込んでいきたいと思う。更に家族という小さなコミュニティで終わらせるのではなく地域にも発信していきたいと思う。地域で防災活動を進める動きがあれば賛同し更なる活性化に尽力したいと思っている。

4 環境防災科

(1) 特色ある活動

兵庫県立舞子高校環境防災科は全国で初めて設立された防災を専門に学ぶ学科だ。現在では全国で2校目の宮城県多賀城高校災害科学科が設立されている。環境防災科では普通科目と防災科目を勉強している。その割合としては防災科目が全体の1/3を占めている。座学のほかに様々な授業を展開している。また特色ある活動も盛んである。たとえば実際に歩いて自分の目で見る「長田のまち歩き」や「六甲山フィールドワーク」である。その他にも消防学校体験入校など消防士になりたい私には興味深い授業もある。

授業以外でも休日を利用して多くの生徒がボランティア活動に力を注いでいる。地域のイベントのお手伝いを通して学ぶことはたくさんある。地域の人との距離が縮まり地域コミュニティが活性化される。地域貢献以外にも被災地支援活動も行っている。募金活動をボランティアで行ったり実際に被災地へ足を運び復旧活動を行ったりもする。

方針としては市民のリーダーになることであり、防災のエキスパートになることが目標ではない。それぞれの進路で災害が起こる前は防災活動に努め、災害時には地域のリーダーになれる人間を目指す。だから防災の知識だけを詰めるのではなく、いろいろな切り口から防災を考える。阪神・淡路大震災の教訓を生かすことをメインで、ハザードのメカニズムを学び、被災者の心のケアについても学ぶ。近隣の幼稚園や小学校、特別支援学校との交流も盛んである。

(2) 熊本県被災地支援活動

私が高校1年生の6月、実際に熊本県の益城町に入った。被災地の様子を肌で感じることは生まれて初めての経験で、倒壊する家屋や隆起する道路を自分の目で見て地震の恐ろしさを感じた。実際に人が亡くなったことで、惨さというものも感じた。具体的にどのような活動をしたかという点、私たちの班は全国から集まった救援物資の運搬及び整理である。そこでは多くの物資が集められており、整理が大変であった。また雨により段ボールが濡れて使い物にならなかったので作業が思うように進まない状況であった。力仕事だったので身体的にしんどかったが、少しでも被災地の力になりたいという思いから必死に活動を行った。そこでは学びに行くというよりも復旧活動のお手伝いをしに行くという考え方で一般のボランティアの方と同じである。

しかし、実際に体を使って活動したのは雨の影響もありその1日だけだった。活動をしない日は商店街や熊本城を視察し、街の様子を肌で感じた。思っていたよりも明るい人が多くて生活を取り戻そうという前向きな姿勢な人が多かった。

復旧活動、視察ときて後は荒井さんと一緒にお茶碗プロジェクトの食器市を開催した。初めての経験で最初は要領をつかめず、食器を運んだり並べたりすることに必死だったが、だんだん慣れてくると熊本の人たちの「ありがとう」という言葉や貴重な被災体験を聞けたりした。本当に良い経験をさせてもらったと今になって思う。

熊本県被災地ボランティアは合計4泊5日の活動であった。衣食住の生活を支えていただいたのは熊本県菊池農業高校だ。もしも菊池農業高校の人たちが舞子高校を受け入れてくれなかったら、私はこのような活動を健康的に行えなかったと思う。だから非常に感謝している。また夜になればクラスでミーティングを行ったり、菊池農業高校の生徒と交流したりと、とても有意義な時間を過ごせた。

思うような活動ができなかったせいも無力感というものを感じて神戸に帰ってきた人が多かった。確かに、そのような気持ちを持つことでもっと勉強しようと思えたり、みんなでどうしたら良いかと思えることができた。でも、私たちは全く何もできなかったというわけではないと思っている。精一杯に活動を行い「ありがとう」という言葉も多くいただいた。この活動を経験値として残し自信と誇りに変えていきたい。

5 将来の夢

私の夢は消防士になり市民の安全と命を守ることだ。また直接、人命救助に携わりたいという思いから神戸市の特別高度救助隊(SEK)に入隊し様々な困難を乗り越えていきたい。

まず消防士という夢を志すようになったきっかけは2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震だ。当時小学4年生だった私は夕方5時ごろまで友達と公園で野球をしていた。暗くなってきたので、家に帰ろうとしていると公園で犬の散歩をしていた友達が「東北のほうでおっきい地震起きたらしいで。テレビでもそれしか放送されてへんわ。」と言っていたことを覚えている。急いで家に帰ってテレビを点けると、そこには凄まじい津波の様子が映っていた。津波が町の建物を次々に飲み込み、多くの車が流される光景に小学生だった私は驚くばかりだった。今でも鮮明に覚えているのはヘリから見える黒い津波と、テレビ画面の横に津波警戒地域を赤や黄色で表している図だ。初めての光景に最初は実際におきている出来事なのかどうか信じるができなかった。

3月11日から数日が経っても被害が徐々に大きくなるばかりであった。情報も新聞やニュースで収集していた。死者の数は日経るにつれ増えていき、悲しい報道も増えるばかりだった。一方では公的機関の活躍も報道されていた。被害の規模が大きすぎたため、一般市民や地方の消防士でも太刀打ちできない事故や任務も発生していた。そこで東京消防庁のハイパーレスキュー隊はそんな困難を極める任務を遂行し、被害の拡大を防いだ。それをテレビ越しで見た私は純粋にかっこいいと思った。こんな職業についてたくさんの人の命をこの手で救いたいとも思った。そして救助隊に強い憧れを持つようになった。

私が消防士になったら市民と街に防災を更に広げていき、様々な災害による被害を減らしていきたい。自然災害そのものを無くすことはできないが、その自然災害への対応によっては被害を減らすことができる。そのためには災害と災害の間すなわち「災間」と呼ばれる時期で備えておくことが必要である。

環境防災科で1年生の時に授業でライフライン関係(電気・ガス・水道・NTT)や公的機関(自衛隊・警察・消防)の方の講義を聞いた。当時の困ったことや復旧活動の様子や苦労したこと、教訓として現在に生かしていること等を勉強してきた。その時に職員の方は口をそろえて「まさか神戸に地震が来るとは思っていなかった」と話していた。そこから当時は地震に対する考えが甘かったことや地震を軽視している人が多かったということが分かった。また阪神・淡路大震災の死因の多くは圧死だった。木造家屋の倒壊や家具の転倒によりそれらの下敷きになり呼吸ができなくなってしまう。たればではあるが、もし事前に備えるという考えがあれば家を耐震化することができたし、家具も固定することができたと思う。

消防士の業務に予防課や広報課があり、その部署で防災について積極的に広めていくことも良いと思ったが、自分の手で人の命を救うことができる救助隊になりたいという思いから、救助隊として防災を広めていきたい。具体的には地域の防災訓練や小学校の避難訓練などに出向いて地域の人、子供たちと一緒に防災を伝えていきたい。また身近にいる大切な家族や職場の同僚などにも備えることの大切さを伝えていきたい。

30年以内に70～80%の確率で起こるとされている南海トラフ巨大地震などの大きな災害は街全体で防災活動に取り組んでいかなければ被害を減らすことができない。そこで消防士という立場から市民が命を落とさないためにはどうするべきかを伝えていきたい。人間は危機感がないと何でも後回しにしてしまうことがある。だから「災害はいつ起こってもおかしくないんだ。備えておかないと命をおとしてしまうんだ。小さなことからいいから準備をしていこう」と訴えるように伝えていく。阪神・淡路大震災では公助は役に立たず、自助・共助によって多くの命が助かった。それは事実である。教訓として災害時には公助の助けを待たずに自分たちで命を守らなくてはならない。この教訓を生かした防災活動を進めていきたい。しかし公的機関による救助でしか助からなかった命もあったと私は思う。だから市民にはまず自分の命は自分で守る自助、自分の命が助かったら次は近隣の人を助ける共助を行ってもらい、消防は公助の力でしか救えない命を救うことを進めていきたい。しかし、災害時にはいろいろな障害が発生する。例えばこんなことがあった。

- ・道路に散らばった瓦礫が邪魔となり消防車両が通れない。
- ・水道管が破裂して水が出ずに消火活動が思うようにできない。
- ・ホースを延長し海水をくみ上げて消火活動を行ったが、避難車両が道路を横断することでホースに亀裂が入る。

これらの教訓を生かす必要があると思う。具体的には現在も進められているが道路幅を広げる区画整理が1つ目の例の対処法だと思う。2つ目は水道管の素材をポリエチレン系の柔らかい素材に変更することが挙げられる。3つ目に関しては海水をくみ上げなくても済むようにするか、ホースの強度を上げてしまうか、交通規制を行うか等が挙げられる。

必ず消防士になり救助隊として尊い命を助ける。

必ず救助隊になり特別高度救助隊として救助の最先端で尊い命を助ける。

こうして語り継ぐことで1人でも防災に興味を持ち、備えることにより1人でも多くの命が助かれれば幸いである。

追記

私がこの文章を執筆した6月の段階で消防士になるということは、まだ夢であった。しかし、この追記を行っている11月現在、消防士になるという夢が叶った。この夢が叶ったのも、勉強やトレーニングに付き合ってくれた友達がいたからだ。だから、これから新しくできる仲間も、今まで支えてくれた友達も大切にしたい。4月からは消防士として大好きな街と市民を守るため、災害に強い街づくりに携わりたいと考えている。

「語り継ぐ」

西尾 ことり

1 はじめに

1995年以降に生まれた私たちは、阪神・淡路大震災について全く当時の状況、被災者が感じた恐怖の心を体験していない。それらを体験した人は、今となっては私たち人生で大先輩にあたる高齢者の方々や、成人の方々だ。これからの時代、阪神・淡路大震災を語り継ぐ人は少なくなるだろう。そのためには、1995年以降に生まれた今を生きる若者たちがその時の状況、被災した方々の教訓、災害に対する予防、などを後世の人々に伝えていくべきだ。きっと、阪神・淡路大震災を経験した方は、同じような被害が起きてほしくない、繰り返されたくない願っているはずだ。学生だから、大人だからということとは関係なしに、これからも震災の教訓を語り継いでいきたいと思う。

2 阪神・淡路大震災

(1) 概要

1995年1月17日 午前5時46分52秒 兵庫県南部地震（直下型地震）発生
震源地 淡路島北部
マグニチュード 7.3
震度 7
死者 6,434人
行方不明者 3人
全壊 104,906件
半壊 144,274件

3 阪神・淡路大震災の体験談

(1) 祖母からの体験談

祖母は、当時兵庫区に住んでいた。阪神・淡路大震災の前日、祖母がいくつかある奇妙な現象を体験した。それは、お月様がとても大きく赤色に染まっていたこと、大量のカラスが飛んでおり、電線に止まり激しく鳴いていたことだ。祖母がこれを見たときは、まさか次の日に阪神・淡路大震災が起こるとは思っていなかったようだ。何か変な感じがするなと思いつきながら眠りにつき、震災当日。朝から大きな揺れにびっくりし、すぐに起きた。そしてすぐに祖父と2階で寝ている姉と妹（私の母）を起こしに行った。リビングに置いてある大きなダイニングテーブルの下に祖父母、母、母の姉で隠れた。目が覚めてから外を見ると、体全身に毛布をまとい足は素足でたくさんの人が近所の学校へ避難してきたようだ。また、会下山のほうを見ると火の手がたくさん上がっていた。すると、家族がそれぞれバラバラでいるときに、いつの間にか祖母は近くの小学校に避難していた。家にいるより避難所にいたほうが安全だろうと、自分の命を最優先に行動したということだ。だが、幸い家は半壊でもなく安全な状態だったので、避難所からは帰るよう指示されたようだ。家族はそれを知るまでどこにいるのか必死になっていたが、祖母のその迅速な緊急対応に安心した。ところが、家族が一緒になったところでライフラインの復旧はなかなか回復せず、困っていた。電気は1時間ほどで付き、ガスは1か月～2か月は使えなかったのだ。そのせいで、洗濯に困り親戚の家まで行って、少ししか出ない水で洗濯を済ませた。少しすると、ガスの匂いがして近所の男の人が「火を使うな！」と、何度も叫んでいた。特に水道が断水していたため、お風呂に入れず、トイレで用を足せないことが分かった。家が当時、兵庫区の夢野台付近だったので有馬温泉まで歩いて、水道が復旧するまでは娘たちを温泉へ連れて行ったようだ。その当時は、他の家からもたくさんのお風呂を沸かせないため、有馬温泉へ殺到していた。また、そのこともあってか基本料金より倍の値段でしかお風呂に入れなかった。だが、お風呂に入れずのはかわいそうだと、仕方なく高い値段を出して何日間かは温泉へ連れて行った。また、食料が足りなくなったら困ると思い祖母と母は近くのスーパーへ買い物にも行った。人が殺到して、スーパーの商品自体も売り切れていたため、何件ものスーパーを回り、あるものなら何でもいと買いあさった。

(2) 母からの体験談

母は、祖母が震災前日に体験した奇妙な現象にも気にせず、震災当日の朝を迎えた。祖父母や母の姉は地震が起きたとたん、すぐに揺れに気づき起きることができたが、母は揺れが始まってから数秒経っても目が覚めないでいた。母の姉と祖父母は急いで母を叩き起こして布団から出された。母は当時、夙川高校にJR電車に乗って通っていた。阪神・淡路大震災が起きた直後にもかかわらず、学校側から取

りに来てほしいものがあるから、学校へ来るようにと連絡があった。震災当時はJRが運行していなかったため、電車に乗って通学することができず、仕方なくJRの線路の上を歩いて夙川駅まで行った。その時は、他にも通学する学生だけでなく、仕事へ通勤する人も線路を渡っていた。

(3) 父からの体験談

父は当時、住んでいた家が温泉屋さんで内装工事をしているところだった。だから、家にはその時はおらず、兵庫区の楠谷町で仮住まいをしていた。震災当日は、父と母（父方の祖母）の二人でおり、母（父方の祖母）は1階、父は2階で寝ていた。ぱっと目が覚めると地震がドーン！と音を上げ、横にグワァー！と揺れて、立つことができなかった。地震の揺れは約20秒くらいだったが、実際には1分くらいとても長く感じたようだ。地震の揺れの影響で、部屋にあった段ボールが全て倒れてきた。揺れが収まってから1階にいる母の元へ行こうと立ち上がった。しかし、電気がつかないことが分かり、部屋の引き戸も地震の揺れで歪んでしまい、思いっきり力を加えてちょっとしか開かなかった。そのちょっとした隙間から抜けて、1階の母の元へ行くと、既に割れていた床に落ちた台所の食器などを母が掃除していた。当時、家を修理していた影響により仮住まいだったので、大きい家具などはなかったため、そこまで大きな被害はなかった。だが、向かいの家は古くから建っておりおじいさんが住んでいた。そこは、瓦がほとんど落ちて悲惨な状況になりながらも、そのおじいさんは手持ちのラジオで「淡路が震源らしい」と得た情報を教えてくれた。父は、外が心配になり一人で平野の方まで見に行ったが、信号が止まって機能していなかった。その間も何回か余震は来ており、そのまま家へ再び戻った。友達の家が心配になり、橘通にある友達の家を見に行った。その友達の家は潰れていなかったが、その友達の家へ行く途中に長田の方面を見ると、火事で真っ赤に染まっており火の海になっていた。そして、その友達の家は元々中華屋さんを営んでいたため、ガスが復旧してからは食料も家になかったため、食べに行かせてもらっていた。そして、当時高校生だった父は、阪神・淡路大震災が起きた1月17日から春休みが終わる頃まで学校が休校になっていた。父は、学校がないからストレスが溜まるなどはなく、学校がなくてラッキーと思っていたが、環境のストレスは感じていた。どこを見てもブルーシートがかけられており、外もホコリだらけでマスクをしないと体に悪い状況だった。だから、学校の再開にはあまり何も感じていなかったが、周りの環境に関しては早く治ってほしいと思っていたようだ。また、近所の湊川公園というところにも、グラウンドにテントを張って住んでいる人、またはそこにできた仮設住宅に住んでいる人がいた。最後に、修理中だった温泉の煙突部分だけを、地震が来る前に落として撤去していたので、それが倒れて誰かが下敷きになったり隣接する建物に大きな被害があったりしなくて良かったと言っていた。

4 環境防災科に入ろうと思ったきっかけ

(1) 環境防災科を知った

元々舞子高校の環境防災科については、私の祖父が新聞で見かけた記事を私に教えてくれたことがきっかけで知った。「募金や東北にボランティアで訪問だって。高校生でこんな活動をするなんて、すごいね。ここの高校はどう？」と、私の将来の夢と繋がりそうな科だと教えてくれた。それもあって、高校進路を進むことを考えるにあたっては、救急救命士には、ただ迅速に冷静に正確に対応することだけでなく、患者さんに対する対応にも気を遣わなければならない。つまり、コミュニケーション能力が高く、思いやりを持って行動することも必要だ。環境防災科では、防災の知識だけを学ぶのではなく、心理的な心の勉強もする。そして、ボランティア活動によって人の温かみを感じ本当の優しさというものを学び、たくさんの人と話す機会がある。それらが救急救命士になるために、自分のためになると思い進学を決めた。

5 環境防災科で

私が、環境防災科で学んだことはたくさんある。日頃の授業、ボランティア活動など、環境防災科でしか経験することのできないことだ。募金活動では、募金をして頂くことは当たり前のことではない、お金をもらえないことが普通だと思い、募金をしていただく人に心の底から感謝をすることなどを先輩から学んだ。世の中には、こんなにも優しい人がいるのか、お金に困っている人がいるのか、と今の自分が生きていることに感謝しながら、今まで素通りだった募金の大切さを身に感じる事ができた。地域の祭りでのボランティアでも、たくさんのお金を学びんだ。今まで、いろいろなイベントに参加してきて、設営や飾りなどをしてくださる裏の仕事を目にする事はなかった。だが、環境防災科での地域の祭りのボランティアではそのような裏の仕事を朝からさせて頂いた。大変だと思うこともあつ

たが、祭りを開催して小学生がとても笑顔で祭りに参加してくれる姿を見て達成感を感じた。また、先輩方や地域の方と一緒に協力しながら作業をすることで、協調性を学ぶこともできた。そして、熊本地震が発生してからの被災地訪問、東日本大震災への被災地訪問に訪れた。熊本でのボランティアが、初めて被災地で活動する場となった。右も左も分からない状態で、役に立てるのか無力感を感じることもあった。私たちの学年が行った熊本の被災地でのボランティアは、ひまわりおじさんという方が行っている全国から集めた使わないお皿を、食器がなくて困っている被災地の人に提供するお手伝いをした。その内容は、トラックに積んである食器が入った重たい段ボールを運ぶことや、その段ボールの中から食器を出して並べるなどの作業を行った。被災地の人から、たくさんありがとうと言ってもらい、ボランティアをしているこちら側も被災地の人に感謝したいという気持ちになった。東日本大震災でのボランティアでは、災害発生から数年経った状態ではあったが、まだ震災の傷跡は残っていた。被災地へ訪問する前から話を聞いていた大川小学校にも訪れた。前から話を聞いていたのでどんな感じか想像はしていたが、実際に行ったときは衝撃的だった。普通なら家やお店などが並んでいる街並みには、ほとんど荒地になっており、大川小学校だけが残っているような状態だった。津波の影響によって、学校内は泥水で汚れていた。実際に見る現場の状況と、テレビで見る現場の状況では感じるものや考え方や気持ちが変わってくるのだと気づいた。それは、テレビや人から間接的に聞いたり見たりした情報は、自分の心の中でとどめてしまっていることがどうしても多いが、実際に直接的に見て聞いて感じると、自分が実際に見て聞いて感じていることは事実なので、誰かにも早く伝えたくなった。帰ってから母と父に伝えた。母も父も真剣に話を聞いてくれた。このように、実際に被災地でのボランティアへ出向くことによって、後世または後世ではなくても知らなかった人たちに伝えることができる。また、環境防災科では外部講師が舞子高校の環境防災科のために授業をしに来てくれることもある。例えば、消防士・警察官・大学の教授・NTT 西日本・水道局の方などいろいろな業種や職種の方が来てくれる。普通の高校生、また社会人でもなかなか対面をして聞く機会がないような方達の話の聞けるので、どれもとても貴重な体験になる。そこでは、災害時にどうすればいいか外部講師の方達の職業と防災との関係について話を聞かせていただいた。そこから学んだことは、これから先も知っていて損はない良いものだと感じた。

6 将来の夢

私には、将来の夢がある。それは、救急救命士になることだ。なぜ救急救命士になろうと思ったかという、小学生と中学生の頃の出来事があるきっかけで、なりたいと決意した。1つ目の出来事は、小学校5年生の時に友達とのささいなトラブルによって、お互いを傷つけあったことがあった。その時に、周りの友人や家族、学校の先生たちにたくさん話を聞いてもらったり、優しい言葉がけをしてくれたりした。私は、そのみんなの心の温かさにとっても嬉しく思い、人の優しさを身に感じ感謝の気持ちでいっぱいになった。すると母親が、「人に優しくされた分、自分も思いやりを持って誰か困っている人がいたら助けてあげよ。」と教えてくれた。みんなが私にしてくれた言葉がけや行動を、人助けなのだ理解し、そこで私は誰か困っている人に優しさや安心感を与えられる、助けをする仕事に就きたいと思った。必ず、間接的ではなく直接的に誰かを助ける職業に就こうと決めた。この時は、まだ救急救命士になりたいと明確に決まっていたはなかったが、救急救命士という職業は母の友人にもいたので、話は聞いていた。2つ目の出来事は、中学3年生の夏休みの時期に母親が3人目の赤ちゃんを妊娠していた。いつも通り、父と弟が買い物から帰ってきたときに、急に母のお腹に赤ちゃんに関する異変が起きた。父も母もどうすればいいのか分からず、焦っていたが、私はすぐに父親に「救急車を呼ぼう。」と頼んだ。すると、10分もしないうちに救急救命士の人達が家に母親を病院まで運ぶためにゆっくりと丁寧に救急車まで母を誘導してくれた。救急救命士の人達が「大丈夫？歩ける？ゆっくり行きましょうね。」と優しく母に話しかけながら誘導してくれたことを今でも覚えている。私は、母のことは見守ることしかできず、とても不安な気持ちでいたが、救急救命士の人達の優しい言葉がけに安心した。後から「冷静に救急車を呼ぼうと言ってくれて有難う。助かった。」と父親に言ってもらえたことが人の役に立てたことなのだろうと嬉しかった。そして、自分は緊急時でも冷静に判断して行動できるのだと、自分の長所にも気がつくことができた。救急救命士は、どんな時でも冷静に迅速に正確に対応することが必要だ。そこで、私は元々誰かを間接的ではなく直接的に人を救う仕事がしたいと、小学校の頃から思っていた夢と救急救命士を照らし合わせた。母が救急車に運ばれる姿を目の前で見たときに、救急救命士の人達によって安心感を得たこと、優しく手を取りながら患者である母をサポートしていたこと。これは、私や母を含め患者さんやその周りの人達を自分の言葉や行動で安心させ、相手の助けを受けて救うというのは、私が

なりたい職業だと確信した。また、残念ながら3人目の赤ちゃんは命が助かることができなかったが、その分私が一生懸命に生きて、亡くなってしまった赤ちゃんの分まで、たくさんの人を救おうと思った。これが、私の将来救急救命士になろうと思った2つのきっかけだ。

7 これからの人生と防災について

私が救急救命士になるにあたって、大切にしたいこと、また防災とはどう関わっていくかなどを語りたいと思う。まず、救急救命士は一人でも多くの命を救うためには迅速に対応し、冷静でかつ正確に行動しなければならない。また、救急救命士になるためにはまず、専門学校へ入学し救急救命士に必要な知識や技術をしっかり習得していきながら、国家試験を受けて国家資格を得なければならない。そして、迅速で冷静でかつ正確に行動することも必要なもので、今よりさらにもっとそのような行動ができる人になれるよう努力していきたいと思う。人命救助を最優先に行うことも大切ではあるが、患者さんの不安な気持ちを和らげることも大切だ。だから、救命士に必要な知識や技術を習得するだけでなく、患者さんの心の面でもしっかりケアをして安心させることができる人になりたい。私の母が救急車まで誘導してくださったときのように、優しい声掛けや手を取ってあげるなど、さらに相手の気持ちを考えて行動していきたいと思う。救急救命士の活動と防災についての関係では、繋がられることはたくさんある。私は、救命士になったら病院ではなく消防で勤めたいと思っている。だから、消防での救命士の役割とはとても大きなものになる。消防から出動する際の緊急時の患者さんへの救急手当は、救命士でしかできないものが多い。地震、火事、津波、台風などの自然災害でも消防士とともに人命救助に最優先に守りつつ、患者さんやその周りの見守っている人たちの不安な気持ちから安心へとしっかりできる救命士を目指していこうと思う。防災との関りについて、私が中学生のときに地域の消防士の方が定期的に消火器の使い方や火を消す際の水ホースの使い方など、災害時や火事の時にどうすればいいのかなどの知識や技術を学べる場を提供してくれる。この活動によって、一緒に参加をしている人と関りを持てたり、災害時にどうすればいいかなどの知識を身に付けたりすることができる。地域の方と関りを持つことで、コミュニケーションの場ともなるし、災害時の住民の把握にも繋がることになるだろう。だから、私が消防署で救命士として活躍するうえで、学んできた知識を仕事だけで活かすだけでなく、それを地域の方に提供をできる場を作れるように活躍していけたらと思う。

「震災と聞いて何を思うか」

西川 尚哉

1 はじめに

「阪神・淡路大震災」この震災について自分が初めて真剣に向き合ったのはおそらくこの環境防災科に入学する前の受験勉強の時期だっただろう。自分が生まれる5年前に起こったこの地震、自分が物心つく頃にはその痕跡はほとんどなくなっており、初めて震災のことを知ったのは小学校の防災教育の時間だった。

震災を経験した人はもちろん、その時代を生きた人ならばその時に何が起こったのか、あれほどの大きな出来事があれば少しは語ることができるだろうと私は思う。私だって東日本大震災を直接には経験していないが、その時何が起ってどんな状況であったか、ということくらいなら語ることができる。これは私が3年間防災を学んできたから、ということだけでなくその時を生きていたからという意味で、おそらく防災を学んでいない私の友人も全く語れないということはないだろう。

ではそれが阪神・淡路大震災となるとどうだろう、私は3年間勉強をしてきたため少なくともその当時の事実については語ることができる。しかし震災についてほとんど学習していない私の友人や同じ世代の人の中には阪神・淡路大震災について人に話すことが全くできないという人も少なくない。

もし災害の伝承というのがそれを直接体験した人、そのときを生きた人にしかできず、自分の体験のみしか話すことができないのであれば、この先どんどん災害の記憶は薄れていき、いずれは誰の中からも消えてしまうと私は考える。

だから私は今ここで阪神・淡路大震災での経験を語り継ぎ、震災を経験していない私が、震災の風化を防ぐとともに、後世の記憶に残しそれがまた次の災害に対しても活かされるようにしたいと思う。

2 語り継ぐ

私は身内に兵庫県民がおらず、震災を直接経験した人がいない。父は大学生で長野県におり、母も長野で実家暮らしをしていた。唯一の近場といえば父方の実家が奈良にあることなので、まずはそこで聞いた話を少し書き、メインは震災を淡路島の岩屋で経験した私の通っていたピアノ教室の先生Tから聞いた話を書こうと思う。

3 祖母、伯母の話

奈良にある父の実家は震災当時築30年ほどの木造2階建て住宅であった。当時この家には私の祖父母と伯母が暮らしていた。地震発生時伯母は2階で、祖父母は1階で就寝中だった。家のある地区は震度4の揺れを観測。2階で寝ていた伯母はその瞬間「死んだ」と思い、祖母は「(家が地区内で比較的古いことから)これは潰れたな」と思った。しかし大きな被害もなくそのまま起床。直後に長野にいる私の父にあたる息子に電話をかけるとすぐに繋がり会話をすることができた。無事を報告し、その後日常通り朝食を食べようとテレビをつけると神戸の街が大変なことになっているということをヘリからの中継映像で知った。だが兵庫に親戚がいるわけでもなく自分の周り被害というものもなかったためその時は「神戸が大変なことになるとな、(祖母)」程度にしか思わず、そのまま伯母は会社へと向かった。

伯母が出勤するために近鉄高田市駅にいた午前7時34分ちょうどその時に奈良県で震度4を観測する余震が発生した。伯母はその時恐怖を感じたものの、周囲に混乱もみられずそのまま電車に乗り、普段通り会社に向かった。

翌日からも報道により神戸の状況を知りはしていたが、特にこれといって行動を起こすこともなく日常生活を続けた。

4 話を聞いて

車で高速を使うと1時間半程の距離にある祖父母の家。私は今までそこがここから近い距離にあるように感じていた。だからこの「語り継ぐ」を書くにあたり、震災当時の状況等を詳しく聞けると思い訪ねた。しかし、同じ近畿の中だということに震災当時の話を聞くと自分が想像していたよりも震災に対して大きな関心を抱いておらず、ここ神戸で3年間防災を学んできたせいか、その関心の低さには正直驚いた。

そしてボランティア元年と呼ばれたあの年、全国から多くのボランティアが全国から神戸に駆けつけた。しかし祖母はそんな現場のすぐ近くにおりながらも何をしたらいいのかわからなかったと語った。

確かに今考えると、私はあの当時はボランティアというものがまだ普及していないということもあり、その考えのほうが普通なのかとも思った。だから私はそのような中、被災者のためにと何か行動を起こせた人の実践力というのは改めてすごいことだと分かった。

また、被災地に対する関心というのは、日頃からその地域と関わりがなければ関心がわきにくいのかということも考察した。だから、日頃からもっと全国、全世界に目を向け、災害が起こる前からそれぞれの国や地域についての知識を蓄えておくことも重要で、それが防災につながることもあるのではないかとも思った。

5 Tの話

(1) 地震発生

Tは震災当時淡路島の旧淡路町（現在の淡路市）岩屋にある1991年に建て替えたばかりの教会に住んでいた。教会は2階建て木造であり、木で作られているのが売りでもあった。

5時46分Tはその教会の2階の一室で就寝中だった。地震が起こる直前の地響きで目を覚まし、最初にグラグラっときた時には「これは地震やな」と悟った。地震の揺れにより部屋中に物が散乱したが南向きに置いてあった本棚自体が倒れることはなく大きな被害もなかった。しかし、隣の部屋の東西に向けて置かれた棚はすべて倒れ床にはCDやカセット、本などが散乱し足の踏み場がない状態になっていた。

揺れが収まったあと両親の寝ている1階へ降りるが1階でも西側に置いてあった棚はすべて倒れていた。アップライトピアノの裏にある大きな本棚は93年にあった北海道南西沖地震を機に父がチェーンで壁に固定していたため倒れることがなく、その前にあったピアノも倒れることがなかった。教会の会堂にあるグランドピアノも少し動く程度であり、壁にぶつかって壊れるなどの被害はなかった。

教会自体も建て替えたばかりだったということもあり、ほとんど被害がなく、玄関の扉が開かなくなるということがあったが、蝶番を調節する程度で直せるものだった。

ライフラインについては、ガスはプロパンであったため困ることがなく、電気も即日復旧し、水道も井戸があり、復旧も早期に行われたため、あまり不便することもなく、次の日からはお風呂に入ることもできた。

家は教会であったがそこに避難してくる人はおらず、島内の被災した知り合いに対して個人的に何人か招く程度のものであった。母はインフルエンザにかかり寝込んでおり、父は牧師であるため島内を走り回っていたため、Tは基本的には家から出ずに生活していた。そのため、岩屋町内の公民館で炊き出しを行っていたという情報を知ったのも震災から何年も経った後のことだった。夜も基本的にずっと家の中でテレビを見ていたため、よく言われる「震災の時はいつも明るい神戸の街が暗くなり星がよく見えた」というような体験はしていない。

(2) 仕事へ

当時Tは元町の商店街にあるヤマハに勤めていたが、震災後数日は仕事ができないと判断し、会社へ向かったのは1月の終わり頃だった。岩屋に住んでいたため、元町にある会社に向かうには一度船で明石の港へ行った後、船を乗り継ぎメリケンパークの突堤まで向かう必要があったが、2月のJRが開通するまでは毎日その生活を続けた。

会社の独身寮が西宮にあり、ヤマハにはバイクを扱う部門もあったため、そこにはまだ普及する前の最先端である電動アシスト自転車が置かれていた。震災後通勤手段を失った多くの社員がその電動アシスト自転車で通勤をしてきたが、もちろん充電などはできるはずもなかったためただ重たいだけの自転車を使って西宮と元町を往復していた。

1月の時点ではまだ営業を再開することはできず、店内に入って片づけをする程度だった。商店街は電気も水道も復旧しておらず、水は商店街にある果物屋に井戸があったため、皆そこへもらいに行っていた。

2月に入ってもビルの中での営業はできる状態になかったが、店舗の前でCDや時期がバレンタイン前ということもあり、ギターの形をしたチョコレートの販売などを行っていた。また、販売場所では当時ヒットしていたSMAPの「がんばりましょう」をかけ、自分たちや地域住民、通行する人たちを励ましながら仕事をしてきた。しかし、通行する人から「こんな大変な時期に何そんなもん売っとんねん」などとクレームを入れられることもしばしばあったが「こんな時期だからこそ自分たちにできることをしているんだ」と説明し、販売をやめることはなかった。

その後ビル内での営業も再開したが、壁にはバツ印が多く書かれており、営業をしつつの復旧工事を行ったため、ビルの復旧には1年弱の時間がかかった。

(3) 温度差

現在のTの旦那である当時の彼氏は当時明石の大久保に住んでおり、東加古川にある会社に勤めていた。震災当日彼氏も大久保で被災、周囲も被災していたため会社に休みの電話を入れると、会社側は「なんで来られへんねん」というような対応だった。実際加古川へ行くとほとんど被災しておらず、加古川には情報もあまり入っていなかったため、西へ行くにつれて東側との地震に対する温度差が大きくなっているのだと感じた。

(4) 壊れた町

JR が復旧してからは毎日車窓から被災しぐちゃぐちゃになった街が見え、それを見ながら通勤した。

震災後数日してから友人のバイクで須磨の辺りを見てまわらせてもらった。

そのような風景を見てもそれが信じられないというような感情は湧かず、「そういうことか、」と自然に受け入れさせられるように感じ、逆に冷静な反応をしていた。

3月江崎灯台を訪れた際に灯台へ向かう階段が途中急に段差が大きくなっているところがあった。そのとき初めてこの地震を起こした断層を直に見たが、地表に断層が表出していることなど普通ではありえない光景であるため、その光景にもただ啞然とするのみだった。

(5) 震災前夜

震災前夜Tは西明石でバンド練習をしており、23時過ぎに友人を尼崎まで車で送るために阪神高速を利用していた。そのため翌日、前夜に通った阪神高速が横転している映像を見たときには強い恐怖を覚えた。

6 話を聞いて

私はTの話聞いてまず、震源にあれだけ近い岩屋という地区で被災したのに、被害がほとんどないということに驚いた。そしてその理由についてTは地盤のせいではないかと話し、岩屋というのはその漢字の通り地盤が固い岩盤で出来ており、M7.3という大きな地震がすぐ横で起こっても耐えぬくことができたのだと語った。私も環境防災科で3年間学習する中で、その土地の名前や昔の呼び名を知ることが大切だということは学んだことがあり、最近では2014年に土砂災害が起こった広島八木地区は、昔は蛇落地悪谷と呼ばれていたということが有名である。

このようにその土地の歴史を知るとというのは自分の身を守るのにとっても重要だということが改めてわかり、特にTは通勤時に液状化しぐちゃぐちゃになったメリケンパーク周辺も見ているため、あんな所には絶対に住めないと言っており、自分も同じく埋立地などにはよく住めないと思った。

震災後の仕事について私が特に印象に残っているのが商店街での助け合いについてである。私は商店街というのは特別な空間であると思っている。商店街には普通では考えられないほどの強い人と人との繋がりがあり、災害時にはそのつながりが遺憾なく発揮された例をいくつも聞いたことがある。

しかし、これが近年増えつつあるオフィス街であれば自分のビルの水道が使えなくなったから、物資が足りなくなったから、と行って他のビルに借りに行く、もらいに行くということはまずないように思われる。だが、我が国では商店街というものの存在自体が消えようとしているのも事実である。だからこそこでその商店街を守ろう、活性化させようという取り組みの重要性については私も理解しているつもりである。でも、ここからV字回復させることは正直難しいのではないかと私は思っている。

だから私はこれから確実に増えていくオフィス街やその高層ビルにおいての会社同士の繋がりが、災害が起こった際にお互いに助け合いを行えるようなシステムの構築についても考えていきたいと思っている。

また、通勤方法について、当時はまだ明石海峡大橋が開通する前であったため、淡路島と本州を移動するには船を利用するしかなかった。だから船を利用する人の数というのは緊急時であっても特段増えるということもなく、便数は少なくなったとしても、そこで混乱が起こるといってほどではなかった。

しかし今ではどうだろう、明石海峡大橋が開通したことにより、多くの人がそこを通過して移動を行うようになり、タコフェリーもなくなってしまった。もちろん今でも定期便や高速船は通っているが、では災害時に普段明石海峡大橋が担っている輸送能力をそれらでまかなえるかといえば厳しいところである。

また、運ぶべきものは人だけでなく物資も輸送しなければならない。そうなるともし今後同じようなことが起こればこの地域での混乱は必至であるということが分かる。

そして、これは何も明石海峡大橋だけの問題ではなく全国的に、このように利便性は増したものの、その分災害時に弊害をもたらすものというのは多くあると私は思う。だから、そのようなことについて

も今後より調べていき、災害時に発生する普段ではみられない弊害というものを減らしていきたいと考えている。

7 夢と防災

私の夢は海上保安官になることである。昔から人を助ける職に就きたいと考えており、幼少期は消防士に強いあこがれを抱いていた。しかし、4歳から水泳を続けているということもあり、それを活かした人を助ける仕事がしたいと考えていた時に海上保安官という職と出会った。そして、海上保安官ならばそれを達成できるのではないかと思いつきそこから志すようになった。

一重に海上保安官といってもその職務内容は多岐にわたるが、私中でも潜水士になりたいと考えている。潜水士になると業務上災害時に海難救助や事故処理などの災害対応にあたることとなる。そこで私はそれらの業務を行う上で常にどうすればその事故を防げたのか、どうすれば被害をもっと減らすことができたかということを考えて活動をしたい。

事故や地震、津波等の災害そのものをなくすことはできない、しかしその災害による被害をなくす、減らすことはできる。だから私は、それらの検証もしっかりと行い、その事故や災害に対しそれをただ処理するだけでなく、二度と同じことが起こらないように、同じ思いをする人が出ないように、ということに心がけて活動できる人になりたい。

また、この環境防災科で防災について3年間学んできた以上、どんな職に就いても防災に関わり生きていくということは一つの義務であるとも考えている。そしてその中でも、私は津波防災について深くかかわっていきたくと考えている。東日本大震災の影響から、自分の大好きな海で人の命がなくなってほしくないという強い思いが私にはある。だから私は公私での活動を区別することなく生涯にわたり津波防災について力を入れていき、人の命がなくなる誰かが安心して楽しめる美しい海を目指して生きていきたいと考えている。

私が海上保安官として勤務しているうちには必ず起こるとされている南海トラフ巨大地震。この地震が起こるまでにどれだけ多くの人に津波の恐ろしさを伝えられ、備えを実践してもらえ、適切な避難行動を促し、そして被害を減らすことができるかということが私の人生においての大きな課題であると考えている。だから、いつ起こるか分からない地震がいつ起こっても良いように、誰でもできる防災活動を精一杯続け、その地震が起こった際には、自分にしかできない捜索・救難・救助活動を精一杯行い一人でも多くの人を救える海上保安官になりたいと思っている。

8 さいごに

こうして話を聞いてみると、一口に阪神・淡路大震災といってもその震災の捉え方というのは人それぞれであり、実際に震災を体験し、あの時あの場にいた人でさえここまで差があるということが分かった。

そしてそのことから、何も体験したことのない私たちの世代の震災の捉え方というのは経験している人よりもっと差があり、関心の全くない人も多いのではないかと感じた。

もし本当にそうなのであれば、最初にしたようにこの震災の記憶というのはいずれ0になってしまうことになる。私は絶対にそんな世の中は作りたくない。だからこの「語り継ぐ」を執筆した。

人それぞれの震災に対する思いや気持ちは違う。だからそれを否定するようなことはしたくない。ただ、そのそれぞれの思いを大切にしながらも、阪神・淡路大震災と聞いて何とも思わないという人というのは絶対に作りたくないし、阪神・淡路大震災と聞いても何のことかわからないという人も出てきてほしくない。それはもちろんどの世代であってものことだが、その中でも私は特に自分と同じ世代の人を中心に働きかけたいと考えている。

私がこのように働きかけ、どんな世代であっても阪神・淡路大震災と聞いたら一つ以上のエピソードを話せるようになることを目標とし、すべての人の中に阪神・淡路大震災がある状態を作ることによってこの震災に対する風化を防ぐとともに、それを活かして次の災害への備えや防災活動もしてもらえたら良いと思っている。

追記

上の文を執筆した6月当時はまだ夢としてしか語ることでできなかった海上保安官になるという目標は11月に最終合格が決まり実現。4月から正式に採用されることとなったためここに追記とし記すこととする。

「決して忘れてはいけない」

信川 亮太

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分。この港町神戸を中心に未曾有の大地震が襲い、6434名のもの尊い命が奪われた。阪神・淡路大震災だ。私は阪神・淡路大震災や東日本大震災、熊本地震のような甚大な災害を実際に経験したことがない。いわゆる「未災者」と呼ばれる人の中の一人だ。しかし、環境防災科に入った今、阪神・淡路大震災をはじめとした多くの災害について学んできた。神戸で生まれ、神戸で育ってきたからこそ、あの日のことは決して忘れてはいけないし、語り継いでいかななくてはならないと思う。震災などの災害を経験した人はいずれこの世からいなくなってしまう、防災に興味や関心のない人のほとんどは誰も語り継ごうと思っていないはずだ。だからこそ私は語り継いでいきたいと思っている。そして、将来阪神・淡路大震災と同じような災害が発生した時にあの時よりも被害を少なくしなければ意味がないと思う。それが私たち環境防災科で学んできた人としての使命だと思っている。そのため私は、あの日のことを実際に経験した両親に当時の話を聞いた。

2 阪神・淡路大震災概要

発生日時…1995（平成7）年 1月17日 午前5時46分

地震名…1995（平成7）年 兵庫県南部地震

震源地…淡路島北部（北緯34度36分 東経135度02分）震源の深さ16キロ

最大深度…震度7

地震の規模…M7.3

余震の数（震度1以上）…190回

人的被害…死者6,434人（関連死919人）行方不明者3人 負傷者43,792人（当時の戦後最悪の都市型地震被害）

主な死因…圧迫死（圧死、窒息死など）

住宅被害…全壊109,406棟 半壊144,274棟 一部損壊390,506棟

火災被害…全焼7036棟 焼損7574棟

その他被害…水道7245箇所 橋梁330箇所 河川774箇所 崖崩れ347箇所

被害総額…約10兆円規模

避難者数（ピーク時）…316,678人

[Wikipedia] より

3 母の話

母は当時、明石の藤江にある実家に父と母、妹の4人で暮らしていた。地震当日のあの朝は、自分の部屋で一人で寝ていた。寝ていたら突然、下からドーンと突き上げるような大きな揺れが襲った。最初は何が起こったのかわからなかった。今までに地震は何度か経験していたが、今までに経験したことない激しい揺れに恐怖を感じた。自宅の被害はなかった。しばらくしてから、食料を調達しに西明石のほうに向かった。すると、新幹線の高架の支柱のコンクリートが地震の影響で剥がれ落ちていた。また、そのあとにコンビニに行くと、陳列していた商品がほとんど落ちている感じだった。自宅の断水は、1日もかからないうちに終わったので、震源に近い地域の人に比べると、生活にはそんなに困らなかったが、念のために水はたくさん買っておいた。しかし、ガスが止まっていたのでカセットコンロを集めて生活していた。その当時、長田の駒ヶ林には祖父母が住んでいて、地震から2、3日後に長田に車で向かった。その前に父の兄弟が長田に行って祖父母の安否を確認してくれていたため、無事なのはこの時点ではわかっていた。しかし、いつも通る道では行けなかったため、父がいろいろな道を回って長田まで連れて行ってくれたが、どの道もガタガタで見渡す限りあちこちで建物が倒壊していた。地震から何日か経っているのに六間道や長田のあたりは煙が出ているのに驚いた。ようやく長田に到着すると、大正筋商店街は燃えてなくなっていて、煙が出ていくすぶっており、今までに嗅いだことのない異様な匂いがしており、焼け野原になっていた。今でも覚えているが、あの時の光景はまるで映画の世界にいるようだった。そして、無事に駒ヶ林にある祖父母のところに到着し再会を果たした。食料などはどうしているのかと聞くと、近くにある駒ヶ林小学校が避難所になっており、そこで炊き出しをもらってそれを食べているから大丈夫だと言っていた。幸いにも、祖父母の家は建てられる際に、この辺はいつか

必ず大きな地震が来るからということで大工さんになるべく窓を少なくし、頑丈に作ってくれたおかげで長田にあったものの、あまり被害はなかった。しかし、一本道を挟んだ反対側は、大きな被害を受けていた。その後、少し認知症を患っていた祖母を親戚のいる三木のほうに送っていったが、その時も普段は通らない道を通っていった。震災での悲惨な光景を見て、現実だけど夢を見ているような感じで、涙が出るようなでないような感じだった。テレビで見る三宮の悲惨な光景も、今ではすっかり変わってしまい、復興したあとの三宮に行っても自分の中では昔の震災前の三宮の記憶が残っていて、今の三宮と情景が違うのが不思議な感じで、どこかに行くと昔の三宮があるんじゃないかと思っていた。また、西神の方に仮設住宅が多く出来ていたのを覚えている。しかし、ばらばらで仮設住宅に入居していたため、毎日のように孤独死などといった悲しいニュースが流れていた。母の父は、個人で電気工事の仕事を営んでいたため、自ら無料で被害にあったところをあちこち飛び回り、仕事としてではなく、儲けなどは考えずに電気の復旧工事を行っていた。最後に母は、この震災では多くの命が奪われてしまったが、この震災は決して無駄なものではなかった、阪神・淡路大震災があったから今があると思うと語った。

4 父の話

父は当時、垂水駅の近くにある実家に父と母の3人で暮らしていた。実家は二階建ての一軒家だった。震災当日の朝は二階にある自分の部屋で一人で寝ていた。突然、ドーンという大きな音の後にグラグラと揺れが来た。とてもすごい揺れではあったが、食器棚が倒れたり、テレビが落ちるくらいで、自宅が倒壊したり、屋根瓦が落ちたりするといった大きな被害はなかった。ただ、家の周りはとてもガス臭かった。地震が起きた時には、神戸の方がまさかあんな被害になっているとはテレビを見るまで思ってもいなかった。自分のところは被害がないのに、隣の街では壊滅状態になっており、壊滅状態になるかならないか、父はその境目にいた。テレビはその日には見られたが、情報がとても錯綜していた。当時、東二見の人工島にある会社に勤めており、東二見の会社は震源から離れているため大丈夫だろうと思っていた。しかし、実際に行ってみると人工島だったため、液状化現象が発生しており、会社は泥まみれで、地盤沈下していた。地震のその日に会社に行ったが、その日は仕事にはならず、今後どうするか対策が話し合われ、会社に来たみんなで復旧作業に当たった。また、当時神戸の東灘に知り合いがいたが、地震の影響で全く連絡が付かなかったため、地震の次の日に自転車で向かった。無事に避難所になっている小学校で再開することができた。その人は、倒壊した阪神高速道路の南側に建っているマンションに住んでいたそうだ。東灘に行く道中で、陥没した大開通りや、倒壊した阪神高速道路の横を実際に通って、悲惨な状況を目の当たりにした。またその夜には、大丸に懐中電灯を持って店内に忍び込んだりする人や、水をペットボトル一本1000円で売っている人なども見た。長田や須磨のあたりは、火事の影響でいろんなものが焼けた独特な焦げ臭い匂いが充満していた。自分の家の近所では何件かでガスが止まるくらいでほとんど何も止まることはなかった。自分の知り合いで家が倒壊した人はいたが、亡くなった人は幸いにもいなかった。当時は、避難所にある掲示板や、避難所に設置された電話で安否を確認するしか方法はなかったが、電話はあまり繋がらなかった。また父は、自宅のガス装置についているマイコンメーターがなければガス管が破裂し、ガスが出っぱなしでもっと多くガス漏れが発生し、もっと多くの被害が出ていたかもしれないと思うと語っていた。また、震災の時に、たまたま漁に出ていた知り合いの漁師の人が、「海が光っていた」と語っていたそうだが、なんで海が光ったのかはわからなかったそうだ。父は最後に、この阪神・淡路大震災が今の防災の形になったと思うと語っていた。阪神・淡路大震災があったから、この時はこういう行動をしようというマニュアルが決まったんじゃないかと思う。また、人間は自然の力には絶対に勝てない、自然というのは恐ろしいもので、そのためにも「防災」というのはこれから先、永遠のテーマになってくると語っていた。

5 二人の話を聞いて

私自身、今回2人から話を聞くまでは、垂水と藤江に住んでいたからあまり被害はなかったと聞いていたため、そんなに壮絶な体験はしていないんだろうなと思っていた。しかし、実際話を聞いてみると、二人ともすごい体験をしていてとても驚いた。実際に家が倒壊したとか、親族や知り合いの方が亡くなったといったことは幸いにもなかったそうだが、話を聞いていると、自分の会社が人工島にあったために液状化現象の被害に遭っていたり、長田に行くのに普段通っていた道が通れずたくさん迂回をして何時間もかけていたり大変な生活を送っていたんだなと思った。今回、2人が共通して言っていたのは、今までに経験したことのない揺れだったということ。この言葉を聞いて私は、阪神・淡路大震災の恐ろしさを改めて知ることができた。

今回のインタビューでは様々な話を聞くことができたが、中でも特に、父が最後に言っていた、「防災は永遠のテーマ」という言葉が今回話を聞いた中で一番心に残っており、防災を学んでいるひとりの人間として、これから先、永遠のテーマである「防災」を広げていきたいと思う。今回聞いた話はここで終わらせるのではなく、将来、自分の家族や子どもにしっかりと伝えて、阪神・淡路大震災を後世に語り継いでいきたいと思う。

6 環境防災科に入って

私がこの環境防災科という学科の存在を知ったのは中学生の時だ。小学生のころから何か人の役に立つことや、リーダーとしてみんなをまとめたりすることが得意だった。中学生になってもそれは変わらず、地域行事のボランティアに参加したり、生徒会執行部としてもネパール大地震が発生した際には学校で募金を呼び掛けるなどといった活動をたくさん行ってきた。そして、高校に入ってもボランティア活動を行いたいと強く思って私はこの環境防災科を受験した。僕自身、中学校での成績が低く、中学3年の時の担任の先生には、「落ちる覚悟はしとけ」と何度も言われたのを今でも覚えている。それでも私は絶対に環境防災科に行くんだと強く思い、毎日塾に行って小論文の練習をしたり、推薦入試を受ける友達や、塾の先生に手伝っていただき面接の練習をしたりもした。その努力が実り、私は無事に環境防災科に合格することができた。私自身この環境防災科での生活が始まるまでは、「防災について学ぶのだからきっとまじめな人ばかりなんだろうな」と思っていた。しかし、実際に環境防災科としての生活が始まってみると、個性豊かな人ばかりで充実した毎日を送っていた。そんな生活が始まって間もないころに、熊本地震が発生した。私はまだ防災や災害について何も学んでなく、知識がなかった。けど、現地で困っている人のために何かしたいという思いはとて強かった。そして地震発生から2か月が経った6月末に実際に現地でボランティア活動を行わせていただくことになった。被災地支援ボランティアは当たり前だが、今回が初めてだった。そのときは大雨の影響で思ったような活動はできなかったが、実際に見てみると、住宅の1階がつぶれていたり、道路や家の壁に大きな亀裂が入っていたり、民家や熊本城の瓦が落ちていたり現実世界とは思えない光景が広がっていて、言葉を失ったのを今でも鮮明に覚えている。その中でも NPO 法人「ひまわりの夢企画」が行っている無料食器市、通称「お茶碗プロジェクト」のお手伝いをさせていただいたときに、実際に来られた現地の方に「遠いところからわざわざありがとう」「頑張ってるね」という言葉をかけていただいたときはとてもうれしい気持ちになったと同時に、思ったような活動ができなくて本当に役に立てたのかという疑問やもっとこうしたかったという後悔があった。この環境防災科で過ごした3年間はとて充実した3年間になった。その中でも、この環境防災科に入ってよかったと思ったことがある。それはたくさんの人とつながることができたことだ。私はこれまでにジュニアリーダー合宿や東北訪問、ネパール訪問などの様々な活動に参加させてもらった。そのたびに同じ防災を学んでいる友達や環境防災科の先輩方と出会い、防災について話をして自分自身の知識を増やすことができ、自分が学んだことを多くの人に伝えることができた。その中でも、多賀城高校のみんなと知り合えたのはいちばんよかったと思っている。多賀城高校には、舞子高校の環境防災科に次いで全国で二例目となる防災を専門に学ぶ学科「災害科学科」が2016年に設置された。そのことを機に何度か多賀城高校と交流する機会があり、友達もできた。多賀城高校のみんなはとて面白くて、一緒にいるときが本当に楽しくて毎回交流の時間があつという間に過ぎていた。そんな中でも実際に東日本大震災で経験したことを聞いたりする機会があり、その話を聞くたびに毎回衝撃を受け、今こうやって仲良くなれたのも奇跡かもしれないと思っている。もし、環境防災科に入ってなかったらこんなに充実した高校生活は送れていなかったと思う。これまで色々支えてくれた両親や先生をはじめとした多くの人に感謝したい。そして、卒業後はこの3年間で築いた人脈をこれからも大切にし、そしてこれから先も新たな人脈を築いていながら防災活動などを行っていきたい。

7 将来の夢

消防士や警察官、教師、救急救命士などといった将来就きたい具体的な職業はまだ決まっていない。ただ一つだけ言えるのは防災に関する活動を行いたいということだ。阪神・淡路大震災や東日本大震災をはじめとした過去の災害のことを後世に語り継ぐことで過去の災害の風化を防止し、この環境防災科で3年間学んできたことを活かして、将来発生するかもしれないといわれている南海トラフ巨大地震や首都直下型地震、また今は予想されていない災害から家族や友人といった大切な人をはじめとした多くの人の命を守り、被害を少しでも少なくできるようにしたいと考えている。そのために私は、大学に進学し、防災についての知識を増やし、防災士の資格を取ろうと考えている。また私は、神戸の高校生と、

宮城県の高校生が交流する場を設けたいとも考えている。防災に関する題で話し合ってもらい、災害が起きた時に自分の命を守れるようにしてほしいのと、この交流会を機に友達になってもらい、いざというときお互いに助け合える中になってほしいという狙いからだ。また、日本全国に環境防災科で学んだことや、熊本地震や平成30年7月豪雨で経験した被災地支援活動、地域行事のボランティアなどの経験を生かして、日本全国に防災を広めていき、一人でも多くの人に防災や減災、災害について興味、関心を思っていただき、いざというときに自分の命を自分で守り、周りの人の命も守り、そしてリーダーとして避難所や被害にあった場所での確な指示を出せる人を増やしていきたいと思う。

8 最後に

今、日本は「災害大国」といわれているほど毎年どこかで「災害」といわれるクラスの甚大な自然現象が発生している。それは地震や津波に限らず、大雨や洪水、台風、火山の噴火、大雪、竜巻、高潮など様々だ。今年も、大阪北部地震や平成30年7月豪雨、北海道胆振東部地震をはじめ、多くの自然災害が発生し、日本に甚大な被害をもたらした。しかし、日本は毎回その自然現象の猛威に翻弄され続けている。父も言っていたが、自然というものは時にして人々の生活や命をも奪う恐ろしいもので、人の力では勝てないものなのだ。そのような自然災害から自分の命を守り、周りの人を助け、被害を少なくする、それが減災だ。災害はいつ、どこで、どのくらいの規模のものが起きるかは誰にも予想できない。南海トラフ巨大地震は、今後30年以内に70~80パーセントの確率で発生するといわれている。その30年以内というには、今日かもしれない、明日かもしれない、もしくは亡くなってからかもしれない。そのようないつ起こるかわからない災害に備えなければならない。「どうせこないだろう」という甘い考えはもう通用しなくなっている。阪神・淡路大震災の時も、神戸には大地震は来ないとずっと言われ続けていたそうだ。災害は必ず来るといって世の中になっているのだ。日本という災害多発地帯に住んでいる以上、誰しも一度は必ず災害を経験する。そのような自然災害に備えるのが防災だ。家具を固定する、家族の避難場所を決めておく、非常持ち出し袋を準備しておく、窓ガラスが割れないようにフィルムを張っておく、ローリングストック法で食料を備蓄しておく。これだけで防災を行っているといえるのだ。このような防災は、低コストで行えるので、高校生でも簡単に行うことができる。私はまず、このような簡単な防災から多くの人に伝えていきたい。

防災を勉強するということはとても難しいことだ。なぜなら、数学や物理、化学のように答えがないからだ。防災は、これが正しいと思っていても、状況によってはその知識が通用する場合と、通用しない場合がある。こんな難しいことを学びたいと思う人は私たち高校生に限らず少ないと思う。しかし、災害多発地帯の日本において、防災というのは絶対に必要な存在になってきているのだ。今回、父も語っていたが、防災というのはこれからの日本の「永遠のテーマ」なのだ。だから私は、大きな災害を経験したことがない未災者だからこそ、この環境防災科で学んだことや、阪神・淡路大震災や東日本大震災といった大きな災害を実際に経験した人の話を一人でも多くの人に伝え、いざというときに自分の命を守り、そしてそのあとに家族や友人といった大切な人をはじめ、周りの人の命を救える人を増やしていきたいと思う。そのためにも、知識を伝えるだけでなく、この「語り継ぐ」のように、阪神・淡路大震災をはじめ、東日本大震災や熊本地震などといった過去の災害を後世に伝え、今後同じような災害が発生した時に、あの時よりも少しでも被害を少なくできるようにこれから活動していきたいと考えている。過去の災害を風化させるといったことは絶対してはいけないことだと思う。過去の災害の言い伝えがあって助かった命も多くあるからだ。また、今日本に住んでいる人に防災、減災について興味、関心を少しでも持っていただき、災害時に自分で判断して行動できる人が増えるように、これから活動していきたい。なぜなら、それが私たち環境防災科の一員として、そして市民のリーダーとしての使命だと思っているからだ。

「語り継ぐ」

橋岡 達也

1 はじめに

1995年1月17日この日、神戸は消えた。阪神・淡路大震災から24年が経ち、震災は過去のものとなり、風化している。私は震災を経験していない世代の一人だ。だから、この「語り継ぐ」は、両親の力・記憶を借り未来への橋岡家オリジナル「語り継ぐ」を書くことにする。

2 父の体験

消防職員として、人として

(1) 当日まず、できることを

前日、今の嫁（震災当時は彼女）と2人で夜中まで酒を飲んで、家で熟睡してた。家は俺と妹と祖母の三人暮らしで部屋は別々やった。

地震が起きた時やけど、揺れが「ぐらぐら」から「ゴゴゴゴゴ」に変わったことが印象に残ってる。天井から砂や埃が顔に降ってきたから布団に潜っとったら、窓ガラスの割れる音と共に隣の部屋から妹の悲鳴が聞こえてきて、真っ暗やからライターの火を頼りにあわてて見に行ったら部屋の天井パネルが半分落ち、妹がベッドの端で動けず固まった。「とりあえず外に出るから服を着い」言うて、続いて祖母の部屋に行くとタンスが倒れとって、起きていた祖母が「頭が濡れとるけど雨漏りしとんかー」言うてきたから見ると、頭が切れとって血を拭っていたのを雨と勘違いしとったみたいで、俺が「それ、血が出とる。頭、切っとるでー。でも先に外に行くから早よ服着い」言うてあわてて家の外に出た。外は、月明かりか星明かりか分からへんけど、家の中よりは周りが見えたと思う。近所のもんが集まって何やかんや言うとったけど、まず、目に飛び込んできたのが、土砂が崩れて上の家が無くなっていたのに驚いた。そのうち一人が「崩れた家におばあちゃんが居ったはずや、早よ助けな」言う声が聞こえたと思ったら、誰に声を掛けることもなく、みんなで一斉に救助活動してた。無事助け出した時には全員で拍手して喜んだことをはっきり覚えてる。

(2) 家族が第一

まず、第一に考えたことは、「祖母の怪我の手当て」「家族の避難場所」「彼女の安否」これらを確保してから出勤すると心に決めた。

家族を車に乗せ、震災当時、俺は長田、彼女は兵庫に住んでたから、連絡のつかない彼女の家に向かってると、道路は陥没、信号は消え、所々で火災が起きてた。幸い彼女とその家族は無事だったので、祖母の怪我の手当てと職場への連絡を兼ねて兵庫消防署へ行くと消防車は出払い、救急隊はガレージに溢れていた怪我人の手当てで一杯一杯になっとった。ガーゼと三角巾を貰い、専用線は生きてると聞いたので、当時、勤務していた山田出張所に自分の現在の状況と家族を避難させてから出勤すると連絡したら、当時の小隊長からお座成りに「早よ出て来い」と言われて愕然とした。

親戚の家が無事だったこともあり、家族を預け、出勤のために丸山大橋を通過してると、神戸の街の至るところから黒煙が上がり、戦争の空襲ってこんな感じやったんかなと思ったと共にこれ消せるんやろか？と考えながら出勤した。山田出張所に着くやいなや「臨時編成の部隊を立ち上げるからポンプ車を運転して市内応援に行ってくれ」と言われ、長田の運河で水源確保に向かった。

(3) 仕事か命か

北消防署の管轄エリアに被害が少なかったから、ほとんどが市内応援やった。長田、東灘、兵庫と行ったけど、一番印象に残ってる現場は東灘やった。ビルにビルが寄り掛かっている間の奥に火が見えるけど、余震が結構な頻度であったから、そこに入ったら死んでまうんちゃうか思うて躊躇しとったら、小隊長が「入って消さな消えへんやろ、行くぞ」言うて筒先片手に行ったけど、今、大きな余震があったら死ぬんかな思うたら、怖いこと怖いこと。とりあえず火は消えたけど、後で小隊長にそのことを話したら「俺もめっちゃ怖かったわ、でも誰かが行かなあかんやろ」って言うのを聞いて、この仕事をしてる間は「しゃあないな」思って納得した。

(4) 火が消せない

兵庫の現場では、広範囲の火事で筒先を持って放水してたけど、焼き石に水とはこういうことやなって思ったわ。筒先から出る水はしょんべん水で、目の前には火の海、次から次へと建物に燃え移り、燃

え始めから燃え尽きるまで何も出来ずに見るだけやったわ。それまでは、どんな火事でも「消せるわ」って自信もってたんやけど、何も出来へんいうだけで悔しかったな一。

消防入って、消火栓や防火水槽が使われへんかったら別の水利を「探せばええ」とは考えてたけど、水取るところがどこにも無いとは想像もしてなかった。

(5) 帰るところが無い

震災から一週間くらい経って、交替で家に帰れるようになってんけど、俺の家は全壊やったから帰れなかった。親戚の家も祖母と妹がお世話になっていたので入れず、結局、消防署で寝泊まりしてた。そんな職員が何人かいたから、署でも気兼ねなく、ゆっくり出来たことが嬉しかった。でも、自宅に被害がなかった職員の言葉で「帰ってええ日に帰らんと署に居るんやったら俺が帰ってええか？」と言われた時は少し応えたな一。まあ、皆、なかなか帰られへんかったから、人の気持ちを汲むことも難しかったんやと思う。それに署に居ったほうが、これからの事とか話が出来て、一人で考えるよりも気が紛れたように思うし、楽観的にもなれた。消防職員は普段「同じ釜の飯を食う仲間や」言うて教えられてきたけど、こんな時こそ、強い絆を感じた。

3 父の話を聞いて

私は今回、父から震災当時のことを聞いたのは初めてでした。父からは、一般市民と消防士の二役の話が聞けたのでよかった。話を聞いて、私は二つの教訓を感じた。

一つ目は自助の必要性ということ。自助：共助：公助＝7：2：1と、阪神・淡路大震災発生の際の初期消火・救助活動は、自助で賄っていた。公助を待ってはいは遅い。だから、自助は大切だと思う。自助・共助を育むことで、災害に強い街ができると思う。

二つ目は災害の風化を防ぐということ。今刻々と震災は風化している。このままでは過去の震災の反省を生かせずに次の災害に当たることになる。そんなことでは誰も災害からは助からない。阪神・淡路大震災から24年が経ち、市内の震災経験者の人数の減少や高齢化に伴い、震災を伝えることが減ってきている。だからこそ、もう一度皆さんに防災意識をもってもらいたいと思う。防災に携わった者としてこれからも防災を広めていきたいと強く思う。

4 夢と防災

僕の夢は父を超えることだ。

目標は父と同じ職(消防士)になり、超えるというものだ。この目標はなによりも難しい。だが、やりがいを感じられると思う。

消防士は、地方自治体の消防本部や消防署に所属し、火災の消火や救急によって、人々の安全を守る仕事だ。消防士は「消火」、「救助」、「救急」、「防災」、「予防」の5つの活動が主な任務となる。だから、防災活動としては2つある。

では、2つの防災活動について説明していきる。1つ目は「防災」だ。消防士は火災が起きないように、啓蒙活動を行って、災害を未然に防ぎ、被害を最小限に食い止めるために不可欠な任務だ。万一の事態に備えて、地域住民の防災に対する意識を高めると同時に、基本的な行動や避難路を知ってもらうため、町会・自治会を中心に、消火器や起震車などを活用して初期消火、身体防護、救出・救助等の訓練・指導を行って、小学校などで防災活動を行うこともある。そのほか、火災や地震のレベルや地域の地形に基づく被災パターンを想定し、地域ごとの実状にあった訓練を行ったりする。

二つ目の防災活動は「予防」だ。火災も立派な災害の一つだ。予防活動は建物の防火上の安全性や消防用設備等の設置について、現場の実状を厳格に審査・検査し、その結果に基づく指導を行う業務だ。工事中や竣工時には、実際に建築現場に出向き、施工状態を確認し、防災に対する基準を満たしているかなどを厳しく検査する。防火装置の設置や点検なども行い、影ながら支えてくれている。

僕がもし消防士になって防災を広めるなら、まずは公務員である消防士という立場を利用する。やはり、一般の大人が話すのと消防士が話すのでは内容が全く一緒でも伝わる重みや伝わり方が違うからだ。僕が一番防災を広めたい相手は災害を経験していない若い世代ではなく、災害を忘れてしまった大人だ。災害に対して、子供のチカラでは限界が簡単にきてしまう。そこで僕は防災知識が多い大人がいると災害に強い街に繋がっていくと考える。僕は環境防災科で蓄えた防災知識を自分だけにとどめるのではなく、大人たちにどんどん提供できればと思う。また、それで神戸が、日本が災害に強くなればと思う。

5 環境防災科

(1) 長田まちあるき

私が印象に残っている活動は長田まちあるきだ。

① 海運町(大国公園より東)・・・区画整理事業

大正時代の西部耕地整理の際、海運町と名付けられた。由来は、廃寺となった正福寺の山号「海運山」からとったものといわれている。町は、北のJR神戸線を境界として、国道2号線を縦断した細長い地形で、1丁目はありません。2、3丁目は阪神・淡路大震災によって特に大きな被害を受けたが、土地区画整理事業により、現在は復興され、美しい町並みになっている。

② 大国公園

長田区野田北部地区の中央に、1994年12月に大国公園が整備された。JR鷹取駅に近く、憩いの場としての役割を果たすはずの公園だったが、震災による火災の延焼を防ぎ、壊滅的な被害を受けた地区の人々の避難所となる等、思わぬスタートとなった。火災の延焼を防いだクスノキには、まだ当時の傷跡が残されている。

③ 長楽町、本庄町(大国公園より西)・・・まちなみ誘導型地区計画

長楽地区は長田区の西南の端に位置し、少年Hの作者・妹尾河童氏の出身地としても知られている。戦争の被害をほとんど受けなかったこの地区では、戦前の木造長屋が多く残っており、震災ではそれらのほとんどが倒壊した。一方で職住一体の建物が多い地域であり、屋根にはトタンを用いるなど軽量の素材を用いていたことが幸いし、倒壊を免れた家も少なくもない。また長楽小学校(現駒ヶ林小学校)には約50畳の広さに57人の方が避難された。

④ 長楽老人いこいの家

震災時避難所となった。す沈め状態での避難生活を余儀なくされた。心労と疲労に加え、避難所の環境の悪さや空気の乾燥から肺炎にかかるなどして、姫路の病院に入院した人もいた。

⑤ 美しいまちなみ

「緑あふれ、うるおいとやすらぎのある下町」という看板を見つけて感じたことは、住民の人たちが今でも下町の温かさを大事にしているということだ。ほんとうにみんなから愛された町だと感じた。

そんな中でも、特に長楽町と本庄町にあるお花などが書かれたタイルは素晴らしく全部で28枚あり、1枚目は1998(平成10)につくられ28枚目は2007(平成19)と9年のもの月日と手間がかかってつくられている。すべてをまわると長楽町と本庄町を一周することができる。

⑥ 神戸アーカイブ写真館

パソコン・タブレット(タッチパネル)で、約9万点の懐かしい神戸の写真を、年代・区名・各種のカテゴリーを入力して検索、閲覧できる。また、街並みや観光地など懐かしい神戸の映像を、大型テレビで視聴できる所も魅力だ。交流や学びの場など、いろいろな用途で利用できる。さらに、「六甲歴史散歩」や「神戸交通史」、「源平史跡巡り」など、さまざまなテーマに沿って編集した写真冊子、約460冊を閲覧できる。

僕としては、自分の出身小学校、中学校の写真などもあり楽しく見学できたのがとても印象的だった。見たいものがたくさんあったのだが、時間がなかったため、諦めた所がどうしても残念だった。

⑦ 気付いたこと

やはり、1番驚いたことは防犯カメラの多さだ。震災後、区画整理なので量が増えたのだがいろんな箇所にあるので犯罪数が減ったこともうなずけた。安心な街になったなと感じた。

また、震災後にたくさんの市住宅が建てられたそうで、道幅としては3~10メートルほどあり、震災後直されたところと直されていないところとで差が激しかった。昔ながらの長屋も見られたので良かった。長田の震災からの復興が見られて、大変驚きた。

(2) 高校

私が入学したきっかけは父の勧めがあつてのことだ。舞子高校環境防災科に入るには推薦入試を突破しなければなりません。ここで私の中学時代で問題があつた。私は成績があまり良い方ではなく、推薦が貰えるか貰えないか際どい状況だった。だが、両親や担任の先生の強い推しがあり推薦が貰え、合格し今に至る。

そんなスタートから3年、これまで大切なことをたくさん学んできた。防災のことはもちろんだが、それ以外にも社会に出るための知識、スキルを磨けた高校生活でした。私は今、環境防災科に入れたことを誇りに思っている。

6 感想

日本の面積は世界の面積の400分の1。そこに、世界の地殻エネルギーの10分の1が集まっている。日本は地震大国なのだ。私達がどんなことをしても、自然の力にかなうはずはないのだ。そんな私達ができることは、次の災害に備えることだ。備えというのは色々ある。例えば、家具の固定、非常持ち出し袋の制作、避難所の確認など、それらはもちろんして欲しいし、大切なことだ。だが、私が1番知って欲しいのはそこに「語り継ぐ」という手段もあるということだ。語り継ぐということを皆さんはどう思っているか？過去のことを話すこと、当時の昔話という感じだろうか。

答えは未来を語ることなのだ。

あの日、あの災害が起こった日を、ただのつらかった過去にしてはいけないのだ。その日を語ることは未来へ繋げることなのだ。

最後になりましたが、この環境防災科の伝統である「語り継ぐ」を書かせて貰えたことに感謝します。ありがとうございました。

「語り継ぐ」

平井 花歩

1 はじめに

阪神・淡路大震災から24年。技術の発展とともに過去の街並みや震災の傷跡は私たちの目ではわからなくなっている。私自身、震災から5年後に生まれたため震災時の苦労などは一つも経験していない。しかし、経験していないからといって次の世代へ語り継ぐことをやめたら、きっと同じ被害、もしくはそれ以上の被害が起こる。だから、私は防災を学ぶ一人として、経験された方の体験や思いを語り継ぐ必要がある。今回私は、両親から話を聞いた。そして、その体験、それを踏まえて私にはこれから何ができるかをまとめ書くことにする。

2 父の体験

(1) 震災当日

その日、父はいつもより深く寝ていた。それは、震災が起こる前日に愛媛県で友人の結婚式に行っていたからだ。そして、仕事があるため、愛媛県のホテルには泊まらず帰宅していた。

すると、突然、大きな地鳴りとともに、ベッドごと突き上げられた。とにかく揺れて、何が起こったのか全く分からなかった。幸い父は震源から少し離れたところに住んでいたため、目立った被害はなかった。しかし、食器や家具が壊れ、自然災害の恐怖を感じさせられた。周りの被害も少なかったため、神戸が変わり果てているとは到底考えなかった。そのため、友人や当時付き合っていた方（現在の妻）に連絡を入れることもなかった。家の片づけをして、息抜きにテレビをつけたところ、日本なのかもわからない、火事の映像や崩れた家屋の映像を目にした。自分の地域との差に驚いたというより、恐ろしかった。情報の整理がつかないまま震源が淡路であることを知った。

そのとき、西区でひとり暮らしをしていた、彼女のことが心配ですぐに車で向かった。いつもより時間のかかる道のりは、重く、これからの生活が不安になった。彼女の安否の確認が終わると、二人で被害の小さかった父の実家に帰った。その後のことは安心しすぎたため覚えていない。

(2) 翌日

被害が少なく家にいてもする事がないので、父は彼女と父の弟と神戸まで車で走った。なにかできることがあると考えたからだ。しかし、実際に目で見ると大きな被害に戸惑いを隠せなかった。そのため、ボランティアしに行ったのに参加すらできなかった。心が苦しかった。

そんな時、父の弟がたばこを吸おうとしてライターに火をつけた。しかし、すぐに止めた。なぜなら、その場にすぎた感覚は麻痺していたがガス漏れの臭いが酷いことを覚えていたからだ。そして家に帰ると、テレビで神戸の銀行に強盗が入ったと知り、悲しくなった。

(3) その後

職業柄たくさんの人と関わる機会があるが、住んでいる場所などによって震災に対する関心の差を強く感じた。震源から少し離れた地域やそれ以上に離れた地域の人、いつまでもたっても他人事で、甚大な被害を受けた地域の人、生活再建のめどが立たず元気がなかった。そのため職場では、震災の話はあまりすることはなかった。

この機会に震災の記憶を思い返すと、忘れていたことが多かった。話すために考えないといけなかった。だから、震災体験者は震災の記憶を曖昧にしてしまう前に、自分たちの口から後世に伝えることは、自分の中で整理をつけるきっかけにもなるし、風化も防げる。

3 母の体験

(1) 震災当時

いつものように寝ていると、体を揺さぶられるような感覚で目を覚ました。すぐに地震であると感じた。酷く揺れ、テレビや食器が飛び散る音が聞こえた。不安と焦りを感じながら揺れが収まるとすぐに飛び起きた。外に出ると近所の人たちも外に出ていたため少し安心した。寝ていたためか、地震はそれほど強くは感じなかったが、昨日とは全く違った世界が広がっていた。

ひとり暮らしをしていたため、話せる相手は近所の人だけだった。情報がすぐにでも欲しかったため声をかけると驚かれた。足の裏が血だらけだった。心配はされたが痛いとは感じなかった。電気が止まっていたため、テレビから情報は得ることができず、近所の人で車をラジオを聴かせてもらった。淡路が震源であるということが分かったが、被害があったのは、西区までだろうと思い、三宮の職場に向

かった。車で向かっていると、板宿あたりで火事などが起こっていて被害が考えていたより大きかったことを知った。そんな中、職場である日生三宮ビルにつくと、4～5階が潰れていて、到底、勤務場所である11階までは行くことができなかった。出勤できないと分かったとき、ようやく被害があまりにも大きく大地震であったと知った。そして帰宅した。そのとき、会社に連絡を一切入れなかったため、安否確認が取れず迷惑をかけた。

(2) 翌日

当時付き合っていた方（現在の夫）の実家で、しばらくの間お世話になることが決まった。少し申し訳ない気持ちもあったが、ひとりであるよりは何倍もまじだった。その後の行動は父と同じである。ただ、自分の家の片づけやこれからの仕事はどうなるのかが不安でしばらくは眠ることができなかった。

(3) その後

しばらく過ごした後、実家に帰ることになった。その時、ようやく落ちつけた気がした。普通だと思っていた生活にこれほど感謝したことはなかった。せっかくのこの時間を無駄にしたくなかったため、車の免許を取ることにした。とにかく、今の状況を忘れてしまいたかった。

現在は足の裏を怪我し苦労したことを教訓に、寝室や様々な所にスリッパを置くようにしている。ペットボトルの水も買いだめしている。また小さな地震でも、目を覚ましてしまうようにもなった。

4 話を聞いて

「そんな語るような体験はしていない。」と二人とも言っていたが、二人とも被災者であるが、被害があまり大きくなかったためあまり話せないということがよくわかった。話せることはたくさんあるのに、遠慮してしまっている。だから、私たちから聞くということはとても重要だとわかった。しかし、「もうあんな地震には生きている間には起こらない。」と安心しきっている様子を見ると、まだまだ、私は自然災害の恐怖を伝えきれていない。「怖かった。」で終わらせてしまうのではなく、「次、同じような地震が起こったら何をどうするか。」などを考える必要があるということを伝えていかなければならない。

阪神・淡路大震災の被害など知れば知るほど、地震を経験していない私は恐怖を感じる。だからもっと防災・減災について知りたい。そして、大切なものを一つも失わないようにする必要がある。

5 自分にできること

未来を担う私たちにできることはやはり語り継ぐことだ。しかし、経験していない私たちに語り継ぐことができるのか。何を語り継ぐのか。阪神・淡路大震災の語り部さんたちも経験はしたものの、多くのお話は人から聞いたことだ。つまり、私たちでも、経験された方の話を聞き理解したうえで語り継ぐことはできるということだ。

今回初めて両親に震災の話聞いたが、口には出さないだけで、確実に被災している。そんな方たちから震災の話を聞きだすことも重要だが、「辛くなるから、思い出したくない。」と考える方もまだまだいらっしゃる。だからその人たちの分も、阪神・淡路大震災について語り継ぐ必要がある。震災を経験していない世代が増えていく中、自然と防災意識は薄れていく。私自身も大きな地震といった自然災害にはあったことがない。

そんな、若い世代の阪神・淡路大震災の記憶の風化を防ぐとともに、私たちが語り継ぐことによって、新たな災害に備える人を増やしていきたい。災害が起こったとき、過去の災害の知識がある人とそうでない人とは、災害に対応する能力に大きな差が生まれる。自分の命を守り、家族や近所の人を救うため、私は語り継ぐ。

次に、募金活動といったボランティアだ。参加させていただいたボランティア一つ一つにやりがいがあり、とても楽しかった。しかし、私がこの3年間で参加したボランティアはそう多くない。私は軽音楽部に所属し、さまざまなライブに出させていただいた。バンドのメンバーに迷惑はかけたくなかったし、せっかく高価な楽器を買ってもらったから「これくらいいいか。」といった妥協は絶対にしなくなかった。真剣に取り組んだ3年間は本当に楽しかったし、充実していた。「今」できることに真剣に取り組みながら、できる範囲のボランティアをしていくことにも十分に意味がある。だから、私だけではなく、より多くの人に、参加した回数より、できる範囲でボランティアに参加してほしい。そうすることで地域の関りも作れる。

6 環境防災科

(1) きっかけ・入学前

当時、私は特に行きたい高校もなく中学時代の先輩の勧めや、同じ部活動の子が受験することを知り、とりあえず受けてみようと思ったのがきっかけだ。そのときはもちろん、阪神・淡路大震災のことなんて、神戸に住んでいる私が知らないわけないと思い込んでいた。今思うと、この科に入っていなければ、甚大な自然災害を経験するまで、防災に興味を持たず、災害の恐ろしさ知らないまま今も過ごしていたかもしれない。

環境防災科に入学し防災について学ぶまで、私は防災の具体的な知識など全く知らなかった。しかし、一度だけ防災に関心を持った出来事がある。それは、東日本大震災だ。当時私はまだ小学生だったが、あの時見たテレビの映像はこれからも忘れることはない。学校が終わり家に帰りいつものようにテレビをつけ、あまりの衝撃にテレビの前から動けなくなった。これが同じ国で起こっていることだということすら理解できなかった。その時初めて、私もこんな風に死ぬのかもしれないと恐怖を感じた。

(2) 入学後

授業のほかに外部講師の方に来ていただいてお話を聞かせていただいたり、外部の施設を見学しに行ったり、熊本地震が起こった時は、現地に行き、できる範囲のことをしたりすることもあった。

環境防災科に入り、多くのことを学び、多くのことを経験させていただいた。入学するまで全部知っていると思っていた阪神・淡路大震災のことも、知らないことだらけだった。知った気になっている私たちが一番風化を加速させているということにも気づいたし、24年という時間の重さも知った。

阪神・淡路大震災といった自然災害の被害について知っていく上で一番必要かつ取り組んでいかなければならないと痛感させられたことは、備えるということだ。非常食を準備することは大切だが、いつ起こるかわからない災害のためにわざわざ準備する家庭はそう多くない。だが、ローリングストックという方法を知った。レトルト食品などを普段からご飯として取り入れ、使った分だけ買い足すという方法だ。これは普段から非常食になれることができるし、手軽に取り組める一つの命を守る手段である。このような小さなことを組み合わせることも防災である。このようなことを学ぶことができ、環境防災科に入学して本当に良かった。卒業しても知っていることを人に伝えていくことも、私たちの役割である。

7 夢と防災

私の夢は、素敵なお母さんになること。しかし私は、家事をすることも、子供とかかわることもあまり好きではない。しかし、なぜそのような夢を持ったかという、私の母がとても尊敬できる人だからだ。母とはたくさんぶつかった。怒られたりしたその時は、とても嫌な気持ちになるが、時間がたつといつも母の言っていることの正しさが見えてくる。朝から晩まで家事に追われながらも私たちの相手をしてくれる。普段は本当に面白い人で、なんでも相談できる親友のようだ。しかし、駄目なことをしたときは叱ってくれる。私にはまだ備わっていないメリハリのある姿をととても尊敬している。そんな全力で私たちのことを考えてくれる母の姿を見てみると、私もこんな人になりたいと強く思うようになった。だから、私を生んで育ててくれて本当に感謝している。私もいつかそう思ってもらえるような母になりたいと強く思う。

また、私が母親になったら、どんな災害からも子供を守る責任がある。そのために過去の災害や防災などをしっかりと学ぶ必要がある。

まず、学校では教師が生徒を預かり守るという責任がある。言い方としてあっているかわからないが、家に帰ると親が子供を守るという責任も生まれる。家のどこにいても子供を守るためには徹底的に家具を固定する必要がある。しかも家具の固定は比較的成本がかからず、取り組みやすいので、とてもよい防災の一つの方法である。次に落ちてくるものに瞬時に対応することは難しいので、極力高いところにはものを置かないようにしたい。また、災害の一番の備えとして、耐震化や耐火対策などの家を建て、工事にも取り組みたい。また、非常用持ち出し袋を子供と一緒に作り、「避難する時には何が必要か。」などを考える機会を作りたい。さらに、まち探検をして、何が危ないか、どこが危ないか、などを考える力をつけたい。また、家庭ではローリングストックに取り組んで月に一回くらい非常食体験などをしてほしい。子供のときから自然と防災に触れることによって、防災意識が高まる。

このように、自分の子供に防災力を身につけてもらうのはもちろん、幼稚園や小学校などでも簡単な防災の方法を紹介していきたい。私が通っていた幼稚園では、よく保護者が集まっていたので、そのような集会の場で家具の固定の大切さや、耐震化や耐火対策などの紹介をしたい。参観日のときなどで、

親子で新聞スリッパなどを作ることで、楽しく、さらに身につくので、取り組みたい。親と一緒に取り組むことでふざけたりしていたら怒る人がいるため、真剣に取り組むことができ、さらに知らない人ばかりでないので、リラックスした状態で取り組める。小学校以降では、私たちがやらせていただいた出前授業のようなものを休みの日に図書室でしたり、学童の子たちと一緒に勉強することで過去の災害などを知ってもらいつつ、「だから災害に備えることが必要」と分かってもらえるように取り組みたい。

やらされる防災ではなく、自分から取り組む防災になるような手助けをしていきたい。

8 最後に

現在、私の家の周りでは、阪神・淡路大震災の面影はなく、とても住みやすい町である。そんな中にいる私たちは自然と震災の記憶が薄れてしまう。つまり、復旧・復興が進むにつれ震災の記憶や傷跡が風化していくのは自然な流れなのかもしれない。現に私はこの環境防災科に入るまで阪神・淡路大震災は過去のことだと考えていた。また日本は1年間に何度も地震が起これり、災害が多く災害大国といわれていることはこの学科に入るまで全く知らなかった。だから私たちは、同世代の人たち、あるいは大人よりも、防災にかかわることが多い。さらにはそこから学ぶことも多いといえる。つまり、知っている知識や教訓をより多くの人に発信していく必要がある。さらに私たちが語り継いでいかないと、より急速に阪神・淡路大震災は風化してしまう。

今回、この「語り継ぐ」を作成できることは、私たちにとっては一つのチャンスなのかもしれない。風化させない為の手段なのはもちろんのこと、直接体験した人から話を聞くことで、自分の今の知識を整理する機会になった。そして一つ私は心に決めたことがある。それは、笑顔の溢れる町・国・世界にするために、一つ一つの災害と向き合い、防災に取り組むことだ。そうすることで私たちが大人になり子供や孫ができたとき、一人一人の防災意識が今よりも強くなり、より災害に強い「まち」になると思うと、将来がとても楽しみだ。

「語り継ぐ」

福岡 朝陽

1 はじめに

1995年1月17日5時46分阪神・淡路大震災は起こった。その地震によって6434名の尊い命が奪われ、20万棟以上の家屋が被害を受けた。今年で、震災から24年の時が過ぎた。僕はその5年後の2000年に生まれた、「経験していない世代」の一人だ。舞子高校の環境防災科に入学し、阪神・淡路大震災はもちろんのこと、防災についてたくさんを学んできた。僕はこう思う。「防災において大切なのはその災害を経験していない世代の声だ。」と。もちろん、経験した人の声があるものだが。地震とは、1度起こればもう終わりというわけではなく、周期的に起こるものだ。それも数百年単位の大きな周期で。次の阪神・淡路大震災の地震、つまり兵庫県南部地震が起こる頃にはこの震災を経験した人はおろか、僕たちでさえも確実に生きていないだろう。僕は次の兵庫県南部地震での死者が0人になることを願っている。そのためにも僕は阪神・淡路大震災を語り継ぐ使命感を感じている。

2 母の話

(1) 地震発生日

母は当時、明石市二見町の現在祖父母が住んでいる家に祖父母と3人で暮らしていた。その時間帯、母はまだ寝ており、祖母だけがお弁当を作るために起きていた。突然の大きな音と突き上げられるような揺れに目を覚ましたが、身動きが取れず布団から出ることができなかった。祖母はパニックになってしまい腰が抜けたような状態で、動けずにいた。余震による恐怖の中で祖父と母が仕事に出て行ってしまい、祖母は怒ってしまった。

母の当時の職場は学園都市にあり、車で出勤したが、地震発生直後は大きな渋滞もなく、あまり時間をかけずに出勤することができた。職場へ向かう途中、伊川谷の新幹線が落ちている光景を見た。昼過ぎ、職場から須磨の方角を見ると黒い煙が立ち昇っており、テレビなどの速報ばかりが気になり、誰も仕事に手がつかなかった。中央区の海岸通りにある農業会館の本店での業務ができなくなってしまったため、引っ越しをし、姫路と学園都市に分かれた。その日の帰りは出勤時と違い、道が渋滞しており、神戸から北回りで帰宅した。

(2) 地震発生日以降

翌日からは電車が止まっていたため、車で出勤する人が多く、7時半に出勤しても職場に着くのが10時半と、3時間もかかってしまった。日が昇る前に家を出ると道がすいており、6時に家を出たら6時半に着くことができた。職場の人の中には姫路から船に乗って出勤する人もいた。

土曜日には、長田区池田町に住んでいた知人が山陽西代駅の近くの体育館に避難していると聞いた。急いで食べ物や飲み物をもってJRで鷹取か新長田まで行き、そこから歩いて知人のいる体育館へ向かった。その途中で母は人生で初めて焼く野原を見た。長田区の大火災だ。乗っていたJRの電車内では誰一人しゃべっている人はおらず、重たく暗い空気が全身で感じられた。

震災翌日から少しの間、母はライフラインが断たれていた長田区ひばりが丘と垂水区宮本町の知人を二見町の自宅へ連れて帰り、温かいご飯を食べさせたりお風呂を貸したり溜まった洗濯物を洗ったりして家まで送るという生活をしていた。その知人は、「銭湯へ行っても行列で入る気になれなかった。本当に助かった。」と、とても感謝してくれた。目の前に悲惨な現場が広がっていても車で30分も走れば普通の生活がある。そんな味わったことのない違和感をもちながらも、常に被災した人のために何かできる事がないかを考え、毎日神戸と明石を往復していた。

須磨区では、白川台の団地の3階に住んでいた弟の子(甥)が11月29日に生まれたばかりだった。母は仕事終わりに弟の家に寄り、まだ生後2か月にも満たない甥の面倒を見ていた。母の弟は当時、水道屋で働いていたため毎日夜遅くまで工事で外に出ており、帰宅するのは夜中だった。

(3) 母の知人の話

元町の本店で働いていた仕事の先輩はパソコンがそこら中に散らばり、片付けばかりで全く仕事ができなかった。家の水道は止まっており、トイレに行くことができなかった。

淡路に住んでいた友人は火災によって家が燃えてしまった。逃げるときは何も持ち出さずに逃げた。思い出の品はたくさんあったが、どれかだけを選ぶということができなかった。

長田区に住んでいた友人はお好み焼き屋を営んでいた。母もよく食べに行っていたが地震で全壊してしまい、数年間再開することができなかった。数年後、プレハブ小屋で再開した。

同じく長田区の知人は家が全焼してしまいパジャマ姿のまま避難した。その後、長田区のまちづくり協議会に入り、区画整理を成功させた。

3 祖母の話

(1) 地震発生前日

母と祖父の3人で暮らしていた。祖母は前日の午後6時ごろ、こたつに入ってうたた寝をしている時に、「ゴゴゴゴ…」という地響きのような音を聞いた。その時家には誰も帰ってきておらず、気のせいだと思いそのことは誰にも話していなかった。震災後、世間で「地震前日に地響きのような音がした、いつもとは違った雲を見た。」などの不可解な現象が話題になった。その時初めて「あの時聞いた音も地震につながる音やったんかも。」と気が付いた。

(2) 地震発生当日

当日の朝はいつも通り5時に起き、洗濯機を回し、石油ストーブに火をつけ、祖父のお弁当を作っていた。突然訪れた大きな揺れにパニックになりながらも、すぐに洗濯機の水を止め、ストーブの火を消し、ガスを止めた。当時は、防災という言葉すらあまり浸透していなかったため、机の下にもぐったりはできず、立ったまま揺れが収まるまで動くことができなかった。揺れが止まると、腰が抜けたように全身の力が抜けた。近所の様子は変に静まりかえって不気味に感じた。母と祖父は仕事に出てしまったうえに、何度も余震が起これ、しばらくの間は恐怖で頭が真っ白だった。2週間前に仕事場の友人と「明石や神戸は地震がなくいいところやねえ。」と話していた矢先の出来事だった。24年経った今でも、風などのガタガタという音に震災の記憶がフラッシュバックし、驚くことがある。

なんとか家の片づけを一通りすまし、遅れながらも当時勤めていた会社に行った。しかし、社内は物が散乱しており仕事ができる状況ではなかったため、「今日は休みにします。」と言われ家に帰った。当時の浜国道（現在は国道250号線）を一日中消防車や救急車が行ったり来たりしており、明石にいながらも現場の悲惨さを感じ取れた。その日のうちに長田区池田町に住む知り合いが西代の体育館に避難していると聞き、近所のお店にできた行列に並んで、水をたくさん買った。

(3) 地震発生翌日以降

4日後の土曜日、買っておいた水を持って母と一緒に西代の体育館へと向かった。幸いなことに、体育館には水が十分に足りており、水を持っていく必要はほとんどなかった。

地震から2週間ほどたった頃、周囲の状況も少しずつ落ち着いてきたため、結婚当時住んでいた須磨寺にある家の様子が気になり見に行ってみた。その家の周辺はほとんどが将棋倒しのよう倒壊しており、建っている家屋は少なかった。

4 叔父の話

叔父は当時、須磨区の白川台の団地に住んでいた。突然の大きな上下の揺れに目を覚ました。家のもののほとんどが浮き上がるほどの揺れだった。食器はすべて割れてしまい、足の踏み場もないほどだった。ブラウン管テレビが2m以上飛び、危うく1か月前に生まれたばかりの息子にあたるころだった。電子レンジなど家具のほとんどがぐちゃぐちゃに散乱していた。家のことがあり、すぐに仕事へは行けなかった。長田方面の空を見ると火災による黒煙で真っ暗になっていた。揺れが収まるとすぐに外に避難した。10分置きに余震があったが、通帳だけを取りに家に戻った。

5 将来の夢

(1) きっかけ

僕の将来の夢は消防士になって救助隊に所属することだ。そう思い始めたのは小学生の頃、近所の消防署で車両点検や訓練をする消防士を見て「カッコいい」と思ったのがきっかけだ。そのころはまだはっきり消防士になりたいと思っていたわけではなく、カッコいい職業の一つで、「夢」というよりは「憧れ」というような遠い存在だった。

(2) 「憧れ」から「夢」へ

僕が小学校4年生の2011年3月11日、東北地方で大きな地震が起こった。東日本大震災だ。死者行方不明者合わせて約1万8,400人、避難者40万人を出した大災害だ。僕が小学校から帰ったとき、母と弟がテレビに貼り付けになっていた。テレビでは津波の様子が流れていた。海から離れた田畑を海から来た波が瓦礫と一緒に這い上がっていくところだった。その日は一日中テレビでは速報ばかりで、他に見たい番組があったが、被災地の映像や世間の雰囲気から、この出来事から目をそらしてはいけな

察した。

ニュースを見るたびに何倍にも増えていく死者数を見て人間の命の弱さ、自然の力の強大さを目の当たりにし、「たとえ消防士になっても人間は人間。こんなにたくさんの命を救えない。」と心を折られた。しかし一方で、行方不明者の数は減っていつていることに気がついた。当時の僕は遺体で見つかる場合があることを知らなかったが、それでも建物の屋上に避難している要救助者の救助をしたり、震災から何か月たっても行方不明者の捜索をしたりする消防士の姿は確かにあった。それを見て、「死者0人は無理だとしても、自分が消防士になれば100人死ぬのを99人にすることはできるかもしれない。」と思うようになった。ただかっこいいと「憧れ」に思っていただけの消防士という職業はこの時「夢」に変わった。

(3) 南海トラフ大震災

中学校3年生の時、南海トラフ巨大地震という言葉をよく耳にすることが増えた。南海トラフとは、四国の南側に位置する4,000m級の細長い海底盆地のことを指す。フィリピン海プレートとユーラシアプレートの境界に東海、東南海、南海とトラフが並んでおり、この3つの内どれか1つでも地震が発生すれば、3つすべてが誘発する可能性がある。その事から「3連動地震」とも呼ばれている。当時は将来30年以内に発生する確率が70%だといわれていたが現在は70~80%に上がっている。90年から150年の周期で発生する南海トラフの地震が最後に起こったのが約90年前の昭和南海地震であることから今起こってもおかしくないことは十分に理解できる。さらに東海地震に至っては、前回の安政東海地震から150年以上たっており、南海トラフ地震は東海地震によって誘発する可能性が高いといわれている。南海トラフ巨大地震による兵庫県内の想定では、最大震度6強、津波の高さは3mで、地震発生から最短で109分後に到達する。被害想定は、死者5,800人、倒壊家屋5万4,000棟、直接被害額5兆円とされている。

「この地震が起こるときに消防士になっていないと意味がない。」と思い、できるだけ早く消防士になろうと決意した。人の命を救える救助隊員になればいいと思っているが、自分が生まれ育ち、家族の住む兵庫県で働きたいと考えている。

(4) 国際消防救助隊

ここまで言ってきた通り僕が消防士になるのは南海トラフ巨大地震の災害現場で救助隊として活躍したいからだ。しかし、僕にはもう一つ大きな目標がある。それは国際消防救助隊の一員に選ばれて、世界中の災害現場で活動することだ。「国際消防救助隊 (International Rescue Team)」通称「IRT」は、「国際緊急援助隊 (Japan Disaster Relief Team)」という組織の中の救助活動を専門とするチームだ。救助チームの他にも、医療チーム、自衛隊部隊、専門家チーム、感染症対策チームがある。災害の種類や規模、被災国の要請によって必要なチームが派遣される。これまでに、トルコやネパール、コロンビアや中国など、様々な地域で活動してきた。IRTに選ばれるには、国内に40か所、兵庫県に5か所ある消防本部に採用され、救助活動で優秀な結果を残す必要がある。選ばれる人員数は約500名と、かなりの狭き門だ。

僕は高校2年の冬、2015年4月に起こったネパール地震によって被災し、甚大な被害を受けた首都のカトマンズに訪問する機会があった。日本国内では、東北や熊本の被災地支援活動に参加したことがあったが、海外の被災地を視るのは初めてだった。ネパールの建物は耐震化などがほとんど進んでおらず日本と比べて地震に弱い造りだった。地震による被災地という共通点を持ちながらも日本とは全く違った景色が広がっていた。その当時からIRTについて興味を持っていたため、実際に2年前にIRTが活動した地域だと思うと非常に興奮した。一方で異国の地で救助活動をするのに困難な点に気が付いた。ネパールという国は世界最高峰のエベレストを含むヒマラヤ山脈及び中央部丘陵地帯に位置しており、高いところで標高2,500mのところに居住地がある。日本よりも酸素が薄く、酸素マスクなしでは日本と同じような動きをするのは非常に難しいだろう。このように、活動範囲が世界中に広がると、その国々によってさまざまなハンディを負いながらの活動となる。そのような厳しい環境下でも世界トップレベルの救助活動をしているIRTの隊員を心から尊敬し、また最大の目標として追いかけていきたいと考えている。

6 感想

僕は環境防災科に入って3年間のうちに、何度か周りの大人から阪神・淡路大震災についての話を聞くチャンスがあった。しかし、あまり具体的な話を聞き出せたことはなかった。防災を学ぶために環境防災科に入ったが、心のどこかで、いま震災の暗い話をしたくない。真面目に話を聞くのが恥ずかしい。

という気持ちがあったのだろう。今回、神戸で被害が大きかった阪神・淡路大震災を明石の最西端の二見で体験し、神戸で被災した知人や友人と関わりながら悲しみを共有していく母や祖母の話聞き、人として尊敬できる部分を見つけることができた。また、3人とも話をしているうちに当時のことを思い出す場面が多くあり、母と祖母の中で震災の記憶が風化してしまうことを防ぐことにつながったような気がした。震災を経験した人が少なくなり風化していくことを防ぐのと同時に、経験した人自身の記憶からも風化するのを防ぐことができると気がついた。

環境防災科では主に神戸での被災の様子や出来事を学ぶことがほとんどだった。明石で育ってきた僕は場所や建物のイメージをすることが難しく、話についていけないことも多々あった。今回、母や祖母の明石から見た阪神・淡路大震災の話聞いて、被害が少なく現在とあまり景色が変わっていないこともあり、当時の状況を想像しながら聞くことはそれ程難しいことではなかった。

叔父の話からは当時、あまり防災という言葉が浸透していない、社会的な地震に対する弱さが見えた。家具の固定や逃げ道の確保、祖母は机の下にもぐることもできなかったという。防災訓練や防災教育が全くと言ってよいほど世間ではされていなかった。逆に言えば、阪神・淡路大震災が起こったからこそ、今、これだけ防災という言葉が表に出ている。阪神・淡路大震災は多くの犠牲を出したが、その一方で未来の命を救うほどの重要な教訓を残していったのだろう。

環境防災科に入って様々なことを学んできた。防災についてはもちろんのこと、被災地ボランティア活動では被災者の自立を第一とし、必要最低限の支援をする。地域ボランティアでは思っていた以上に防災の知識が周知されていないことを知り、防災教育の必要性を実感した。災害発生時には自分の身の安全を優先する自助。近所の人と協力して共に救助・避難する共助。その他にも防災に関する初めて聞くような専門用語や地学的な分野で災害発生メカニズムや人為的な要因があることなど、数えきれないほどの知識や能力を身に付けてきた。それらすべてを将来に活かし、環境防災科の生徒として与えられた「市民のリーダーとなり防災を広める」という使命を胸に、これからも防災に関わり続けていきたいと考えている。

「語り継ぐ」

藤田 優芽

1 はじめに

阪神・淡路大震災は1995年1月17日午前5時46分に発生した大規模な自然災害だ。この地震で6434名の方が犠牲になられた。私は震災から丸6年たった、2001年の1月に生まれた。私は震災を経験していない。だが自分の生まれ育った地でどんな災害が起こってどんな風に復興していったのか、自分の周りの方はどんな経験をされたのか、聞いて知って語り継ぐ責任があると思う。「語り継ぐ」を書くにあたって自分が環境防災科で3年間学んだこととリンクさせながら、今自分が伝えることができること、次の世代に伝えたいことを書いていきたいと思う。

2 母の体験

これから書く内容は母から見た目線である。

(1) 震災当時の母

神戸市西区の一軒家に母・父・当時小学校4年生の弟と4人で暮らしていた。

1995年1月、当時中学2年生だった。毎日学校に行き友達と家族と当たり前の日々を過ごしていた。

(2) 震災当日

1月16日の夜も普段通り2階の和室に家族4人で川の字になって寝ていた。

5:46に轟音とともに全身をつきあげるような感覚に襲われ恐怖で目が覚めた。横で寝ていた父が覆いかぶさってくれていて、幸い周りに家具などなくふすまが倒れていただけだった。

母はちょうど起きようとした時に地震がおこり、まだ2階にいたので無事だった。揺れが収まり母は1階へ様子を見に行った。食器が飛び散っており2階で待っていた自分、父、弟に向かって「降りてきたらあかん!!!」と大きな声で叫んだ。その後、安全を確認しながら待機をした。大きな揺れが収まっても余震は続き体が硬直して全く動くことができない状態だった。テレビをつけることができたので見てみると長田のまちが映し出されていた。目に映った光景はとんでもないものだった。自分の知っている神戸市長田区ではなかった。どこか違う国を見ているかのような感覚になり実感がなかなか湧かなかった。

その日は中学校も休校になり、自転車でコンビニに食料調達に行った。食べられる物とはにかく買い込んで1つでも多く食料を確保できるようにした。水が止まり、ガスも止まり中学校2年生の自分にはなにもできない状態でただただ呆然とするだけだった。

隣の明石市は、たまたま水もでたので行動力があつた母は車であちこち走り回りお水をもらい、近くに住んでいた親戚たちに水を配っていた。

(3) 震災後

西区はほかの地域に比べて被害が少なく家も半壊で済んだ。だがライフラインのすべてが完全に遮断されていたので自分の家で生活することは難しかった。そして私たち家族はそれからしばらくの間あまり被災していなかった父の友達のお家にお世話になった。ご飯を作ってください食べさせていただき、お風呂に入らせてもらい、その時、いままであった当たり前が一瞬にして全て無くなり人の優しさや資源のありがたさを心の底から感じた。

月日が経ち高校に入学し、いろいろな地域の友達が増えた。そこで阪神淡路大震災の時の話をすると当時自分の周りは幸いにも亡くなった方や生き埋めになった方はいなかった。だが友達の中には実際に生き埋めになって救助されて助かった人や親族を亡くした人がたくさんいた。高校の先輩でも亡くなった方がおられて、自分がいま生きていることが当たり前ではなく本当にありがたいことだと心の底から感じた。

(4) 子どもができて

19歳の時に長男(兄)、20歳で長女(私)、27歳で次女(妹)を産んだ。私が子どもを産んで感じたことは、守るものができたこと、自分より子どもの命が第一優先であることだ。

また、子どもたちに人を助ける気持ちがどれほど大切かということ伝える責任が親としてあると感じている。

震災を経験し、子どもを産み、守るものができ、人の暖かさ優しさを感じながら当たり前を当たり前と思わず感謝して生きていきたいと思う。

3 親戚のおばさんの話

地震発生時は大阪の吹田市で車を運転していた。空が青光りをした瞬間地震が発生した。車のハンドルは左右に大きく揺れまともに運転ができない状態だった。道路が三車線あり両端の車は側道にぶち当たり、道路がぐちゃぐちゃだった。幸い、自分は三車線のうちの真ん中で車を走らせていたため車同士の衝突や側道にぶつかることはなかった。地震発生直後、道は大パニックになると覚悟したがみんなが道を譲り合いながらなんとか進めた。だが30分後にはもう大渋滞がおこり車は全く進まなかった。本当に怖かった。うちに帰れないのではないかという恐怖に襲われながら車から流れてくるラジオに神経を集中させて情報を待った。その時聞いたラジオでは京都が震源と伝えられていた。

そこから近くにあった友達の家までなんとか帰ることができた。そこでテレビを見て、初めて神戸で起きた地震だと知った。京都方面が震源だと思っていたので神戸方面に避難しようとしていた。あの時いれびを見ていなかったらどうなっていたのか今考えても恐ろしい。

そこからまた自分の家まで帰ることができた。その道中、近所の様子を見るとこの家は大丈夫なのに横の家は全壊しているという風に家の壊れ方が不自然だった。揺れに沿って家屋が被害を受けているようだった。

周りの友達や知り合いの家はガスも止まりシャワーが使えないので、電気で動くシャワーだった自分の家にみんなシャワーを浴びに来ていた。食料はそんなに困ることはなかったがどこに行っても水が売り切れていた。また電話が全く繋がらないので安否確認に時間がかかった。

4 話を聞いて感じたこと

(1) 母の話を聞いて

私は母から初めて震災当時の話をきいた。私の母は西区に住んでおり被害が少なかったという話は少しだけきいたことがあったので正直大したことはなかったのかな、と思っていた。だが母の話を聞いて想像以上に被災していて心が痛くなった。当時中学生だったということは今の自分よりもさらに若く、当時は防災教育が普及していない時代だったので本当に怖くて仕方がなかったのだろうなと話を聞きながら感じた。

私が話を聞くなかで特に心に残ったことは自分の周りは被災の程度が少なく収まったが少し違う地域にいけばものすごい被害をうけていて差がとても大きかったということだ。実際に私の父は須磨に住んでいた。母と同じく中学2年生で地震を経験した。被災状況は想像を絶するものだったと幼いころに聞いたことがある。住んでいた団地は崩れた。私の曾祖母は崩れた団地の下に埋もれて亡くなった。このように私の母と父だけでも被害の程度がこんなにも大きく変わる。述のように母も友達と自分の地域がこんなにも違うということに胸を痛めたようだ。

母は兄と私と妹の命が第一優先だということを何度も伝えてくれた。私の家庭は親が母しかいないため1人で子ども3人を守るのは相当大変なことである。そのため私は自分の身は自分で守るということはまだ小学生である妹にも伝えていこうと思った。

また、母は何度も「自然にはどれだけ頑張っても敵わん」「1日1日大事にして毎日を楽しく過ごすことが何より大事」と言っていた。

大きな災害を経験した母だからこそ災害を経験していない私に1番伝えたい思いがこの2つなのだと考えた。母はその言葉の通り毎日を楽しく過ごしている。阪神・淡路大震災で被災した傷はもしかしたらまだ完全には治っていないかもしれない。だが私の母は前を向いて今日も楽しく過ごしている。その母をみて私も1日1日を大切に過ごし、当たり前を当たり前と思わず、備えを大切に起こりうる災害に対して万全の状態をいたいと強く感じた。

また、当時母が住んでいた一軒屋は今も私の祖母が住んでいる。被害をあまり受けていないと言っていたが、実際に家を改めて見るとななめに傾いている。スーパーボールを床に置くとコロコロと転がる。私は小さい時お兄ちゃんとよくスーパーボールで遊んでいた。だがその転がる原理は特に理解はしていなかったが今考えるととても恐ろしいものだと感じた。私の祖母は「あんな怖い思いもう一生体験したくない。今はお父さん(祖父)が亡くなって、1人で住んでいるからこわい地震に対しては神経質になるなあ」と言っていた。

私はこの言葉を聞いて同じ恐怖を繰り返さないために備えること、知ることが本当に大切だと改めて感じた。また、祖母の家と私が住んでいる家はとても近いのでたまに避難経路について話し合うことがある。これからも怠ることなく続けていきたいと思う。

(2) 親戚のおばさんの話をきいて

私は親戚のおばさんの話を聞いて情報がどれだけ大切かということに改めて感じた。おばさんは車のラジオで震源は京都だと聞き完全にそう思い込んでしまっていた。そのあとたまたまテレビで正確な情報をキャッチすることができたので大事には至らなかったが、そのまま神戸方面に避難しようとしていたらと考えるととても恐ろしいことである。災害発生時は多くの情報が出回る。その中にはデマや誤情報ももちろん含まれる。その情報を自分でどれだけ見極めることができるのかが命を救う大きなカギになると感じた。

また、連絡手段の確保の大切さも改めて感じた。おばさんが今はLINEやTwitterがあるけど当時電話でしか連絡が取れなかったから本当に困ったといていた。私はSNSが普及しているこの時代だからこそデマやウソに惑わされることなく正しい情報とともにうまくSNSを利用することが大切だと感じる。LINEは基本的に緊急時でもつながることが分かった。またTwitterに自分は大丈夫だということをつぶやくだけでも十分安否確認の情報になる。私はこのようなこともこれから起こりうる災害に備えて伝えていきたいと思っている。

5 環境防災科に入学して

私が環境防災科を受験した理由はただ単純に幼馴染の先輩が通っていて楽しそうだったから。という簡単なものだった。それまでは阪神・淡路大震災については小中学校で少し勉強しただけで特に意識して生活したことはなかった。だが環境防災科に受験すると決めてから日本、または世界各地で起こった自然災害のことを調べていくにつれ防災への興味がわいてきた。私は自然災害で被災された方が些細な幸せを実感できるような環境を作れるようになりたいと思った。

環境防災科に入学して私は確実に防災への意識、起こりうる災害への意識が大きく変わった。最初のころは知識がない分教えられたことを記憶するだけだった。だが3年間防災を学んできて知識もある程度ついてきたからこそ自分なりの防災を考えたり、発表したりすることができるようになった。また、私はもともと人前に立つのが好きでよく発表もするほうだったが環境防災科に入学してからは意味のある発表ができるようになったと感じている。人のために自分ができる最大限のことを防災の面はもちろん普段から考えて行動できるようになったのも環境防災科に入学して様々なことを経験させてもらったからだからだと感じる。私は環境防災科でしか学ぶことのできない貴重な学習をこれからは自分から広めていくことが大切であり環境防災科生としての使命だと思っている。

6 将来の夢

私の将来の夢はダンスに関わる仕事をする事だ。きっかけは小さいときにあるアーティストのDVDをみてときに習い始めて人の前で自分を表現することの楽しさを知り、ずっと憧れていたからだ。ダンスの関係といっても振付師、バックダンサー、インストラクターなど種類はたくさんある。私はその中でバックダンサーとインストラクターになりたいと考えている。そしてそこで防災を広げていくことができればよいと考えている。一見ダンスと防災は関係が全くないように見える。だが私はダンスと防災は意外と近い存在にあると思う。ダンスを通してできる防災、減災がある。

まず1つ目は避難施設に行き誰でも踊れるような簡単な振りをみんなで踊ることだ。避難所では運動不足になりやすい傾向にある。また、熊本地震の時のように連日車中泊が続き、エコノミー症候群になり最悪の場合命を落としてしまう可能性がある。その問題を解決するために私は被災地に行きダンスを通して運動不足の解消ができればよいと考えた。小さい子どもから高齢者の方までできる簡単なステップでも十分運動になるし外の空気を吸うことによってリフレッシュすることもできる。また、みんなで体を動かすことで周りの人ともコミュニケーションが取れる機会ができる。私はそのようなことが復興につながると考えている。

2つ目は被災地でダンスのレッスンをすることである。ダンスを習う人が多くなった今の時代、もちろん被災地にもたくさんダンスを習っている人はいる。被災したことのよって自分の楽しみであることができない環境を少しでもできる環境にしていきたいと考えている。私も気分が落ちた時や元気がないときはダンスを通して力が湧いてくるのがたくさんある。そのため私は被災地に行きダンスのレッスンを行いたい。ダンスをすることでなにか心のケアになれば自分の役目が果たせると思う。

一見ダンスと防災は別世界のものだと誰しもが思うだろう。だが私は環境防災科に入学して3年間過ごしてどの職業でも防災に関わることができるということを知った。

私はダンスと防災がもっと近い存在になれると思っている。ダンスはほかのスポーツに比べて技術や

経験値で左右されずにからだ 1 つで楽しむことができる。災害弱者と呼ばれる高齢の方、外国の方、障がい者の方、小さい子どもなどもわけ隔てなくみんなで体を動かすことはからだと心の健康につながる。私は改めて、ダンスで被災地を笑顔にできるようなダンサーになりたいと強く思う。

7 さいごに

今年に入ってから大きな災害が立て続けに起こっていて事前に準備しておくことがどれほど大切なのか身をもって感じる機会がたくさんあった。また、メディアの対応のありかた、ボランティアのありかたについて考える機会にもなった。西日本豪雨災害や北海道地震では芸能人がボランティアに入ったという記事をたくさん見かけた。そして芸能人が被災地に出向くことで一般人が被災地に対して関心を持ちボランティアを行うということもあった。影響力の大きい人物が周りに災害のことについて情報を伝えることで大きな輪が広がる。私はこの大きなつながりもこれからの災害でたくさん活躍すると感じている。

「語り継ぐ」を書くにあたって今回私は母と親戚のおばさんに話を聞いた。自分の身近な存在である人が被害に遭った状況を聞いてすごくつらい気持ちになった。だが私には語り継ぐ責任がある。つらい気持ちを言葉にしてその時の状況を事細かに教えてくれたことに感謝をし、今自分にできることである語り継ぎをしていきたいと思う。

これから生きていくうちに起こるといわれている災害に対してどう向き合い対処していくかが今後の自分の課題である。今回聞いた話を無駄にせずこれからも防災・減災と深くかかわっていききたいと思う。

「語り継ぐ」

松浦 陽樹

1 はじめに

阪神・淡路大震災を経験していない私が語り継ぐのは経験している人よりも説得力はないのかもしれない。けれど、風化させないようにするためには私たちのような経験をしていない者が語り継ぐことだと思っている。風化とは記憶や印象が月日とともに薄れていくことであり、忘れられるほど怖いものはない。

2 母の話

(1) 地震発生

私は震災当時大阪に住んでおり、中学二年生だった。地震発生直後はトラックが走っているような大きな音が聞こえて目が覚めた。目が覚めて真っ先に気がついたのはダンスがガタガタと動いていてダンスの上から物がたくさん落ちていたことだ。幸いダンスの上のっていたのは紙などの軽いものだったので怪我はなかった。何が起きているか分からず不安におそわれた。大阪は被害が小さかったので通常通り学校があり、いつも通り、普段の日常と変わらない様子で登校した。

(2) 学校内での反応

登校途中に友人と会い、その友人は顔面血だらけになっていて、理由を聞くと友人は初期微動で目が覚めて外に出たところ主要動が起き、顔からこけたそうだ。学校に着くと職員室がざわついていて覗いてみるとテレビに先生たちが集まっていて何やら話し合っていた。やっぱり大変なことが起きていると不安が募った。友人とは今朝の出来事で話が持ちきりになりみんなが不安を感じていたが帰るころには忘れてしまっていた。

3 父の話

私は震災当時長崎に住んでおり、中学一年生だった。朝いつも通りに七時頃に目を覚まし、テレビをつけたら驚くような景色が今でも思い出すくらい悲惨な神戸が映っていた。高速道路が真っ二つになり、バスが落ちそうになっているシーン。その近くの家は火災で焼けているシーン。子どもながらに何とも言えない恐怖を感じたことを今でも覚えている。しかし、住んでいるのは九州と遠かった為、一日考えることはなく、その場だけだったと思う。その後学校に行っても今朝の出来事は話題に上らず、ほとんどの人が他人事のような感じで過ごしていた。当時を思えば、私たちには危機感がなかった為、他人事にしてしまったのだと思う。

4 話を聞いて

初めて両親から震災の話を聞いた。母も父も当時は神戸に住んでいなかったので大きな被害は受けていないし、父は揺れさえ感じていない。けれどそんな二人の話はとても貴重だと感じた。環境防災科に入っていることもあり神戸で震災を経験した方のお話はよく聞くが、震災をテレビで見ただけで学生だった人の話などは初めて聞いたので新鮮だった。やっぱり経験をしていない人は他人事として見てしまう事を感じた。だからもっと震災を経験していない人にも危機感を持ってもらい備えてもらうことが大切だと感じた。当時のことを話し合ったおかげで私たち家族も改めて防災に取り組むことになった。正直真剣に親と話したのは恥ずかしかったが、そのおかげで気付いたことや感じたことがあったのでとてもよかった。

今までいろんな話を聞いてきて一つ印象に残っている話がある。地域の人々、友人、人々との間の顔の見える助け合より行われることを互助といい、その「互助」は個人の自発的意思によって他を思う気持ちがあるからできるもの、他者を支えるだけでなく、他者からの尊敬を通じた自分自身の生きがいや自己実現にもつながって、支える人と支えられる人の両者にとっての生活を豊かにする。さらに、地域コミュニティのつながり、絆を深めるためにも重要な役割を果たすと考えられていて阪神・淡路大震災で深く感じたらしい。

震災では想定外が常態化し、過去の常識や思い込みが通用しない。災害の常識や思い込みをリセットする必要がある。マニュアルはあるけど、実際に行動には繋がらないことが話を聞くだけでも感じた。

5 長田のまちあるき(区画整理事業)

(1)まち見学

まちを見て気がついたこと、たかとり工場は当時の鉄骨を現在も使用されている。地下道は当時の列車を思い出すデザインになっていて、線路の場所を地下でもわかるようになっている。地震で建て替えていない家の前は道路が狭いことがわかった。無事だった家もあるので電柱が道路の真ん中にあり、とても驚いた。合意のない街は整備されていないままだった。東西のプレートはカタカナで表示されていて、南北はひらがな、なにの違いか正直わからなかった。プレートの向きに歩いて行くと、たかとり駅につく、平屋が多くあり、三階建ての家が多い、近くの家と共有しながら家を建てる。

震災当時は事が起きてから動く人がほとんどで被害は東はほぼ全焼、大国公園で火がとまったことがまちを見ただけでわかる。震災前の家と後の家がわかれていた。防災上危険な家が結構あった。アルミの扉が当時多かったのでアルミは熱で膨張してしまい開かなくなり生きて埋まった人が多い。長田には神戸市出身の漫画家にちなんで、鉄道28号のモニュメントがたてられた。旧二葉校舎は現在地域人材支援センターとして生まれ変わることになっている。協同病院は震災当時から二葉小学校で診療所を開設し、けがの手当て、病人の診察にあたっていた。地域を周って診療活動も行っていた。大正筋商店街は今と違い、辺り一体は行きかう人のすれ違いが困難なほどの賑わいだった。

震災後すべてが焼き尽くされた。今は市街地再開発事業により、震災の面影はなくなった。震災当日電気は午前中に復旧した、しかし住民の中には漏電を心配して電線を切断してまわった人もいた。電力会社もそのあとすぐに送電を停止した。長楽地区は長田区の西南に位置しており、戦争の被害をほとんど受けなかったので戦前の木造長屋が多く残っており、震災ではそれらのほとんどが倒壊した。一方で職住一体の建物が多地域であり、屋根にはトタンを用いるなど軽量の素材を用いていたことが幸いに、倒壊を免れた家も少なくはなかった。また長楽小学校には約1800人の被災者が入り、老人いこいの家では50畳ほどの広さに57人の方が避難されていた。久二塚地区、震災の火災により商店街を中心に尊大な被害を受け、今では震災前の面影はほとんどなくなってしまった。また、二葉小学校では、炎が追ってきたことから長楽小学校への再避難を余儀なくされた。けれど、目前までおそった炎は突然向きを変えて二葉小学校は被災を逃れることができた。大国公園は東から追ってくる大火は大国公園でとまった。公園での東側に並んでいる楠には今でもこげ跡が残っていた。たかとり教会、教会は焼失したが、敷地内にはプレハブや紙の教会ペーパードームが建てられ、全国から集まったボランティアの拠点となった。紙の教会、ペーパードーム紙の集会場とも呼ばれ地域の住民にも開放されていた。今は同じく震災にあった台湾に移設され、交流の懸け橋となっている。

(2)感想

実際まちづくりを執行したひとは本当にすごい、すごいとしか言いようがない。最初に計画した場所が結局最後に区画整理が終わった話もあり、それほど地域によっては困難な課題が出てきたのだと感じた。人間は自分が損することを嫌がる。しかし、それをまとめて成し遂げたのはそれほどこのまちが好きだったと感じた。ただでさえ、クラスの意見をまとめるのも難しいのにまちの人をまとめて行動することがどれだけ勇気のいることが分からない、そして、まちに何があったのかを語り継いでいる。それを聞いたまちの人たちは考えて二度とないように自分たちで行動する。こういうことが大事だと思う。絶対に被災した人や物を忘れない、忘れなかったからこのように考えることができて防災が生まれたのだと思う、だからまちあるきでの語り継ぎもやっていこうと思ったし、大切さも感じた。

6 被災地訪問をして

一年生の時に熊本被災地訪問。二年生の時に東北被災地訪問を初めて参加させていただいてとてもいい経験になった。行く前はとても不安な気持ちだった。震災を経験していない私たちが行っていいのかという気持ちになったからだ。けれど何も知らない自分自身が嫌だったので参加させて頂いた。

初めて行く熊本や東北はとても考えさせられるものがたくさんあり、特に東北の大川小学校はいろんなことが頭によぎった、確かに教師は判断を誤って失ってはいけな命を失わせてしまった。けれど今は津波が来たら逃げると言う教訓はあるけどその当時はその教訓が継がれてなかったうえに大きな被害になったと思う。だから誰も責めることはできない。防災を学んでいくにうえにこのことを忘れてはいけないと思う。だから私たちが受け継いで風化させないようにしたいし、伝えていきたい強く思う。

この熊本訪問と東北訪問で一番大事だと思ったことは教訓を受け継ぐことが少しでも被害を減らすことにつながるということがわかった。そして風化することによって被害が大きくなることも同時に思い知らされた。

7 災害用伝言ダイヤル

地震などの大きな災害が起きると、家族や知人などに連絡をとるため、多くの方が一斉に電話をかけるため、電話がつながりにくい状況になる。

輻輳(一時的に電話が繋がりにくくなること)

そんな時役立つサービスがNTTの「災害用伝言ダイヤル」災害用伝言ダイヤルは、災害発生後にNTTがシステムを稼働し、家族間の安否確認や集合場所の連絡などに利用することができる。「171」番をダイヤルすると、全国に設置された災害用伝言ダイヤルセンターにつながり、音声ガイダンスに従って、伝言の録音・再生を行うことができる。ぜひ活用してほしい。

8 夢と防災

(1) きっかけ

私は警察官という夢がある。この夢を持つようになったきっかけは三つある。

一つ目はこの環境防災科に入ったことだ。私は環境防災科に入るまではずっと消防士を目指していた。けれど実際に警察官の方の講義や環境防災科の授業を受けて警察官という職業に興味をもちだし、警察官の仕事内容や、災害時の活動などを調べたりした。将来何がしたいのか、考えたうえでこの道に進もうと決意した。

二つ目は高2の夏に兵庫県警の説明会に行ったことがきっかけで、これが一番の決め手となった。正直なところあまり期待していなかったのですが興味本位で行ったところこれが本当に良くて兵庫県警の印象がとて変わりました。組織全体が一つの目標を持っていて私が行った時は暴力団対策を掲げていた。組織全体が目標をもつことによって一人一人のモチベーションも上がりそれを維持することができる。これは働き手からするととてもいい環境で、これから長く働いていかなければならない事を考えても警察官はとてもいい職業だと思う。

三つ目は私が高所恐怖症だということだ。消防士を夢見ていた小学生のころは大人に近づいていけば高所恐怖症は治るものだと思っていた。けれど、治るどころかひどくなるばかりで、もちろん観覧車に乗ったりジェットコースターに乗ったりして直す努力もしたが治らなかった。大げさかもしれないがある意味挫折だ。人の命が関わっているのに命を助ける方が動けなかったらどうにもならない。けれど、人を助ける仕事をしたという思いは変わらなかったの以上記の理由も含めて警察を選んだ。

(2) 警察と防災

警察はただ単に犯罪を取り締まっているだけではなく防災の面でも大きくかかわっている場面が多いと思う。災害が起きた時は一人でも多くの被災者を救うため、地方公共団体や消防と連携しながら救出救助をする。また、交通対策、防犯活動、被災者支援等を行うなどしている。

警察はいつ、どこで発生するか分からない災害に過去の災害の教訓を生かし、いかなる災害にも迅速かつ的確に対応できるよう、災害警備計画を策定し、様々な事態を想定した実践的訓練を積み重ね、災害の発生に備えた体制の整備を行って、また、地域住民に対して災害発生時の避難場所、避難時の留意事項等について周知徹底を図り、デパート、劇場等多人数の集合する場所の管理者に対して非常の際の誘導要領、照明・予備電源の確保等について検討をお願いするなど関係機関・団体と連携しながら、地域住民等による防災活動をしている。

警察は社会においても大きな防災活動をしているのは見ての通りわかると思う。私も警察官になったら実際にすることになる。そんな時は持ち前のリーダーシップを発揮して職務を全うしたいと考えている。

(3) 将来

私が警察の道に進む大きな理由は犯罪からも災害からもたくさんの人を守りたいからだ。今の私にはまず無理だということはわかっている。社会に貢献できる人間は頼もしい存在でなければならない、だから誰からも頼られる人間になる。この気持ちだけは絶対に忘れずに生きていこうと思っている。防災の広め方は正直あまりはっきりしていない。けれど、警察の活動において防災と深くかかわる方向にいくつもりなので、必ず機会はあると思う。その時にこの環境防災科で学んだことを少しでも伝えて少しでも防災意識を持つ人が増えるように努力する、これが今考えている私の防災の広め方だ。もっといい広め方があるかもしれないが実際に警察の組織に入ってみないとわからない部分がある。けれど考える時間はまだあるので自分なりの広げ方を探していきたい。

9 語り継ぐ

今まで環境防災科で学んだことをいかして阪神・淡路大震災を改めて向き合うことができた。私自身環境防災科で学ぶまでは災害や防災には正直あまり興味がなかった。けれど、そんな私が災害や防災を学んでいくうちに忘れてはいけない、語り継がないといけないと思ったのは同じ被害を繰り返してはいけないと強く思ったからだ。

これから語り継ぐにつれ、配慮しないとイケないのは震災を忘れたい人もいるということ。後世に伝えたいと思う人がいる反面に忘れたいという人もいる。語り継ぐのは簡単そうで難しい。けれど、そのような人達にも理解してもらえるように語り継いでいかなければならない。そのような時に私は、過去にあった災害を知ることによって私たちは守られる、守るすべを持つことができ、同じ被害を出さないようにすることができるのだということを相手の気持ちも考慮しながら伝えたいと思っている。私のような若い世代や経験していない者達が努力し、未来の可能性を信じて語り継ぐことにより風化は決して起こらないだろう、そのためにもまずは自分からその姿を見せていきたいと思う。防災を学ぶ者としてこれからも防災や減災活動に力を入れていくことを約束する。

10 さいごに

私の「語り継ぐ」を見ていただきありがとうございました。はじめに言ったように説得力はなかったかもしれないが、風化してはいけないという気持ちは伝えれたと思う。風化ほど怖いものはない。けれど風化を防ぐすべがあることが分かっている以上私たちは動かないといけないのだ。

「語り継ぐ」

本池 夏音

1 はじめに

1995年1月17日(火)午前5時46分淡路・阪神大震災発生。今はもう24年がたった。私が産まれたのは19年前なので当然、発生当時は生きていない。つまり、震災を経験していないのだ。けれど、これだけは言える。風化させてさせてはいけない。震災を知らない私たちは、データ化されているものを見たり、映像を見たり、語り部さんや身近の人たちにお話を聞いたりして震災当時のことを知ろうとしている。風化させないためにもこの場を借りて語り継ごうと思う。

今回わたしは、叔母(父の姉)に話を聞いた。叔母に話を聞こうと決めたのは、震災当時今の私の歳に近いからだ。震災が起きた時今の私たちと同じ、高校生といった若者は、何を考えるのか、震災を体験したことのない私はすごく興味を持った。

2 叔母の話

叔母は、東須磨にある私の父と同じ家に住んでいた。

「ぎゃあああああああ、志穂ちゃん、神様、神様、神様、どうか私たちを助けてください」母の声で起きた私は家が激しく揺れているため、一緒になって神様助けてくださいとずっと唱えた。私の上に母が覆いかぶさるようにガバツとかばって来ていた。

揺れがおさまり、恐怖で足がガタガタ震え心臓がバクバク音をたて、目の前は真っ暗。世界の最後かと思っていたが、何か生きてみたいような気がしたので「お母さん」と叫んでみた。すると、母が、「布団被って外に出なさい」と大声で言ったので私はそれに従った。2、3歩歩くとすぐに何かにつかった。ふすまが外れて、物が足元に散らばっていたのだ。遠くで弟が「お父さん、お父さん」と叫ぶ声が聞こえる。私は一人、道にふさがれて外へ出れないのかと思い、もう一度「お母さん」と半泣きで叫んだ。そしたら、母が「志穂ちゃん、こっちよ」と言ったので、物も乗り越えただ母の声のするほうに駆けよっていった。

父が早速懐中電灯を持って照らしてくれた。母が玄関で靴を出して、一人一人外へ行かせてくれた。玄関入ってすぐの所にあった預かり物のピアノが2メートルぐらい吹っ飛んで、ひっくりかえっていた。私が神様を感じたのはこの時だ。ピアノが飛んで畳一畳分、あいていて、いつも開きにくい障子が一枚外れ一本の道ができ、神様が導いて下さっているように思えた。

大した怪我もなく外へ皆が出ることができ、布団を祖祖母と祖母に被せどうしようかと思っていると震度4の余震がきた。ゴオオオオーと音をたてて恐ろしいものがやってきた感じだった。もう死ぬ、もう死ぬと何度思ったことか。

震度4の余震も終わると、近所の人たちの叫び声が聞こえた。私たちはすんなり外に出ることができたが周りは違う。「開けて、助けて」と扉をどンドン叩いている。父と兄と弟はまわった。45度ほど傾いたアパートの2階は弟、1階の隅の1番ぐちゃぐちゃのおじさんとお婆さんの所へ兄が中へ入って助けた。父は、みんなに「小学校へ避難してください。」と叫んでまわった。私は足の不自由な曾祖母と祖母を連れ、足元の瓦礫を足でどけ道をつくり、足場を確保し小学校まで先に行った。やっとたどり着き、私はパジャマ一枚で寒くて寒くて震えていたが、年老いた曾祖母と祖母は早く起きていたので服をきちんと着ていたけれど、風邪をひいては大変だと思い一枚の掛け布団を被せた。

あの日は、なかなか夜も明けず、じっと小学校の前で立っていた。そのうち家族も犬も集まり、ただただ余震ばかりを恐れて小学校が開くのを待っていた。何時間待っていたらだろうか。やっと体育館が開いたので行こうと思った瞬間小学校の前の木造2階建ての家がドッターンと大きな音を立てて1階がつぶれ、2階が1階になったのを見た。恐怖は募り、まだ、体中震えている。体育館へ入っても余震が続く。父と兄と弟と友達是我的家の近所で3階建てが、べったんこになり4人の生き埋めになったところへ行き、手を血だらけにして中の人を探して探して探しまくった。80歳ぐらいのお婆さんと小学6年生ぐらいの孫2人を助け出した。弟の友達は、そのお婆あちゃんと孫に自分の履いていた靴を履いてもらい小学校まで、2人を案内した。その弟の友達というのは、髪が金色の世にいうヤンキーという子達ばかりでいつもは学校もろくに行かず夜遊びをし、校則も破りまくりの親不孝者達である。そういう子達が人を助け、私の家から毛布、布団をありったけ持ってきてくれ、自分達の上着を肩の骨折で体育館に待機させられている女性や腰を骨折している老いた男性にかけてあげていた。

命に別状のない人は、後回しなので私の母は、その苦しんでいる骨折者達にお話しをして不安な気持

ちや悲しい気持ちを取り除ければ良いと思い必死にまわった。そうこうするうちに日は暮れ出した。外を見ると東西南の3方から火が追っている。夜になっても火は消えず、ずっと死におびえていた。夜持ってきてくれた布団で、女の人達は寝はじめた。私と父、兄、弟、男の人達は起きている。すると、裏のアパートに住んでいたお姉ちゃんが臨月で産気づき「お腹が痛い」と泣き出し、母が「神様どうかお助け下さい」とずっと言ってさすっていると、少し痛みがおさまりまた眠ることができた。

友達のお母さんが亡くなった。いとこの祖母が1階でいて下敷きになり亡くなった。中学校の時の親友が和ダンスの下敷きになり亡くなってしまった。何も言えない。言葉にならない悲しさが、涙にもならずにあふれてくる。どこへ捨てようかこの悲しみ。震災から3日ほどたった時、トイレの便器に大便とティッシュの山。洋式はおしりについて、座れないぐらいに積っていた。水がないと本当に不便だ。髪の毛はベタベタ、顔も洗えない、歯も磨けない。食べ物も3日間何もない。胃は硬直して実際食べ物があっても、食べられないだろうけれど。

私はすぐにでも思い入れがある奈良に行きたかった。1週間がたったころ、奈良の叔母が私と兄を迎えに東須磨小学校へ来てくれた。奈良について時安心したからか涙があふれ出した。ここで初めて、私は涙が出なかったのではなく涙を出すことを我慢していたのだと気付いた。

私達一人ひとりの精神はひどく不安定だったが、日本全国、外国の人々からも援助していただき、本当にお礼の言葉もないくらいありがたいことだ。いつもの当たり前なのが、生かされていることが、家族団らんがどれほど幸せか。一瞬にして、死に迫られ、恐怖心でいっぱいになり、泣きたくても泣けない状態でも18年間生きてきた中で最高の喜び、生かされていることの喜びを味わい、本当に激動の大震災だった。1月17日以降私は人間の死というものをいつも意識するようになった。悔いの残らないよう親孝行をし、人を大切にしていこうと心に誓った。

3 叔母の話聞いて

阪神・淡路大震災の話をする、今でも泣きそうになっていた。やっぱりあの阪神・淡路大震災はいくら時間がたつたとしてもとても辛い出来事だったのだと改めて感じた。叔母に話を聞き終わったあと一番辛かったことは何だったかと問いかけたところ、家がなくなったことが1番辛いと言っていた。今まで毎日生活していたところがいきなりなくなるということは、精神的にもとても辛いと言っていた。

話を話していてくれているときとても辛そうだったが、話を聞くこちらもなんだかととても辛かった。辛いのに話してくれて、感謝の気持ちでいっぱいだ。

4 人間は弱い

阪神・淡路大震災が起こり、情緒不安定になった人もいたのか喧嘩する人も出てきたそうだ。殺人、性犯罪、強盗、放火、空き巣も起きたという。避難所でのトラブルも多発した。ストレスが原因とみられるトラブルが多かった。一番私が気になった犯罪は、盗難だ。コンビニに食料などを盗みに入る人がいたという。このような話を聞いた時に思ったのは、この人達が盗みを行ってしまう前に話したかったということだ。これらのことは全て悪いことだけど、盗みをしてしまった人は心に大きな穴が出来てしまっていたり、もうどうすれば良いのかわからなくなってしまったりして盗みなんか普段だったら絶対しないことをしてしまったのだと思う。自分が生き延びる手段はこれしかないと考えた人もいるだろう。話せばきっと分かってくれたのではないかと私は思う。

震災時にコンビニの盗難を増やさないため、備えが重要だと私は考える。家には、1週間くらいの食料を家族分用意しておきリュックに詰めておくことが大切だ。一人ひとりが地震に備えることで盗難が確実に減っていくと思う。だから、私は食料に限らず普段からの備えの重要性を皆に伝えたい。

5 環境防災科

(1) 環境防災科とは

阪神・大震災の教訓を後世に引き継ぎ、地域防災の担い手を育てようと2002年4月に開設された。外部講師の講義を聞きたくさんのジャンルにおいて学ぶことのできる「災害と人間」、災害時のボランティア活動について学ぶ「社会環境と防災」、防災にまつわる英文を読んだり実際に国際交流したりできる「Active 防災」などの専門科目が、卒業に必要な単位数の3分の1を占める。これまでも、水害があった兵庫県豊岡市や佐用町、熊本大震災や東日本大震災など多くのボランティア活動に携わってきた。

(2) 環境防災科を目指した理由

中学生のわたしには夢がなかったので、高校は普通科に進もうと考えていた。どの高校にしようかネ

ットで調べていると、舞子高校のホームページが目にとまった。そこで出会ったのが、環境防災科だ。小さい頃から人の役に立つことがしたいという気持ちは、心の中にあった。だから、環境防災科のホームページに書いてあった新たな防災教育の中心課題である命の大切さや助け合いのすばらしさを学ぶことができるという文は、私にとってすごく魅力的に思えた。しかも、当時看護師になることが夢だった。医療と防災は関係が深いと考えていたので、普通科より環境防災科のほうが自分に合っているのではないかと考えた。

舞子高校のホームページで一番心に残っている言葉がある。それは、「Think Globally, Act Locally」だ。地球規模で考え、地域で活動するという意味だ。この言葉の意味は、防災知識が全くない私にはまったくと言っていいほど分からなかった。入学してから後々分かるということに当時の私は知らない。

環境防災科は、ジャイカの皆さんと交流していたり、Active 防災という授業があったりしているので、国際社会、つまり英語に力をいれていることが伝わってきた。私は、英語がとても苦手だった。本当は英語には極力関わりたいと思っていたが、嫌なものからすぐ逃げようとする自分が嫌いだった。変わりたい、変われると思った。

この2つの理由で環境防災科を目指しはじめた。

6 夢と防災

わたしの夢は医療秘書だ。この夢を持つようになったきっかけは、ある先生に「あなたは医療事務と向いているのではなか」という何気ない一言をもらったことだ。これを機に医療事務について調べるようになった。医療事務のことを知るためにオープンキャンパスに行くと医療秘書という職業に出会った。初めて聞く職業だったが、仕事内容ややりがいなどを聞いているうちにとても魅力を感じ何より整理整頓、スケジュール管理が好きで几帳面なわたしの性格にぴったりの仕事だと思った。

わたしは、大きくまとめると医療の道に進みたいということになる。医療は、防災にとっても関わりがある。1番関係があるといっても過言ではない。わたしの職業の場合大きな病院に勤務することになる。わたしが医療秘書になったら行いたいことが4つある。

まず、1つ目は、地震などの緊急災害時に患者さんや病院付近の住民に対し、分かりやすい情報提供を図る必要があると思うので、その地域のハザードマップを病院の廊下や患者さんの病室に張りたい。暇な時やふとした時に目につくと思うので、それで少しでも防災について意識が高まれば良いと思う。

2つ目は、患者さんやそのご家族に入院する手続きの説明を行う際、震災が起きた時どのような行動をとるか、避難経路はどこか、ハザードマップを実際に見てもらいどこが危険かを説明することを入院の手続きの1つの段階としていれたい。今現在もしかしたらこういうようなことをしている病院はあるかもしれない。けれど、あくまで入院の手続きなのでそんなに力を入れていないと思うのでわたしはここに力を入れていきたい。

3つ目は、近くでは千鳥が丘が村で名簿の提供を行っているように病院のなかで名簿を作って配りたい。大きな病院には入院していて身体が悪く一人では身動きが取れない方がたくさんいらっしゃる。そんな中で地震などが起きた時、一番早く患者さんたちを救えるのは消防や警察でもない病院に勤務している人だと思うのでこのような取り組みをしたいと思った。だから、病院を一つの村だと考え名簿をつくり緊急事態があった時この人はこの人を助けるなど決めておきたいと思った。

4つ目は、ヘルプカードをもっと普及させることだ。少なくとも病院の中にいる人には、知っていてもらいたいの説明やポスターを通じて普及させていきたい。

わたしが防災を学ぶ理由の中に、緊急事態に活躍でき一つでも多くの命を救えるようにということも含まれている。今は、この環境防災科で一生懸命学び、卒業したら身体が不自由な方に緊急時どう対応したら、不安や恐怖を減らすことができスムーズに避難できるか学びたいと考えている。多くの命を救えるように手話も勉強し、いずれかは手話検定にも挑戦したい。防災に詳しい医療秘書になれるよう防災の勉強と医療秘書になるためにいる資格を取るためにこれからも勉強を頑張っていきたい。

7 危機感

私は、平成30年6月18日午前7時58分大阪府を震源とした地震が起こった時に感じたことがある。私は、まだ家にいた。父は出勤し、弟と妹はすでに登校していたので家には、母と私と犬のハルだけだった。母と犬のハルは2階のベッドで寝ていて、私は学校の用意が終わったのでソファに座ってスマートフォンを触っていた。そんな時スマートフォンの緊急地震速報が家に鳴り響いた。私は、その音が鳴った瞬間にテーブルの下に身を丸めた。揺れは緊急地震速報が鳴り響いてから5~10秒くらいたってか

らきたので、テーブルの下で揺れを感じた。南海トラフ巨大地震がきたのではないかと思い、とても怖かった。母は、緊急地震速報の音ではなく、その揺れで目が覚めて1階に降りてきた。テーブルの下に身を丸めている私を見て、大笑いし写真を1枚撮った。私は、この母の姿を見て、なぜこの人は笑っているのだろうか、と不思議に思った。兵庫県も結構揺れたとニュースを見て私達を心配し、叔母（母の姉）が電話をかけてきた。母と叔母の話を知っていると、私が、地震がきたとき机に身を丸めていた話をして笑い、神戸には大きな阪神・淡路大震災が起こったからなんか安心感があるなどと話していた。この話を聞いていて、私がおかしいのかとも考えた。なぜ正しいことをしているのに笑われないといけないのだろうかとも思った。

阪神・淡路大震災を経験したにも関わらず、母のように防災意識が低い人が近年増加しているように思える。母は当時東須磨に住んでいたため被害は大きかったはずだ。けれども、あの阪神・淡路大震災が起こってから24年もたってしまったので恐ろしさを忘れていないのではないかと私は考える。大丈夫と来ないだろうと考えている人が一番危ない。母、いや出来ることならば誰にも命を落としてもらいたくないので、私は、これからも防災を学び続け、風化を防ぐべく語り継ぎ、次世代のリーダーとしてたくさんの人の役に立てるように頑張る生きていきたい。

8 感想

普段話すことの少ない叔母から話を聞くことで、両親とはまた違う話が聞けて良かったと思う。両親とは違う感じ方、当時思ったことを聞いて人によってこんなにも感じ方が違うという点に驚いた。阪神・淡路大震災の話を聞く機会は小学校や中学校のとき宿題を行う際にあつたが、こんなに詳しく聞いたことは初めてだった。叔母の話を知って、真っ先に感じたことは両親も叔母も本当に生きていてくれて良かったということだ。震災では6343名もの命が奪われた。命の尊さがこの数字に表れている。

今回、私が書いた内容を読んで備えをしようなど一つのきっかけになってくれ、少しでも風化を防ぐためのメッセージになっていると感じてくれる人がいればとても嬉しく思う。

この世界は、人間の手で作られている。自分たちが作り出したものなのに一瞬にして自然に壊される人間の無力感。自然の力は大きすぎる。限界はあると思うが、自分ができる限り減災につとめていきたい。

最後に叔母さん、辛いだろうに話をしてくれてありがとう。

「語り継ぐ」

本西 杏

1 はじめに

私は、神戸市長田区長楽町で育った。そこは震災当時、最も被害が大きかった地域である。そんな長田の街で生まれたからこそ、小学生のころから震災のお話をたくさん聞いてきた。そこから防災や、震災に関して興味を持ち始めた。そして環境防災科に入学し、たくさんの知識を身につけて市民のリーダーになれるように、また語り継げるように、これまで学習をしてきた。この語り継ぐでは、そんな長田区に住んでいた父の当時の体験と姫路市に住んでいた母の話の話を聞いていこう。

2 父の話

(1) 震災前日

前日の話ではないが、4日前に父は観光で淡路島に行った。その時に空を見上げると、変な空だった。空が真っ二つに割れたような変な雲だったことが印象的で、世間一般的に言えば、地震雲と呼ばれる雲が空一面に広がっていた。「割れているなあ。」と思いながら家に帰ったそのあとに、阪神・淡路大震災が起こった。

(2) 震災当日

当時は6階建てのマンションの3階に住んでいた。いつものように家族3人で寝ていると、大きく揺れ始めた。とっさに兄(当時1歳)の上に覆いかぶさり、身を守ろうとした。揺れがおさまった後に、いつも枕元には懐中電灯を置いていたので、その懐中電灯を使って玄関まで行き、扉を開けると隣接していた一軒家がすべて倒壊していた。「えらいことになっている。」と思い、部屋に戻ってまずは、水不足が想定されると考えたので、お風呂の浴槽に水をいっぱいまで溜めた。次に、寒かったので防寒対策のために、家族にスキーウェアを着させた。そして、マンションの権利書や、財産になるもの、レトルト食品など食料をとっさにリュックに詰めて、家から出ようとして扉を開けると、新長田方面には火がたくさん上がっていた。そして、2つ隣の家からも火が出ていて、それを消さないとマンション全体が燃えてしまうと思ったので、慌てて家に戻り、浴槽にためていた水と、消火器を使って消火活動を行った。まだその時は暗かったし、コンビニやスーパーなどでは略奪が起こっており危険に感じたため、マンションのエントランスで明るくなるのを待った。そして明るくなった後、年配の方を優先的にマンションから出るように誘導し、ようやくマンションから出た。出たらすぐに周りの住民たちに、助けを求められたが、自分の両親の家も倒壊しているだろうと思ったために、断りながら両親の家に向かった。両親が須磨の山手に住んでいたため、原付で安否を確認しに行ったが、山手はどうもなかったため、ここに避難しようと思った。そして、家族だけをそこに一旦避難させた。普通なら30分ほどで着く場所だったが、5時間かけて向かった。そして自分だけは家に戻り、荷物の整理をしていると友人が駆けつけてきて、火の手がすぐそこまで近づいてきていることを教えてもらい、しかたがなく家を諦め、バイクでまた実家に戻ることにした。

(3) 震災当日の周りの状況

人間は圧迫されるとこんなにも紫色に変色するのかもしれないと思うくらいに、変わり果てた姿で建物から救出された人たちがたくさん軒先に並べられていた。長屋が多いために、1階が倒壊し、2階の下敷きになった人が大多数いた。倒壊している家から、声は聞こえるが中に入ることができず、サイレンは鳴っているが、被害の規模が大きすぎて、消防も駆けつけられない状態が続いた。最初は小さな火事だったが、次第に燃え移っていき、大きな火災になった。しかし、どうすることもできずに棒立ちになる人もいたり、通行人は燃えている家で暖を取っていたりと不思議な光景だった。暖を取るために、車を取りに行っていたが、立体駐車場に入れていたため、車は大破して取り出すことができなかった。倒壊した家から救助しようとしている人もいれば、火事場泥棒、コンビニやスーパーの略奪を目の当たりにし、極限になった時の人間の本性を見た気がした。

(4) その後

火は消えることなく、鷹取・新長田間を焼き尽くしたが、風向きが変わったため、自分のマンションは燃えずに残った。約4日後にほぼ鎮火した。焼け野原になった長田の街では、各学校、公園に自衛隊が炊き出しやお風呂の準備をしてくれて、毎日朝から夜まで食料と水を確保するために、1回3時間ほど並んでそれを手に入れていた。全国からの救援物資が、約1週間後に公民館や各学校に配布されていた。なによりも自衛隊の方にはお世話になった。ほかにも、神戸市以外、県外からのボランティアによ

る炊き出しやお風呂もとてもありがたかった。赤ちゃんの食べられるような食料、身の回りの物やおむつを手に入れることがとても難しかったが、地元の方が分けてくれて、地域の温かみをととても感じる事ができた。

(5) 昔と今の長田に思うこと

街の道路が昔よりも広くなり、救助活動や消火活動がしやすくなり、地域全体が防災意識の高くなった新しい町に生まれかわったと感じている。昔よりも、隣近所の人や地域の人とのつながりが強くなった。大正筋は、当時は壊滅状態になったため、若い人が市外にたくさん出ていき、再建しても人が集まらず、夜になるとゴーストタウンであるが、昔から住んでいる人は住みやすいのか、大半は地元で暮らしている。町並みはずいぶんと変わってしまったが、昔から住んでいた人も帰ってきて良い雰囲気の街が今も続いている。

(6) 震災を経験して

普段から、近所のつながりを持っておくことは本当に大切であると感じた。自分はもともと防災に興味があったために備えや知識は万全であったが、やはり日頃の備え(各部屋に懐中電灯・非常食・日持ちする食料・水・ラジオ)を必ずしておいたほうが良い。もしものための集合場所も必ず家族で話し合っておいたほうが良い。あとはお金の準備。すべてを銀行に預けるのではなく、常に現金を持っておくほうが良い。震災時に誤った判断をすると大変なことになるので、冷静に情報の確認、収集に努めること。

(7) 震災を経験していな世代に伝えたいこと

横とのつながりをしっかりと持って、何があっても助けてもらえるように。日ごろからの危機管理ができるように知識を得ておくことが必要。

3 母の話

(1) 震災前日

当時は23歳の社会人で普段の生活、家族と会話・食事をし、自分の部屋でのんびりと過ごしていた。

(2) 震災当日

当時は、神崎郡に住んでいて家が山に近かった。当日の朝、地面の底からゴォォという音がして目覚めた。その時「地震が来るな」と思ったが、あまりにも異様な大きい音がしたため、怖くて体が動かなかった。そして、地震が来て下手に動くといけないと思ったのと、恐怖から体は動かず、寝たまの態勢で揺れがおさまるのを待った。2回目 comes と思いそのまましていると、また揺れが来たのでそのままだった。そのあと、揺れが収まり、両親が部屋に駆けつけてきてくれ、リビングへ行くと食器棚の食器やコップが少しだけ割れている程度の被害だった。そのあとすぐに状況を把握するためにテレビをつけると、その時初めて神戸で地震があったことを知った。その後もまた地震が来たらどうしようと不安に感じていた。

(3) 震災当時の周りの状況

両親がよく神戸に仕事に行っていたので、両親だけ車で神戸まで見に行ったが、物凄い渋滞で、神戸に行くまでにいつも以上に時間がかかった。親戚の人は、その渋滞を想定し、姫路から神戸まで自転車で見に行ったという。当時の神崎郡の様子は、外に出て安否を確認しに行くところまではいっておらず、近所の人に会うとその時の地震の話を世間話として話す程度だったという。神戸に住んでいる友達がいたので、電話をかけてみるも繋がらず、数週間後にやっとつながったので、当時の様子を聞くと、「部屋ごと横に大きく揺れ、身動きが取れないままだったが、少し揺れが収まった瞬間に外に飛び出た。」「もう、怖くて地震のことが頭に焼き付いて離れなくなり、わすれられない。」という。そして一人暮らしだったが、トラウマになり恐怖心が芽生えた為、落ち着いたところに家族のもとへと引っ越したそう。

(4) 震災を経験して思うこと

東北でも地震があったように、いつ起こるか分からないので備えることの大切さがわかった。地震に対する恐怖心が今でもあり、備えだけはしっかりとしておくことが大事である。

(5) 震災を経験してない世代に伝えたいこと

やはり、次の南海トラフ巨大地震に備えて非常用持ち出し袋を作っておくことが大事である。そして、地域での助け合いも大事だと思うので、地域で実施している防災訓練にはなるべく参加してほしい。どんな時にでも、冷静かつ正確な判断ができるように知識を蓄えておいてほしい。枕元に懐中電灯とスリッパを置いておくことで少し安心する。あとは家族での集合場所を決めておく。年に何回かでもいいから、家族で災害時を想定して予行練習も行っておいたほうが良い。それぐらいをして、自分の命は自分で守れ

るようになってほしい。

4 私の夢

私の将来の夢は歯科衛生士になることだ。歯科衛生士になろうと思ったきっかけは、2つある。1つ目は、私のように、後から苦しい治療の日々を送る子供を少しでも減らしたいと思ったことだ。私は小学生のころ、歯磨きが面倒くさいと感じていて、適当に毎日済ませていた。それでも、虫歯になることは1度もなかったため、「私は虫歯にならない体質なのだろう」と勘違いしていた。そして中学生に上がり、虫歯ができた。その時に「なぜあの時ちゃんと磨かなかったのだろう」と後悔し、歯を磨くことがどれだけ大切なのかを認識した。そこからは毎日気が済むまでしっかりと歯を磨くようになった。2つ目は歯科衛生士さんとのコミュニケーションからだ。中学から高校に上がってからも、定期的に歯医者に通うようにして、そうすると歯科衛生士さんと毎回顔を合わせる機会が増え、しだいに仲が良くなり、治療が嫌な日があっても歯科衛生士さんと少し会話をするだけで、気持ちが楽になった気がした。また、歯科衛生士さんに顔や名前を覚えてもらえていることだけでもうれしく感じていた。きっかけはそんな単純なことからだったが、だんだん歯科衛生士という職業にあこがれを持つようになった。歯科衛生士と防災は何のつながりがあるのだろう。私は、最初は全く思いつかなかった。だが、調べたり、歯科衛生士の仕事の役割から自分で考えてみたりすると、歯科衛生士は防災と深く関係があることが分かった。

歯科衛生士は災害時には大きく活躍している。被災地では、個人に口腔ケアの相談を受け付けたり、口腔ケアのグッズを置いたり、口腔ケアに関する呼びかけを行っている。口腔ケアとは、むし歯や歯周病予防のためだけではなく、全身の健康を守るためにとっても大切なことだ。口腔ケアを必要としている人は、身体機能の低下に加えて多くの場合、摂食など何らかの口腔機能の低下が見られ、器質面だけでなく機能面からのケアが欠かせなくなっている。災害時には、歯を磨くことができる状況ではなくなるため、どうしても口の中の状態が悪くなる。だが、口の中の状態をよくすることはとても大切なことで、特に高齢者の方だと、口の状態が悪ければ口は肺に直接つながっているため、肺炎などの病気にかかりやすくなってしまう。阪神・淡路大震災では、そうした肺炎で200人以上の方が亡くなっている。また、避難所での感染症予防にもオーラルケアは大切だ。小さい子供であれば、間食が増えた上に、歯を磨く回数が減れば虫歯になりやすくなってしまう。口腔ケアをすることによって、震災関連死を防ぐことができる。

歯科衛生士になったら、災害時、避難所生活の中では様々な口腔ケア用品が不足していたということで、非常用持ち出し袋には歯ブラシや口腔ケアのグッズを入れておくことを張り紙など作って呼びかけていきたい。また、歯科衛生士が小学校に行って歯のブラッシング指導などを行う出前授業もしてみたいと思っている。そこで小学生にもわかるような防災を交えながら授業をしてみたいとも考えている。私は歯科衛生士の資格を取ったら、個人の診療所ではなく大きな大学病院や総合病院に勤めたいと思っている。大学病院や総合病院では個人の診療所と違い、チーム医療で治療をしたりなかなか診療所では体験できない経験、症例を扱うことができたりと、高いスキルを身に着けることができると思ったので、資格を取ったら大学病院に勤めることを目標に頑張りたいと思う。そして、プロの歯科衛生士として活躍していきたい。

5 感想

今回の語り継ぐで、父と母からとても深い話まで聞くことができた。私は高校に入るまであまり両親の震災の経験を聞くことはなかった。阪神・淡路大震災を経験していたことは知っていたが、話を聞くという気にはならなかった。興味がないのではなく、なぜだか話を聞くことに恐怖心があったからである。自分の住んでいる地域がどんな被害にあってどんな様子だったのか、聞くことを恐れていた自分がいた。だが、高校に上がり、環境防災科に入学して私の気持ちや考え方は変わった。震災の経験を聞くことがどれだけ大切か。そして知ったこととして、父親はもともと防災に関して知識があったため、今となっては当たり前前の備えや防災知識などが当時からあった。私はそんな父の行動や知識など全てにおいて尊敬している。やはり、当時から自分で防災について学んでいた父はすごいと思うし、私は今まで防災や震災について勉強してきたので、そんな父を超えるぐらいに、震災時は市民のリーダーになりたいと思った。また、当時長田区に住んでいなかった母親からの目線の話。普段は被害が大きかった長田に住んでいる方々のお話を聞くことが多かったが、そうではなく震災が起きた地区を見ている目線の話しを今回は聞いて、貴重な機会となった。やはり、地区が違うだけで父親とは全く違う行動をとって

いた母親だったが、父と思っていたことは一緒に「備えは大切」ということだ。震災の揺れの大きさ、被害の程度がたとえ違っていても、地震を経験し、地震に対する恐怖心はみんな共通して持っていると思う。2011年にあった東北地方太平洋沖地震で、その「備え」に対する気持ちは一層強まったという。地震はいつ来るか予測もつかないから。だから「備え」は大切なのである。両親の話聞き、震災に対する恐怖心を含め防災に対する意識がさらに高まった。身の回りの防災はしっかりできているのかを見つめなおし、そして自分の今住んでいる町の事をもっと深く知る必要があると考えた。

環境防災科に入学して、本当に良かったと感じている。防災や震災、被災地のことなどについて知っているのと、知らないのでは全く震災を目の当たりにしたときに取る行動や、見る世界、感じ方は変わってくるからだ。ボランティアなどにも参加したが、一番印象に残っているボランティアは「未来の宝 夢と希望と絆の架け橋プロジェクト」である。最初は、東北の子供たちや熊本の子供たちと交流して仲を深めたいという単純な理由から参加した。このボランティアにより、たくさんの子供たちと仲良くなれることができたし、神戸の良いところをたくさん見てもらい、楽しんでもらうことができた。そしてそのお返しにと、翌年の3月に東北へ招待を受け、子供たちと再会という形で東北へ訪れた。東北の風景や現状は写真やメディアなどでしか見たことがなかった為、自分の目で見ることはとても貴重で、忘れられないものとなった。震災がなかったかのように、皆さんが笑顔で優しく親切に接して頂き、人の温かい心を常に感じていた。

宿泊先での住職さんのお話しの中で、今でも忘れられない言葉がある。それは「3月11日になると黙とうなどがあり、亡くなった方々に祈りをささげていますが、3月11日に亡くなった方々が特別なわけではなく、一人ひとりが大切に、かけがえのない命であるのです。」という言葉だ。これは住職さんにしかなかなか気づかないことで、この言葉を聞いて、私は「誰一人命を失ってほしくない。」「皆の命はかけがえのないたった一つの命であり、それを守りたい。」と強く思うようになった。その為にも防災について学び成長し、そして次の世代へと、自分の大切な人を守るためにも、私はこの先「語り継ぐ」ことを決してやめることはない。

「語り継ぐ」

山口 紗耶香

1 はじめに

1月17日、突如神戸を襲った兵庫県南部地震は6434人もの犠牲者を出し阪神・淡路大震災と名付けられた。私は神戸で生まれ育ったため小学校や中学校でも防災教育を受け、阪神・淡路大震災を忘れたことはなかった。だが大人はどうだろうか。阪神・淡路大震災を思い出す機会が無ければ24年前のことは忘れてしまうだろう。現に追悼行事の参加者は減少している。また、被災者が高齢化し、語り継ぐことができる人は年々少なくなっている。阪神・淡路大震災を経験していない私たちが今出来ることは、経験した方の話をそのまま後世に語り継ぐことだ。当時の話を母と祖母に聞いた。

2 母の話

(1) 震災の前日

神戸市須磨区にある実家に暮らしていた。いつも通りの何も変わらない日常だった。

(2) 震災の当日

兵庫区の友人の家に泊まっていた。突然、経験したことの無い、突き上げるような衝撃と横揺れで目が覚めたが、恐怖で動けず声も出すことができず、天井の電気が揺れているのを布団の中から見つめていた。外に出ると、目の前のビルの1階が潰れ、そこにとめていた自分の自動車も半分つぶれてしまっていた。隣にある古いアパートも倒壊し、自分が泊まっていた友人の家も傾いていた。近所の住民は外に出てきて話していたが、地震を経験したことがないため誰も何が起こったのか分からずに戸惑っていた。自宅に帰る途中長田区を通り、毛布をかぶった住民が道路に出ている姿や、町で火災が起こっているのを見たが、ガソリンスタンドで火事が起こっていると思っていた。それぐらい、地震が起きたら家で火事が起こるなど、地震に対する知識がなかった。高速道路が潰れて通ることができなかつたため、遠回りをして須磨区にある自宅に帰るのにとっても時間がかかった。自宅に着くと、食器棚のガラスが割れて中の食器は落ちて粉々に割れ、時計は止まって、倒壊した家屋や火災などは一切なく、住民も電車が止まっていることや神戸全体がとても大きな被害を受けていることを知らず、会社に向かおうとする人もいた。このように自宅周辺は被害が小さかったため電気と水道はお昼ごろには復旧した。しかし、ガスは復旧が遅く、1月なのでとても寒かった。午前10時ごろに電気が復旧し、そこで初めて大地震が起きたこと、地下鉄が止まっていることや火災が起きていること、神戸全体が大きな被害を受けたことを知った。

(3) 今思う事

アパートが潰れているのを目の当たりにし、自分と同じように咄嗟に外に出てきた男の人と話して誰かが下敷きになっていると聞いたが自分と自分の家族の心配しかできず、助けに行くことができなかつたのをとても後悔している。また、地震発生直後に何も持たずに家を飛び出したが、非常用持ち出し袋や毛布をとれば良かったと後から考えていた。

(4) 仕事

三宮にあったビルは倒壊し、大阪の会社で働くことになった。電車に乗るが、被害が大きい地域では電車が運行しないため代替バスに乗り、何時間もかけて職場に通っていた。電車を降り、がれきの間を進みバス停まで歩き、バス待ちの長蛇の列に並び9時ごろに会社に着く生活を送った。自分だけではなく、知り合いも皆神戸の職場が潰れて機能しなくなったため大阪に仕事に出ていた。

(5) 母が知っている祖母の話

祖母の家はあまり被害を受けなかった。家の中はぐちゃぐちゃになったがその日のうちにガス、電気、水道が回復した。家の片付けなどが済み落ち着くとまず祖母は、避難所生活送っている友人や家のガスや水道が復旧していない友人を家に招きお風呂に入れた。そして、おにぎりを作って食べさせた。自分が知る限りの困っている人をとにかく助けた。

3 父の話

(1) 震災の当日

神戸市灘区に父と父の兄と祖父と叔父の4人が2階立ての一軒家に住んでいた。震災当日、父の兄は出張で北海道にいたため家には父と祖父と叔父の3人がいた。父は2階で寝ていて揺れが収まってすぐ

に祖父と叔父が寝ている1階に向かった。しかし、家が傾いていて扉が開かず、蹴り破って部屋に入った。足が悪い叔父をおんぶして外に飛び出した。その後、近所の人と共に倒壊した家の下敷きになっている人達を助けに行き、しばらくして体育館に避難した。食料を受け取ったが一家に2つしかおにぎりが貰えなかったため、父は祖父と叔父におにぎりを渡して自分は食べなかった。翌日、震災が起きたことを知った父の兄は出張先の北海道から大阪まで飛行機で帰ってきたが、西宮で電車が止まっていたため、水や食料を詰めた鞆を持って道が分からない中、線路を頼りに西に向かって歩いた。携帯電話が通じなかったため連絡は取れなかったが自宅付近の小学校の体育館に行くと、父と祖父と叔父に再会することができた。

(2) 震災後の生活

家は全壊だった。しかし、父と祖父と叔父が避難所にいたのは震災が起きたその1日のみだった。震災の次の日から父の兄が勤めている大阪ガスが社宅を開放してくれて、大阪に住むことになった。区画整理から瓦礫の撤去、住宅再建までに2年ほどかかった。しかし約2年間大阪に住んで、足の悪い叔父は見知らぬ土地のため外に出る機会が少なくなり、容体が悪くなり、介護施設に入るようになった。避難所生活は送っていないがある日突然見知らぬ土地に住むということは大変なことばかりだった。

4 両親の話を聞いて

(1) 地震を知らない

母が地震発生直後に外に出た時同じように外に出てきた人全員、何が起きたのかわかっていなかったということを知り、阪神・淡路大震災が起きるまで地震というものは誰も意識していなかったことが改めて分かった。そして、長田区の火災を見て、ガソリンスタンドが火事だと多くの人が思ったということにとっても驚いた。

私は神戸に生まれたため、幼いころから阪神・淡路大震災について知る機会が多く、地震が起きたらどうなるのか、地震とはどのようなものなのか、基本的な知識は自然と身につけていた。しかし、24年前はそうではなかったのだと知った。神戸は災害が起これないという思い込みのせいで防災から遠ざかって行っていたのではないだろうか。約3年間環境防災科で学び、防災を広める事ばかりを考えていたが、まずは多くの人に地震とはなにか、災害とはなにか、知ってもらうことから始めなければならないのだと思った。

(2) 災害時の行動

両親に話を聞いて、本人も周りの人間もパニックだったことがとてもよく分かった。そして、恐怖で体が動かなかったり冷静に考えたりすることが困難な状況になり、机の下に隠れたり家を出るときに非常用持ち出し袋を持ったり靴を履いたり、そんな基本的なことでさえも思いつかなくなってしまうのだと知った。誰もが経験したことのない衝撃と混乱の中でそうなる中で命を守るためには、災害が起きることを想定して普段から家具の固定や耐震化、非常用持ち出し袋を家の数か所に置いておくことなど、今できる最大限の備えを行うことが必要だと感じた。

(3) 被災者の生活

父の被災後の生活の話がとても印象に残った。私は以前父と阪神・淡路大震災のことを話した際、避難所にいたのは1日だと聞き、あまり苦労していないのだと思っていた。しかし、今回より詳しく話を聞いて、ある日突然兵庫県を出て大阪に住み見知らぬ土地で生活することの大変さや、震災で生活が変わり、人生が大きく変わる人がいることを知った。叔父は介護施設に入り、そのまま息を引き取った。もし、震災が起きず、灘区に住み続けていれば今まで通り近所の人と交流したり散歩したりして、健康に暮らせていたのではないだろうかと考えてしまう。きっと私の叔父のみでなく、親戚の家に泊まらせてもらったり、会社の社宅に住んだり、生活環境が大きく変わってストレスを抱えていた人が多くいたと思う。避難所や仮設住宅と同じように、そのような人にもボランティアの人が訪問したりしなければいけないと思った。

(4) 後世に伝える

今までも何度か阪神・淡路大震災について両親から話を聞く機会があったが、その時の気持ちや今後悔していることなどは聞いたことがなかったため、それらを聞くことによってより地震というものの恐ろしさを身に染みて感じた。そして、今回聞いた話を将来自分の子供や孫にも話して語り継いでいきたいと強く思った。両親が経験した苦労や辛さや後悔だけでなく、その時に感じた人の温かさや優しさや人と人のつながりの大切さを伝えたい。

5 環境防災科に入学

(1) きっかけ

私が環境防災科を知ったきっかけは兄が環境防災科に通っていたことだ。年齢が4つ離れているため兄がどんな活動をしていたのかあまり知らなかったが、校外学習で色々なところに行ったりボランティア活動に参加していたりしていたことは覚えている。私が中学3年生で進路に迷ったとき、兄が通っていた舞子高校を思い出して興味を持ってオープンハイスクールに行き、環境防災科に入りたいと思った。当時は看護師になりたいと考えていて、その夢のきっかけは災害医療センターと関わったことだった。災害について知りたいと思い、環境防災科の受験を決意した。その時に感じた、災害で助けを必要としている人を助けたいという気持ちや、面接で話した気持ちは今も変わっていない。

(2) 環境防災科に入学して

環境防災科に入学して災害や防災について専門的に学んできた。様々な外部講師の方や語り部の方のお話を聞いたり過去の災害について詳しく学んだりして、災害に対する恐怖が大きくなっていった。そして恐怖が大きくなると同時に、自分の家族や友人、大切な人を守りたいという気持ちが強くなっていった。また、様々なボランティア活動に参加して多くのことを経験した。その中で一番大切だと感じたのは人と人との繋がりだ。普段から地域の人とコミュニケーションをとることで災害時に助け合うことができる。実際に、阪神・淡路大震災の際、淡路では地域の住民同士の繋がりが深く、その時間に誰がどこにいるのか何をしているのかがわかり、行方不明者が短時間で見つかるということがあった。挨拶など、日々の小さな人と人の繋がりを大切にしていきたい。しかし、ボランティア活動で熊本や東北を訪れて自分たちの出来ることは小さく、無力であるということを何度も感じた。東北を訪れて何も無い更地と慰霊碑を見た時、こんな恐ろしい自然災害から人の命を守れるのか、どうして防災を学んでいるのか、いろいろなことを考えた。しかし、小さなことしかできない私たちでも、被災地を訪問して高齢者の話し相手になったり力仕事をしたり、被災地に行かずとも地元で被災地復興支援募金を行ったり、いくらでも被災地の力になることができる。

自然の脅威はとて大きいけれど、私たちだからできるボランティア活動を考え、取り組んでいきたい。そして、高校を卒業しても防災と関わりを持ち、ボランティア活動に参加していきたい。

6 将来の夢

(1) きっかけ

私の夢は歯科衛生士になることだ。歯科衛生士になりたいと思ったきっかけは2つある。1つ目は様々な場面で私は歯科衛生士を見てきたことだ。祖父が介護施設にいた時には、大勢の高齢者の方々一人一人に対して丁寧にブラッシングや入れ歯の洗浄や付け替えをしていた。また、重体患者が集まる病院の集中治療室に訪れた際には、身動きができない患者さんの口をケアしていた。その様子を見て歯科衛生士が行う口腔ケアはどんな時にも欠かすことができないとても大事なことなのだと気づいたと共に、普通の患者さんだけでなく、体が不自由な方にも治療ができる幅広い活動ができる職業なのだと感じた。

2つ目は高校2年生の夏と春に東北の子供たちと交流するボランティアに参加したことだ。実際に東北に行って被災地の状況を見たり、震災時の体験談やボランティア活動に取り組んでいる方の話を聞いたりして私も将来、自分の職業を被災地支援活動やボランティアに繋がりたいと思った。医療系に進みたい、災害が起きた際に被災者の力になりたいと考える私にとって、幅広い年代の患者さんに関わることができ、様々な場所に行くことができる歯科衛生士は私にとってもあっている職業だと思い、次第になりたいと思う気持ちが強くなっていった。

(2) 歯科衛生士としてできる防災活動

現在、私が歯科衛生士になった際に取り組みたいと考えている防災活動は、「普段できる防災活動」と「災害時にできる防災活動」の2つに分かれる。

普段できる防災活動としては主に、地域に防災を広める活動だ。歯科衛生士は歯科医院で勤めることがほとんどであり、その地域の幼稚園や小学校に歯科検診で訪れることも多い。職場が地域との繋がりが深いことを生かして、その地域で行われる防災訓練や防災イベントの情報を医院に張り出したり、幼稚園や小学校を訪れた際に歯磨き指導と共に防災教育や災害時の歯磨きの重要性を伝えたりするなど、小さな子供から高齢者までと関わる地域密着型の防災活動に取り組みたい。

次に、災害時にできる防災活動としては、避難所や仮設住宅に訪問して口腔ケアを行ったり歯磨き指導をしたりすることだ。災害時の避難所では口を清潔することにまで手が回らなくなり、子供は虫歯が

多発したり高齢者は呼吸器の感染症が増加したりする危険がある。また、ストレスや偏った食事により口内炎、歯周病などが起こる。それらを防ぐために、歯ブラシによる清掃指導、児童への食事指導、高齢者への清掃指導や口腔ケアなどを行い、感染症や口内が不衛生なために起こる高齢者の誤嚥性肺炎を防ぎ、関連死を減らしたい。

(3) 防災活動だけでなく・・・

歯科衛生士は患者さんと話す機会も多いため、自分が知っている知識をたくさんの人に伝えられると思う。そして、災害時に避難所を訪れた際にはただ口腔ケアを行うだけでなく、被災者の方とお話して被災者の方がその時本当に必要としていることを聞いたり悩みや不安を聞いたり、健康を守るだけでなく被災者の方の心を少しでも楽にできる活動に取り組もうと考えた。災害時には口の問題はあまり注目されないが、実は口は健康を保ち関連死を防ぐためにとても大切な場所だと多くの人に知らうために様々な場所に訪れて活動し、そして、歯科衛生士だからこそできる防災の広め方や災害時に被災者の力になれる方法を探していくことを忘れずに働きたい。そして、環境防災科で学んだことを決して忘れず、どんな時にも防災を関連づけて働きたい。

7 まとめ

今回「語り継ぐ」を制作して、身近な人の阪神・淡路大震災の経験談を聞いて、災害というものをより身近に感じた。そして、「語り継ぐ」ということは難しいものだと分かった。今まで語り継ぐことは大切だと簡単に言っていたが、話す側は家族を相手に重い話を話しにくかったり経験した出来事やその時の感情を忘れていたり、聞く側は聞いたことを正確に文章に残さなければいけなかったり、話す側も聞く側もとても難しいことを知った。そして、両親が話していくうちにぼつぼつと色々なことを思い出していく様子を見て、語り継ぐということは過去の災害を風化させないためにとても大切なことだと改めて分かった。思い出すという行為がとても大切なのだと知った。

私たちは震災を経験していない世代であるが、震災を経験した人と話すことができる世代でもある。過去の震災を風化させないように一人でも多くの人話を聞き、聞いたことを文章に残していきたい。そしてそれだけで終わらせてはいけない。現在日本では南海トラフ巨大地震が明日起こってもおかしくない状況だ。大切なひとを守るためになにができるのか。それは過去の教訓を語り継ぎ、同じ過ちを繰り返さないことだろう。阪神・淡路大震災から得た教訓や、進んだ防災技術で今は救える命が沢山ある。知っていれば救えた命が失われないように、今出来る小さなことから始めよう。靴を履いて非難すること知っていれば足を怪我して逃げ遅れることはないかもしれない。道具の使い方を知っていれば倒壊した家屋の下敷きになっている人を助けられるかもしれない。小さな知識が命を救うことになる。過去の災害を語り継ぎ、過去の災害から得た教訓を生かし、災害に負けない世の中をつくるのがこの世代に生まれた私たちの使命だ。

1 はじめに

私は当然ながら阪神・淡路大震災の時に生まれておらず、自分自身の体験談などは無い。親の話を書こうにも、親は震災当時、広島に住んでおり、あまり多くのことは聞き出せなかった。また、震災当時に兵庫に住んでいた父方の祖父母の話も全て、3年前にこの学科に通っていた兄が『語り継ぐ 12』に書き尽くしてしまっていたため、同じ内容を書くわけにもいかなかった。どうしようかと悩んでいた時、震災当時に赤ちゃんだったネットの人と知り合った。そのため私はその人自身のことやその親御さんの話を綴ろうと思う。ただ、この人とは顔見知りであるとはいえ、ネットの友人であるため、実名ではなく以下Aさんとその人のことを呼ぶことにする。またAさんが親（主に母親）に聞いた話のため、Aさんの母視点になることが多いことを注記し、不明瞭な点などを逐一細かく取材も出来なかったため、ある程度大まかな内容であり、多少の継ぎ足しの部分もあることをここにお詫びする。

2 Aさんが母より聞いた話

(1) 序章

Aさんの家族は学が丘にある団地の、5階建ての4階に住んでいた。当時Aさんは赤ちゃんで、普段はベビーベッドで寝かされていた。震災当日の早朝3時ごろ、Aさんが夜泣きをしたため、Aさんの母（以下母）は起きてきてAさんをあやしていたのだが、なかなか泣き止まない。そうこうしているうちに、Aさんの父（以下父）も起きてきてあやし始めた。Aさんはようやく安心したのか、父のお腹の上で寝てしまい、父と母はベビーベッドに戻すか迷っていたが、戻すのが面倒だったのと眠かったためにAさんが父のお腹の上にいるまま父と一緒に就寝した。

地震が起きる少し前、再び母は目覚めた。ふと父のほうを見ると父も目覚めていて、目が合った。「なんやろう…」と二人で話していた時、揺れが襲う。

(2) 地震

揺れの最中でも父は冷静だった。父が母に、足を縮めて布団に入ったまま近くに来るように言い、母はそれに従った。長い揺れが収まると、あたりは真っ暗だった。あとから分かったことだが、電気、水道は止まっていた。余震が続くため、1時間ほど様子を見てから、普段は廊下に置いているスリッパと懐中電灯が父の枕元に飛んできていたため、その二つをもって父はリビングの確認に行った。いつもならリビングと寝室はふすまで仕切られているのだが、たまたま揺れでふすまが開いていたため、確認に出ることができた。母はそのまま寝室で待っていたのだが、父がリビングを歩いた時に、足音がガチャガチャと聞こえてきた。

しばらく待っていると、ある程度確認を終えた父が帰ってきた。リビングは冷蔵庫や食器棚から飛び出した卵や食器類のせいでぐちゃぐちゃに荒れていた。戻った父は母に対し、自身の服を取ってくるように言った。当時はまだ冬の早朝で、気温もとても低く、寝間着の上に重ね着をしなければ耐えられない。母はそれに従って服を取りに行ったのだが、ティッシュの箱と片足分の靴下を持って戻ってきた。焦りや不安、恐怖といった感情で母は完全にパニックに陥っていた。しかし父は冷静に母に対して、持ってきたそれも大事だけど…と諭すと、母はようやく冷静になり、服などの必要なものを取ってくることが出来た。

(3) 分岐

しばらく布団から出られずにいたのだが、外がざわつき始めたので様子を見ようと玄関から顔を出すと、向かいの部屋の人も出てきていた。一緒に外に出ることにし、下の駐車場に止めていた車が無事だったため、みんなで車に乗ってラジオをつけた時、初めて神戸が大変になっていることを知った。そのまま情報を集めていると朝日が出てき、長い一日の夜明けとともにどこからか灰が舞ってきた。ようやくしっかりと状況の確認を終え、家に戻り部屋をのぞくと、早朝にAさんを寝かそうか迷っていたベビーベッドの上にテレビが落ちてきていた。あのままベビーベッドに寝かせ、就寝していたらAさんはきっと亡くなっていただろう。

(4) 事後

電気は比較的すぐに復旧し、貯水槽のある団地だったため、水はもらいに行けた。電気ポットでお湯を沸かして飲み水にした。住居の被害も少なめで、火事などもなかったため、母方の曾祖父母の無事を確認するために様子を見に行こうとしたが、渋滞でたどり着けず、断念した。

そこで次は父方の祖父母の様子を見に行くことにした。伊丹にある祖父母の家に行くのに海岸沿いは高速道路が倒れていたり道路も使えなかったりしたため、北上して有馬を通って行くことになった。家に着くと家族全員無事だった。祖母は箆笥が倒れてきて額に当たり、ケガをしていたのだが、一番骨の固い部分だったために助かった。そのあとは箆笥に埋もれた祖母を、祖父と叔父とで助け出した。祖父母の家も電気以外の、ガスや水道が止まっていた。

安否確認ができたため自宅に戻り、とりあえずでも落ち着ける場所を作るために、ガラスを拾ったり掃除機をかけたりと片づけを進め、リビングを綺麗にした。Aさんのご飯は離乳食を買い置きしたものやミルクがあったためそれで凌いだ。父や母は残っていたカップ麺などを食べていた。Aさんはいつも布おむつを使っていた（よくかぶれたりしていたので）のだが、あまり洗濯もできない状況だったために紙おむつを使った。しかしそれでもやっぱりかぶれてきたため、結局は布おむつを使い、洗面器にお湯を張って洗うようにした。

そうして過ごしているうちに、伊丹の祖父母の家が早くに水と電気が使えるようになったため、祖父母の家に行き、しばらくの間、母とAさんは祖父母の家に居て、父は仕事に行くという生活が1か月ほど続いた。

(5) 現在

冷静な判断ができる人が近くにいたからこそ、今生きていられるのだと思う。と母は振り返っていた。

3 話を聞いて

私がこの話を聞いて思ったことは3つある。

1つは、同じ被災者の中でも被害の程度は一樣ではないということだ。確かに、様々な人の話を聞くと、多少内容が被ってくるものもあるが、だからといってその背景にある状況などがそっくりそのまま同じ人なんて、一人もいないのである。それぞれがそれぞれの状況で、それぞれの理由や動機があってそれぞれの行動をとる。全く同じ経験や話がないからこそ、1つの話で満足せず、これからも様々な人の話を聞いていきたいと考える。そしてそれを、できるだけ多くの人と共有し、教訓なども含めて、後世に伝えていきたいと考える。また、取材の面でもこのことには気をつけなければならないと思う。例えば、同じような体験をした人の前例を元に、取材をする被災者の方の当時の心境などを勝手に決めつけたり、その先入観を持って取材を行ってしまうと、被災者の体験ではなく、編纂者を通した物語になってしまうからだ。それこそ今回の私の書いた話のように、多少の肉付けをしてしまっただけでは、本当にその人が伝えたかったことが伝わらない可能性もある。

2つ目は、日ごろからの防災の大切さの再確認である。Aさん家族は、それが意図していたのかは定かではないが、備えていたものに救われる場面がいくつかある。寝る前に履いていたスリッパや懐中電灯。災害時のためにあった貯水槽。そしてこういった災害時のための知識をもっていた父。こういった日ごろからの防災が、生死や復旧までの時間、労力などをよりいい状況へと、他より減らしたりすることもあるのだと改めて思った。知識面では今まで3年間学んできたわけだが、ハード面ではまだ心もとない部分も多い。そこを改善し、自分も将来しっかりと災害について考え、地震だけでなく、火事やその他の災害についてもしっかりと向き合うことで、自分や友達や大切な人たちを守れたらいいと思う。

3つ目は、しっかり準備をしても、やはりどうしてもなく死んでしまうことがあるということである。Aさんはベビーベッドに寝かされていればきっと死んでいただろう。謂わば、とても運のいいことに助かったのである。こういった死について考えると、とても怖くなる。その時、もし仮にAさんが死んでいれば、その人にまつわる現在存在している出来事も何もかも全てなかったことになってしまうのである。しかし、Aさんが死なない選択肢というのは、そもそもテレビを置かなかっただか、実際のように運よくそれを回避するか、或いはテレビを飛ばないようにしっかりと固定しておくか、などがあるが、正直災害についてそこまで認知のなかったときに家具の固定などをできるかと言われれば、想定外のことに備えるのはとても難しいことだと私は思う。この事実は、私に対し、人は死ぬときには軽く死ぬし、それはどうしようもないことだと論じてきた気がする。だからこそ私は、‘想定外’以外のことでは絶対に死にたくないし、友達や家族など大切な人をそのようなことで失いたくもない。自分の努力不足で死なせないために、災害だけでなく、交通事故やその他危険に巻き込まれないためのリスクマネジメントを徹底しようと思う。それこそ、今考える限りの全ての備えはしておきたいし、実物のハード面だけでなく、普段から避難口やこれから起こりうることを想像するといったソフト面での備えもしていきたいと思う。

4 高校生活を通して

(1) 入学前

高校生に入る前の私は、普通の子とは少し違った子だったと思う。妄想癖が激しく、よく頭の中で本やゲームの世界に入り浸っていた。それが高じてか、喧嘩に巻き込まれた時やテロリストが攻めて来た時や地球外生命体に侵略された時の対処を、授業中に延々と妄想していたのが小学生のころだ。

そこから思考は少し大人へと変わり、(相も変わらず自分が特殊部隊になる妄想などはしていたのだが…)より現実的で、身近な妄想をするようになった。例えばそれは、あのすれ違うであろう人が通り魔だったらどうしよう、あの車が誘拐犯だったらどうしよう、といった、突拍子はないが現実的に少しはあり得そうなことや、或いは、出先のデパートなどで急に火災や爆発が起きたらどうしよう、といったかなりリスクマネジメントが出来ているものもあった。今思えば、もし〇〇が起きたらどうやって自分の身を守って生き延びるか、という妄想が好きだったのかもしれない。

そして中学生になろうとしていたころ、丁度兄がこの舞子高校の環境防災科に入学した。当時は、兄が在籍しているといってもあまり災害には興味は湧かず、進路を決めるとなっても、(確かに環防志望ではあったものの)兄が在籍しているという縁しかなかったし、自分としても高校に行ければなんでもいいて考えていた。またそのころ兄も大学が指定校で決まり、真面目にやっていたらいい大学に入れる知った私は環境防災科に入ろうと決めた。

(2) 入学後

入試は推薦入試で、学科試験に加えて面接や小論文まであり、かなり込み入った内容まで聞かれていたため、合格は確信していたものの、果たしてこの学科でトップを取り続けられるのか不安だった。1学期早々からレポートなどの宿題に追われるようになり必死にやっていく傍らで、講師の方の話や、人生で初めて聞く語り部の方の話聞き、命の大切さというよりは、人生の儂さについて学んだ気がする。それこそ、語り部さんの話す場面を想像すると、どうしようも悲しく、胸が締め付けられるものもあった。

そこからその思いが根っこになって、本格的に、「人に死んでほしくない」または「死にたくない」と考えるようになった。今までの、何かが起こるかもしれない、もし起こったらどうするか、という考え方と、防災の考えが結びついて、今の自分は将来が不安で仕方ない。今から自分にできる、周りへの防災というものを行う勇気が出てこないからだ。今のままでは、絶対とは言えなくても、周りの大切な人を守ることができない。しかしだからと言って、その人たちへの防災を、どのようにどのような機会を広めればいいのか、具体的にいい案が思いつかない。加えて、やはり自分の心のどこかで、明日南海トラフ巨大地震が来るわけではないという希望的観測が、危機感の出現を押さえつけている。少しずつでも、1歩ずつでも前に進めているのか不安になる。

5 これからの防災

「今の自分に書ける文」というものを考えた際に、私は、今の私の現状をもってして全力で考えた「防災」についてここに記すことだと私は考えた。私が思うこれからの時代に必要になってくる防災というのは、一言に尽きると思う。

(1) 「未災地へ向けた防災」

未災地へ向けたものとはいったい何なのか。逆から考えてみよう。被災地へ向けた防災とは一体何なのか。家具の固定、消火器を置く、耐震工事、非常持ち出し袋の用意、災害時の正しい行動を教える、非常時にできるように日ごろからそれを訓練しておく、etc…。私たちが防災として学んできたことは多岐にわたるが、その全ては当てはまるといういいと私は考える。

これは未災地においても同じ事が言えるだろう。では、この二つの間には一体どんな差があるのか。私はその差について、根底にある意識の差だと考える。被災地でのその意識は(発災からの経過時間にもよるが)やはり防災の重要性について(実際に実行しているかは別として)しっかりと認知できているのではないと思う。しかし、未災地では防災という言葉は知っていても、その重要性について知らない人が多いのではないか。いつか来るとはわかっている、どうせなるようになって、救助とかも来てくれる。そう考えている人が多いのではないだろうか。私が重要だと考えるのは、こうした人々に向けて、防災の重要性とその学問に入るための踏み出す一歩目、またはきっかけを作っていかなければならないと考える。防災というのは人々に真剣に考えてもらわなければ始まらないもので、災害時に被害が減らせたという、もっと身近で言うならば、自分たちの生活営みが災害時に少しでも残り、苦勞が減ったという実績ができてようやく意味のあるものである。

では具体的にはどう未災地に向けた防災を行うのか。私が考えている中ではいくつかある。

(2) 個人の発信

有名人が呼びかける。これはかなり効果のあるものだと思う。個人でのコンテンツ発信力のある人だとなお良い。これには理由があり、テレビの有名人が防災を呼びかけたところでそれを受け取れる人というのはなかなか少ない。多くの視聴者はその有名人が映っている「テレビ番組」を見るからである。その人が余程努力して、防災に関する特編を組まない限りはその個人がいくら SNS などを使おうと拡散には限りがある。では元々個人発信力のある人だとうか。現実で言うと、Youtuber やプログラマー、大手ブロガーや配信者などが当たると思う。情報化社会が進んだ現代では、テレビに出なくとも何百万人の興味の対象となっている有名人がたくさんいる。そういった人たちは基本的にネットを利用した個人としての配信でファンを会得した人々ばかりである。そういった人たちが防災を訴えれば、ファンの人々は一様に食いつき、そこに少しのサービスをつけ足せば、ファンの人が消費しやすい（受け入れやすい）コンテンツとなるのではないだろうか。ただ単品の防災ではなく、コンテンツに添えた防災にすることによって大衆にとっつきやすく、また効力のあるものとして大成していくと思う。

(3) 団体の発信

また、個人ではなく団体として防災を広めるならば、一般大衆に向けたものではなく、もっとマニアな、局地的な人々に対して行うのがいい。世間一般には多様な人がいるが、そのほとんどが趣味を持っており、その中でも熱狂的な部類のものへの防災はかなりの効果が期待できる。例えば特定のバンド、ゲーム、アニメ、俳優、アイドル、鉄道、漫画などがあると思う。これらのコンテンツには熱狂的なファン、所謂おっかけなるものが居て、中にはそのコンテンツに関わる全てを受け取るような人もいる。こういったオタクが好きなものやコラボやタイアップをすることで、かなりの宣伝効果が期待できる。これは既にやっている団体もあり、例えば日本赤十字社なんかだと、献血に来てくれた人に、イラスト付きクリアファイルをあげるといったことをし、新規の層へ献血を呼び掛けたりしている。この例と同様な形で宣伝を行っていけば、確実に防災を大衆に浸透させることが出来るのではないだろうか。

(4) 技術を使って

こうして防災に関する興味を引き、きっかけを与えたいうで、防災の知識をより効果的に織り込む方法はないかと考えた時、真っ先に思い浮かんだのは VR 技術を使ったシミュレーションである。現代の技術はとても進歩しており、ほぼ現実と同じような視界を体験することができる。また、その世界を創るためのソフトも充実しており、地震体験車などと組み合わせれば、現実と差がないほどリアルな災害体験をすることが出来るのではないかと考える。ただ少し安全面での不安があるが、揺れを少し控えめにするなどすれば大丈夫なのではないかと思う。かなりの恐怖体験にはなると思うが、同時に防災の重要性について認知する最高の機会になるだろう。或いはそのような体験を、全世界が集まるような技術発表会でお披露目をすれば、そういった技術の関係者や消費者までかなり幅広く話題に上るだろうし、これはただの怖いアトラクションではなく、災害というもののシミュレーションのため、災害に備えなければならないという危機感を煽ったり、啓発活動にも繋がるのではないかと考える。

私が結局言いたかったことは、被災地と未災地の災害に対する意識の差を埋めるための防災をこれからの時代にしなければならぬということである。技術や知識は進歩しているのに、それを利用して身を守る人が少ないのはとてももったいないことだし、大衆にとってはあと一歩踏み出すだけで防災の道は見えるはずなのだから、その一歩を押してやるような防災を進めていかなければならぬと私は改めて考えている。

6 感想

今回、この卒業研究を作るにあたって、様々なことを考えさせられた。この冊子は謂わば私の3年間の集大成のわけであるのだから、この学んできた内容が果たしてこの世界が求める防災で合っているのか疑問に思ったし、同時に、自分の学んできたことが間違っていたとしても、この体験についての考えなどを皆に伝えたいとも思った。だからこそ私は今まで培ってきた知識と価値観を使った防災についてをここに記したわけだ。これから自分がどんな道に進むのかも分からないし、自分自身や周りを守るための防災で手一杯かもしれない。だが、将来的には少しずつでもこの経験を社会に回帰して、少しずつでもこの世界の防災のカタチについて変えていければいいと思う。そしてもし、防災の立場を決定していくような人々の一因になれたならば、この経験を遺憾なく発揮し、災害大国日本で生きる以上は最後まで災害と、その被害と、被災者と、そして防災と向き合って生きていければ、私の3年間は胸を張って成功の3年間だったと言えることだろう。

「語り継ぐ」

山村 太一

1 はじめに

私が生まれたのは、震災から5年と時が経ってからだ。だから、私は阪神・淡路大震災を経験していない世代の一人である。そんな何も知らない無知な僕がしなければならないことは、経験した人から話を聞くことだ。その第一歩として、被災経験のある親から当時の話を聞いた。そして、私ができることは、その話を語り継ぎ風化させないことだ。しかし、経験していない私たちでは本当に震災を経験した人に比べ説得力も震災に対する思いも劣っているため、語り継ぐことは安易なことではない。では、どのようにしたら震災を知らない世代から知らない世代へと語り継ぐことができるのか、震災を経験していない人だからこそできることはなんなのかを書いていく。

2 母の話

まず、誰の話を聞こうかと考えると、真っ先に母の顔が浮かんだ。当時、母は看護師で地震直後も最前線で活躍していたと聞いたこともあった上に、一番身近な被災経験者でもあったため母から話を聞くことにした。ここからは、母の目線で書いていく。

(1) 地震発生

母は当時、JR塩屋駅から徒歩10分で海が見えるハイツで一人暮らしをしていた。母は看護師で阪神・淡路大震災が起きたのは、看護師歴4年目の出来事だった。その日は、たまたま休日で寝ていた。朝、下から突き上げられるような揺れで目が覚めた。起きて歩こうしたら、ガラスの破片が飛び散っており靴を取りに行った。取りに行った際に、いつもより部屋が明るいことに気が付いた。窓の前のブロック塀が倒れていたのだ。ブロック塀は、駐車場に散乱しており駐車場に止まっていた、高級車の上に降り注ぎ、フロントガラスがボコボコ、ベコベコになっていた。辺りからは、すでにガスの匂いが漂っており、道路の上は瓦が散乱してマンホールは隆起し道路には亀裂が入っていた。どこからともなく、犬の鳴き声が絶えず響いていた。簡単に家の片付けをして、休日だったが出勤の準備をした。出勤しようと思った理由は、これはとんでもないことが起きているのではないかと思ったからだ。塩屋駅に行くと、もちろん電車は止まっており、一旦家に帰った。母は電車が止まるほどの、大ごとではないと思っていたが、山陽電鉄塩屋駅が倒壊しており、本当にとんでもないことが起きたと確信した。そして、近所の人に自転車を借りて、いつも使っていないリュックサックに荷物を入れ午前七時半に出発した。

(2) 救命活動

自転車で国道二号線を東に向かう途中、何度も救急車、消防車とすれ違った。病院について驚いた。病院の駐車場は地獄絵図と化していた。駐車場のかたすみで地面に横たわっている男性の横で、「誰か助けてください」と絶叫する女性がいたので、駆け寄って男性に心臓マッサージを施したが男性はすでに亡くなっていた。「申し訳ありませんが、亡くなっていますね」と言い、病院に入り白衣に着替えようと思いきや地下にある更衣室に向かった。地下は、もちろん停電しており真っ暗だった。どこともなく異臭がしており、水が滝のように流れる音がしていた。後から聞いた話だが、ボイラーが壊れていたようだ。結局白衣は取りに行くことができず、私服のまま職場に向かった。職場の人は、私の顔を見るなり「お～、生きとったか」と言い、みんなに笑顔で迎えられ握手を交わした。だいたい、午前8時半ぐらいの出来事だった。そこから、怒涛の一日が始まった。すでに何体かの遺体が、リハビリ室に安置されていた。その日、何人患者さんが来たかは、覚えていない。ガラスで頭を切った人や倒壊した家から助け出されてドロドロになった人、足が家屋に挟まれて切断骨折されている人、様々だった。また、地震により交通網が混乱し交通事故で運ばれてくる人も少なくなかった。医者は、他の病院への紹介状を書くのが大変な仕事だった。電気は、もちろん通っていなかったのも全て手書きだ。震災時だいたい患者さんは、長田の方から運ばれてくるが多かった。夜になっても、電気はつかずペンライトで動いていた。もちろん徹夜だった。病室はすでにいっぱい、リハビリ室のフロアの上で動けない患者さんに毛布を配り休ませた。患者さんへの食事は、備蓄されていた最低限の梅干しのおかゆで賄った。職員は、何も食えることができなかった。2日目以降から、倒壊した家から助け出された人が多く運び込まれたが、ほとんどの方がすでに亡くなっていた。4日目の出来事だった。倒壊した家屋の中から助け出された高齢女性がいた。その女性は、4日間も倒壊した家に閉じ込められていたのにも関わらず、比較的元気で話もできるほどだった。このことは、職員全員が驚いた。女性は、閉じ込められている間、息子たちが外で葬儀の話をしているのも丸聞こえだったと笑っていた。震災が起こってから、2か月間は32時間働いた。

て12時間休むという生活が続いた。地震から3カ月ごろより、自殺者が増えた。地震直後の不安が絶望へと変わっていったのだろう。

(3) その後、感じること

当時の救命活動で後悔していることは、自分自身震災で家族、友人の死はなく物損が軽度あるのみであり、混沌する状況の中非常に冷静であった。今、家庭を持ち母になった現在思うことは、あまりにも冷静でありもっと心に寄り添う言葉があったのではないかと思う。母は地震後、気づいたことがあったと話す。これだけ多くの命が亡くなった中、自分は五体満足で生きている。それは、神様が私の命を取っておいてくれたのではないかと考え、看護師としての強い使命感を感じた。だから、この命、看護師である命を精一杯生きて、人の役に立つ仕事を全力で取り組もうと思った。この後、母はボランティアリーダーたるものやPTSD、トラウマの事など様々な勉強会にも参加した。

3 話を聞いて感じたこと

私は、身近な人に阪神・淡路大震災の当時の様子を詳しく聞くのは初めてではなかった。初めて話を聞いたのは、小学生のときのことで、たぶん当時、私は小学5年生だったと思う。先生が「おうちの人に地震の時のこと聞いておいで」と言ったのを、どこことなく覚えている。その時の、母の様子はどこか半笑いで、私も詳しく聞いても何も分からなかった。そんな記憶がある。まず今回、またこのような身近な人から震災当時の話を聞く機会を作ってくくださったことに、私は感謝の心でいっぱい。このようなことは、機会がなければ一生聞けないだろう。また、今回は真剣に震災当時の話をしてくれた母にも感謝の気持ちを伝えたい。

話を聞いて、母からの言葉の一つ一つに重みを感じた。今まで、阪神・淡路大震災のことは環境防災科の授業で外部講師の方のお話や、校外学習での語り部さんのお話を聞いてきた。だが、母の話は今まで聞いたなかで一番緊張感がありながらも、リアルに想像することができた。それは、母という存在がとて身近く、母という人物を知っているからこそ想像ができたのだと思う。話を聞いていて一番印象に残ったのは、母が最後に話していた看護師である命を精一杯生きることだ。この言葉は、なぜか私の心に深く刺さった。ただ精一杯頑張るだけでなく、その職業の使命感と共に生きる。とても、カッコいいと思った。私も、いつかそんな生き方ができるようにならなければならないと感じた。また、今私が求められている使命とは一体何か疑問に思った。

今回話を聞いていて一つ確信したことがある。それは、風化の仕方だ。母も後悔していたが、やはり五体満足の人と震災で家族や友人などの大切な人を失った人とは、明らかに震災への想いが違っている。この差が風化を生むのだ。私は、この差が生まれることは仕方がないことだと考えた。では、風化が生まれることも仕方がないことなのだろうか。私はそうは思わない。しかし、何もしなければ風化は進む一方だ。この風化を風化させるためにも、このように「語り継ぐ」ことの重要性がわかる。

4 環境防災科15期生として

(1) 環境防災科を志したきっかけ

最初に書いておくが、私は環境防災科に入るまで防災なんてまるで興味がなかった。東日本大震災も阪神・淡路大震災ももちろん知ってはいたが、わがこと意識など持つこともなかった。それどころか、東日本大震災の日、当時小学生だった私はアニメが見たかったが、どのチャンネルも家が津波に流されている映像ばかりで「アニメが見たい」と駄々をこねるような小学生だった。それぐらいに、防災の「ぼ」も知らないような小中学生であった。

なぜ、私が環境防災科を志望するようになったかという簡単に言えば、私もこんな人になりたいと思ったからだ。私が環境防災科の存在を知ったのは中学生の頃だ。環境防災科の生徒さんが私の中学校にお越しいただき防災の講義をしてくださった。その時の先輩の姿は、今でも鮮明に覚えている。落ち着きながらも、堂々と胸を張って私たちが少しでも防災に興味を持ってもらおうと分かりやすく、かみ砕いて話す姿はとてまっかっよく印象に残っている。歳も3つ程しか変わっていないのに、自分の熱い想いをもち、その想いをしっかりと相手に伝えられることに驚いた。私も私だけの熱い想いを見つけ、それを上手に相手に伝えられるようになりたいと思った。これが、環境防災科に興味を持ち入りたいと思ったきっかけだ。私自身人の役に立ちたい、人と直で接したいという想いが幼いころからあった。こういった面からも環境防災科は、私の思いとピッタリ合っていた。こんなにも私の想いとバッチリ合っている学科は他を探してもないと思っており、素直に今は環境防災科に入って良かったと思う。

(2) 熊本県被災地支援活動

平成28年熊本地震は震度7の揺れが二回も発生した直下型地震だ。環境防災科に入って、まだクラスメイトの半分も覚えてない状況の中熊本地震は起きた。どのチャンネルも熊本地震の報道がされており、ニュースに釘付けになった。ニュースを見れば見るほど、とてつもなく甚大な災害だということだけが分かった。環境防災科の生徒として何かしなければならぬのではないかと思ったが、実際には何もできない自分の無力感を痛烈に感じた。私自身環境防災科に入った時点で何かできるようになると、どこか勘違いをしていたようだ。熊本地震の被災地訪問に行くと聞いたときは、不安しかなかった。3ヶ月前まで中学生だった人が行って、なんの役に立つのだろうか。かえって迷惑をかけるだけでは、ないだろうか。様々な想いが葛藤した。

実際に行って感じたこと、学んだことは多々ある。感じたことは、地震に被災したのにも関わらず、みなさんととても明るく元気だったことだ。元気だけが、取り柄の私たち一年生だが、その元気が負けるぐらいに、みなさん元気だった。逆に元気を貰ってしまうほどであった。私にとって熊本県被災地支援活動は、人々の温かさを感じることができる4泊5日だった。学んだことは、ボランティアの五大要素、チームワークの大切さ、話の聞き方など書ききれない。中でも、今回の熊本地震ボランティアに行っただけの一番の収穫は、想像力の大切さだ。人の役に立ちたいならば想像し、常に考える。このことは今まで、どうやったら人の役に立つことができるのかと自問自答してきた私にとって、模範解答のようなものだった。これからも、このことを忘れずに生きていこうと思った。また、ボランティアや防災訓練にもぜひ活かしていきたいと考えている。この熊本県被災地支援活動での4泊5日間は、私にとって人生観を大きく変える経験だった。

(3) 平成30年7月豪雨のボランティア

平成30年7月豪雨とは、2018年(平成30年)6月28日から7月8日にかけて、西日本を広範囲に襲った豪雨だ。豪雨の死者は、200人を大きく超え平成に入って最大の豪雨水害となった。私は、その豪雨水害から1ヵ月と経った夏休みの8月9日に真備町に行かせていただいた。参加した理由は、環境防災科として何かしないわけにはいかないのが一番の理由だ。何より、実際に現地に行って被災者の生の声、被災地の復興状況がとても気になった。ボランティアをしていて、気づいたことは二つある。一つは、床上浸水と床下浸水の差だ。この差は、一見変わらないようにも思えるが全然被害の度合いが違う。もう一つは、畳の脆弱性だ。畳は、水に浸かるととてつもなく重くなり、カビが生え臭くなる。畳を運ぶ作業は、ボランティアの中でも一番大変な作業だった。この畳を運ぶ作業をするかしないかの違いが、床上浸水か床下浸水の違いだ。復興状況が、まったく違ってくるのが分かる。私は、このボランティアを終えてもっと真備町についてみんなに知ってもらいたいと思い、これを卒業制作のテーマに決めた。制作の際に学んだことは、人に伝えることの難しさだ。人に伝えるということは、自分はその倍の知識量が必要だ。「語り継ぐ」とは、人に伝えることだ。これらのことを、踏まえて上手に分かりやすく常に誰かに伝えようとすることを意識して過ごしたいと思う。

5 夢

私は、まだ自分の夢を決められないでいる。夢を決めようと言葉にすると上手に表現できず嘘くさくなってしまい形に残そうとするとあやふやになってしまう。そんな優柔不断な私をさらに困惑させたのが、あと10年後から20年後には今の仕事の60%はなくなっているということだ。この事実は嘘ではなく確実そうなるそうだ。私はこの事実を聞きさらに混乱した。これからの世の中は、もっとグローバル化が進み、今まで人間がやっていたことは人工知能(AI)がしてしまうような世の中だ。今なりたいと思っていた職業が、10年後には人工知能やロボットが行っているという可能性も十分にありうる。そんな中環境防災科のみんなは、しっかりと将来の夢が決まって、その将来の夢に向かって必死に頑張る人ばかりで尊敬の心しかない。そして、どこか羨ましいと思っている。もう将来の夢が決まっているような人は、一種の未来予知ができるのではないかなんて考えるほど私は未熟だ。

そもそも私は夢というものが一体何か分からないから決まっていけないのだと思った。だから、夢とは、一体何なのか考えるようになった。夢は人間の欲そのものだと言う人もいる。また、夢は、希望だと言う人もいる。どれも、あまりピンとこなかった。榊田先生は、夢は見るものだとおっしゃっていた。そして、私も私なりの答えを見つけた。今回の「語り継ぐ」を書くことで、みんなが持つ将来の夢の共通点を見つけることができた。夢は、絶対に誰にも譲れないものだと考えた。また夢は、人間が生きる上での原動力そのものだとも考えた。人間を車に例えるなら、エンジンはやる気などの人の心の部分、そして夢は燃料だ。その燃料を燃やして人間は原動力にエネルギー変換していると私は考えた。私自身夢

について、真剣に考えたことは初めてだった。そして、私も近いうちに早く誰にも譲れない原動力を見つけたいと思う。

6 「語り継ぐ」

次に「語り継ぐ」について書いていきたい。語り継ぐことの重要性は、「3 母の話を書いて感じたこと」に書いているとおりだ。語り継ぐことは、風化を防ぎ防災力を高めるものだと考えている。しかし、本当に語り継ぐことは可能なのだろうか。阪神・淡路大震災から24年もたち語り継ぐ人も年々減少している。このままこの状況が続けばいつか途絶えてしまう。これを、くい止めるために私たちは環境防災科にいるのだと思う。これは、環境防災科としての使命だと考えている。だが、この使命はそう簡単ではない。なぜなら、理由は至って単純で私たちは、阪神・淡路大震災を経験していないからだ。これは、どう頑張っても変えることのできない事実だ。将来、もっと文明が進んでドラえもんが、出してくれるようなタイムマシンができない限り不可能だ。だから、私たちは今回少しでも阪神・淡路大震災を知ろうと身近な人の話を聞いた。今回だけではない、環境防災科に入ってから校外学習に行ったり、いろんな外部講師の方のお話を聞いたりした。きっと、普通の高校生よりは防災の知識が富んでいると思う。しかし、だからといって私たちは語り継ぐことができるほどのレベルにいるのだろうか。私は、到底敵わないと思う。これからもっと、防災について勉強したとする、それでも阪神・淡路大震災を経験した人には勝てないと思っている。たしかに、もっと勉強すれば防災の専門家になることはできるだろう。だが、絶対に語り部さんのように、なれないと思う。要するに、私が言いたいのは経験していない人では、その災害を本当の意味で語り継ぐことは不可能だということだ。いくら勉強しても経験していない私たちでは伝えられるのは、語り継ぐという形ではなく防災の知識としてでしか伝えられないと考えている。言葉で伝えても伝わったのは言葉だけなのだ。その時の、言葉で表すことのできない衝撃や迫力、悲しみ、不安、その場の空気は伝えることはできない。言葉で表すことができないから伝える手段がないのだ。

では、私たちはどうすればいいのだろうか。私たちにしかできないことはなんだろうか。本当の意味で語り継ぐことはできない。これは、仕方のないことだ、私は別にそれでも良いと思う。言葉移しの語り継ぎは、まったく意味のないものでもない。だが、徐々に薄れていく。だからこそ、私たちはこの環境防災科で学んだこと、今までいろんな人たちから聞いた話、ボランティアでの活動、様々な人との交流、これらをミックスして話す必要があると思う、たしかに経験している人の話は説得力もあるし、とても良い勉強にもなる。だが、経験している人の話の視点は自分自身一人だけだ。それに比べて私たち環境防災科は、たくさんの方の視点から語れることができる。これが、私たちの一番の強みだ。警察、消防、自衛隊、各ライフライン、NPO法人、行政、地方公共団体、一般企業、一体いくつの視点を持っているか数え切れないほどだ。さらに、ここに環境防災科で学んだボランティアでの経験や授業で習った知識を加えれば、まさに無敵だ。経験している人の「語り継ぐ」と同等か、それ以上のものを伝えることができる。これが、私たち流の「語り継ぐ」だと考えている。そして、これこそ環境防災科の私たちにしかできないことだと考えている。

7 感想

まず、この「語り継ぐ」を書くに当たって、協力してくれた全ての人にまず感謝の気持ちを伝えたい。この「語り継ぐ」は私にとって、今まで学んできたことの集大成のようなものだ。だから、書いていく上で小学校時代のことから環境防災科での3年間をよく思い出し、とても懐かしく思いながらも楽しく書くことができた。そして、何よりも改めて私が環境防災科に何を学びに来ているのか、学んだことをどう活かすか考えることができ、初心に戻ったような気がした。これからも、市民のリーダーとしての自覚を持ち防災、減災活動に携わり続けたいと思う。最後に、私の「語り継ぐ」に付き合っただき、ありがとうございました。



兵庫県立舞子高等学校

〒655 - 0004 神戸市垂水区学が丘3丁目2番
Tel : 078 - 783 - 5151 Fax : 078 - 783 - 5152